富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第11集

開藜大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告

—— 能越自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘報告Ⅱ ——

第一分冊

２０００年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

正　誤　表

第1分冊

ページ・行	誤	正
P3　表	NEJ−06	NEJ−05
P42　16行	石組み	石組
P53　37行		包含層出土遺物
P77　14行	天目茶碗	天目茶椀
P242　24行	SD3	SB3
P244　8行	埋土も同様の幅	SD462と同様の幅
P348　35･36行	盃	杯
P353　7行	B2出土遺物	B2地区出土遺物
P380　13行	～わずかながら認められた。	認められた。
P380　37･38行	住居跡	土坑

上　開酵大滝遺跡全景（北から）　下　C地区　近世面畠（西から）

上　A地区　中世面全景（南から）　　下　C地区　中世面南側全景（南から）

上　C地区　北側・D地区　全景（北から）　中左　石敷炉　SK456（南から）　中右　石敷炉　SK112（南から）　下左　炉関連遺構　SK984（南から）　下右　炉関連遺構　SK1167・SK1168（東から）

上左　炉関連遺構　SK428（南から）　上右　炉関連遺構　SK607（北から）　中左　噴砂に切られた井戸　SE524（東から）　中右　噴砂に切られた土坑　SK67（西から）　下　700号土坑出土鉄瓶

上　地崎遺跡東区全景　下　530号井戸（南から）

開馞大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告

―― 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅱ ――

第一分冊

２０００年

財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

序

富山県文化振興財団では，平成４年度から能越自動車道の建設に伴い，多数の遺跡を発掘調査してまいりました。

本書は平成５年度に調査を実施した福岡町開酵大滝遺跡・小矢部市地崎遺跡の発掘調査報告書で，能越自動車道関連遺跡調査報告としては平成10年刊行の五社遺跡に続く２冊目となります。

開酵大滝遺跡は，天正13（1586）年の白山大地震で埋没・崩壊したと伝えられる木舟城の城下町の一部にあたります。炉関連遺構が検出されたことや古地図との比較から，鍛冶屋町・鉄砲町に相当すると考えられます。南北150m以上，東西約90mに渡り，２条の道路と短冊状に区画された町並みが確認されました。道路に沿って建物が整然と配置され，裏側に井戸や畠を伴った町並みの姿が明らかになりました。また，井戸を切り裂いた噴砂などの地震の痕跡も確認されています。

地崎遺跡では中世末から近世にかけての建物が４棟検出され，この地方の民家の構造等を検証することのできる好資料といえます。この両遺跡の発掘調査報告書が，中世から近世の民衆生活をひもとく一助となり，今後の研究に活用されれば幸いです。

本書をまとめるにあたり，関係機関や団体また諸氏のご指導をいただき厚く感謝いたします。

平成12年３月

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長　**桃野真晃**

例　　言

1　本書は富山県西砺波郡福岡町開𨫼地内に所在する開𨫼大滝遺跡と，小矢部市地崎地内に所在する地崎遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は建設省北陸地方建設局からの委託を受けて，財団法人富山県文化振興財団が行った。

3　本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間　　開𨫼大滝遺跡　平成５（1993）年５月19日～平成５（1993）年12月21日
　　地崎遺跡　　平成５（1993）年５月11日～平成５（1993）年７月27日
整理期間　　平成10（1998）年４月１日～平成11（1999）年３月31日

4　本書の編集・執筆は，池野正男，中川道子，越前慎子，三島道子が担当し，執筆分担は文末に記した。

5　遺物の写真撮影は，写房　楠華堂（代表　内田真紀子）に委託した。

6　自然科学的な分析は，以下の諸機関に委託し，その成果について報文を得た。

植物種子同定　㈱パリノ・サーヴェイ
木製品樹種同定　財団法人　元興寺文化財研究所
金属製品等分析　㈱九州テクノリサーチ
漆塗膜分析　漆器文化財科学研究所（代表　四柳嘉章）

また，地震痕跡は寒川　旭氏（通産省工業技術院地質調査所）に依頼し，玉稿を賜った。

7　発掘調査から本書の作成に至るまで，下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略，五十音順）

伊藤隆三，宇野隆夫，寒川　旭，田嶋明人，前川　要，宮田進一，富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センター，小矢部市教育委員会，福岡町教育委員会

凡　　例

1　本書には本文、挿図及び表、自然科学的分析と遺構全体図、写真図版を掲載する。

2　時期別に検出した主な遺構・出土遺物の内容については、章末に一覧に掲載している。

3　開藤大滝遺跡の時代区分は、中世、近世以降に分けた。

4　遺構全体図は1/200で示し、北から1頁に収まる範囲に分割して遺跡毎に掲載する。

5　本書で示す方位は全て真北である。

6　挿図の縮尺は次の率を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。なお遺物写真図版の縮尺は統一していない。

遺構　建物：1/100，溝：1/40～1/80，井戸：1/40，土坑：1/20～1/40

遺物　土器・陶磁器：1/3～1/6，木製品：1/1～1/8，石製品：2/3～1/8，金属製品：1/1～1/6

7　遺構の略号は以下のとおりである。

SA：柵，SB：建物，SD：溝，SE：井戸，SF：道路，SK：土坑，SP：柱穴，SX：その他（集石遺構）

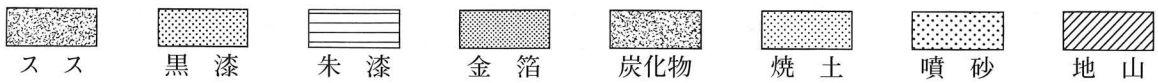
8　開藤大滝遺跡の遺構番号は、調査時に地区毎に付した番号にある一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は遺構の種類に関わらず連番号とするが、建物・柵・道路には新たに番号を付した。各地区の遺構番号に加算した数値は次の通りである。但し複数の地区にわたる遺構は、若い遺構番号で示す。

A：2000，B：3000，C：加算せず，D：4000，E：5000，F：6000

9　遺物は遺跡毎に連番を付す。遺物番号は遺物観察表及び写真図版中の遺物番号と一致する。

10　施釉陶器等の釉の掛かる範囲は1点鎖線で示した。2種類以上の釉が掛かる場合や絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。

11　遺物の煤付着部分及び漆器の赤色漆の部分等、遺構図中の地山及び炭化物層等はスクリーントーンで示す。以下に図示したもの以外については、それぞれの図・文を参照されたい。



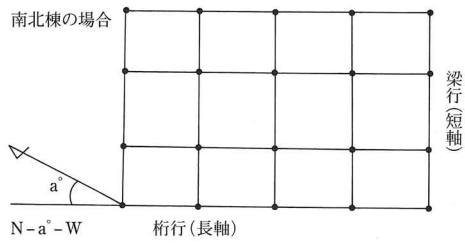
12　遺跡の略号は、開藤大滝遺跡「35ＫＯ-地区名」・地崎遺跡「09ＴＳ-地区名」で、遺物の注記には略号を用いた。

13　遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語・数値等は以下のとおりとする。

掘立柱建物：用語は「平城宮発掘調査報告Ⅶ」を参考とし、以下のように定義付ける。

①　柱間や棟方向に関わらず建物の平面図の長軸を「桁行」、建物の短軸を「梁行」とし、桁行（間）×梁行（間）の順に表記する。

②　建物の棟方位は、真北からの方位の振れをわかりやすく表示するため、「南北棟」の場合は建物の長軸の



方位を、「東西棟」の場合は短軸の方位を測る。

③　建物の面積は長軸に短軸をかけた数値である。

④　「柱穴」とは柱位置に遺存する穴の総称とする。

⑤　「柱掘形」とは、掘立柱を据え付けるための穴のことで、「掘形埋土」とは柱根を固定するために柱掘形に入れた土のことである。

⑥　「柱根」とは、遺存している柱自体の下部のことであり、「柱痕跡」とは柱掘形の中の柱根が立ったまま腐り消えて空洞になり、そこに土が流れ込んだもので、ここでは柱根が抜き取られたものも含む。

⑦　柱穴の規模は、遺構確認面から測った数値である。

井戸：井戸の部分名称及び型式分類については、宇野隆夫氏の「井戸の分類」[注1]を援用している。

①　各部の名称は、地上の施設を「井桁」、地下壁面の施設を「井戸側」、底の施設を「水溜」とする。

②　型式分類は井戸側の部位の構造で分類する。

③　井戸の断ち割図面において、地山の変化がわかるものは、スクリーントーンで示した。

遺構一覧・遺物一覧：観察表の凡例は以下のとおりである。

①　遺構の覆土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新＞古のように記号で示す。

②　法量はcm単位で示す。

③　重量はｇ単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。

④　胎土・色調・釉調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所　色票監修「新版標準土色帖」･財団法人日本規格協会「標準色票　光沢版」を使用し、釉調の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。なお、陶磁器の内複数の色が見られる場合は、最も多く使用されている色を記し、その他は特記事項に記す。但し透明釉の場合は記入しない。

⑤　特記事項：陶磁器については窯名・窯詰め技術・墨書・刻印・ヘラ記号等を、珠洲・瓦器・中世土師器は胎土中の含有物を記す。木製品のうち漆器椀は漆の色を記すが、記載がない場合は黒色漆であることを示す。

注1　宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林第65巻第５号』

目　次

第Ⅰ章　調査経緯 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

A　調査の契機…… 1　　B　分布調査…… 1

C　試掘調査…… 2　　D　本調査…… 2

2　調査経過…… 4

A　調査方法…… 4　　B　調査の経過…… 4

C　調査体制…… 6　　D　現地説明会…… 6

E　整理の経過…… 7　　F　整理体制…… 7

第Ⅱ章　立地と歴史的環境 …… 8

1　立　　地 …… 8

2　歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　開藤大滝遺跡…… 13

1　遺跡の概要 …… 13

A　概　　要…… 13　　B　土　　層…… 15

C　地震痕跡…… 15　　D　中世遺構の記述…… 15

2　遺構・遺物 …… 16

A　中　　世 …… 16　　B　近　　世 …… 183

道路1東側遺構群…… 16

道路1西側遺構群…… 59

道路2西側遺構群 … 172

第Ⅳ章　地崎遺跡…… 217

1　遺跡の概要…… 217

A　概　　要 …… 217　　B　調査経過 …… 217

C　土　　層 …… 217

2　遺　　構…… 218

A　掘立柱建物 …… 218　　B　柵　　列 …… 221

C　ピット …… 221　　D　溝 …… 242

E 井　　戸 ……252　　F 土　　坑 ……254
3 遺　　物……286
A 掘立柱建物 ……286　　B ピ ッ ト ……288
C 溝 ……288　　D 井　　戸 ……290
E 土　　坑 ……290　　F 表土・包含層 ……297

第V章 考　　察……339
1 開発大滝遺跡中世面の町並みについて……339
A 立地と歴史的背景 ……339　　B 町並みの変遷 ……340
C 建物の構造 ……343　　D 県内の様相 ……346
E 開発大滝の建物 ……346
2 開発大滝遺跡の中世土器・陶磁器について……348
A 中世土器・陶磁器の組成 ……348　　B 中世土師器皿 ……350
C 陶 磁 器 ……354
3 木製品からみた開発大滝遺跡 ……355
A はじめに ……355　　B 製品と樹種 ……355
C 主な遺物の特徴 ……355　　D 富山県内の遺跡出土漆器 ……361
E ま と め ……365
4 地崎遺跡における若干の考察 ……367
A 近世民家 ……367　　B 出土遺物の組成 ……371
C 越中瀬戸皿の法量 ……373　　D 墨書土器 ……374
E ま と め ……376
5 開発大滝遺跡で検出された液状化現象の痕跡……378

第VI章 結　　語……393

巻首図版目次

巻首図版１　開馞大滝遺跡全景　C 地区近世面畠
巻首図版２　A 地区中世面全景　C 地区中世面南側全景
巻首図版３　C 地区北側・D 地区全景　石敷炉（SK456）　石敷炉（SK112）
炉関連遺構（SK984）　炉関連遺構（SK1167・SK1168）
巻首図版４　炉関連遺構（SK428）　炉関連遺構（SK607）
噴砂に切られた井戸（SE524）　噴砂に切られた土坑（SK67）
700号土坑出土鉄瓶
巻首図版５　地崎遺跡東区全景　530号井戸

挿 図 目 次

第１図　調査位置図
第２図　調査区区割図
第３図　周辺遺跡位置図
第４図　開馞大滝遺跡　中世面町割図
第５図　開馞大滝遺跡　基本層序模式図
第６図　開馞大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB1　SE4004　SX4005　SK4006　SD4063　SX4064
第７図　開馞大滝遺跡　遺構実測図　SB2
第８図　開馞大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK8　SD170　SE181
第９図　開馞大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB3　SE2302　SK2355　SK2357
第10図　開馞大滝遺跡　遺構実測図　SB4　SB5　SP2317　SP2318　SP2409
第11図　開馞大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SP2317　SK2331　SP2332　SD2339　SK2406　SK2413～ SK2415　SK2425
第12図　開馞大滝遺跡　遺構実測図　SB6　SP2295
第13図　開馞大滝遺跡　遺構実測図　SK2291　SK2312　SK2403　SE2423　SE2455
第14図　開馞大滝遺跡　遺物実測図　SK2403
第15図　開馞大滝遺跡　遺物実測図　SE2423　SE2455
第16図　開馞大滝遺跡　遺構実測図　SB7～ SB10
第17図　開馞大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB7　SP2252　SK2282　SK2285　SK2286　SP2346　SP2474　SK2475　SP2477
第18図　開馞大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB8　SK2241　SK2256　SK2280　SP2281　SE2283　SK2306
第19図　開馞大滝遺跡　遺構実測図　SB9　SK2165　SK2195　SK2196　SD2201　SD2202　SK2232　SK2236　SP2255　SK2466

第20図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB10　SK2157　SK2158　SK2166　SP2180
SP2189　SD2200　SP2463　SK2470　SK2471
SP2472　SK2473　SK2308　SK2484～SK2486
SP2487

第21図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SE2340

第22図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB11　SB12　SA1　SP2095　SP2479　SP2480

第23図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SK2118　SK2121　SK2122　SK2125　SK2139　SK2140
SK2154　SD2167　SD2199　SK2212　SE2341　SE2488

第24図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SK2083　SK2089　SK2093　SE2094　SK2112　SP2115
SD2117　SD2130　SK2137　SK2138　SK2197　SK2216
SK2446　SP2447

第25図　開辟大滝遺跡　遺物実測図　SE2094　SK2137　SK2138　SE2341　SP2447　SP2479
SP2480

第26図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB13～SB15

第27図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SP2039　SK2040　SD2052　SD2053　SK2054
SD2055　SK2056　SK2062　SK2063　SP2064
SP2066　SK2070　SK2071　SK2074　SK2091
SK2092　SD2098　SD2099　SP2103　SK2465

第28図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK2377　SD2378　SK2380　SK2381　SD2384
SK2385

第29図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SK2109　SK2313　SK2366　SK2411　SX2432　SK2449
X32Y103付近噴砂

第30図　開辟大滝遺跡　遺物実測図　包含層

第31図　開辟大滝遺跡　遺物実測図　包含層

第32図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB16～SB21　SA2

第33図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB16　SB17　SK593　SK754　SK764　SE765　SK782
SP784　SK815　SK842

第34図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB18　SB19　SK770　SK808　SK814　SK817
SK829　SK830　SK851

第35図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB20　SK800　SD802　SE819　SK823　SK824
SK839　SK840

第36図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB21　SA2　SE804　SK805　SK838

第37図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK591　SK596　SK641　SK738　SK750

第38図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK577　SD579　SK590　SK594　SK602　SK605
SK607　SK737　SK742　SK758

第39図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB22～SB26　SA3～SA6

第40図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB22　SA3　SK878　SK880　SE889　SK890　SP912

第41図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK879　SK880　SK882　SK883　SD884　SK886
SD887　SK888　SK934　SD1123

第42図　開辟大滝遺跡　遺物実測図　SK879　SK882　SK886　SE889

第43図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB23　SE864　SK898　SK908　SK910　SK913　SP929

第44図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB24　SA4　SD645～SD647　SK653　SK654　SK655　SK656　SK677　SK688　SP855

第45図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB25　SK676　SK693　SD701　SK725

第46図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB26　SA5　SA6　SD647　SK700　SK711　SK712　SK714　SK716　SD722　SD837　SK1294

第47図　開辟大滝遺跡　遺物実測図　SD647　SK700

第48図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SK926　SD1158　SK1160　SK1186

第49図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SK862　SD875　SD876　SK877　SK918　SK925　SK938　SK939　SK1114　SK1156　SK1157　SK1179～SK1181　SK1188　SK1226

第50図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB27～SB30　SA7～SA9

第51図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB31～SB34　SA9

第52図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB27　SP1199　SE1216　SK1217　SP1221　SD1231　SP1232　SD1246

第53図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SE1194　SK1196　SK1198　SK1203　SK1204　SK1211　SK1213　SK1214　SE1215　SK1218　SK1233　SK1234　SK1242　SK1243　SK1254　SK1259

第54図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB28　SB29　SK1125　SK1129　SK1161　SK1162　SK1166～SK1168　SP1169　SP1227　SP1229

第55図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB30　SB31　SA7　SA9　SK171　SD373　SP391　SP392　SK393　SK1281　SP1264

第56図　開辟大滝遺跡　遺物実測図　SP391　SP392　SK393

第57図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB32　SK1　SK2　SE3　SK168　SP183　SK228

第58図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK46　SK381　SK387　SK388　SK398　SK1106　SK1138　SK1177

第59図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB33　SB34　SK67　SD68～SD70　SX385　SD1093　SD1095　SD1123

第60図　開辟大滝遺跡　遺構実測図　SB35～SB37

第61図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB35　SD6　SE96　SK105　SK115　SK119　SP123

第62図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB36　SK7　SP99　SP101　SP106　SP110　SP142　SP174

第63図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SD9　SK91～SK93　SK97　SP98　SK100　SK102　SK108　SK109　SP114　SK172　SK280

第64図　開辟大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB37　SK112　SP199　SK200　SK210　SP221

SK222　SK223　SP234

第65図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK205～SK207　SK209　SK219　SK220　SK230
SK236　SK237　SK242　SP253　SK277　SP280
SK281

第66図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SD238　SK240　SK241

第67図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SB38

第68図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB38　SK201　SK202　SP203　SK204　SK208
SK211　SD213　SK248　SK249　SP251　SP252
SK278　SK279　SK287

第69図　開𥑮大滝遺跡　遺物実測図　包含層

第70図　開𥑮大滝遺跡　遺物実測図　包含層

第71図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SX4018

第72図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SX4018

第73図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SX4018

第74図　開𥑮大滝遺跡　遺物実測図　SX4018

第75図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB39　SE4032　SK4070　SX4088

第76図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SX4021　SK4022　SK4047　SK4048

第77図　開𥑮大滝遺跡　遺物実測図　包含層

第78図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SB40　SA10　SD176～SD180　SD1520

第79図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK195　SK227　SK285　SK290　SK1525
SK1529

第80図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SB41　SB42　SA11

第81図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SD78　SD80　SK81　SK83　SK87　SD88～SD90
SD115　SD116　SK117　SK118　SD255　SD270
SD276　SK284　SK292　SD298　SK299　SD301
SP1522　SK1526

第82図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SB43

第83図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK11　SK29　SK30　SK32　SK33　SK38　SK55
SK73　SK113　SK318　SE319　SK332　SK333
SK337

第84図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SK12　SK13　SD14　SD15　SD19～SD24　SD27
SD28　SK34　SD36　SD39　SD41～SD45　SD76
SD77　SD120　SD327　SD330　SK331　SD334
SD355　SD356　SD359

第85図　開𥑮大滝遺跡　遺構実測図　SB44～SB47

第86図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB44　SD513　SD946　SK1011　SE1035
SD1076　SD1077　SD1085

第87図　開𥑮大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB45　SB46　SK958　SK976　SK978　SK984
SK1068　SK1107　SE1182

第88図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SB47　SE1010　SE1026　SK1041～SK1043　SK1065
SK1066　SK1081
第89図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SK528～SK531　SK534　SK535　SK537　SD940
SK942　SK944　SD945　SD947　SD950～SD952
SD997　SD1014～SD1017　SD1029～SD1032
SD1040　SD1074　SD1078　SF1084　SD1102　SD1103
SD1108　SD1112　SD1113
第90図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SB48
第91図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SK456　SD514　SK519～SK521　SP526　SK527
SK566　SK567　SK574　SK1269
第92図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK522　SK523　SE524　SK525　SK543　SK569
第93図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SD500　SD509　SD510　SK511　SD514～SD516
SD545　SD548　SK554　SK555　SK559　SD631
SD642　SD1265
第94図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SB49　SB50
第95図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SD400　SK428　SK429　SK451　SK455
SD496　SK498　SK517　SK564　SD575
SK635　SK636　SD637　SK682
第96図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SB51～SB53　SA12
第97図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB51　SK416　SK437　SK438　SK460　SP467-a
SP467-b　SE471　SK472　SK473　SE1275
第98図　開酵大滝遺跡　遺物実測図　SE471
第99図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB52　SK441～SK443　SP469　SE470　SK476
SK477　SK628　SK629　SK679　SK680
第100図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SB53　SP469　SE470　SK474　SK475　SP485
SK598
第101図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SK481　SK483　SK484　SK508　SD575
SK1274　SK1276
第102図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SB54
第103図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SD5001
第104図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SD5002　SK5003～SK5007　SK5011
SX5012～SX5015
第105図　開酵大滝遺跡　遺物実測図　SD5001
第106図　開酵大滝遺跡　遺物実測図　包含層
第107図　開酵大滝遺跡　遺物実測図　包含層
第108図　開酵大滝遺跡　遺構・遺物実測図　SD190　SX4065　SX4066
第109図　開酵大滝遺跡　遺構全体図
第110図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SX10　SD2001　SX2002　SD2022　SK2023　SK2024
第111図　開酵大滝遺跡　遺構実測図　SX10　SX2002

第112図　開葺大滝遺跡　遺構実測図　SD2001　SK2023　SK2024　SD3001
第113図　開葺大滝遺跡　遺物実測図　SX10　SD2001　SX2002　SD3001　包含層
第114図　開葺大滝遺跡　遺物実測図　包含層
第115図　地崎遺跡　遺構実測図　SB1
第116図　地崎遺跡　遺構実測図　SP17　SP83　SP113　SP125　SP136　SP143　SP145
SP146　SP150　SP152　SP159　SP174　SP175　SP186
SP194　SP195　SP205　SK54　SK85　SK373
第117図　地崎遺跡　遺構実測図　SP208　SP221　SP236　SP241　SP249　SP253　SP277
SP283　SP285　SP286　SP288　SK223
第118図　地崎遺跡　遺構実測図　SP298　SP304　SP310　SP323　SP324　SP327　SP333
SP357　SP362　SP366　SP383　SP393　SK296　SK306
SK371
第119図　地崎遺跡　遺構実測図　SP483　SP504　SP526　SP573　SP574　SP581　SP583
SP616　SP632　SP633　SK674
第120図　地崎遺跡　遺構実測図　SB2
第121図　地崎遺跡　遺構実測図　SB3
第122図　地崎遺跡　遺構実測図　SP58　SP59　SP81　SP122～SP124　SP140　SP149
SP153　SP163　SP165　SP167　SP168　SP218　SP328
SP358　SK65　SK121　SK141
第123図　地崎遺跡　遺構実測図　SP475　SP477　SP496　SP522　SP525　SP536　SP538
SP541　SP545　SP549　SP584　SP587　SP598　SP675
SK125　SK495　SK625
第124図　地崎遺跡　遺構実測図　SB4
第125図　地崎遺跡　遺構実測図　SA1　SP25　SP77　SP92　SP99　SP397　SP398　SK19
SK90
第126図　地崎遺跡　遺構実測図　SP24　SP51　SP56　SP62　SP68　SP112　SP116
SP135　SK117　SK126　SK134
第127図　地崎遺跡　遺構実測図　SP144　SP219　SP459～SP461　SP519　SP529　SP619
第128図　地崎遺跡　遺構実測図　SD1　SD2　SD5～SD11　SD403～SD405　SD422
第129図　地崎遺跡　遺構実測図　SD1
第130図　地崎遺跡　遺構実測図　SD2　SD9　SD10　SD403　SD405
第131図　地崎遺跡　遺構実測図　SD450　SD455　SD462～SD464　SD467　SK470　SD471
SD473
第132図　地崎遺跡　遺構実測図　SD5～SD8　SD11　SK21　SK22　SK26　SK107　SD404
第133図　地崎遺跡　遺構実測図　SE278　SE530　SE634
第134図　地崎遺跡　遺構実測図　SK155　SK296　SK345　SK348　SK349　SP350　SK363
SK384　SP393
第135図　地崎遺跡　遺構実測図　SK14　SK108　SK111　SK148　SK157　SK160　SK161
SP163　SK172　SK183　SK200　SK207　SK315　SK340

SP351　SK373　SK386　SK387　SK391

第136図　地崎遺跡　遺構実測図　SP15　SK16　SP17　SP18　SK29～SK31　SK34　SK35
SK39　SK101　SK102　SK325　SK344　SK359～SK361

第137図　地崎遺跡　遺構実測図　SK38　SK43　SK48　SP53　SK103　SK130　SP366
SK368　SK371　SK372

第138図　地崎遺跡　遺構実測図　SP49　SK86　SK87　SK131　SK170　SP308　SK364

第139図　地崎遺跡　遺構実測図　SK243　SK245　SK330

第140図　地崎遺跡　遺構実測図　SP184　SK193　SK196　SK210～SK214　SK224　SK240
SK261　SP271　SP281　SP285　SK313　SK314　SK330
SP365　SK389　SK390　SK394　SK395

第141図　地崎遺跡　遺構実測図　SK235　SK237　SP244　SK280　SK284　SK287　SK334
SK335　SK362　SP377　SK378　SK379　SK382

第142図　地崎遺跡　遺構実測図　SK259　SK262　SK263　SK265　SK269　SK305　SK306
SK354　SK355　SK396

第143図　地崎遺跡　遺構実測図　SK162　SK179　SK250　SK256　SP326　SK353　SK367
SK402

第144図　地崎遺跡　遺構実測図　SK415　SD450　SK451～SK454　SK456　SK468

第145図　地崎遺跡　遺構実測図　SK482　SE530　SP575　SK582　SK684

第146図　地崎遺跡　遺構実測図　SK500　SD542　SK543　SK592　SK593　SK669　SK671
SP672　SK677

第147図　地崎遺跡　遺構実測図　SK600　SK644　SK645　SD647　SP665

第148図　地崎遺跡　遺物実測図　SB1　SP15　SP83　SP113　SP150　SP175　SP186　SP194

第149図　地崎遺跡　遺物実測図　SB1　SP205　SP221　SP241　SP249　SP253

第150図　地崎遺跡　遺物実測図　SB1　SP277　SP286　SP298　SP323　SP362　SP366
SP393
SB2　SP412　SP483　SP573

第151図　地崎遺跡　遺物実測図　SB2　SP586　SP632　SP633　SP641　SP685
SB3　SP81　SP123　SP124　SP140　SP165

第152図　地崎遺跡　遺物実測図　SB3　SP163　SP168　SP218　SP358
SB4　SP525　SP536　SP629　SP53

第153図　地崎遺跡　遺物実測図　SP116　SP184　SP244　SP281　SP350　SP459　SP460
SP519

第154図　地崎遺跡　遺物実測図　SD1　SD2　SD5

第155図　地崎遺跡　遺物実測図　SD403　SD450

第156図　地崎遺跡　遺物実測図　SK456　SD462　SD467　SD471　SD473　SE530　SE634

第157図　地崎遺跡　遺物実測図　SK27　SK30　SK34　SK39　SK43　SK79　SK87　SK93
SK100　SK107　SK108　SK111　SK121　SK133　SK155
SK160　SK170

第158図　地崎遺跡　遺物実測図　SK183　SK193　SK196　SK211　SK213　SK232　SK240

SK259 SK261 SK265 SK280 SK296
第159図 地崎遺跡 遺物実測図 SK296 SK314 SK315 SK325 SK335 SK348 SK363
第160図 地崎遺跡 遺物実測図 SK372 SK373 SK387 SK389 SK394 SK395 SK402
SK416 SK451 SK452
第161図 地崎遺跡 遺物実測図 SK453 SK454 SK482 SK500 SK548 SK564 SK582
第162図 地崎遺跡 遺物実測図 SK593 SK600 SK644
第163図 地崎遺跡 遺物実測図 SK645 SK677
第164図 地崎遺跡 遺物実測図 包含層
第165図 地崎遺跡 遺物実測図 包含層
第166図 地崎遺跡 遺物実測図 包含層
第167図 地崎遺跡 遺物実測図 包含層
第168図 地崎遺跡 遺物実測図 包含層
第169図 地崎遺跡 遺物実測図 包含層
第170図 地崎遺跡 遺物実測図 包含層
第171図 木舟城と開酵大滝遺跡の位置概略図と略年表
第172図 開酵大滝遺跡中世面全体図
第173図 町並み変遷図
第174図 建物のタイプ
第175図 建物一覧表及びタイプ・時期別グラフ
第176図 グリット別出土遺物
第177図 16世紀中世土師器皿編年
第178図 機能別構成比
第179図 黒色系漆器形態分類
第180図 赤色系漆器形態分類
第181図 高台の形態分類
第182図 鎧・小札
第183図 漆液容器
第184図 中世後半の漆器法量
第185図 用語例
第186図 遺構の変遷
第187図 建物の間取推定復原図
第188図 富山県の民家（農家）例
第189図 柱の俗称
第190図 時期別遺構出土遺物（土器・陶磁器）組成
第191図 越中瀬戸法量表
第192図 墨書例
第193図 兵庫県南部地震において海岸の埋立て地に流れ出した噴砂
第194図 液状化に伴う噴砂の流出
第195図 液状化跡の模式図

第196図　開削大滝遺跡地震跡に関する位置図
第197図　砂脈の平面図とトレンチの位置
第198図　液状化跡の断面図
第199図　液状化した地層の粒径加積曲線
第200図　石組井戸を引き裂く砂脈の平面図
第201図　石組井戸を引き裂いた砂の粒径加積曲線
第202図　石組井戸の南側における液状化跡の断面図
第203図　土坑を引き裂く砂脈
第204図　土坑を引き裂く砂脈の断面図
第205図　X35Y78地点での液状化に伴う地層の流動過程
第206図　SF1084での液状化跡の断面図
第207図　液状化跡の断面図
第208図　A 地区南端（X32Y103）における液状化跡の断面図
第209図　中部地方から近畿地方東部にかけての活断層の分布

写真 1　野島断層の活動による道路の切断（平林地区）
写真 2　兵庫県南部地震によって海岸の埋立て地に流れ出した噴砂
写真 3　X43Y87における液状化跡
写真 4　石組井戸を引き裂く砂脈
写真 5　石組井戸を引き裂く砂脈の断面形態
写真 6　土坑を引き裂く砂脈

表 目 次

第１表　試掘調査結果一覧……3
第２表　調査一覧……6
第３表　遺跡地名一覧……11
第４表　開藜大滝遺跡　建物一覧……194
第５表　開藜大滝遺跡　柱穴一覧(1)・(2)……195
第６表　開藜大滝遺跡　溝一覧(1)～(6)……196
第７表　開藜大滝遺跡　土坑一覧(1)～(8)……202
第８表　開藜大滝遺跡　井戸一覧……209
第９表　開藜大滝遺跡　土器・陶磁器一覧(1)～(3)……210
第10表　開藜大滝遺跡　木製品一覧(1)・(2)……213
第11表　開藜大滝遺跡　石製品一覧……215
第12表　開藜大滝遺跡　金属製品一覧(1)・(2)……215
第13表　地崎遺跡　建物一覧……323
第14表　地崎遺跡　柱穴一覧(1)～(3)……323
第15表　地崎遺跡　溝一覧……326
第16表　地崎遺跡　土坑一覧(1)～(4)……326
第17表　地崎遺跡　井戸一覧……329
第18表　地崎遺跡　土器・陶磁器一覧(1)……330
第19表　地崎遺跡　木製品一覧……337
第20表　地崎遺跡　石製品一覧……338
第21表　地崎遺跡　金属製品一覧……338
第22表　機能別使用樹種……355
第23表　高台形態分類……356
第24表　漆器形態分類……356
第25表　漆器計測表……357
第26表　一括出土遺物一覧……360
第27表　中世後半の漆器……363
第28表　遺構出土遺物組成表……372
第29表　墨書土器……374

第Ⅰ章　調査経緯

1　調査に至る経緯

A　調査の契機

能越自動車道は，富山県西部と能登地域の高速体系を確立するため，高規格幹線道路網計画の一環として昭和62年に策定された。さらにこの道路は小矢部ジャンクションで北陸自動車道や東海北陸自動車道と接続し，三大都市圏との連携を強めることによって人や物の動きを活発化させ，地域の産業の振興や豊富な観光資源の活用をはかることを目的としている。

道路は総延長約100kmが計画され，その内，富山県内は約45kmである。この中には小矢部東・福岡・高岡・高岡北・氷見の各インターチェンジが計画されている。

平成２年４月に建設省から富山県教育委員会に建設計画が示され，早々に関係する建設省・富山県教育委員会・小矢部市教育委員会の三者で埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行われた。その結果，埋蔵文化財の分布状況を把握するため富山県教育委員会が主体となり小矢部市域の用地買収完了地域の分布調査を早急に実施することとなった。

更に，平成３年４月に建設省・富山県教育委員会・文化振興財団の間で再び協議がもたれ，用地買収が遅れていた小矢部市域の一部，福岡町域を富山県教育委員会が分布調査を実施することとなった。

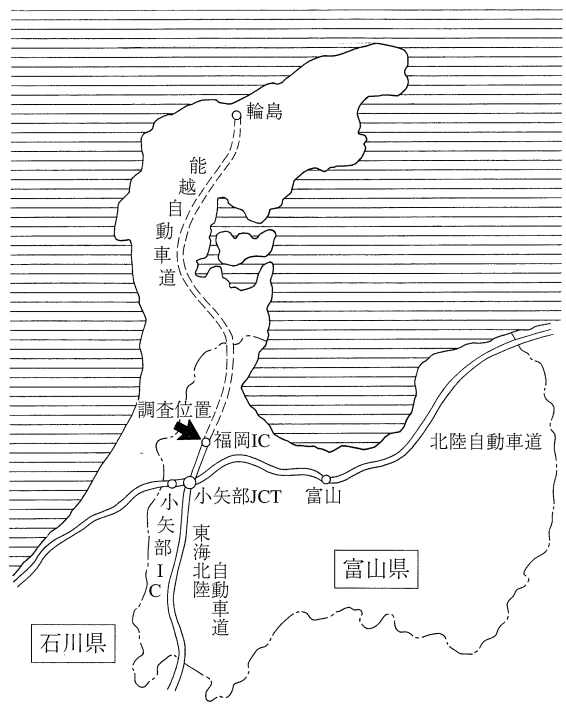
B　分布調査

平成２年度の小矢部市域の分布調査は，小矢部市教育委員会の協力を得て，富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）が主体になり，４月17・18の２日間実施された。本線敷地内（小矢部ジャンクションから福岡インターチェンジ手前の小矢部市域）及び国道８号線から福岡インターチェンジまでのアクセス道路敷地内のうち，未買収地を除く小矢部市域が対象地である。

調査の結果，新たに６箇所の遺跡推定地が発見され，便宜上，本線敷地内は小矢部ジャンクション側から，ＮＥＪ-01・02・03・04，アクセス道路は福岡インターチェンジ側からＮＥＪ-Ａ-01・02と仮称された。

平成３年度の福岡町域を主体とする分布調査は，福岡町教育委員会の協力を得て，富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）が主体になり，12月３日に実施された。本線敷地内（福岡インター手前から福岡サービスエリア間），アクセス道路敷地内の福岡町域及び買収が遅れていた小矢部市芹川地内が対象となった。

調査の結果，本線敷で新たに３箇所，アクセス道路敷で新たに小矢部市域で１箇所が発見され，更に周知の推定地１箇所で範囲拡大が確認された。本線敷は福岡インターチェンジ側からＮＥＪ-05・06・



第１図　調査位置図

07，アクセス道路敷はＮＥＪ-Ａ-01の範囲拡大域の福岡町域をＮＥＪ-Ａ-03，小矢部市芹川地内のＮＥＪ-Ａ-04と仮称された。

C　試掘調査

平成２年度の分布調査結果は，５月24日に建設省・富山県道路課・同企画用地課・富山県道路公社・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・小矢部市教育委員会の七者による協議の場で報告され，今後の取り扱いについて検討が行われた。その結果，早急に試掘調査を実施し，より正確な範囲や内容を把握する必要があるとされた。

試掘調査は小矢部市教育委員会が建設省からの委託を受け，11月１日から12月22日まで実施した。

試掘溝は重機と人力で遺構・遺物を確認しながら掘削した。その結果，ＮＥＪ-04・ＮＥＪ-Ａ-01・ＮＥＪ-Ａ-02の３箇所で遺構・遺物が確認され，五社遺跡，石名田遺跡，地崎遺跡と命名された。また，本調査が必要な面積は合計約54,000㎡と判断された。

試掘調査の結果は，平成３年２月26日に建設省・富山県道路公社・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・小矢部市教育委員会の協議の中で報告された。

平成３年度の分布調査結果は，平成４年１月10日に建設省・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・文化振興財団の四者の協議の場で報告され，早急に試掘調査を実施する必要があるとされた。

試掘調査は文化振興財団が建設省から委託を受け，６月１日から７月７日まで実施した。試掘溝は調査対象面積の５％を目安に10mから20m間隔で設定した。試掘溝の幅は約２mで，遺構・遺物の出土状況を確認しながら重機で掘削した。

その結果，ＮＥＪ-05・ＮＥＪ-06・ＮＥＪ-07・ＮＥＪ-Ａ-03の４箇所で遺構・遺物が確認された。更に，ＮＥＪ-06は２地点に分かれることと，ＮＥＪ-Ａ-03は石名田遺跡と同一遺跡で範囲が拡大することが確認された。ＮＥＪ-05は開酵大滝遺跡，ＮＥＪ-06は蓑島遺跡・江尻遺跡，ＮＥＪ-07は下老子遺跡，ＮＥＪ-Ａ-03は石名田木舟遺跡と命名された。また，本調査が必要な面積は合計で約130,900㎡と判断した。

試掘調査の結果は，９月17日に建設省，富山県教育委員会文化課，富山県埋蔵文化財センター，文化振興財団の四者による協議の中で報告された。

D　本調査

平成３年４月以降，建設省から遺跡の範囲が確定した五社遺跡，石名田遺跡，地崎遺跡の本調査要望が強くなされていた。これを受け，富山県教育委員会及び文化振興財団は東海北陸自動車道関連の調査が終了する平成４年度から本調査を受託することを決め，調査体制の整備や調査方法の検討に入った。

平成４年４月17日の建設省，富山県教育委員会文化課，富山県埋蔵文化財センター，文化振興財団の四者協議で初年度は最も南側に位置する五社遺跡の本調査が決定された。

五社遺跡の調査は，７月20日から12月27日まで実施し，古代・中世の遺構・遺物が多く検出された。また，遺跡の一部分は用地買収の遅れや下層遺構の新たな発見により，平成６年までの３年間の継続調査となった。

２年目の本調査となる平成５年度は，更に調査体制を整備し，平成７年度末の福岡インターチェンジまでの供用開始時期に間に合わせるために，開酵大滝遺跡の調査を主体に，五社遺跡や石名田木舟遺跡の一部も手がけた。（池野正男）

遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	遺構	遺物	時代	面積(㎡)
NEJ-01	小矢部市水島	分布調査 5,600	H2.4.17～4.18				
		試掘調査 271	H2.11.1～11.2	なし	珠洲・陶器	中世・近世	
NEJ-02	小矢部市水島	分布面積 8,000	H2.4.17～4.18				
		試掘面積 237	H2.11.1～11.2	なし	陶磁器	近世	
NEJ-03	小矢部市道明	分布調査 16,800	H2.4.17～4.18				
		試掘調査 1,184	H2.11.1～11.2	なし	陶磁器	近世	
NEJ-04（五社遺跡）	小矢部市五社	分布調査 67,000	H2.4.17～4.18				
		試掘調査 2,977	H2.11.6～12.5	掘立柱建物・土坑・溝	須恵器・土師器・製塩土器・珠洲・中世土師器・輸入陶磁器	◎平安時代後半 ◎中世 近世	32,000
		本調査(延べ)31,100	H4.7.20～12.27	掘立柱建物・井戸・土坑・溝・畠・集石	須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・製塩土器・中世土師器・珠洲・輸入陶磁器・木製品・金属製品	◎平安時代後半 ◎中世 近世	
		本調査(延べ) 6,209	H5.4.19～12.8	竪穴住居・掘立柱建物・溝・畠・集石	土師器・須恵器・木製品	◎古墳時代中期 ◎平安時代前半	
		本調査(延べ) 6,990	H6.5.18～10.25	掘立柱建物・土坑・溝・柵	須恵器・土師器・製塩土器・中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・輸入陶磁器・木製品	◎平安時代後半 ◎中世	
NEJ-06（開発大滝遺跡）	福岡町開発・大滝	分布調査 78,400	H3.12.3				
		試掘調査 4,660	H4.6.19～7.7	掘立柱建物・土坑・井戸・溝	中世土師器・珠洲・陶磁器・木製品	◎中世末 近世	25,300
NEJ-06-b（蓑島遺跡）	福岡町蓑島	分布調査 72,500 試掘調査 2,900	H3.12.3				
			H4.6.17～6.29	土坑・溝	縄文土器・陶磁器	◎縄文時代晩期 近世	3,400
NEJ-06-a（江尻遺跡）	福岡町江尻		H3.12.3				
			H4.6.17～6.29	掘立柱建物・土坑・溝	弥生土器・中世土師器	弥生時代後期 中世 ◎近世	12,100
NEJ-07（下老子遺跡）	福岡町下老子	分布調査74,800	H3.12.3				
		試掘調査 4,900	H4.6.1～6.17	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝	弥生土器・石器・土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・輸入陶磁器・木製品・陶磁器	◎弥生時代後期から末 古代 中世 ◎近世	68,500
NEJ-A-01（石名田遺跡）	小矢部市石名田	分布調査 25,200	H2.4.17～4.18				
		試掘調査 1,462	H3.11.30～12.13	掘立柱建物・土坑・溝	須恵器・土師器・中世土師器・珠洲・輸入陶磁器・木製品	◎奈良・平安時代 ◎中世 近世	21,000
NEJ-A-02（地崎遺跡）	小矢部市地崎	分布調査 19,800	H2.4.17～4.18				
		試掘調査 1,049	H3.11.30～12.21	掘立柱建物・穴	陶磁器・木製品	◎近世	1,000
NEJ-A-03（石名田木舟遺跡）	福岡町木舟	分布調査 32,600	H3.12.3				
		試掘調査 2, 100	H4.6.16～7.1	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・杭列・礎石建物・根太敷建物・埋甕状土坑	須恵器・土師器・珠洲・輸入陶磁器・越前・中世土師器・瀬戸美濃・陶磁器・木製品・金属製品	◎古代 ◎中世 近世	21,600
NEJ-A-04	小矢部市芹川	分布調査 19, 400	H3.12.3				
		試掘調査 900	H4.6.15～6.16	なし	陶磁器		

※ ◎は主体をしめる時代

第1表　試掘調査結果一覧

2　調査経過

A　調査方法

発掘調査の基準となるグリッドの設定に際しては国家座標を用い，遺跡毎に起点を設定した。開酵大滝遺跡は＋76.100，－21.830，地崎遺跡は＋75.850，－23.550をX0Y0とし，南北方向をX軸，東西方向をY軸とした。グリッドは2m方眼とし，各グリッド名は右上のX軸とY軸の座標とした。

開酵大滝遺跡の発掘範囲はX24～X118，Y28～Y137までであり，調査区は農道や用水，畦畔などでA，B，C，D，E，Fに分けている。また，地崎遺跡の発掘範囲はX30～X54，Y51～Y94までで，調査区のほぼ中央を走る農道によって東区，西区に分けている。

調査は表土・耕作土・無遺物層の除去，包含層の発掘，遺構確認面の精査・遺構の検出，遺構の発掘，遺構の記録，写真撮影，空中写真測量，補足作業の順で行った。

表土・耕作土・無遺物層の除去は，人力掘削による調査の事前準備として，調査員立ち会いのもと，試掘調査の結果をふまえ，基本層序を確認しながら，事業者側がバックホウにより行った。場所によっては無遺物層の除去も行った。

包含層の発掘はスコップ等を用い，人力で掘削した。排土はベルトコンベヤーを使用し，路線敷内の調査区隣接地に集積し，ダンプによる調査区外への搬出は事業者側が行った。

遺構確認面の精査・遺構の検出は，遺構確認面に達するとジョレンやねじり鎌で精査し，検出した遺構はスプレーペンキ等でマーキングを行い，遺構概略図を作成した。検出した遺構には遺構番号を付すが，各地区毎に遺構の種類に関わらず通し番号とした。また概略図には遺構上面の覆土色を記入し，検討の材料とした。

遺構の発掘は柱穴・井戸・小さい土坑は長軸に沿って半截，大きい土坑は十字，またはそれ以上に，溝は適宜に間隔をあけてセクションベルトを残し，移植ごてで発掘した。井戸の人力による完掘は最小限にとどめ，重機により完掘した。

遺構の記録は断面図を1/20で実測し，遺構によっては1/10の遺物出土状況図を作成した。各遺構の断面は35㎜カメラで，出土状況図や個別の完掘写真・ブロック写真はブローニー判もあわせて撮影した。調査区の全景写真は4×5インチ判カメラで2方向以上から撮影している。フィルムは，35㎜はカラーと白黒，ブローニー判・4×5インチ判はカラースライドと白黒を使用した。遺構の平面図作成には空中写真測量を利用し，面積によってクレーンとヘリコプターを使用した。

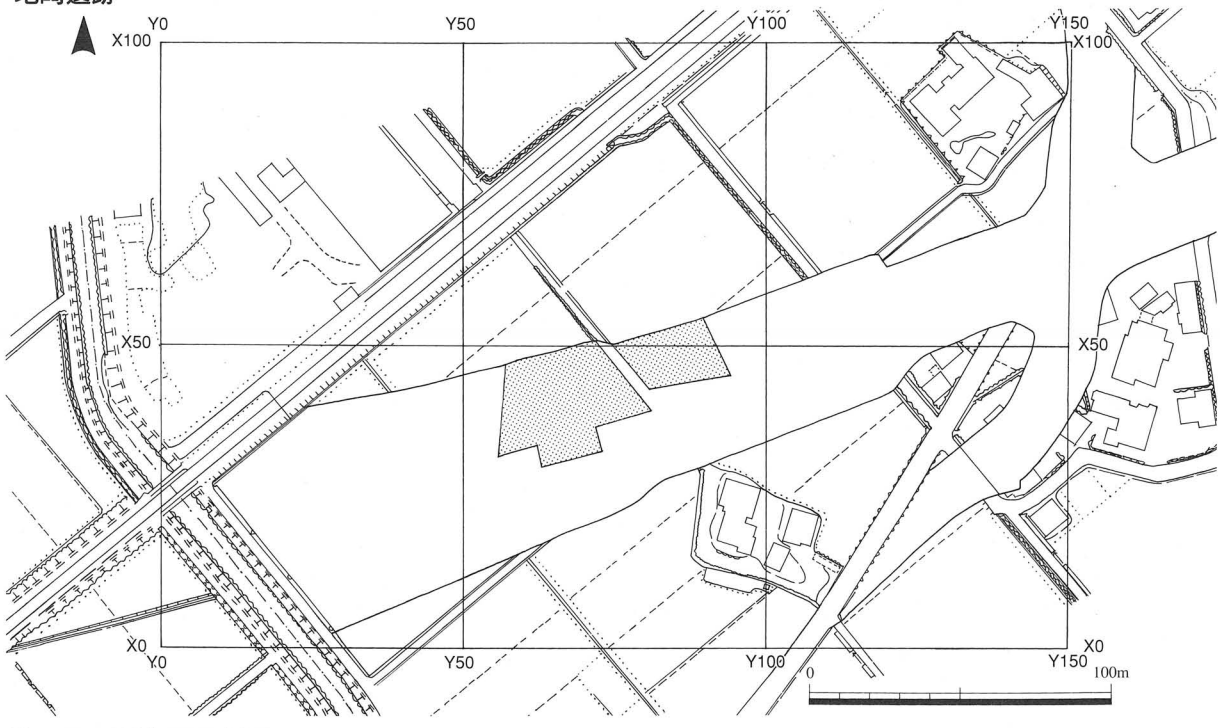
人力で完掘できなかった井戸はバックホウで断ち割り，下層の層位，最終レベルの確認，遺物の採集を行った。また，空中写真測量のために残した畦などをはずし，遺構の完掘を確認した。

B　調査の経過

平成5年度の調査は，建設省との協議のうえ，本線敷内では福岡インターチェンジ部分の開酵大滝遺跡・五社遺跡を，アクセス道内では地崎遺跡・石名田木舟遺跡を対象に，調査員2名1班の体制で行った。開酵大滝遺跡の遺構は，A地区・B地区及びC地区の一部で近世面と中世面に分かれており，近世面の調査終了後，順次中世面の調査に入った。調査期間は5月19日～12月21日まで，調査総面積は28,063㎡である。また，地崎遺跡の調査期間は5月11日～7月27日まで，調査総面積は1,636㎡である。

開酵大滝遺跡

地崎遺跡



第２図　調査区区割図

遺　跡	地　区	調　査　期　間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検　出　遺　構	出　土　遺　物
開酵大滝	A　近世面	8月23日～10月18日	30日間	2,104㎡	三島道子	畠、溝、土坑	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、白磁、青磁、中国製染付、越中瀬戸、唐津、伊万里、石製品、金属製品、古銭
	中世面	10月20日～12月21日	39日間	2,104㎡	佐賀和美 越前慎子 三島道子	掘立柱建物、溝、井戸、土坑、石列遺構	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、白磁、青磁、中国製染付、越中瀬戸、唐津、伊万里、石製品、木製品、金属製品、鎧
	B　近世面	7月21日～8月31日	19日間	2,900㎡	三島道子	柱穴、溝、土坑、畦畔遺構	珠洲、越前、瀬戸美濃、越中瀬戸、唐津、伊万里、肥前、木製品、石製品、金属製品
	中世面	9月1日～9月21日	9日間	2,900㎡	三島道子	溝	須恵器、土師器
	C　近世面	6月24日～7月27日	18日間	2,315㎡	河西健二 柴口真澄	畠	瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里
	中世面	7月28日～12月15日	75日間	5,225㎡	河西健二 柴口真澄	掘立柱建物、溝、井戸、土坑、道路、畠、畦畔遺構	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、白磁、青磁、中国製染付、土師質土器、朝鮮陶器、木製品、石製品、金属製品、土製品、炉壁、鉄滓
	D	6月24日～9月22日	40日間	4,202㎡	池野正男 谷杉廷子	掘立柱建物、井戸、土坑、石敷	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、白磁、青磁、越中瀬戸、木製品、石製品、金属製品、古銭
	E	6月2日～7月23日	26日間	3,673㎡	池野正男 谷杉廷子	掘立柱建物、溝、土坑、	白磁、越中瀬戸、唐津、肥前、金属製品
	F	5月19日～6月22日	17日間	2,640㎡	池野正男 谷杉廷子	溝	越中瀬戸、唐津、古銭
地　崎		5月11日～7月27日	48日間	1,636㎡	佐賀和美 越前慎子	掘立柱建物、溝、井戸、土坑	瀬戸美濃、志野、白磁、青磁、越中瀬戸、唐津、伊万里、肥前、木製品、石製品、金属製品

第2表　調査一覧

C　調査体制

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　関　　清　埋蔵文化財調査事務所所長代理
庶　　務　大房　友明　埋蔵文化財調査事務所主事
　　中川　靖夫　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　池野　正男　埋蔵文化財調査事務所調査第一係長
調 査 員　神保　孝造　埋蔵文化財調査事務所主任
　　河西　健二　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　佐賀　和美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　越前　慎子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　谷杉　廷子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　三島　道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　山元　祐人　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　森本英津子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　柴口　真澄　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

D　現地説明会

発掘調査の結果を広く一般に公開するために，年に1回，調査工程を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。説明会は石名田木舟遺跡で行い，開酵大滝遺跡・地崎遺跡については記者発表のみであった。

平成5（1993）年9月27日　新聞記者発表・開催案内
　　9月30日　各紙に掲載　北日本新聞「16世紀の〝町並み〟発見　木舟城下町跡か」
　　北陸中日新聞「近世のかじ屋群跡か」

E　整理の経過

出土遺物は各年度内に可能な限り洗浄・注記・分類を行った。木製品・石製品・金属製品については，メモ写真を撮影して整理台帳を作成した。木製品は収納・管理の便宜を図るためオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし，仮保管している。調査概要については『埋蔵文化財年報』(5) として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な整理は，平成10年４月に開始した。平成10年度は遺物の実測・遺構や遺物の挿図作成・図版作成・写真撮影・原稿執筆・編集が中心で，平成11年度は印刷を行った。

遺物の実測は土器・陶磁器の大部分を調査員及び整理作業員が行った。木製品・石製品・金属製品については，業者委託による写真実測で行った。実測図は種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺構の実測図・写真・航空測量図はそれぞれの台帳を作成して整理し，遺構カードとともにパーソナルコンピュータを使用してデータ入力した。挿図にある遺構・遺物については，観察表として掲載した。データ入力は人材派遣会社に委託し，整理作業員が補足した。

遺物の写真撮影は業者委託し，４×５インチ判及び５×７インチ判を基本として，白黒とカラースライドフィルムを使用した。写真図版には密着焼付または引き伸ばしたものを使用した。遺構写真・遺物写真のうち重要なものはプロフォトＣＤ化して保存した。

自然科学的分析は平成９年度から平成10年度にかけて専門機関等に委託し，その結果報告を掲載した。

木製品・金属製品のうち重要なものは，平成９年度から平成10年度にかけて元興寺文化財研究所に委託して保存処理を行った。

F　整理体制

平成９（1997）年度

総　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	谷井　保夫	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　務	宮成　真幸	埋蔵文化財調査事務所主任
	蒲田　和志	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	山本　正敏	埋蔵文化財調査事務所調査第一課長
担　当	中川　道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	三島　道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成10（1998）年度

総　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	谷井　保夫	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　務	宮成　真幸	埋蔵文化財調査事務所主任
	蒲田　和志	埋蔵文化財調査事務所主事
	江本　裕一	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	池野　正男	埋蔵文化財調査事務所調査第一課長
担　当	中川　道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	三島　道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

第II章　立地と歴史的環境

1　立　　地

富山県は本州のほぼ中央に位置しており，東を北アルプスに，西を両白山地及び西部丘陵に，南を飛騨高地に囲まれ，北は富山湾に面している。飛騨高原山地から北側に接して連なる音川山地，呉羽丘陵は県中央部に突出し，東部の複合扇状地平野（狭義の富山平野）と，西部の砺波平野に二分している。砺波平野北半の大部分は庄川新扇状地を形成し，面積約146㎢で日本の沖積扇状地の中でも最大級の面積を有している。扇状地上には庄川の変遷を示す河道跡が放射状に残っている。これに対して小矢部川流域の平野は，庄川新扇状地の発達に押されて狭い低地となっており，小矢部川は丘陵裾を蛇行して北流する。

小矢部市・福岡町は富山県西部に位置している。小矢部市は三方を丘陵性山地に囲まれ，北と東は福岡町と接している。小矢部市北部の丘陵は稲葉山（347m）を最高点とし，北東に進むにつれ高さを減じて福岡町西部の宝達丘陵に連なり，高岡市へと通じている。西部は石動断層線と天田峠を通る国道８号線とに限られた地域で，極めて浸食されやすい砂山砂岩で構成されており，浸食谷が発達している。南部は医王山の北側を占める蟹谷丘陵地域である。これらの丘陵は石川県との県境となっており，浸食谷の源流部に形成された倶利伽羅峠や砂子坂峠などは，古来より越中と加賀の交通の要所とされてきた。東部には「散居村」地域としても著名な砺波平野が広がっている。

開発大滝遺跡は福岡町開発・大滝地内に所在し，小矢部川と岸渡川に挟まれた河岸段丘上に立地している。標高は21m～23mを測り，庄川新扇状地と小矢部川低地との境目に位置する。地崎遺跡は小矢部市地崎地内に所在しており，小矢部川低地上に立地し，遺跡の北東約１㎞に現在の小矢部川の河道がある。標高は22mを測る。開発大滝・地崎の両遺跡が所在する一帯は，古くから沖積活動によって幾度となく流路を変えた庄川・小矢部川の氾濫による被害を受けてきたことが知られている。標高20m～30mの扇端部一帯は湧水地帯としても知られ，また，標高10m～15mの末端部では網目状流路をとる大小河川の浸食によって複雑な微地形が発達している。

2　歴史的環境

開発大滝・地崎遺跡の周辺では縄文時代から近世までの各時代の遺跡が認められるが，ここでは時代を追って主な遺跡について紹介していく。

縄文時代には小矢部川右岸では蓑島遺跡（5），高田新茅道遺跡（13），駒方遺跡（14）などがある。３遺跡ともに標高10m～20mの庄川扇状地端部に位置し，縄文晩期の遺跡として知られているが，遺構は自然流路・溝・穴で集落の実態については不明である。小矢部川左岸では桜町遺跡（47）がある。桜町遺跡は小矢部川と子撫川の合流地点から丘陵地帯の河岸段丘に広がる約60万㎡の大規模な遺跡で，縄文時代から現代に至るまで連綿と営まれた複合遺跡であることが確認されている。縄文時代については，草創期から晩期まで縄文時代全期間の遺物が出土している。縄文時代中期の層からは高度な技術で加工した建築部材や，多量の木の実やコゴミなどの植物が出土し，注目された。

弥生時代では小矢部川右岸に下老子笹川遺跡（7），石塚遺跡がある。下老子笹川遺跡は能越自動車道の路線上に位置しており，1995年より調査が行われている。その結果，縄文から近世までの複合遺

跡であることが確認されており，なかでも周溝をもつ建物が20棟以上検出され，弥生時代後期から終末期の大規模な集落であったことが判明している。石塚遺跡は北陸本線高岡駅と西高岡駅のほぼ中間に位置し，弥生時代中期の拠点的集落として著名である。

古墳時代は小矢部川左岸の丘陵裾沿いの山腹斜面に，馬場古墳群（22），加茂神社古墳群（23），下向田古墳群（28），加茂横穴墓群（25），桜町横穴墓群（44）などの古墳や横穴墓が目立っている。集落遺跡については，五社遺跡（4）で古墳時代中期の竪穴建物が検出されているが，調査例が少なく，実態は明らかでない。

古代では石名田木舟遺跡（3），桜町遺跡がある。石名田木舟遺跡は小矢部川右岸に位置し，縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。古代については７世紀後半～９世紀後半の遺構・遺物が確認されており，８～９世紀を主体とする集落遺跡と考えられている。７世紀後半～８世紀初めのものと考えられる瓦塔や阿弥陀三尊像などの仏具関連の遺物が出土しており注目された。桜町遺跡では，６世紀末～８世紀前半の40棟を越える建物が確認されている。また，古代北陸道と考えられる遺構も検出され，律令期の中心が桜町周辺にあるものと推定された。

小矢部市域には五社条里遺跡（9），田川条里遺跡（43），桜町条里遺跡（46），石動条里遺跡（49），蓑輪条里遺跡（59）などの条里形地割が多く残っており，小矢部川左岸にまとまって分布している。古代から中世にかけての砺波平野では荘園が増大していき，小矢部市域では埴生庄，松永庄，糸岡庄など多くの荘園が成立していった。

中世では倶利伽羅峠が合戦の舞台となるなど交通・軍事の重要な拠点となった。平野を望む丘陵部には鴨城（26）や田川城（38），今石動城跡，蓮沼城などの城館が築かれている。一方，平野部では開碆大滝遺跡（1）の南西約870mに木舟城跡（8）がある。木舟城は寿永三年（1184）年に石黒氏が築城したものといわれ，砺波地方の北部地域を支配する中心的な勢力となった。戦国時代末期には上杉氏，佐々氏，前田氏の居城となり，天正十三（1586）年の白山大地震によって崩壊したと伝えられている。その周辺には城下町が発達したとされ，石名田木舟遺跡，開碆大滝遺跡では15世紀末～16世紀後半にかけての遺構・遺物が確認されている。開碆大滝遺跡では，２本の道路跡と短冊形地割に整然と並ぶ建物や炉関連遺構・井戸などが検出されており，『貴船城古今誌』に掲載されている位置図と比較すると，鉄砲町・鍛冶屋町付近に相当することから木舟城の城下集落と考えられている。木舟城の崩壊後は城主前田氏が今石動城に遷ったため，城下の町人も石動や高岡などに移住し，農村となっていった。

近世以降には砺波平野一帯は加賀藩の支配下に入り，灌漑用水の充実などの開拓政策によって開発が進み，米の生産量は加賀百万石を支える要因ともなった。小矢部川左岸の石動には町奉行が置かれ，北陸道の宿場町としても，年貢米の集散地としても重要な町となっていった。これに対し，小矢部川右岸の平野部では地崎遺跡（2）や江尻遺跡（6）などで屋敷跡が確認されているが農村となり，現在では豊かな水田地帯となっている。（三島道子）

参考文献　石黒光祐他　1992　『貴船城古今誌』　木舟城跡保存会
小矢部市　1971　『小矢部市史』
福岡町史編纂委員会　1969　『福岡町史』

第3図　周辺遺跡位置図(1：50,000)

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	文献
1	開辟大滝遺跡	福岡町開辟	散布地	中世～近世	15, 16, 18
2	地崎遺跡	小矢部市地崎	集落・荘園	江戸	15, 16, 33
3	石名田木舟遺跡	小矢部市石名田 福岡町木舟	散布地	弥生・奈良・平安・鎌倉・室町	13,15, 16, 17, 19, 23, 27, 33
4	五社遺跡	小矢部市五社	集落・荘園	平安・中世	14,16,17,22,33
5	蓑島遺跡	福岡町蓑島	集落	縄文・近世	15, 19
6	江尻遺跡	福岡町江尻	集落	古墳・中世～近世	15, 19
7	下老子笹川遺跡	福岡町下老子 高岡市笹川	集落	弥生～近世	15,18,19,20,21
8	木舟城跡	福岡町木舟字西堀	城館	中世・近世	28
9	五社条里遺跡	小矢部市五社	条里	古代・中世	
10	木舟北遺跡	福岡町木舟	集落	古代・中世	24
11	大滝遺跡	福岡町大滝	散布地	中世・近世	
12	高田新西後遺跡	高岡市高田新字西後	散布地	縄文（晩）・奈良～中世	26
13	高田新茅道遺跡	高岡市高田新字茅道	散布地	縄文（晩）	26
14	駒方遺跡	高岡市駒方	散布地	縄文（晩）・古代・中世	26
15	立野地頭田遺跡	高岡市立野字地頭田	散布地	縄文（晩）・奈良・平安	
16	中保Ｄ遺跡	高岡市中保	散布地	古墳～中世	
17	小竹Ｃ遺跡	高岡市小竹	散布地	古墳～中世	
18	上開発遺跡	高岡市上開発	散布地	奈良～中世	
19	今市遺跡	高岡市今市	散布地	弥生～近世	
20	三ヶ遺跡	高岡市三ヶ	散布地	古墳～中世	
21	油屋寺田遺跡	高岡市戸出字油屋	散布地	古墳～平安？	
22	馬場古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	28
23	加茂神社古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	
24	馬場東城跡	福岡町馬場	山城	中世	
25	加茂横穴墓群	福岡町加茂字大松平	横穴	古墳	28
26	鴨城跡	福岡町加茂・島倉	山城	中世	28
27	土屋古墳群	福岡町土屋	古墳	古墳	
28	下向田古墳群	福岡町下向田	古墳	古墳	29
29	西明寺遺跡	福岡町里口	寺院？	中世	28
30	上向田古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	
31	上五位神社古墳群	福岡町上向田・上野？	古墳	古墳	
32	平尻山古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	
33	上野古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	11, 28
34	上野Ａ遺跡	福岡町上野字岡山	集落	縄文（前・中）・古墳	12
35	上向田経塚	福岡町上向田	経塚	中世	28
36	上向田上野古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	
37	オオノントウ古墳	小矢部市田川	古墳	古墳	
38	田川城跡	小矢部市田川	山城	中世～室町？	
39	田川城ヶ峰横穴墓群	小矢部市田川	横穴	古墳	
40	田川白土山横穴墓群	小矢部市田川	横穴	古墳（後）	
41	田川遺跡	小矢部市田川	散布地	不明	
42	田川三角山横穴墓群	小矢部市田川字三角山	横穴	古墳（後）	
43	田川条里遺跡	小矢部市田川	条里	古代・中世	
44	桜町横穴墓群	小矢部市桜町字深沢	横穴	古墳（後）	11
45	桜町西古墳	小矢部市桜町	古墳	古墳	
46	桜町条里遺跡	小矢部市桜町・西福町	条里	古代・中世	
47	桜町遺跡	小矢部市桜町字産田・中出・舟岡・西中野字小三昧前・坂	集落・荘園	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉	1,2,3,4,5,6,8, 10,25,30,31,32
48	天狗山古墳群	小矢部市桜町字地山	古墳	古墳	7
49	石動条里遺跡	小矢部市小矢部町・畠中町	条里	古代・中世	
50	御館山館跡	砺波市東宮森・西宮森・東中	城館	室町？	
51	東中遺跡	砺波市東中	城館？	室町	
52	金屋本江遺跡	小矢部市金屋本江	散布地	奈良・中世	
53	小倉の土居跡	砺波市鷹栖	城館？	室町	
54	鷹栖四谷遺跡	砺波市鷹栖	墓	室町	
55	内御堂遺跡	小矢部市内御堂	散布地	中世	
56	浅地遺跡	小矢部市浅地	散布地	奈良・中世	9
57	高木遺跡	小矢部市高木字野田島	散布地	縄文・奈良・中世	9
58	蓑輪遺跡	小矢部市蓑輪	散布地	縄文・古墳・奈良・室町	9
59	蓑輪条里遺跡	小矢部市安養寺・高木・蓑輪・興法寺	条里	古代・中世	
60	ズンデ山遺跡	小矢部市浅地字ズンデ山	古墳	古墳	9
61	浅地神明社遺跡	小矢部市安養寺	散布地	弥生（終末）・古墳	9
62	興法寺古墓	小矢部市興法寺？	墓？	古代（白鳳）？	9, 11
63	清水遺跡	小矢部市清水 福野町本江・若竹町	散布地	古墳・平安・近世	
64	小倉殿館跡	砺波市鷹栖	城館	室町	
65	稲葉山砦跡	小矢部市田川	山城	中世	

第３表　遺跡地名一覧

文　献

1　安念幹倫・高木場万里　1985　『富山県小矢部市　桜町遺跡　産田地区発掘調査概報』小矢部市教育委員会
2　伊藤隆三　1980　『富山県小矢部市　桜町遺跡発掘調査概報』小矢部市教育委員会
3　伊藤隆三・安念幹倫　1982　『富山県小矢部市　桜町遺跡（古苗代・鷲場地区）』小矢部市教育委員会
4　伊藤隆三・高木場万里　1984　『富山県小矢部市　桜町遺跡　城山都市下水路新設工事に伴う産田地区の調査』小矢部市教育委員会
5　伊藤隆三　1994　『平成５年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市教育委員会
6　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1980　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』小矢部市教育委員会
7　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1981　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』小矢部市教育委員会
8　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1982　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』小矢部市教育委員会
9　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1983　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ』小矢部市教育委員会
10　小矢部市教育委員会　1983　『富山県小矢部市　桜町遺跡（坂東地区）』
11　小矢部市　1971　『小矢部市史』（上巻）
12　久々忠義　1992　『富山県福岡町　上野Ａ遺跡発掘調査概要』福岡町教育委員会
13　栗山雅夫・越前慶祐　1997　『富山県福岡町　石名田木舟遺跡発掘調査報告書－県指定史跡　木舟城跡隣接地における発掘調査－』福岡町教育委員会
14　財団法人富山県文化振興財団　1993　『埋蔵文化財年報』(4)
15　財団法人富山県文化振興財団　1993　『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－小矢部市～福岡町間－』
16　財団法人富山県文化振興財団　1994　『埋蔵文化財年報』(5)
17　財団法人富山県文化振興財団　1995　『埋蔵文化財年報』(6)
18　財団法人富山県文化振興財団　1995　『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－ＮＥＪ08遺跡－』
19　財団法人富山県文化振興財団　1996　『埋蔵文化財調査概要－平成７年度－』
20　財団法人富山県文化振興財団　1997　『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』
21　財団法人富山県文化振興財団　1998　『埋蔵文化財調査概要－平成９年度－』
22　財団法人富山県文化振興財団　1998　『五社遺跡発掘調査報告　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第９集』
23　斉藤隆・橋本正春　1995　『富山県福岡町　石名田木舟遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
24　神保孝造　1997　『民間分譲住宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要　木舟北遺跡』福岡町教育委員会
25　高木場万里　1987　『富山県小矢部市　桜町遺跡（個人住宅の建築に伴う中出地区の調査）』小矢部市教育委員会
26　富山県立高岡工芸高校地理歴史クラブ・ＯＢ会　1972　『富山県高岡市　高田新・駒方遺跡調査報告書』
27　橋本正春　1996　『富山県福岡町　石名田木舟遺跡第３次発掘調査報告書』福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
28　福岡町　1969　『福岡町史』
29　宮田進一　1985　『富山県福岡町　下向田古墳群試掘調査概報』福岡町教育委員会
30　山森伸正・林浩明　1987　『富山県小矢部市　桜町遺跡（県道改良工事に伴う雀谷地区の調査）』小矢部市教育委員会
31　山森伸正・岡本淳一郎　1989　『富山県小矢部市　桜町遺跡（県道改良工事に伴う深沢地区の調査）』小矢部市教育委員会
32　山森伸正・島田修一　1990　『富山県小矢部市　桜町遺跡（船岡地区の重要遺跡確認緊急調査）』小矢部市教育委員会
33　山森伸正・塚田一成　1991　『富山県小矢部市能越自動車道関係遺跡群試掘調査報告』小矢部市教育委員会

第Ⅲ章　開藤大滝遺跡

1　遺跡の概要

A　概　　要

遺跡の時期は，中世末と近世の二時期である。中世末は最も広範囲に遺構が認められる。遺構は２本の南北に延びる道路の両側に掘立柱建物群が並び町屋群を構成する。町屋群の範囲は南側では調査区外にも広がり，確定できなかったが，その他の三方はほぼ確定できた。北側の調査区Ｄ・Ｂ区の大半には遺構は認められない。この部分には砂層，暗褐色シルトなどの氾濫堆積層が厚く認められる。谷地形が入り込み湿潤で居住空間には不向きな地質と推測する。東側はＡ区遺構群東端に土塁状の石列が検出されている。石列は堤防としての機能が推測されており東限を示す。西側はＥ・Ｆ区を北上する大溝によって遺構群は途切れる。大溝は出土遺物から近世まで機能しており，更に大溝の西側は表土の直下が砂礫層で氾濫堆積層であり，遺構は検出されなかった。これらのことから遺跡の範囲は比較的安定した自然堤防上に位置し，町屋群の配置も地形に大きく左右されたのであろう。

遺構は道路２本，掘立柱建物54棟，柵12条，井戸32基の他，溝・土坑は多数検出されている。

道路は建物群の配置と遺構が希薄な帯状部分を道路と推定した。東側の道路１は北側では直線的に南下し，調査区中央付近で弧を描きながら西側に折れる。道路中央部には平行する１条の溝が配置されるが，側溝や石敷きなどの付属施設は無い。西側の道路２は直線的に南北に延び，２本の道路は調査区外で合流すると推定される。

２本の道路に挟まれたＣ・Ｄ区の建物群は短冊状の区画溝が伴う。区画溝は２本の道路に挟まれた東西を大略２分割し，道路に面した間口が狭く奥行きが長い短冊形で，区画規模には大小があり，道路１に面する区画は南側に大区画がみられる。これに対して道路２の東側に面する区画は不明確な面もあるが大区画で，奥行きは狭い。区画の選地や建物配置からは道路１が表道路であろう。これに対して道路１に面する東側建物群には区画溝は認められず，無作為に建物が立て替えられており，柱筋は不揃いである。小区画内での建物の配置は比較的単純で道路に面して桁を並行させた建物を中心に，奥に空白域を設ける。この空白域には平行する数条の小溝が検出されることから，畠等があったのであろう。大区画の場合は道路に面した位置に並行して２棟程度の建物が配置され，奥にも数棟の建物を配置する例が多い。建物群の配置状況は道路１が直線的に延びる北側のＳＢ31・32・35・37は柱筋を揃え整然と並ぶ。道路２に面した西側は用水等で未調査部分が多く，不明確であるが僅かに遺構が検出されている。

掘立柱建物の重複関係は多い建物で３回程度で，重複関係の認められない単独建物も多い。出土遺物の時期とも勘案すると，遺跡の存続期間は16世紀代の約100年程度と推定される。掘立柱建物の柱穴は遺構検出面からの掘り込みが浅く，新旧関係が不明なものが多い。また，柱穴は小さく，柱の配置は不揃いの建物が多い。これらは，中世末の建物の特徴と推測する。

井戸は道路に面した建物に基本的には伴う。配置位置は建物に接した裏側ないし横が一般的であるが，道路に面した表側に配置した例もある。井戸は石組井戸が多く，深さは１ｍ程度と浅い。

近世の遺構はＡ区とＣ区南側で畠跡が検出されている。畠の畝方向はブロック状で異なり，東西・南北方向がある。畝の幅は１ｍ前後で比較的広く，長さは一定でない。

第4図　開藝大滝遺跡中世面町割図

出土遺物は少なく明確でないが近世に属すると推定する。

B　土　　層

基本層序　Ⅰa層；表土・耕作土。Ⅰb層；暗灰黄色砂質シルトや浅黄色シルトでA区やC区東側で部分的に認められる厚さ数 cmの薄い層である。Ⅰc層；浅黄橙色砂質シルトや黄褐色砂質シルトで厚さは数 cmから10cm程度である。畝状遺構のさくの部分に堆積し，近世遺構の検出面にあたる。Ⅰd層；褐灰色砂質シルトや灰黄褐色砂質シルトで畠の畝の部分に堆積した土層である。炭化物が僅かに混じり厚さは数cmから20cmである。Ⅱ層；D区西側で部分的に認められる淡黄褐色砂質シルトで，厚さは数cmから10cm程度である。Ⅲ層；色調や砂の混入割合が異なり，９層程度に分層可能である。基本的な色調は暗黄色の砂質シルトである。Ⅳ層；明褐灰色粘土質シルト・青灰色粘土質シルト・青灰色シルトで３層程度に分層が可能である。Ⅴ層；オリーブ褐色砂礫・明褐灰色砂質土で分層が可能である。Ⅲ・Ⅴ層は氾濫堆積層である。

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は起伏にとみ，地区，地点によって中世遺構の検出面が異なる。A区ではⅤ層，C区はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層，D区はⅢ・Ⅳ層が遺構検出面である。B区中央部やD区北側にはⅢ層がみられず谷地形が入る。西側のE・F区ではⅠa層の直下にⅤ層の砂礫層が現れる。

C　地震痕跡

遺跡内から地震痕跡である噴砂が数多く認められる。噴砂は遺構やその埋土を切り裂いていることから遺構埋没後の地震痕跡であることは間違いない。但し，幾多の地震痕跡でも，同じルートで噴砂が吹き上がる可能性もあり，数度の地震痕跡である可能性も捨てきれない。文献上では天正13年(1586年）と安政５年（1858年）に地震に被災し，大きな被害を出した記録があり，後者の地震痕跡である可能性が高い。更に，噴砂は近世遺構の畝やさく埋土をも切り裂いており，安政５年の噴砂痕跡とすると畝状遺構の構築時期はそれ以前となる。

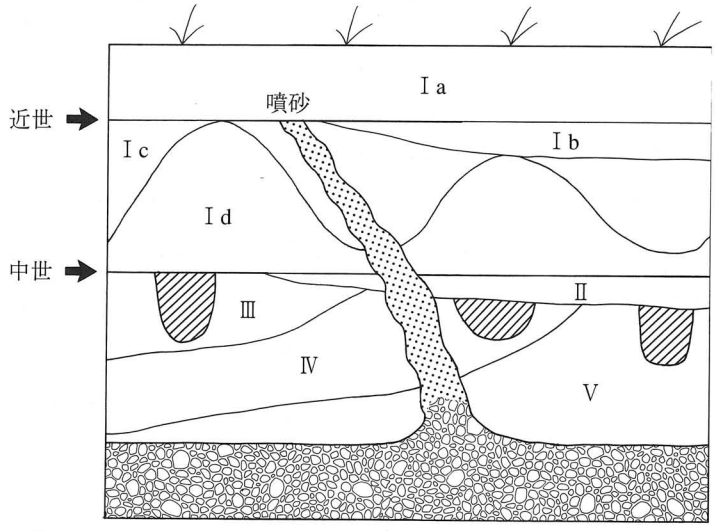
D　中世遺構の記述

中世の遺構はほぼ全調査区に広がる。遺構の記述に当たって，掘立柱建物を中心に項目を設け，建物に付属する井戸・土坑などの遺構も同時に記述する。また，遺構内出土遺物も同様とする。但し，所属が明確でない土坑や包含層出土遺物などは地区毎の最後にまとめて述べる。

C区の区画溝をもつ遺構群は，前述した掘立柱建物を中心とした項目の前に区画毎に大項目を設ける。更に所属が明確でない遺構も区画内遺構として記述し，区画毎に完結させる。但し，包含層出土遺物は量が少ないため地区ブロックの最後にまとめる。

記述の順序は道路1に面した東側建物群の北側から始め，南下する。次に道路１に面した西側建物群に移り南端から北上して説明する。その後，道路２に面した東側建物群の北端に移り，南下して説明する。最後にE区の遺構・遺物の説明を行う。具体的な地区名はD区東側遺構群，A区遺構群，C・D区区画番号順，最後にE区の順に説明する。

（池野正男）



第５図　開酵大滝遺跡基本層序模式図

2　遺構・遺物

A　中　　世

中世面ではC地区を中心として南北およそ150m，東西に最大90mの町並みが確認されており，54棟の建物，井戸，土坑が道路に沿って整然と並んでいる。建物構造は掘立柱によるものが多いが，柱穴が極めて浅い礎石・礎板・束柱痕などの土台基礎痕と考えられるもの，及び掘立柱建物との折衷型があると考えられる[注1]が判別がむずかしく，ここでは掘立柱構造をとるものとして扱っている。

道路1東側遺構群

道路1の東側には道路に沿って建物15棟と，それに伴うと考えられる溝，土坑，井戸などの遺構が確認されている。町並みを形成する区画溝はほとんど検出されなかった為，道路1の東側は建物とそれに関連すると考えられる遺構を，建物ごとに記述する。

道路1（第7・8図）

道路1はD地区の西端からC地区北東角を通りA地区，C地区南東角へ緩くカーブしながら伸びている。遺構の空白地帯となっており，道路1の幅員は約10mと推定できる。道路の幅員は北側のほうが広く12mで，南側に行くにつれて狭くなり南端では10mとなる。道路面は特に堅く締まって検出されたわけではないが，C地区の南壁断面では建物遺構面よりも10cmほど高い面で観察された[注2]。道路上面にはバラス状の礫が認められたことから，若干の盛土を行っている可能性がある。道路1の中央にはSD4041・SD170が存在している。溝の幅は30cm～60cmで，C地区南壁断面では130cmを測る。深さは8cm～10cmで，埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。SD170からは中世土師器（*8*），珠洲甕（*9*・*10*），石臼（*11*・*12*）が出土している。*8*は16世紀末の時期に想定される。*9*は中甕の口縁で，D地区南西端の包含層出土の破片と接合している。また，*10*の甕胴部破片とは同一個体と思われる。Ⅵ期[注3]に比定されるもので，伝世品の可能性も考えられる。*11*は上臼，*12*は下臼であり，共に凝灰角礫岩，いわゆる「桑山石」の製品である。

1号建物（SB1，第6図，図版26）

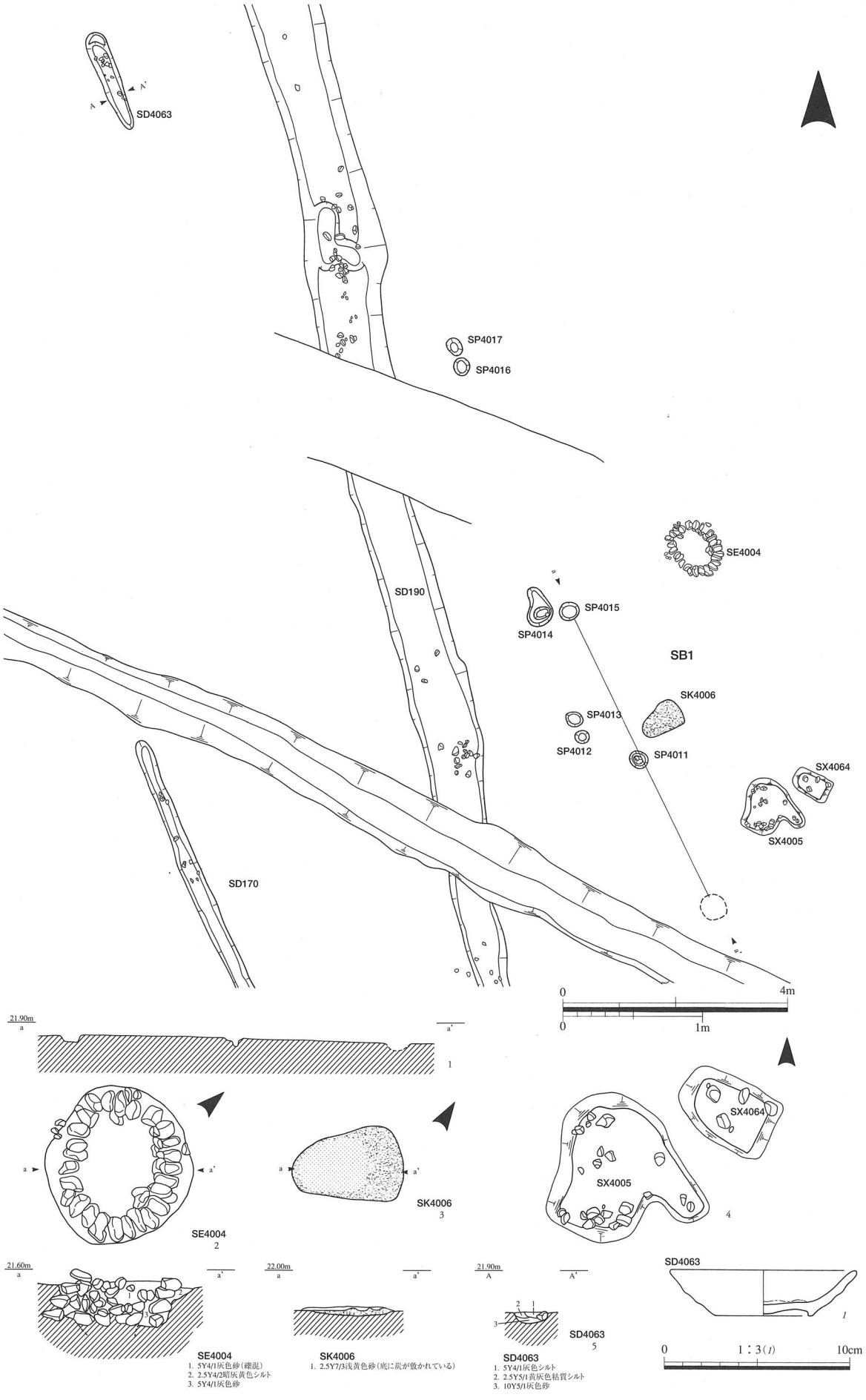
D地区の南東端に位置し，SD170から東へ8m離れている。建物の柱穴は浅いものが多く，南端の柱穴は調査中に消滅したが，SB1は西に22°振る3柱穴1列の柱列である。SP4015とSP4011の柱間は2.6mを測り，SP4011の南側でほぼ等間隔の辺りに柱穴らしい痕跡が確認されている。柱列はSD170とほぼ並行しており，柱列の東側には，土坑（SK4006），井戸（SE4004），石敷き遺構（SX4005，SX4064）があり，SB1を構成する諸施設と考えられる。SB1は，道路に沿って立つ2間×1間の建物で，柱列の東側は土台等と仮定し石敷きを含む17m²ほどの敷地をもつものと推定している。

4006号土坑（SK4006，第6図）

SK4006はSP4011の東側に隣接する80cm×48cmの楕円形の浅い土坑で深さは8cmを測る。底面に炭化物が堆積しており，50cm×40cmの範囲で円形の焼土が確認されている。このことから，炉跡の可能性が考えられる。

4005号・4064号集石遺構（SX4005・SX4064，第6図）

石敷き遺構としたSX4005，SX4064は柱列の東1.5mに位置する。拳大ほどの礫がまとまって検出されたもので，180cm×100cmほどの範囲で認められ，掘り込みはもたない。SB1の屋内に当たり，土間の可能性も考えられる。



第6図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB1　2. SE4004　3. SK4006　4. SX4005・SX4064　5. SD4063
SD4063(*1*)

4004号井戸（ＳＥ4004，第６図，図版26）

ＳＥ4004はＳＰ4015の東約２ｍに位置する，110cm×108cmの石組井戸である。石組は４段で，北西側は部分的に崩れている。深さは30cmを測り，埋土は灰色砂である。ＳＥ4004は道路に面した建物の裏側に位置している。ＳＥ4004をはじめＳＢ１に関連する遺構から遺物は出土していない。

4063号溝（ＳＤ4063，第6図）

ＳＤ4063はＳＢ１の北西11ｍに位置する南北方向の溝で，道路１の幅員内にかかる。溝幅は32cm，深さ10cmを測り，埋土は灰色シルト，黄灰色粘質シルト，灰色砂である。瀬戸美濃の皿（*1*）が出土している。*1*は16世紀後半の時期が想定される。

２号建物（ＳＢ２，第７図，図版26）

Ｃ地区の北東隅，ＳＢ１の南約５ｍに位置している。ＳＤ170から東に６ｍ離れ，ほぼ並行している。一部調査区境にかかり途切れているが，桁行7.3m×梁行4.0m，平面積29.2m²で，主軸はＮ－15°－Ｗの南北棟の建物である。２間×２間の側柱建物としているが，柱穴は極めて浅く土台基礎痕の可能性も考えられる。ＳＰ127とＳＰ132は棟持ち柱の可能性もある。建物の内部に土坑（ＳＫ8），道路から見て建物の裏側に井戸（ＳＥ181）があり，ＳＢ２を構成する施設と考える。

８号土坑（ＳＫ8，第8図，図版26）

ＳＫ8は200cm×190cm，深さ６cmを測る不整形の竪穴状土坑[注4]で，北西角は柱穴を避けてカットされている。埋土は緑灰色砂質シルトで，ほぼ全面に炭化物が堆積している。北東角と南東角では小石の集積が見られ，漆器数個体（*2*～*5*）と蓋（*6*）と考えられる円形板が出土している。ＳＫ８は土間などの作業場と考えられる。礫に混じって出土した漆椀は内外面黒漆で*3*・*4*は外面，*5*は底部内面に赤色で文様が描かれている。*4*と*5*はいずれも丸に扇の文様で，同一個体の可能性がある。

181号井戸（ＳＥ181，第８図，図版26）

ＳＥ181はＣ地区北東角にあり，上部のほとんどを排水溝によって破壊されている。残存する部分では直径80cmを測る円形の石組井戸で，桶の側板が出土しており，水溜として桶が用いられていたと思われる。湧水のため，井戸底の確認はできていないが，桶の下端のレベルは標高20.84ｍを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルト，緑灰色砂である。遺物は漆椀の底部（*7*）がある。

３号建物（ＳＢ３，第９図，図版27）

Ａ地区の北西端，ＳＢ２の南約22ｍに位置し，緩やかに曲がる道路１に沿って立つ４間×１間の建物である。桁行6.4m×梁行2.4m，平面積15.36m²で，主軸はＮ－５°－Ｗの南北棟である。建物の内部に長方形の浅い土坑（ＳＫ2355），道路に面した側に井戸（ＳＥ2302）があり，ＳＢ３に付属する施設と考えられる。

2355号土坑（ＳＫ2355，第９図，図版27）

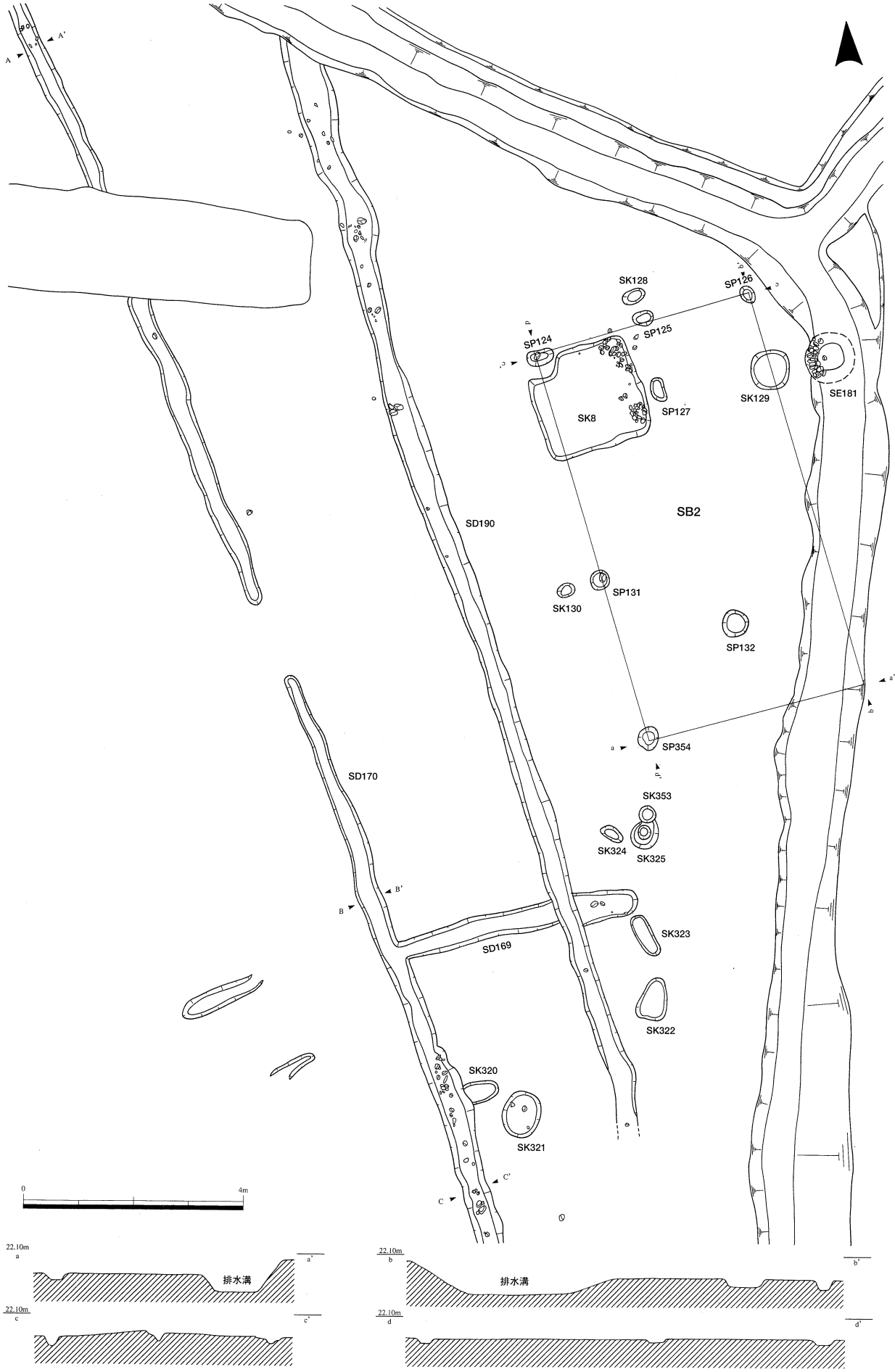
ＳＫ2355は178cm×102cmの竪穴状土坑で，深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質土の単層で，炭化物の堆積は認められない。土間などの作業場の可能性がある。

2357号土坑（ＳＫ2357，第９図，図版27）

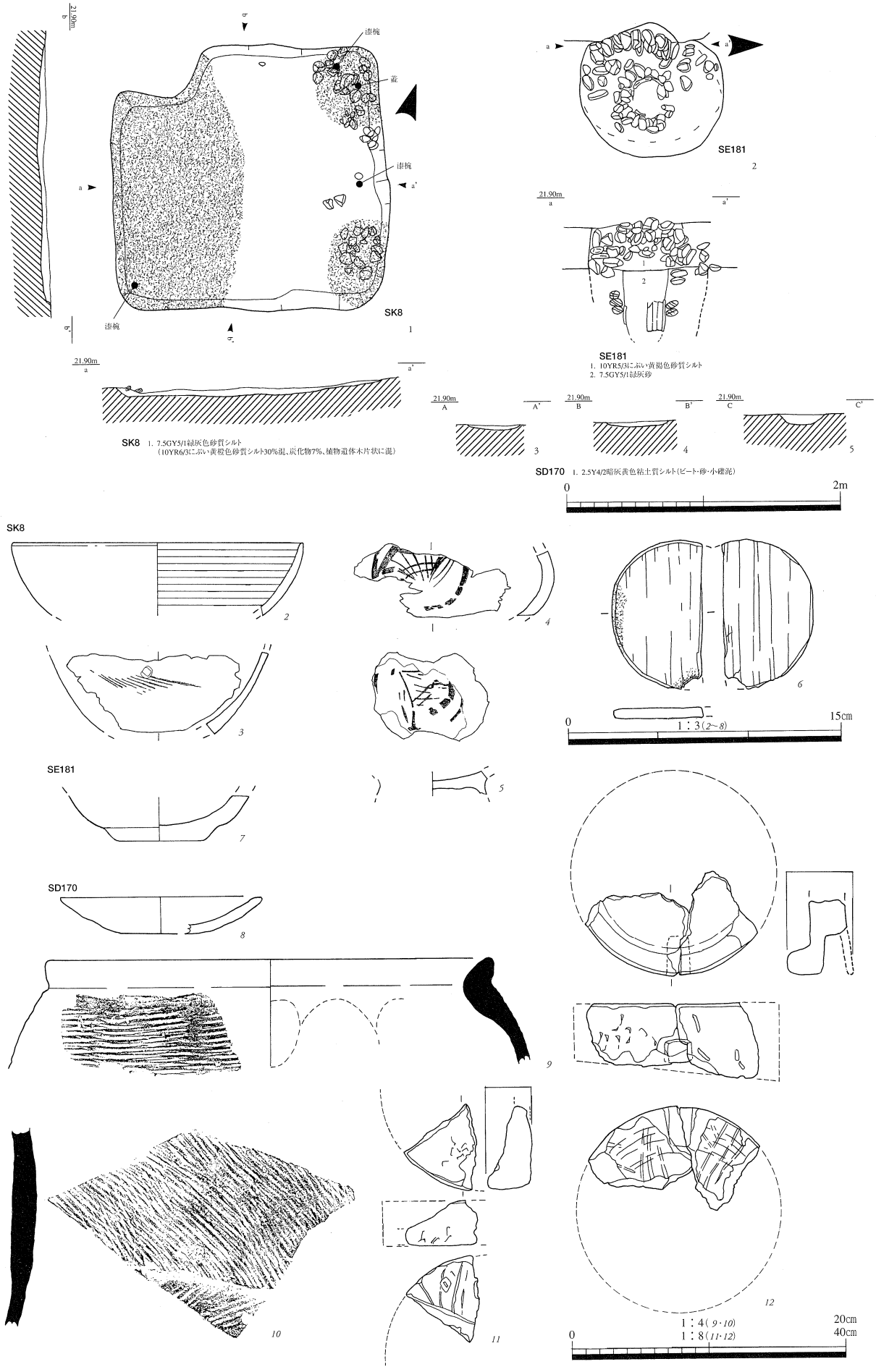
ＳＢ３の東側に近接してＳＫ2357が位置している。ＳＫ2357は108cm×95cmの円形の土坑で，深さは22cmを測る。南側に一部深い掘り込みがあり，10cm代の礫を含んでいる。井戸の可能性も考えられる。

2302号井戸（ＳＥ2302，第9図，図版27）

ＳＥ2302はＳＢ３の南西角，道路に面した側に位置する。100cm×95cmの円形の掘形を持つ石組井戸で，下部に曲物を二段積み重ねている。ＳＥ2302は，上部の石組と下部の曲物とが40cmに渡り南北方

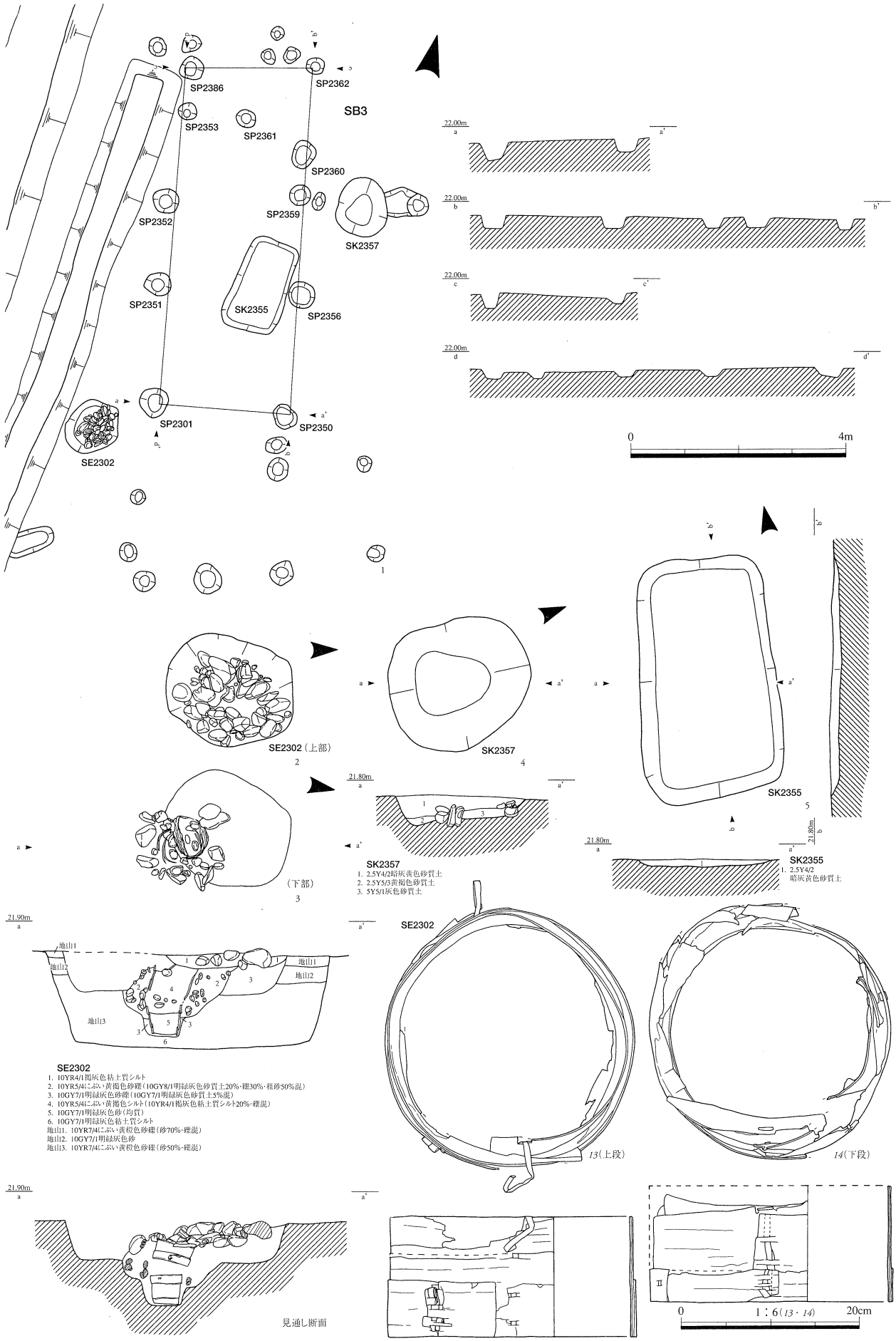


第7図　遺構実測図（中世）
SB2



第8図　遺構・遺物実測図(中世)

1. SK8　2. SE181　3～5. SD170
SK8(*2～6*)　SE181(*7*)　SD170(*8～12*)



第９図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB3　2. SE2302上部　3. SE2302下部　4. SK2357　5. SK2355
SE2302（*13*・*14*）

向にずれており，これは地震によるものと思われる。深さは64cmを測り，埋土は褐灰色粘土質シルト，にぶい黄褐色砂礫，明緑灰色砂礫である。遺物は井戸側として積まれた曲物で，*13*が上段，*14*が下段のもので，ヒノキ材を用いている。

4号建物（ＳＢ４，第10図，図版28）

ＳＢ５と重なるようにして立つ建物で，ＳＢ３の南東約３ｍに位置する。道路１のカーブに沿う主軸Ｎ－14°－Ｗの南北棟の建物で，桁行7.0m×梁行5.2m，平面積36.4㎡を測る。ＳＰ2402とＳＰ2408は棟持ち柱の可能性がある。ＳＰ2317，ＳＰ2318には柱根が認められる。ＳＰ2317からは漆の付着した底板(*19*)が出土している。建物の内部には土坑（ＳＫ2331）があり，ＳＢ４に付属する施設と考える。

2331号土坑（ＳＫ2331，第11図，図版28）

ＳＫ2331は245cm×106cmの長方形の竪穴状土坑で，深さは10cmを測る。建物内部に位置し，土間などの作業場と考えられる。ＳＢ５の柱穴ＳＰ2332と切り合っており，ＳＫ2331のほうが新しい。

2425号土坑（ＳＫ2425，第11図，図版28）

ＳＫ2425は309cm×169cmの長方形で，深さ19cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトの単層で，埋土上面に拳大の礫が集積されている。ＳＢ４のほぼ中央部に位置しているが，ＳＢ４との関係は不明である。出土遺物には中国製の白磁(*15*)，染付(*16*)があり，*15*は端反りの碗で15世紀後半～16世紀前半のもの，*16*は16世紀代の時期が想定される。

5号建物（ＳＢ５，第10・11図，図版28）

ＳＢ４と重なるようにして立つ。２間×２間の東西棟の建物で，桁行5.8m×梁行3.3m，平面積19.14㎡を測り，方位はＮ－5°－Ｅである。建物の北側半分から東側にかけて「く」の字状にＳＤ2339が巡り，建物の内部には炉関連遺構（ＳＫ2406）が確認されている。このことから，ＳＢ５は鍛冶関連の作業場的機能をもつ可能性が考えられる。また，建物の東側には炭化物の堆積がみられる土坑（ＳＫ2415・ＳＫ2413・ＳＫ2414）があり，これらもＳＢ５に関連する施設と考えられる。

2339号溝（ＳＤ2339，第11図）

ＳＤ2339はＳＢ５の北東角を囲むように巡っており，ＳＢ５に伴う区画溝，あるいは雨落ち溝と考えられる。溝の幅は30cm～35cm，深さは16cmを測る。埋土は炭化物混じりの黒褐色シルトの単層である。ＳＤ2410，ＳＫ2413を切っており，ＳＤ2339のほうが新しい。ＳＫ2413は井戸の可能性もあることから，排水溝的な要素ももつと思われる。遺物は16世紀代の中国製染付(*17*)と，刀子(*18*)，中世土師器，瀬戸美濃が出土している。

2406号土坑（ＳＫ2406，第11図）

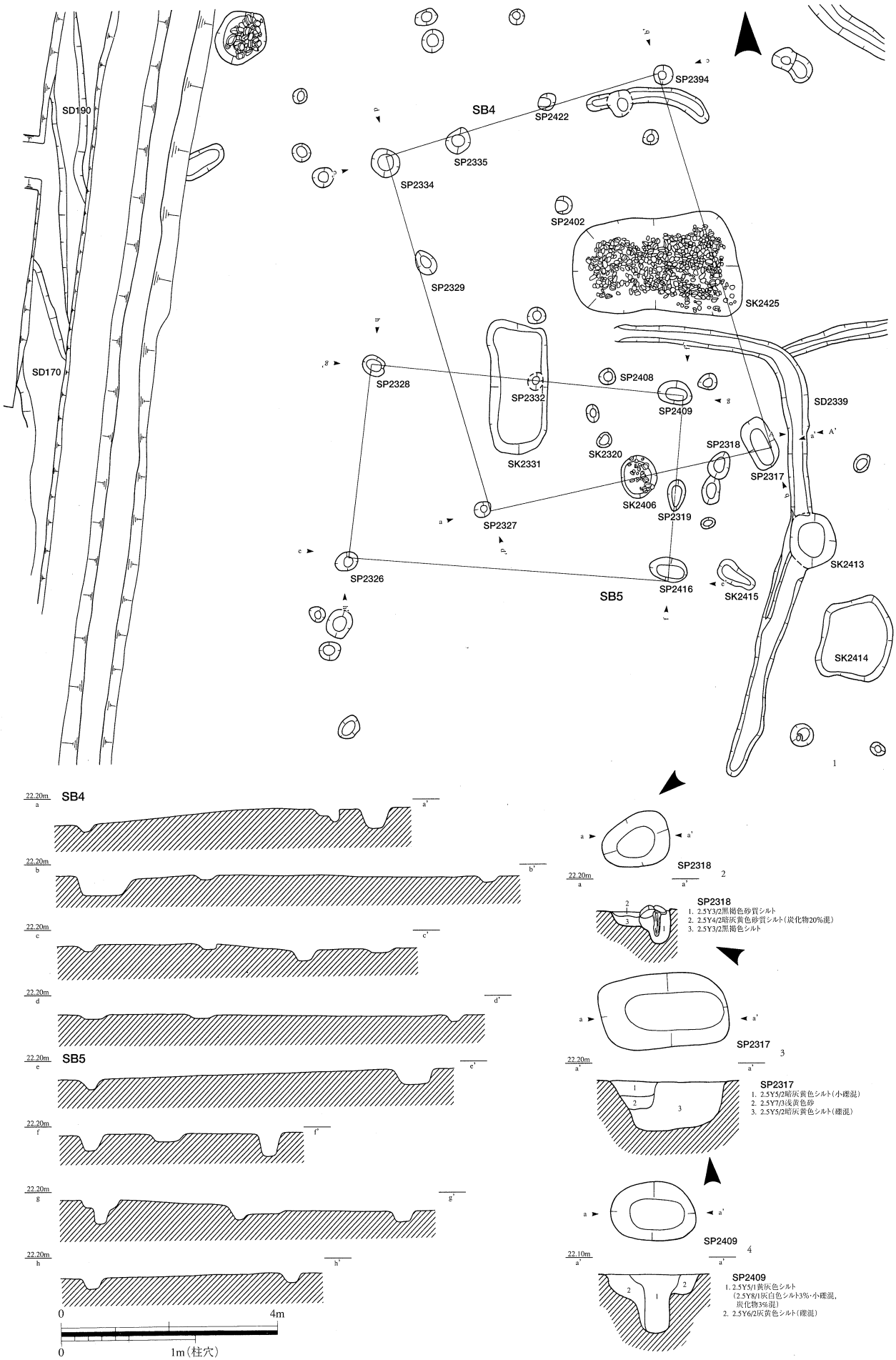
ＳＫ2406は建物内部に位置する73cm×71cmの円形の土坑で，深さは11cmである。拳大の礫の集積がみられ，中央部に円形の焼土と，焼土を囲むように炭化物の堆積が認められ炉関連遺構としたものである。焼土が円形を描くことなどから，炉跡と考える[注5]。ＳＫ2406の周辺ではＳＫ2415，ＳＫ2413，ＳＫ2414で炭化物の堆積が認められている。

2415号土坑（ＳＫ2415，第11図）

ＳＫ2415は建物の屋外だが，ＳＤ2339に囲まれた範囲内に位置している。74cm×36cmの不整形で，深さは７cmを測り，埋土は炭化物混じりのオリーブ褐色シルトである。

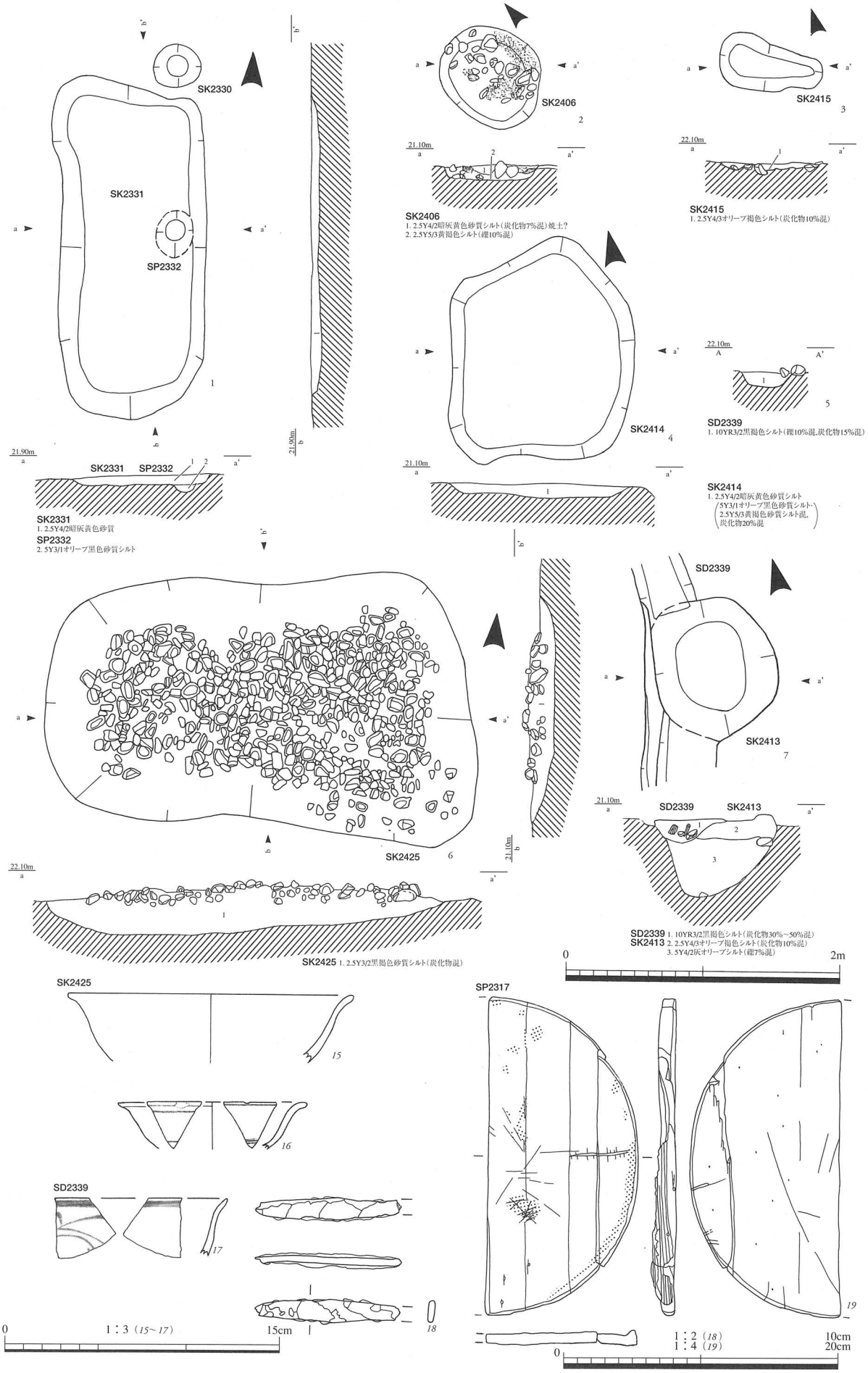
2413号土坑（ＳＫ2413，第11図）

ＳＫ2413はＳＢ５の東約２ｍに位置し，ＳＤ2339に切られている。103cm×89cmの楕円形で，深さは



第10図　遺構実測図（中世）

1. SB4・SB5　2. SP2318　3. SP2317　4. SP2409



第11図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK2331・SP2332　2. SK2406　3. SK2415　4. SK2414　5. SD2339　6. SK2425　7.SD2339・SK2413
SK2425（*15*・*16*）　SD2339（*17*・*18*）　SP2317（*19*）

60cmを測る。埋土は炭化物混じりのオリーブ褐色シルト，灰オリーブシルトである。下位の方には10～15cmの礫が含まれており，井戸の可能性も考えられる。柱状の木製品が出土している。

2414号土坑（ＳＫ2414，第11図，図版28）

ＳＫ2414はＳＤ2339の東側の区画外に位置する。160cm×133cmの方形の土坑で，深さ12cmを測り，底面付近に炭化物が堆積する。柱状の木製品が出土している。

６号建物（ＳＢ６，第12図，図版29・30）

ＳＢ５の南約３ｍに位置し，緩やかにカーブする道路１に並行する建物である。桁行6.0m×梁行5.7mの南北棟で，平面積34.2㎡を測り，主軸はＮ－13°－Ｅである。柱穴ＳＰ2295では柱根が確認されている。建物内部に土坑（ＳＫ2403），井戸（ＳＥ2455），建物の東側に隣接して井戸（ＳＥ2423）があり，ＳＢ６に伴う施設と考える。

2403号土坑（ＳＫ2403，第13・14図，図版30）

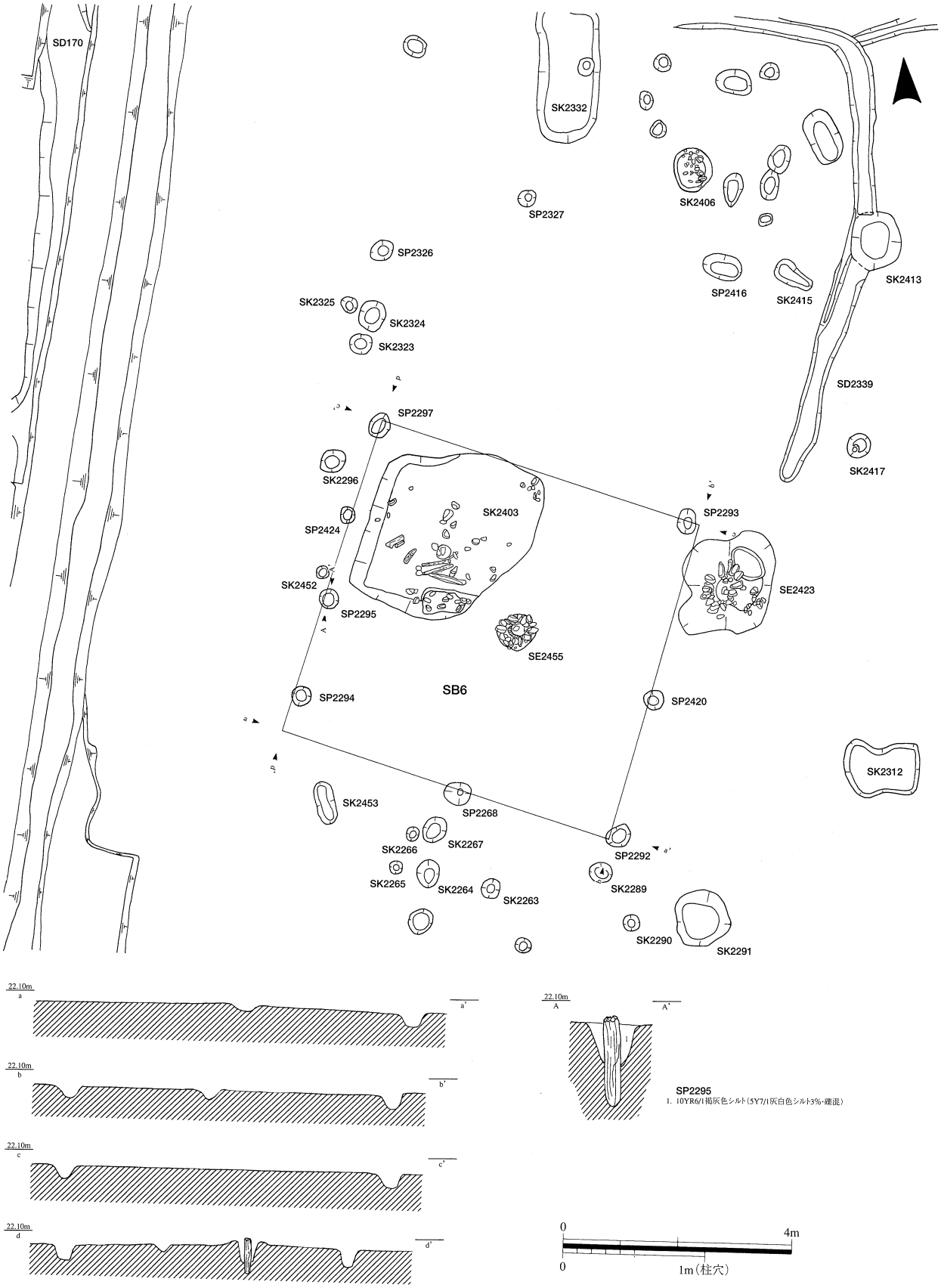
ＳＫ2403は282cm×265cmの方形の竪穴状土坑で，深さ24cmを測る。埋土は皿状に堆積しており，黄灰色砂質シルト，灰色砂質土が主体で，２層以下は灰色シルトと炭化物が互層を成している。炭化物は藁状･小枝状が多く，炭化していないものも含んでいる。6層の炭化物層上面に食い込むようにして，漆椀（*21*～*25*），小札（*39*～*41*），両端に切り込みのある棒状の部材（*28*～*36*），折敷，短冊状の木の皮，石臼，焼けた石などの多量の遺物が出土している。*20*は瀬戸美濃の天目茶椀で，ＳＫ2403出土の土器は一点のみである。これに対して木製品は多様なものがあり，遺存状態も良いものが多い。*23*は内外面ともに赤色漆の皿で，いわゆる「根来手」を模したものである。*24*は内赤外黒の脚高の椀で，高台裏に「上」の字の朱書きがみられる。SK2403出土の漆椀では一の椀：高い高台をもつ深身の椀（*24*・*21*），二の椀：低い高台をもつ椀（*25*・*22*），三の椀：（*23*）という組み合わせが成り立つ[注6]。*26*・*27*・*39*～*41*は小札で，小札は甲冑構成の基本となるもので，ＳＫ2403から出土したものはその形状から本小札に分類されるものである。*39*～*41*は比較的まとまって出土しており，レントゲン撮影を行ったところ金属部分を含んでいなかったことから，草摺，袖などの部位と考えられる。生革に生漆を塗り，さらに黒漆で塗り固めた革製で，札頭に漆を特に厚く盛り上げた「盛上小札」という種類のものである。*40*の小札は長さ（札足）7.2cm，幅（札幅）1.3cm，札頭の厚みは0.4cmを測る。小札の寸法は使用される部位や時代によって異なり，時代の下降と伴に縮小傾向にあり，室町時代後期のもので札幅1.4cm～1.5cm前後のものが多くなるという[注7]。*27*・*40*・*41*は黒漆に赤色で「×」状の模様が描かれており，草摺や袖，栴檀板などの最下段に施される「菱縫」という装飾を，実際に縫わずに朱漆で描いた省略形式の「画菱」というものである。*28*～*36*は両端に切り込みのある部材で，９本まとまって出土している。この他に短冊状の木の皮や，桜の皮，焼石などが出土しており，ＳＫ2403は何らかの生産・加工などの作業を行っていた作業場の可能性が考えられる。

2455号井戸（ＳＥ2455，第13・15図，図版30）

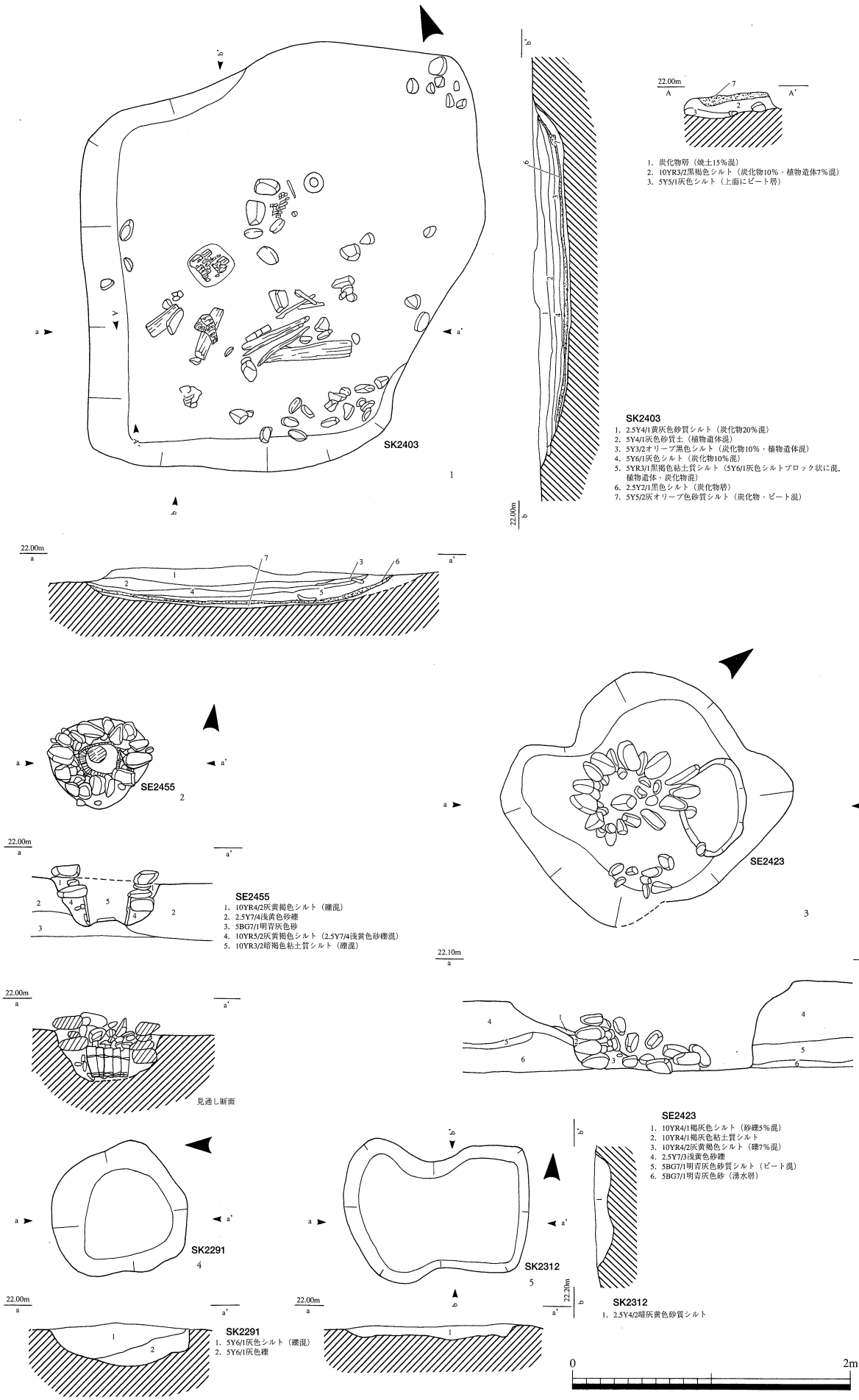
ＳＥ2455は68cm×62cmの円形の石組井戸で，下部に桶が埋められている。深さは37cmと浅く，埋土は暗褐色粘土質シルトである。他の井戸と比較すると小型で浅く，屋内に位置することから，用途の違いも考えられる。遺物は水溜に用いられた桶（*47*）と，底板（*46*）がある。*46*は桶のほぼ中央から出土しているが，*47*の径より小さく同一個体ではない。表裏両面とも煤けたような状態である。

2423号井戸（ＳＥ2423，第13・15図，図版30）

ＳＥ2423は建物の北東角に位置し，道路からみると建物の裏側にあたる。156cm×145cmの方形の井戸で，ほぼ中央に石組をもつ。深さは66cmを測る。遺物は*44*・*45*の漆椀がある。*44*は内外面赤色漆の

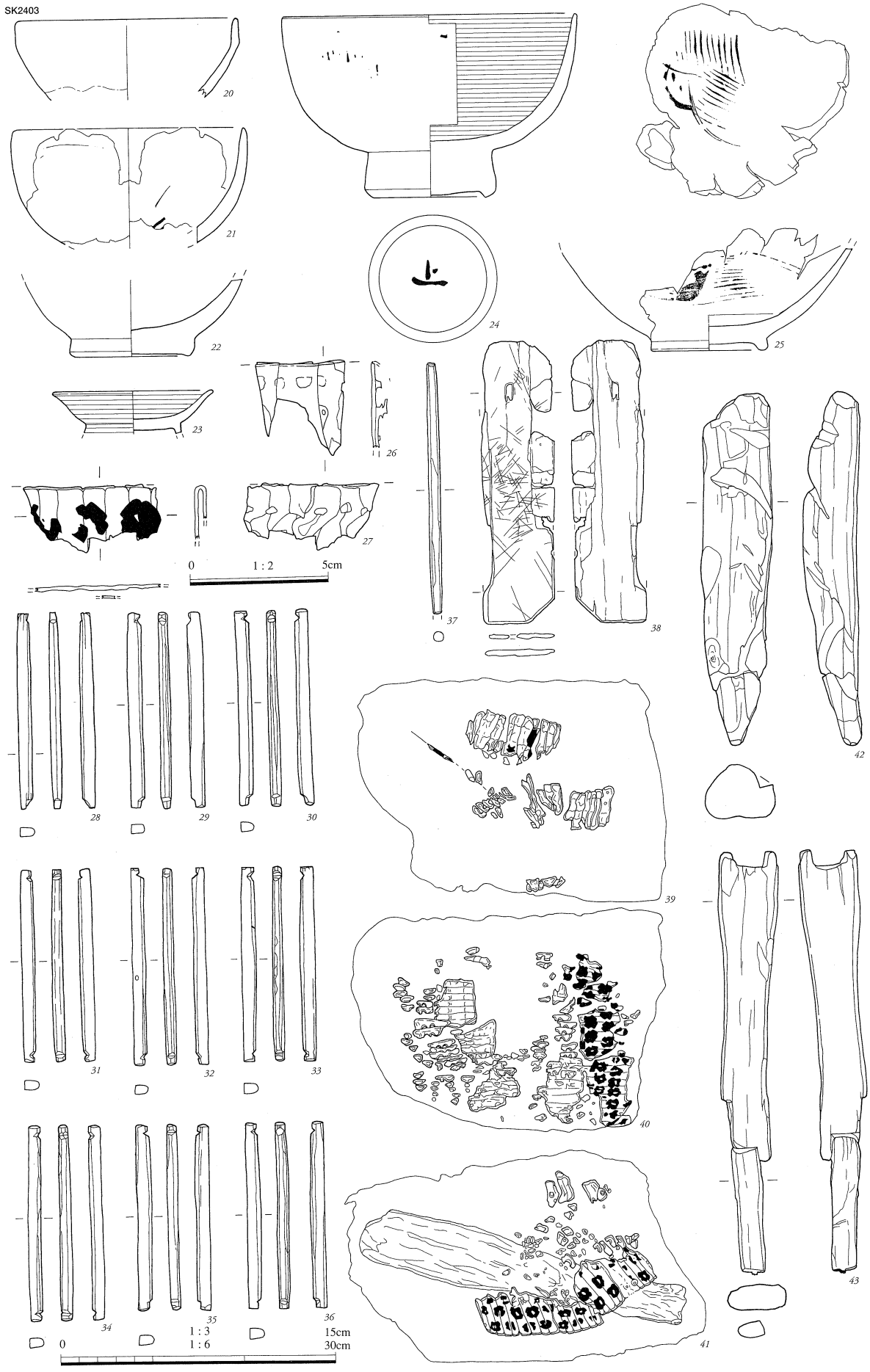


第12図　遺構実測図(中世)
SB6・SP2295

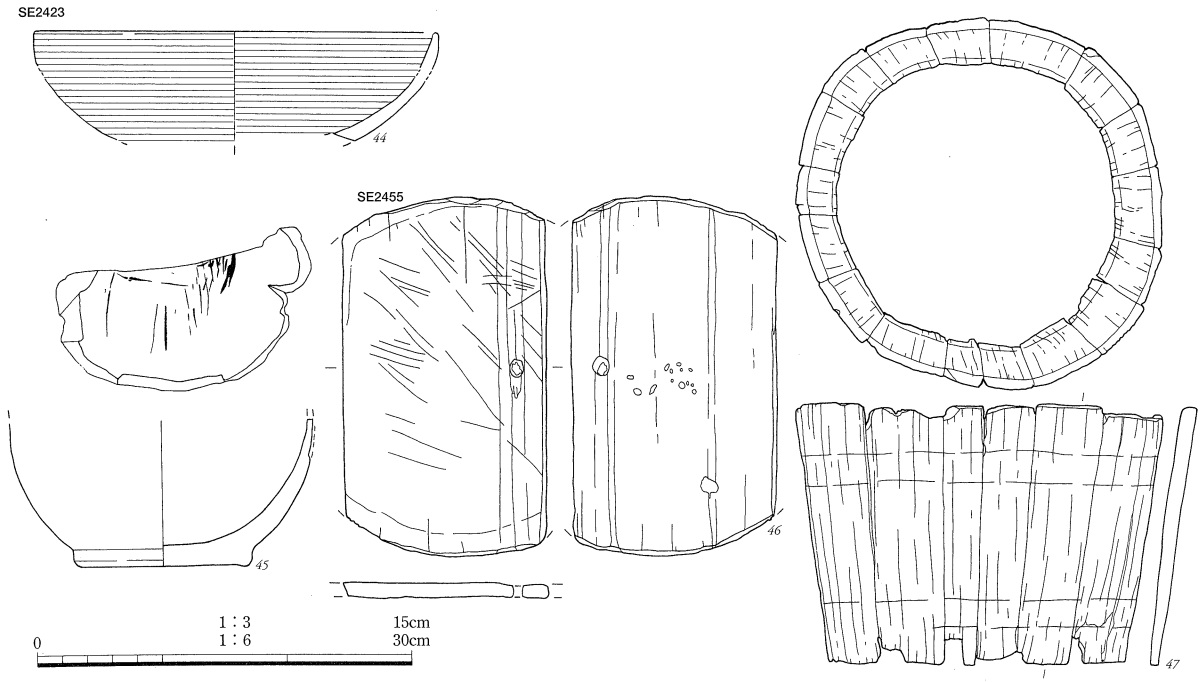


第13図　遺構実測図（中世）

1. SK2403　2. SE2455　3. SE2423　4. SK2291　5. SK2312



第14図　遺物実測図（中世）（*26・27* 1/2，*20～25・28～37・42・43* 1/3，*38～41* 1/6）
SK2403（*20～43*）



第15図　遺物実測図（中世）　（*44*～*46*　1/3，*47*　1/6）
SE2423（*44*・*45*）　SE2455（*46*・*47*）

いわゆる「根来手」の椀である。

2291号土坑（ＳＫ2291，第13図）

ＳＫ2291はＳＢ６の南東1.5ｍに位置している。37㎝×30㎝の楕円形の土坑で，深さは30㎝を測る。埋土は灰色シルトである。建物に近接した位置にあるが，ＳＢ６との関係は不明である。

2312号土坑（ＳＫ2312，第13図）

ＳＫ2312はＳＢ６の東側3.5ｍに位置している。131㎝×82㎝の不整形の土坑で，深さ12㎝を測る。ＳＫ2391同様にＳＢ６と近接しているが，ＳＢ６との関係は不明である。

７号建物（ＳＢ７，第16・17図，図版30・31）

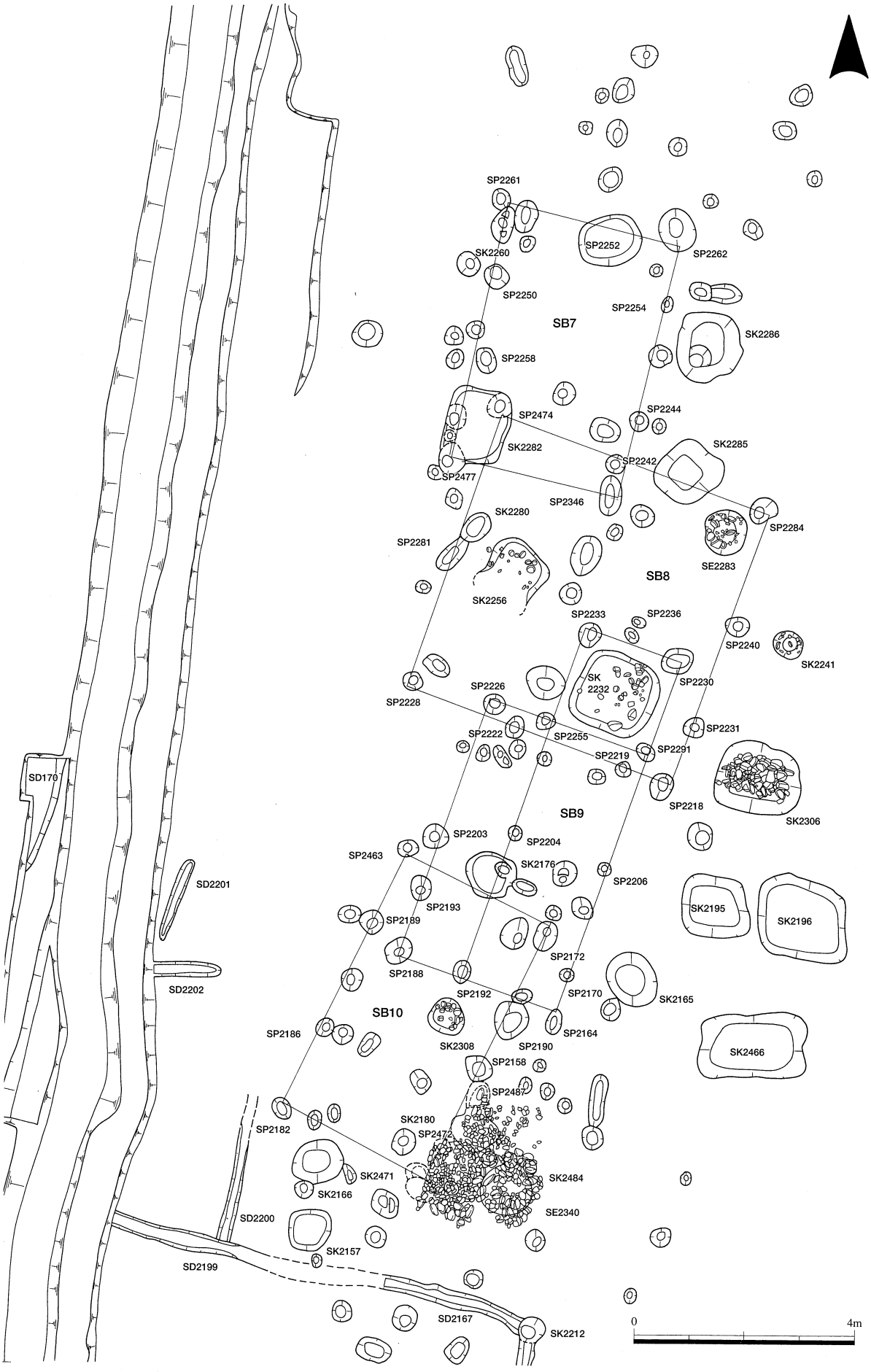
ＳＢ７はＳＢ８と重なるようにして立ち，ＳＢ６の南約３ｍに位置する。桁行5.0ｍ×梁行3.2ｍ，平面積16.0㎡で，道路１に並行するＮ－14°－Ｅの南北棟の建物である。柱穴ＳＰ2346と，ＳＰ2252の西側には柱痕跡が認められる。建物内部に土坑（ＳＫ2282），建物の東側に井戸と考えられる土坑（ＳＫ2286）があり，ＳＢ７に付属する施設と考える。

2282号土坑（ＳＫ2282，第17図）

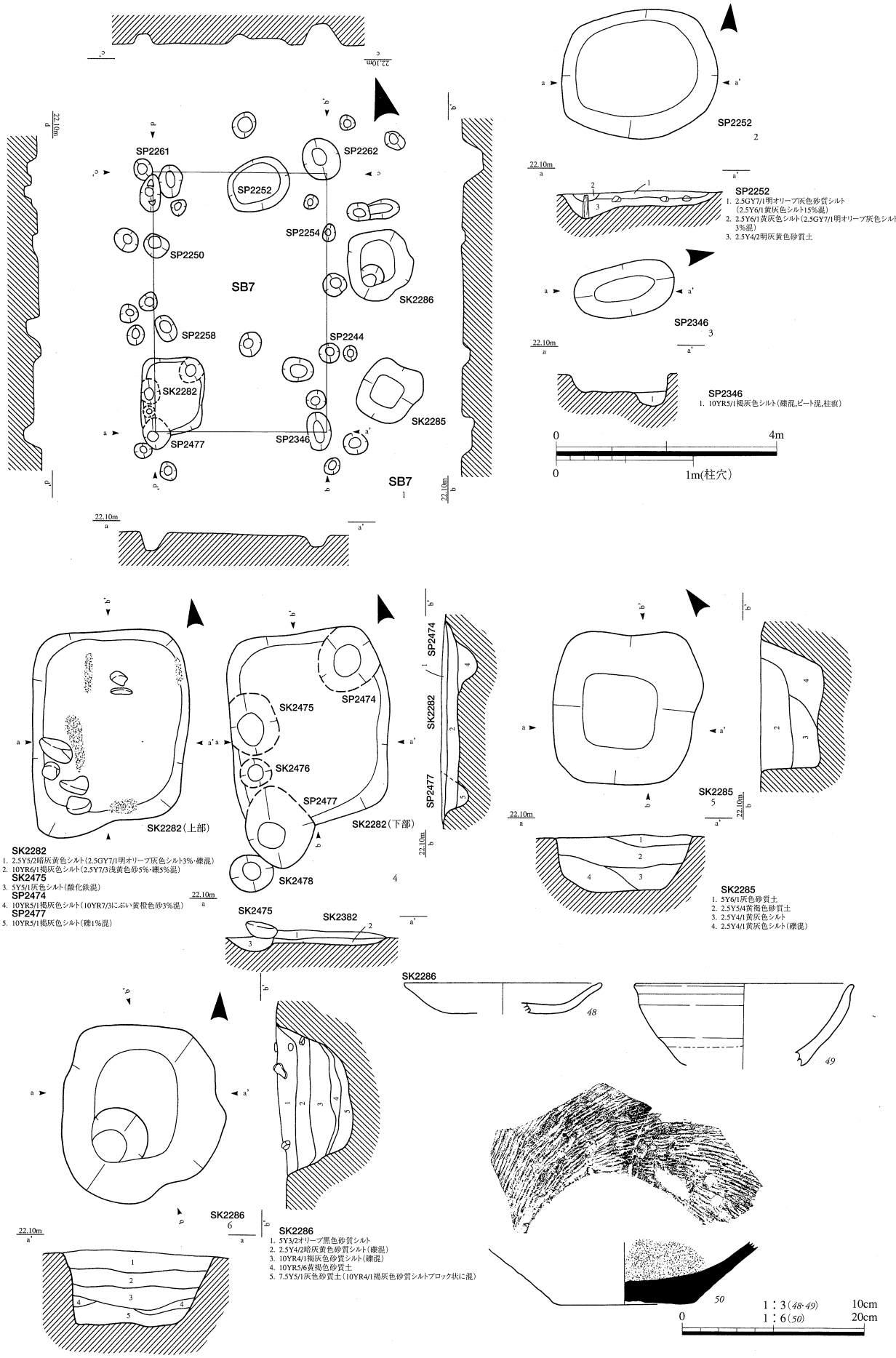
ＳＫ2282は140㎝×113㎝の竪穴状土坑で，深さは10㎝を測る。埋土は暗灰黄色シルト，褐灰色シルトで，底面に10㎝～20㎝の楕円形の礫の集積と，炭化物の堆積がみられる。柱穴ＳＰ2477と重複しているが，ＳＢ７に付属する土間のような施設と考える。

2286号土坑（ＳＫ2286，第17図）

ＳＫ2286は建物の東0.5ｍに位置している。130㎝×120㎝の不整形の土坑で，深さ55㎝を測る。南側が一段深く掘り込まれており，素掘りの井戸の可能性がある。井戸とすると，道路からみて建物の裏側に位置することになる。中世土師器（*48*），瀬戸美濃（*49*），珠洲（*50*）が出土している。*48*は16世紀中頃～後半の時期が想定される。*50*は底部内面に煤が付着している。また，Ｃ地区北西端の包含層か



第16図　遺構実測図（中世）
SB7～SB10



第17図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB7　2. SP2252　3. SP2346　4. SK2282・SP2474・SK2475・SP2477　5. SK2285　6. SK2286
SK2286（*48～50*）

ら出土した断面に漆が付着しており，おそらくは漆継ぎが施されていたと思われる破片と接合している。

2285号土坑（ＳＫ2285，第17図，図版31）

ＳＫ2285はＳＫ2286の南１ｍに位置する108cm×102cmの方形の土坑で，深さは42cmを測る。ＳＫ2286と同様に，ＳＢ７の東約0.5mに位置するが，ＳＢ７との関係は不明である。

８号建物（ＳＢ８，第16・18図，図版31）

ＳＢ７，ＳＢ９と重なるようにして立つ。桁行5.3m×梁行5.2m，平面積27.56m²の南北棟で，道路１に沿うＮ－21°－Ｅの建物である。梁行は２間で5.2mとしているが，東側半分の１間2.9mの部分が側柱建物の中核部分にあたり，ＳＫ2256を含む西側半分は土台などによる補助屋的な空間と考えられる。建物内部に土坑（ＳＫ2256），井戸（ＳＥ2283）があり，ＳＢ８に付属する施設と考えられる。また，建物の東側に井戸と考えられる土坑（ＳＫ2241），集石のみられる土坑（ＳＫ2306）があり，これらもＳＢ８に付属するものと考えられる。柱穴ＳＰ2281からは(*53*)箸が出土している。

2256号土坑（ＳＫ2256，第18図，図版31）

ＳＫ2256は南側半分を削られているが，111cm×100cm以上の方形の竪穴状土坑で，深さは14cmである。埋土は黄褐色砂質シルト，炭化物混じりの黄灰色シルトで，底面北半には拳大の礫の集積と，焼土，炭化物の堆積がみられる。土間などの作業場と考えられる。

2280号土坑（ＳＫ2280，第18図）

ＳＫ2280はＳＫ2256の北西角に隣接する土坑で，柱穴ＳＰ2281と一部重複している。61cm×45cmの楕円形で，深さ５cmを測り，埋土上面に炭化物が堆積している。摩耗した珠洲の破片(*52*)が出土している。

2306号土坑（ＳＫ2306，第18図，図版31）

ＳＫ2306は建物の南東端0.7mに位置する155cm×138cmの楕円形の土坑で，深さは30cmを測る。埋土は炭化物混じりの黄灰色シルトの単層で，底面に10cm～20cmの礫の集積がみられる。建物と近接した位置にあり，ＳＢ８に関連する遺構の可能性がある。

2283号井戸（ＳＥ2283，第18図，図版31）

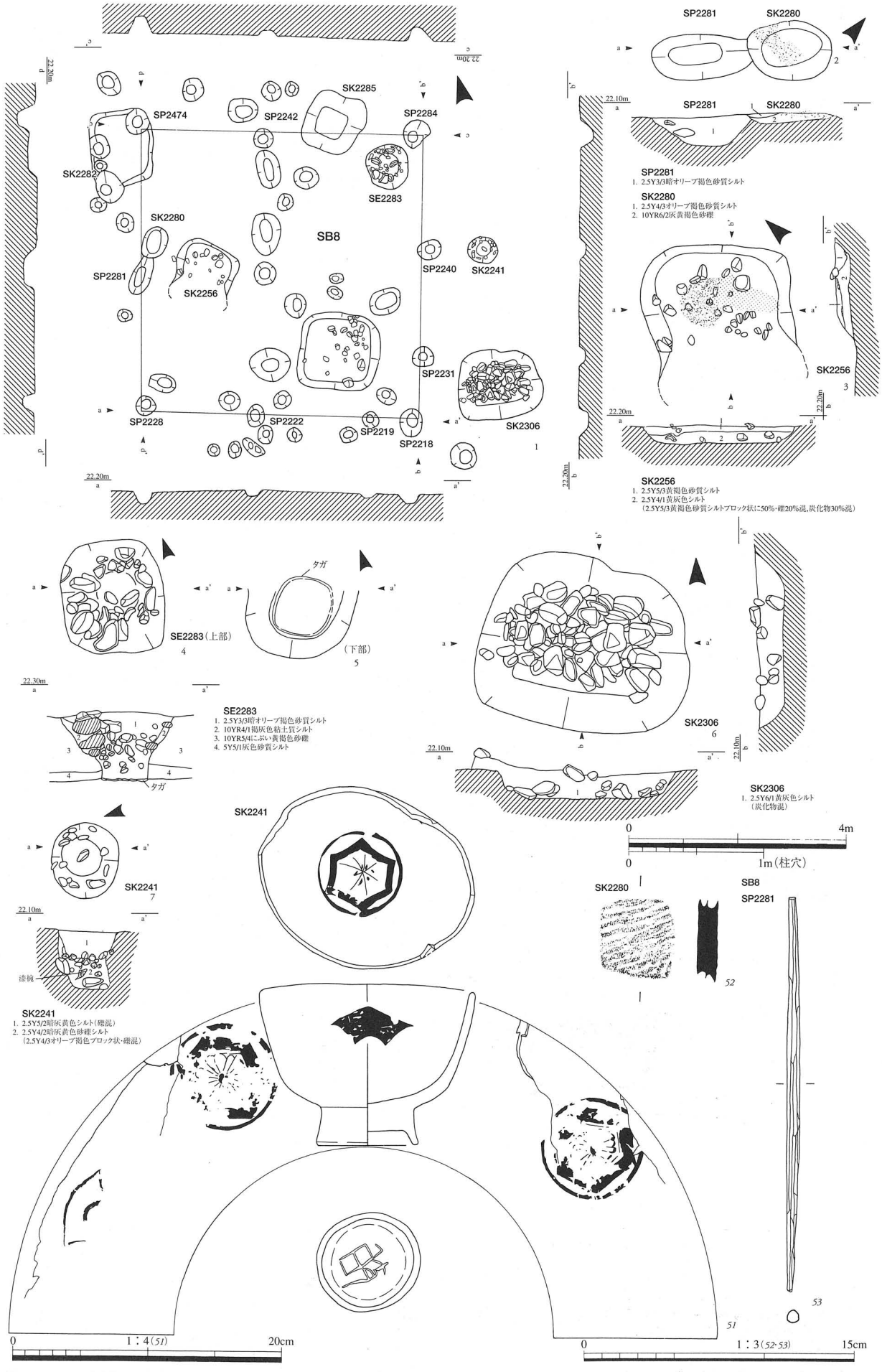
ＳＥ2283は建物内部の北東角に位置する83cm×77cmの石組井戸で，深さは50cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色砂質シルトで，最下部に曲物のタガが検出されている。

2241号土坑（ＳＫ2241，第18図，図版31）

ＳＫ2241は建物の東約１ｍに位置する55cm×50cmの円形の土坑で，深さは45cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトで，下位には10cm～20cmの礫がランダムに入っており，井戸の可能性も考えられる。ＳＫ2241からは漆椀(*51*)がほぼ完形で出土している。*51*は内外面黒漆で，赤色漆で扇と丸に亀甲を組み合わせた紋状の模様が対で描かれている。高台の裏には「時」と思われる線刻がみられる。

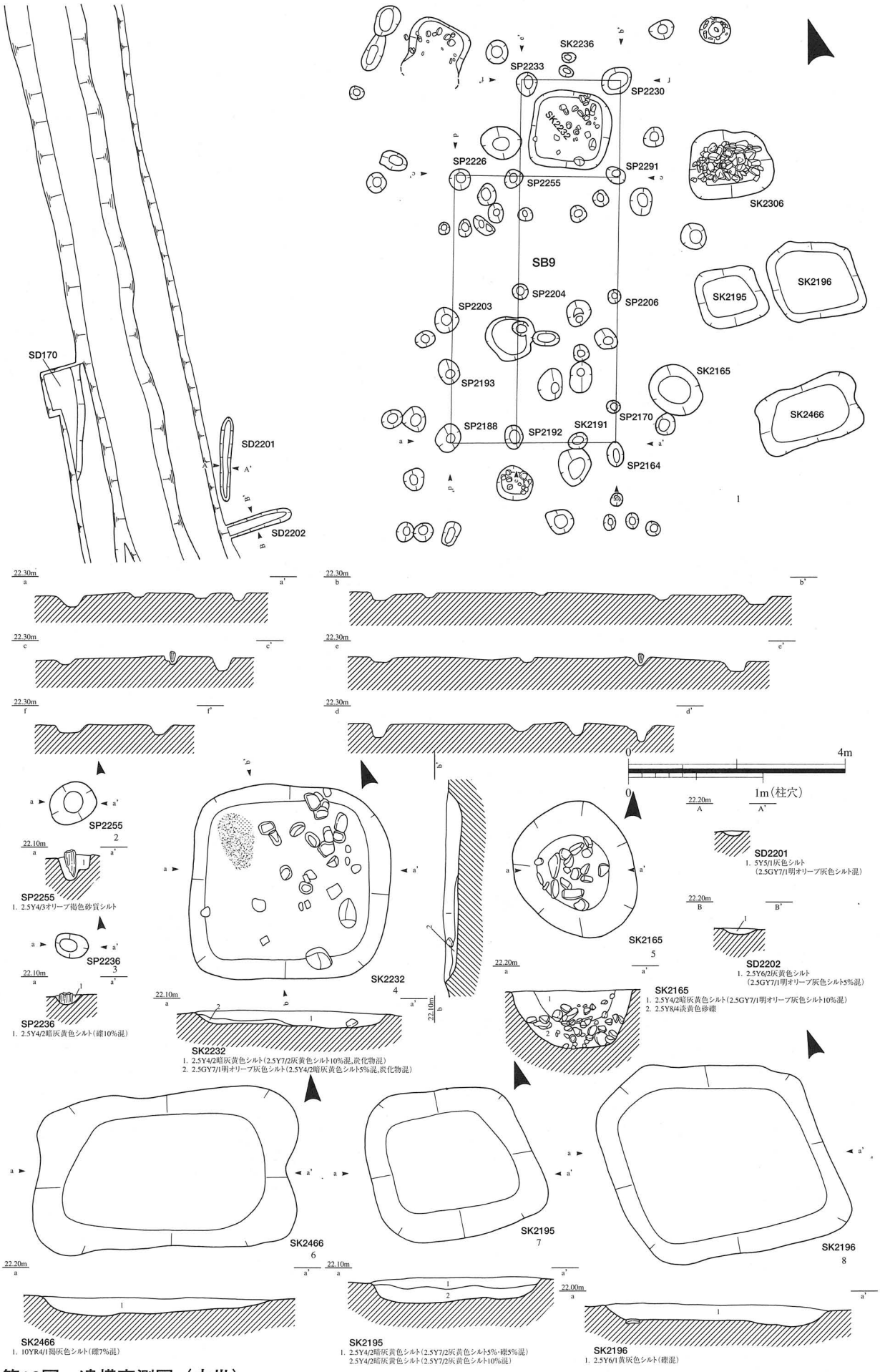
９号建物（ＳＢ９，第16・19図，図版31・32）

ＳＢ８，ＳＢ10と重なるようにして立つ。緩くカーブする道路１に沿う桁行5.0m×梁行3.0mの南北棟の建物で，平面積は15.0m²である。主軸はＮ－18°－Ｅを測る。柱穴ＳＰ2255では柱根が確認されている。建物の北側に方形の土坑（ＳＫ2232）があり，ＳＫ2232の四隅を柱穴が囲んでいる。このことから，ＳＫ2232を囲む1間×1間の空間は，建物の中核部分屋外に位置するが連続的な覆屋のある補助屋と考えられる。建物の東側0.6mに井戸と思われる土坑（ＳＫ2165）があり，ＳＢ９に付属するものと考える。また，建物の南西約３mに位置する東西方向の溝ＳＤ2202は，区画溝の可能性が考えら



第18図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB8　2. SP2281・SK2280　3. SK2256　4. SE2283上部　5. SE2283下部　6. SK2306　7. SK2241
SK2241(*51*)　SK2280(*52*)　SP2281(*53*)



第19図　遺構実測図（中世）

1. SB9・SD2201・SD2202　2. SP2255　3. SP2236　4. SK2232　5. SK2165　6.SK2466　7. SK2195　8. SK2196

れるが，どの建物に伴うものであるかは不明である。

2232号土坑（ＳＫ2232，第19図，図版32）

ＳＫ2232は148cm×142cmの竪穴状土坑で，深さは12cmを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色シルト，明オリーブ灰色シルトで，底面に10cm～20cmの礫の集積と，直径10cmほどの円形の焼土，焼土を囲む炭化物の堆積を確認している。このことから，作業場もしくは炊事場的な機能が考えられる。

2195号土坑（ＳＫ2195，第19図）

ＳＫ2195は建物の東側1.5mに位置する120cm×112cmの方形の土坑で，深さは20cmを測る。ＳＢ９に近接した位置にあるが，ＳＢ９との関係は不明である。

2196号土坑（ＳＫ2196，第19図）

ＳＫ2196はＳＫ2195の東側に近接する160cm×145cmの長方形の土坑で，深さは12cmを測る。埋土は黄灰色シルトの単層である。ＳＫ2195同様にＳＢ９との関係は不明である。

2466号土坑（ＳＫ2466，第19図）

ＳＫ2466はＳＫ2196の南約１mに位置する182cm×111cmの長方形の土坑で，深さは14cmを測る。埋土は褐灰色シルトの単層である。ＳＫ2195，ＳＫ2196同様にＳＢ９の東側に近接しているが，ＳＢ９との関係は不明である。

2165号土坑（ＳＫ2165，第19図，図版32）

ＳＫ2165は建物の東側約0.6mに位置している。100cm×88cmの楕円形の土坑で，深さは44cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト，淡黄色砂礫で５cm～15cmの礫を多量に含んでいる。素掘りの井戸の可能性があり，道路からみて建物の裏側に位置している。図示はしていないが，中世土師器の小片が出土している。

10号建物（ＳＢ10，第16・20図，図版31・32）

ＳＢ９と重なるように立つ。桁行5.3m×梁行2.9mで，平面積15.37m²を測る。道路１に並行する主軸Ｎ－26°－Ｅの南北棟の建物である。柱穴ＳＰ2463，ＳＰ2189，ＳＰ2472では柱根が確認されている。建物の南東角に位置するＳＰ2180は柱根が確認されており，柱筋からはずれるが，ＳＢ10の柱穴と考えられる。ＳＫ2180からは底部静止糸切りの珠洲擂鉢(*54*)が出土している。建物内部に炉関連遺構（ＳＫ2308），建物の東側に井戸（ＳＥ2340）があり，ＳＢ10に付属すると考える。また，建物の南側に近接して炭化物の堆積のみられる土坑（ＳＫ2157，ＳＫ2166）があり，これらもＳＢ10に関連するものと考えられる。炉関連遺構をもつことから，ＳＢ10は鍛冶関連の作業場的な機能をもつと考えられる。

2308号土坑（ＳＫ2308，第20図）

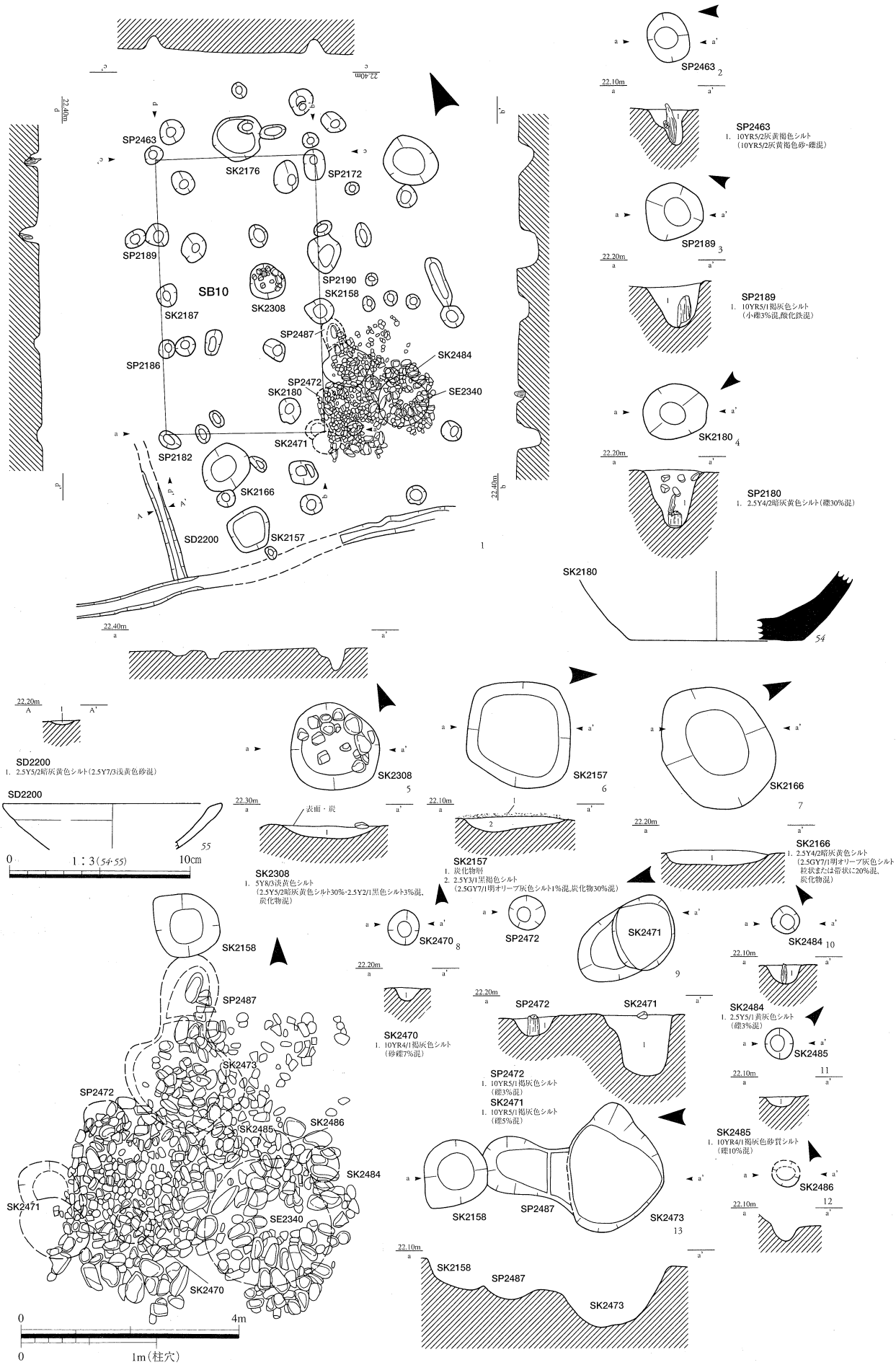
ＳＫ2308は65cm×64cmの円形の土坑で，深さは９cmを測る。埋土は炭化物混じりの淡黄色シルトである。10cm～15cmの礫が半円形に敷かれており，埋土上面に炭化物が薄く堆積していることから，石敷炉と考えられる。

2166号土坑（ＳＫ2166，第20図）

ＳＫ2166は建物の南側柱列に近接して位置しており，95cm×78cmの不整形で，深さは12cmを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色シルトで，上面に炭化物が薄く堆積している。

2157号土坑（ＳＫ2157，第20図，図版32）

ＳＫ2157はＳＫ2166の南約0.5mに位置する77cm×75cmの方形の土坑で，深さは12cmを測る。埋土は炭化物混じりの黒褐色シルトで，上面に３cm～５cmほどの厚さで炭化物が堆積している。ＳＫ2157



第20図　遺構・遺物実測図(中世)

1. SB10・SD2200　2. SP2463　3. SP2189　4. SP2180　5. SK2308　6. SK2157　7. SK2166　8. SK2470
9. SK2471・SP2472　10. SK2484　11. SK2485　12. SK2486　13. SK2158・SK2473・SP2487
SK2180(*54*)　SD2200(*55*)

及びＳＫ2166は土間と考えられ，ＳＢ10の建物中核屋外に位置しているが，土台等による補助屋的な空間で，連続した覆屋があった可能性がある。

2340号井戸（ＳＥ2340，第21図，図版32）

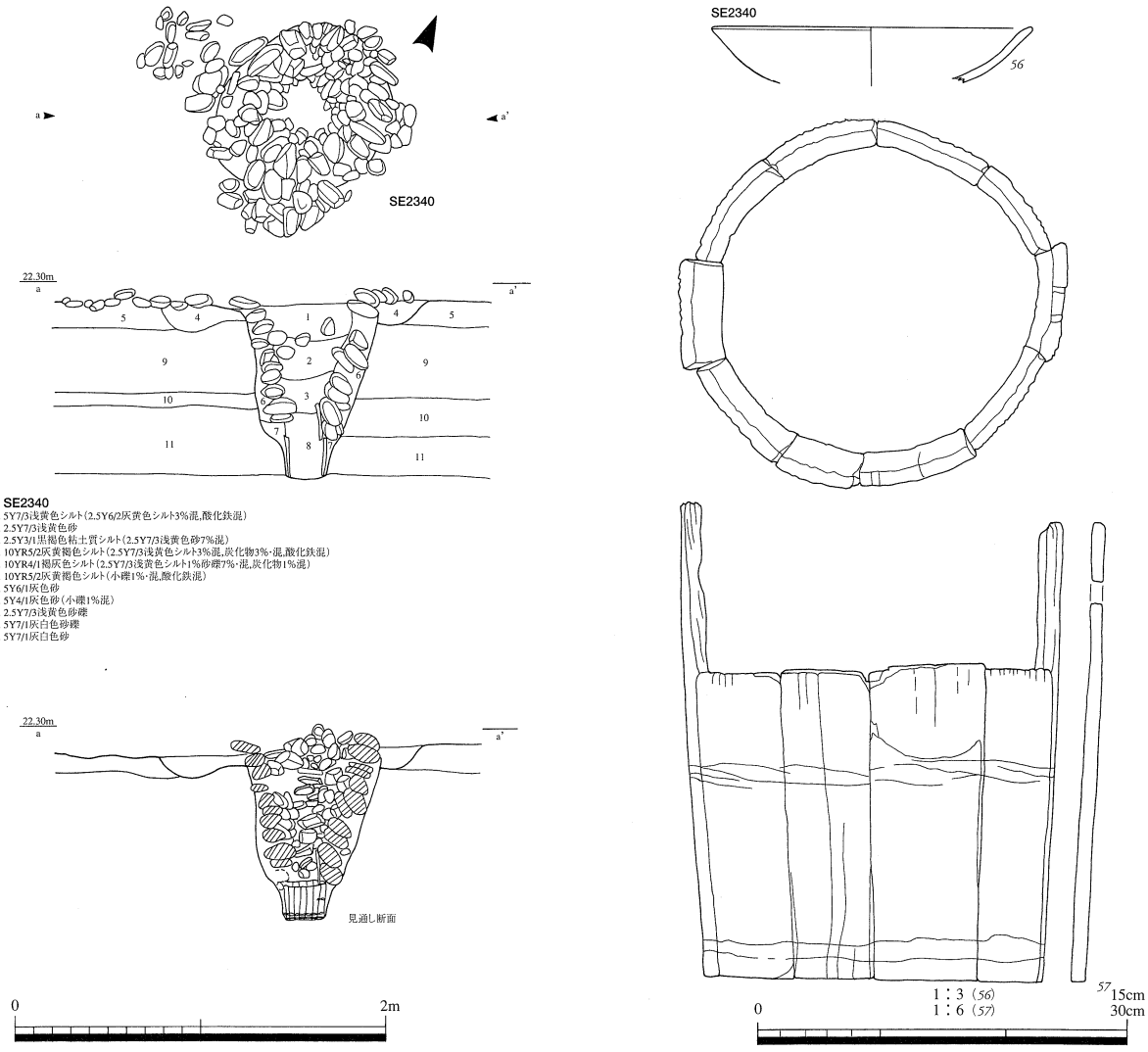
ＳＥ2340は建物の南東角約1ｍに位置する径93㎝の円形の石組井戸で，深さは96㎝を測り，水溜として手桶(57)が埋められている。埋土は浅黄色シルト，黒褐色粘土質シルト，灰色砂である。掘形は径140㎝，深さ20㎝の円形の穴を掘り，ほぼ中央をさらに掘り込んで石を組んでいる。ＳＥ2340の西側半分を囲むようにして，５㎝～20㎝の礫が遺構確認面上面に集積している。この礫の下からはＳＢ10の柱穴が検出されていることから，ＳＥ2340に伴う人為的な「石敷き」ではないと思われる。ＳＥ2340からは，16世紀末頃の中世土師器(56)，ＳＫ2403同様の小札の破片が出土している。

2200号溝（ＳＤ2200，第20図）

ＳＢ10の南西角約１ｍに南北方向の溝ＳＤ2200が位置している。区画溝の一部と考えられるが，どの建物に伴う区画であるのかは不明である。溝の幅は18㎝，深さは４㎝と浅く，埋土は暗灰黄色シルトである。中世土師器(55)が出土しており，16世紀中頃～後半の時期が想定される。

11号建物（ＳＢ11，第22図，図版33）

ＳＢ11はＳＤ170の東約７ｍ，ＳＢ10の南約３ｍに位置しており，桁行5.2ｍ×梁行3.0ｍ，平面積15.6㎡を測る。主軸Ｎ－18°－Ｅの道路１と並行な南北棟の建物である。柱穴ＳＰ2479では柱根が確認されている。建物構造としてはＳＰ2119，2123，2153，2149，2133で囲まれる２間×１間の中核部



第21図　遺構・遺物実測図（中世）
SE2340（56・57）

分にＳＰ2155，2207，2479からなる補助屋部分が付く「２間×１間＋補助屋」と考えられる。建物の北側から東側にかけて幅約0.7ｍの間隔を空けてＳＤ2167が巡っており，ＳＢ11に伴う区画溝または雨落ち溝と考えられる。建物内部には炉関連遺構（ＳＫ2139），炭化物の堆積のみられる土坑（ＳＫ2140，ＳＫ2122），建物の南東角に井戸（ＳＥ2488，ＳＥ2341）があり，ＳＢ11に付属するものと考える。炉関連遺構をもつことからＳＢ11は鍛冶関連の作業場的な機能をもつと考えられる。

2167号溝（ＳＤ2167，第23図）

ＳＤ2167は幅約21cm，深さ10cmの浅い溝で，埋土は暗灰黄色シルトである。西側のＳＤ2199と一続きの溝と考えられ，南側12ｍに位置するＳＤ2099・ＳＤ2098と，ＳＢ11・ＳＢ12を囲む幅12ｍの方形の区画を構成する区画溝の可能性もある。また，南端でＳＥ2488と接しており，排水溝的な要素ももつと考えられる。

2139号土坑（ＳＫ2139，第23図，図版35）

ＳＫ2139は116cm×67cmの楕円形の土坑で，深さは７cmを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色シルトである。埋土上面の南端では径20cmの円形の焼土と，焼土を囲むように炭化物が堆積しており，炉跡と思われる。

2140号土坑（ＳＫ2140，第23図，図版35）

ＳＫ2140はＳＫ2139の北に近接する77cm×64cmの土坑で，深さは９cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質土で，埋土上面に炭化物が薄く堆積している。ＳＫ2139及び，ＳＫ2140は建物の補助屋部分に位置している。

2122号土坑（ＳＫ2122，第23図）

ＳＫ2122はＳＫ2139の南西約1.2ｍに位置する27cm×23cmの楕円形の土坑で，深さは９cmを測り，埋土は炭化物である。

2154号土坑（ＳＫ2154，第23図）

ＳＫ2154はＳＤ2167に接する52cm×35cmの楕円形で，深さは７cmを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色砂質土で，上面に炭化物が薄く堆積し，底面中央から焼石が出土している。ＳＢ11に近接して位置しており，ＳＢ11に関係する炉関連遺構の可能性がある。

2125号土坑（ＳＫ2125，第23図）

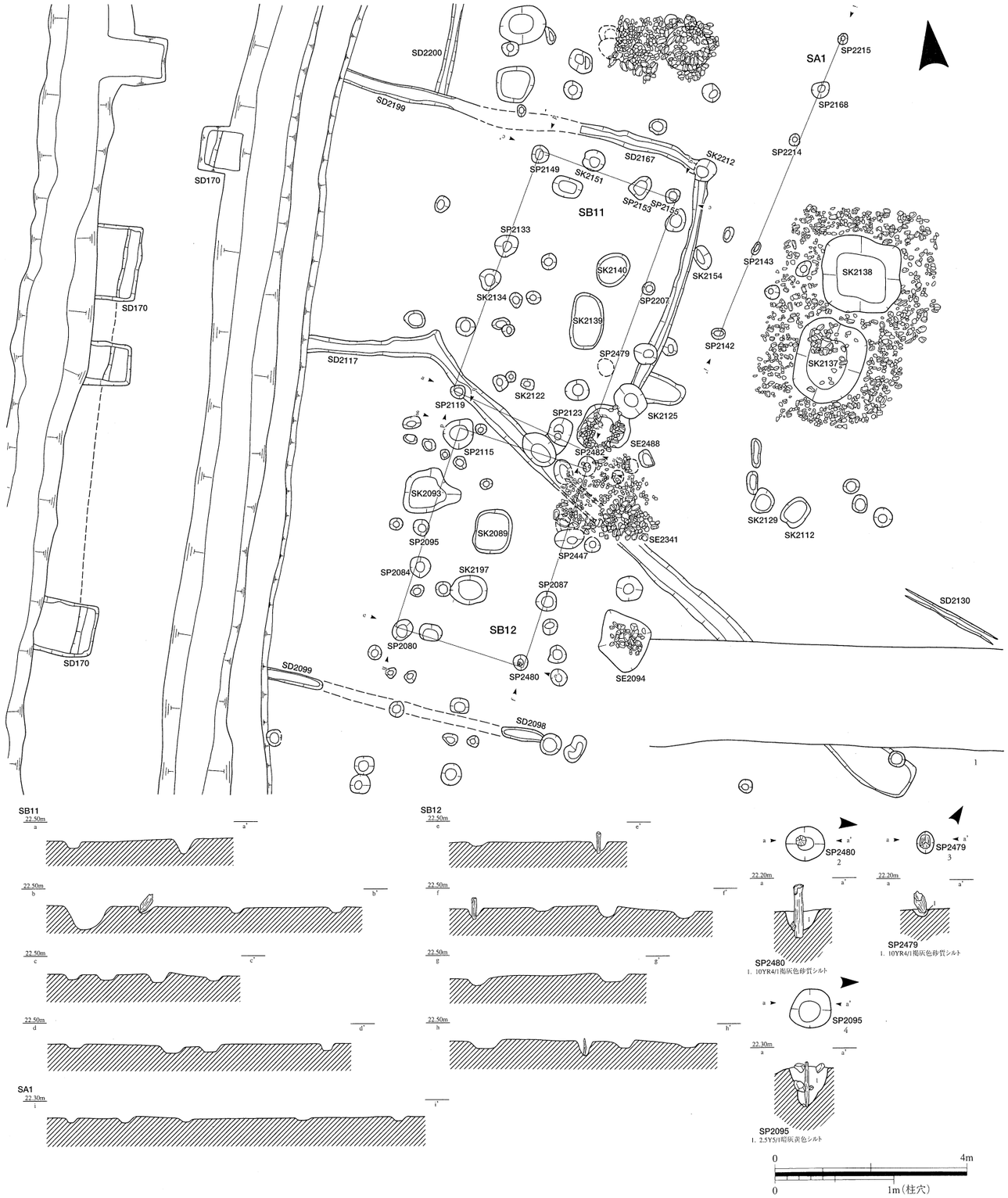
ＳＫ2125はＳＤ2167の南端に位置しており，ＳＤ2167よりも新しい土坑である。75cm×65cmの楕円形で，深さは24cmを測る。埋土は炭化物混じりのオリーブ褐色シルト，オリーブ灰色シルトで，下位に行くほど炭化物が多量になる。ＳＢ11と近接した位置にあり，ＳＢ11に関係した遺構の可能性が考えられる。

2112号土坑（ＳＫ2112，第24図，図版35）

ＳＫ2112は建物の東4.5ｍに位置する61cm×50cmの楕円形の土坑で，深さは５cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰色粘土質シルトで，上面に焼土と思われる黄灰色シルトが薄く堆積している。ＳＢ11との関係は不明である。

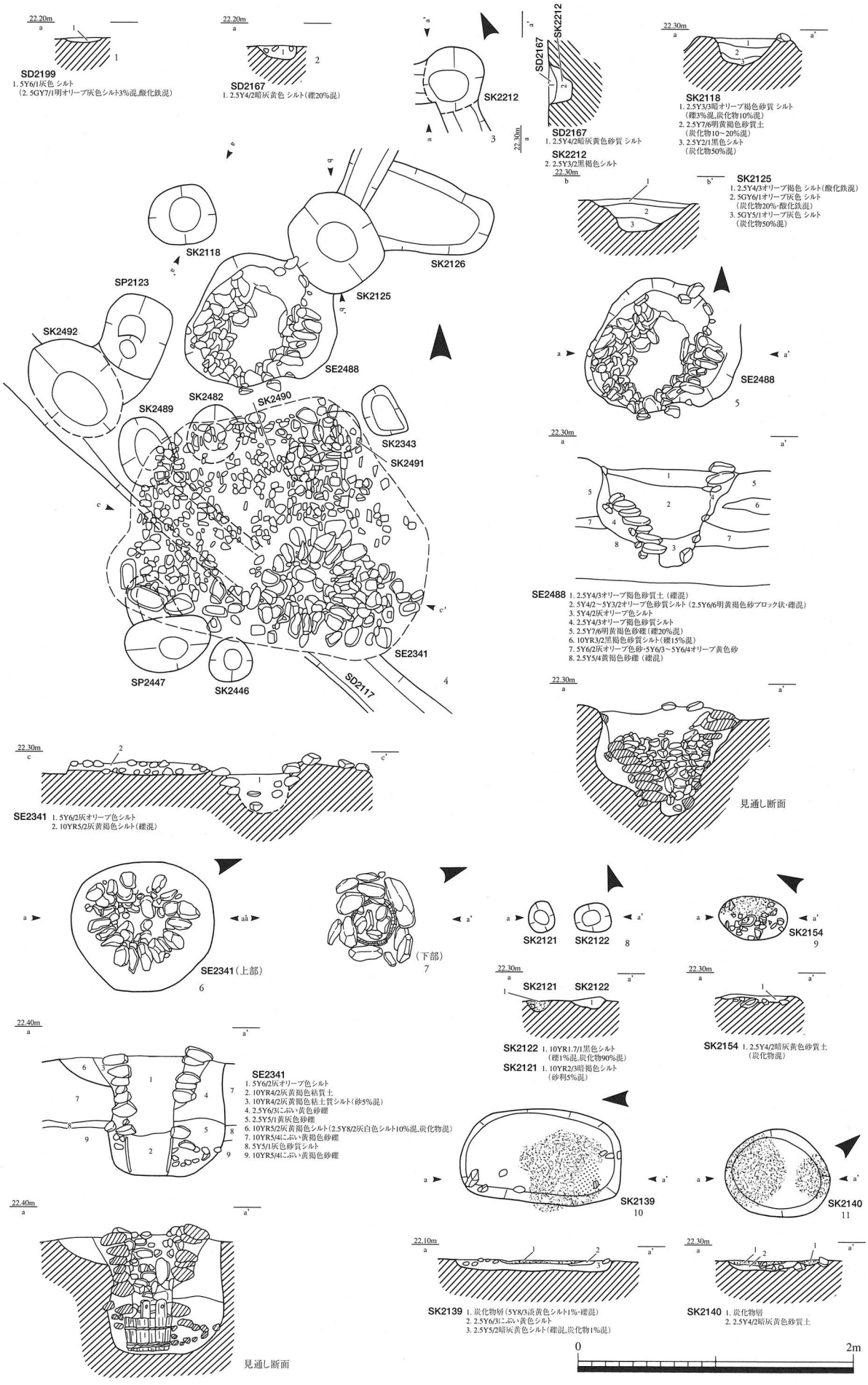
2137号土坑（ＳＫ2137，第24・25図，図版35）

ＳＫ2137，ＳＫ2138は建物の東側に約３ｍ離れて並ぶ土坑で，幅60cm～80cmの集石帯が巡っている。20cmほどの厚さでにぶい黄褐色シルトと５cm～10cmの礫を盛上げて，そのほぼ中央部を20cm～30cm掘り込み土坑を形成している。ＳＫ2137は174cm×140cmの楕円形で，深さは20cmを測る。埋土は皿状に堆積しており，灰オリーブ色砂質土，暗灰黄色砂質土，黄灰色砂で，炭化物がブロック状に混じる。



第22図　遺構実測図（中世）

1. SB11・SB12・SA1　2. SP2480　3. SP2479　4. SP2095



第23図　遺構実測図（中世）

1. SD2199　2. SD2167　3. SD2167・SK2212　4. SK2118・SK2125・SE2341　5. SE2488　6. SE2341 上部　7. SE2341 下部
8. SK2121・SK2122　9. SK2154　10. SK2139　11. SK2140

中国製白磁(*67*)が出土している。*67*は端反り口縁の皿で，16世紀中頃の時期が想定される。ＳＢ11とはほぼ並行しており，ＳＢ11に関連する遺構の可能性が考えられる。

2138号土坑（ＳＫ2138，第24・25図，図版35）

ＳＫ2138はＳＫ2137同様に集石帯が巡る土坑で，160cm×158cm，深さ24cmを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色砂質シルト，黄灰色砂質シルトで，中位に炭化物が５cmほどの層を成しており，炭化物は藁・小枝状で一部炭化していないものを含んでいる。炭化物層の中からしゃもじ(*68*)が出土している。ＳＫ2137同様に，ＳＢ11とは並行しており，何らかの関係をもつ遺構の可能性が考えられる。

2488号井戸（ＳＥ2488，第23図）

ＳＥ2488は建物の南東角に位置する石組井戸である。110cm×94cmの不整形で北東角はSK2125に切られている。深さは70cmを測り，埋土はオリーブ褐色砂質土，灰オリーブ色砂質シルト，灰オリーブ色シルトである。石組の石は10cmほどの小さいものが多く，下位にいくほど大きくなる。埋土には石が多く混じり，下位の石組が南側にずれていることから，地震の影響を受けているものと思われる。

2341号井戸（ＳＥ2341，第23・25図，図版34）

ＳＥ2341はＳＢ11の南東約1.3mに位置している。110cm×90cmの楕円形の石組井戸で，深さは86cmを測り，水溜として手桶が用いられている。埋土は灰オリーブ色シルト，灰黄褐色粘質土である。石組みは放射状に組まれているが，下部では手桶を囲むように組まれており，石組の組み方が異なる。ＳＥ2341の西半では５cm～10cmの礫の集積が２m×1.2mの範囲に渡り遺構確認面上面にみられるが，ＳＥ2340と同様に人為的な遺構ではないと思われる。ＳＥ2341はＳＤ2117と切り合い関係にあり，ＳＤ2117より新しい。ＳＥ2341出土の遺物は手桶(*64*)，天目茶椀（*65*・*66*）である。*64*は18枚の側板で構成される手桶で，底板をぬいて水溜に用いられたものと思われる。*65*・*66*は瀬戸美濃の天目茶椀で，16世紀後半の時期が想定される。

１号柵（ＳＡ１，第22図）

ＳＢ11の東側約２mに建物と並行する柵（ＳＡ１）がある。ＳＡ１はＳＢ11の北側半分と並行し，ＳＢ10の南側半分にかかるように位置しており，どちらの建物に伴うものかは不明である。

12号建物（ＳＢ12，第22図，図版33・34）

ＳＢ12はＳＤ170の東約６m，ＳＢ11の南0.5mに位置する南北棟の建物である。桁行4.3m×梁行2.6m，平面積11.18㎡を測る。主軸はＮ－16°－Ｅで，道路1に沿う。柱穴ＳＰ2095，ＳＰ2447，ＳＰ2480では柱根が確認されている。建物内部に土坑（ＳＫ2089，ＳＫ2197）があり，建物の東側に井戸（ＳＥ2094）が位置しており，ＳＢ12に付属すると考える。また，建物の南1.5mに南側柱列と並行な溝ＳＤ2099・ＳＤ2098があり，ＳＢ12に伴う区画溝と考えられる。

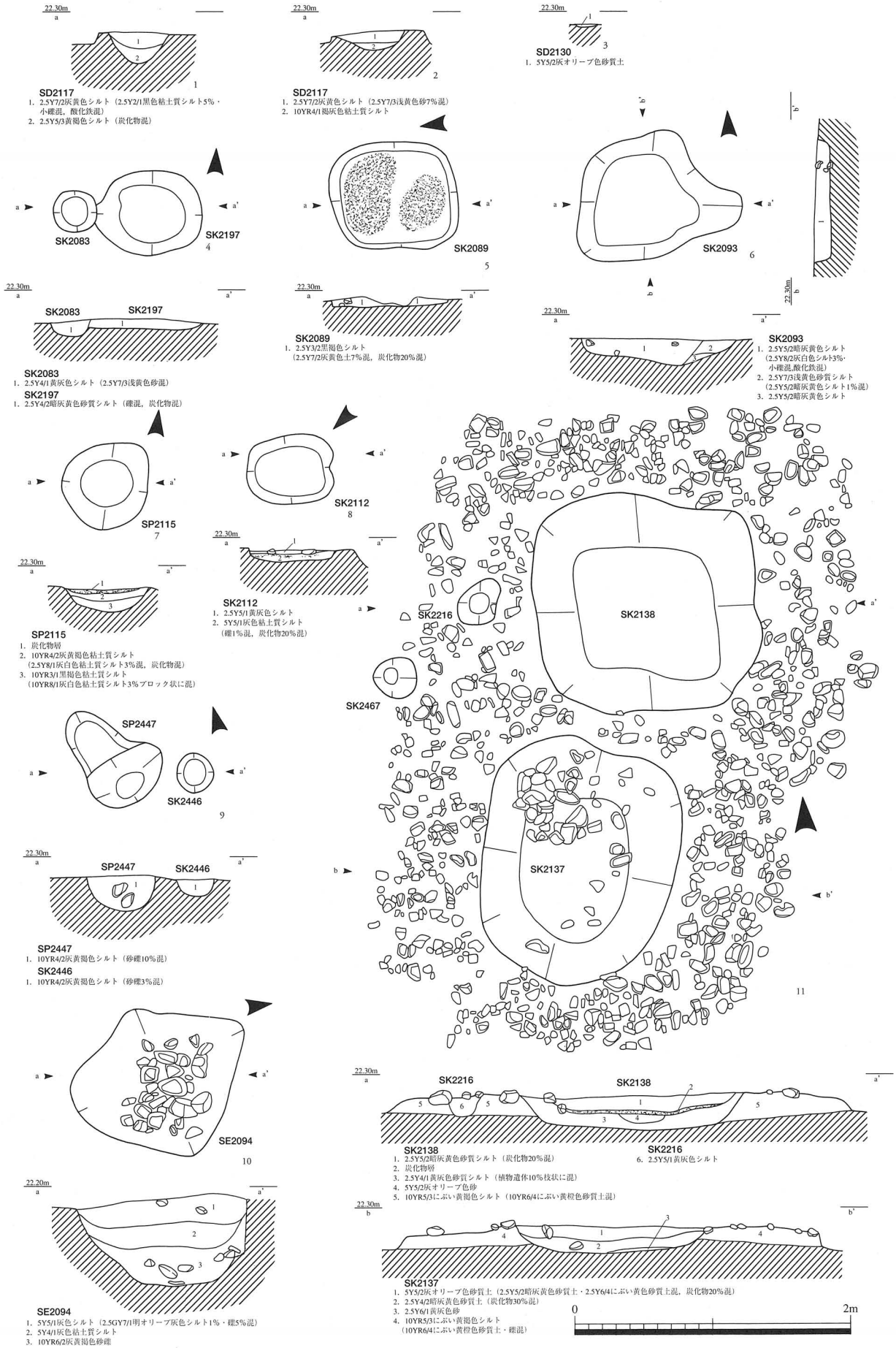
2099号溝（ＳＤ2099，第27図）

ＳＤ2099とＳＤ2098とは一続きの溝と考えられ，北側約12mで直角に曲がるＳＤ2167とＳＢ11・ＳＢ12を囲む幅12mの方形の区画の南辺を構成していると考えられる。溝自体の幅は25cm～30cm，深さは３cm～５cmで，埋土は灰色シルト，灰黄色シルトである。

2089号土坑（ＳＫ2089，第24図，図版35）

ＳＫ2089は建物内部のほぼ中央に位置する92cm×77cmの長方形の土坑で，深さは７cmを測る。埋土は炭化物混じりの黒褐色シルトで，埋土上面に炭化物が薄く堆積している。土間などの作業場の可能性がある。

2197号土坑（ＳＫ2197，第24図）



第24図　遺構実測図（中世）

1・2. SD2117　3. SD2130　4. SK2083・SK2197　5. SK2089　6. SK2093　7. SP2115　8. SK2112　9. SP2447・SK2446　10. SE2094　11. SK2137・SK2138・SK2216

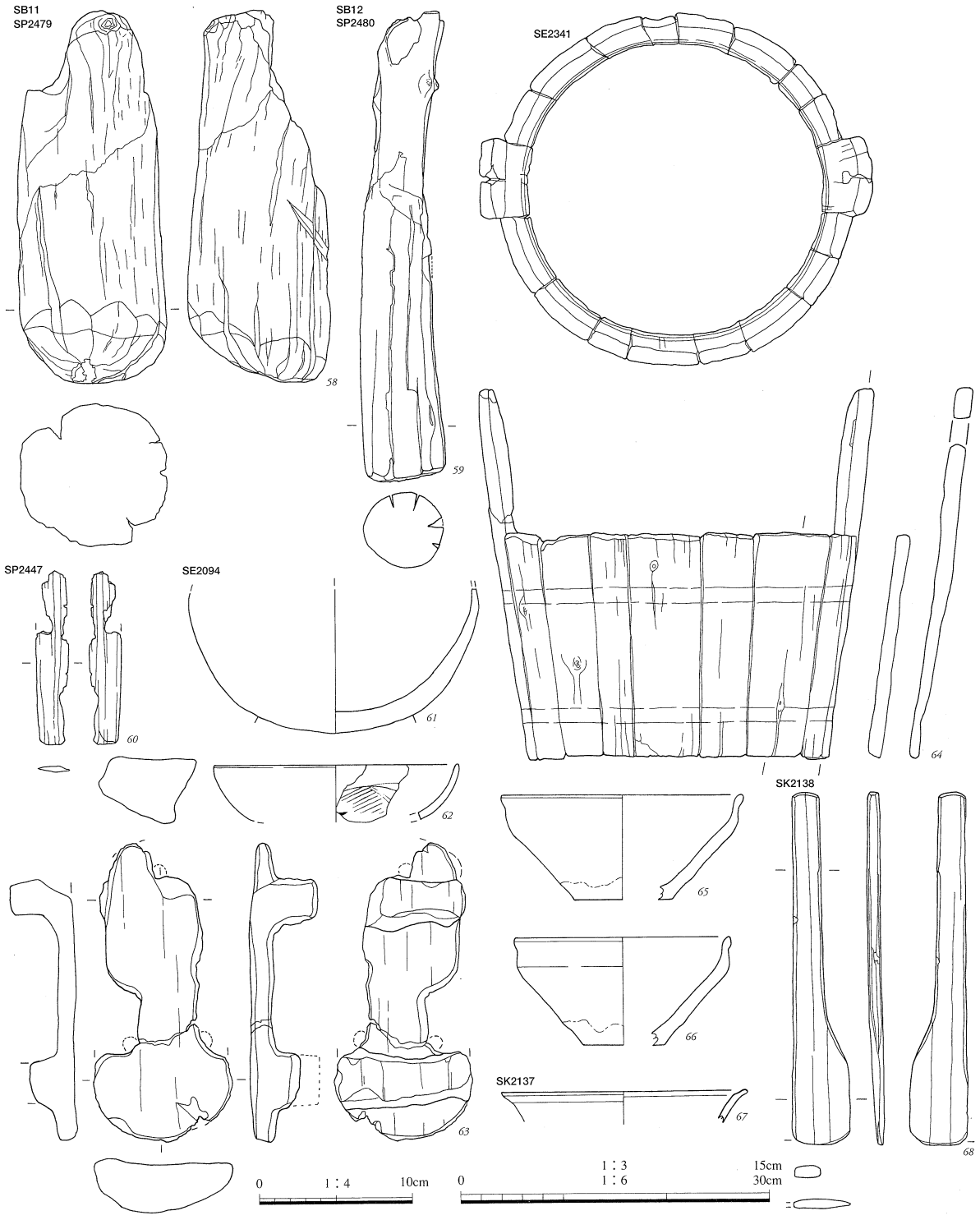
ＳＫ2197はＳＫ2089の南約0．5ｍに位置する80cm×63cmの不整形の土坑で，深さは６cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトで，炭化物が混じる。ＳＫ2083と切り合い関係があり，ＳＫ2083より古い。ＳＫ2089と同様にＳＫ2197は建物の内部に位置しており，土間などの作業場の可能性が考えられる。

2093号土坑（ＳＫ2093，第24図）

建物の西側に近接してＳＫ2093が位置している。116cm×90cmの不整形の土坑で，深さは18cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト，浅黄色砂質シルトである。ＳＢ12との関係は不明である。

2094号井戸（ＳＥ2094，第24・25図，図版34）

ＳＥ2094は建物の東約1.4ｍに位置している。102cm×102cmの歪んだ方形の井戸で，深さは62cmを測



第25図　遺物実測図（中世）（*58・60～62・65～68*　1/3，*63*　1/4，*59・64*　1/6）
SP2479（*58*）　SP2480（*59*）　SP2447（*60*）　SE2094（*61～63*）　SE2341（*64～66*）　SK2137（*67*）　SK2138（*68*）

り，埋土は灰色シルト，灰色粘土質シルト，灰黄褐色砂礫である。底面付近には10cm～20cmの礫が堆積しており，素掘り状であるが本来は石組井戸であったと思われる。道路からみて建物の裏側に位置している。底部の礫に混ざって漆椀（*61*・*62*），下駄(*63*)が出土している。*61*は総黒の深身の椀で，高台が付くものと思われ，16世紀後半代のものと想定される。

13号建物（ＳＢ13，第26図，図版33・34）

ＳＢ14，ＳＢ15と重なるように立つ。ＳＤ170の東７ｍ，ＳＢ12の南約1.2ｍに位置している。桁行6.7ｍ×梁行2.5ｍの南北棟の建物で，平面積16.75㎡を測る。主軸Ｎ－19°－Ｅで，道路１に並行する。柱穴ＳＰ2064では柱根が確認されている。建物内部に土坑（ＳＫ2092），炉関連遺構（ＳＫ2040）があり，ＳＢ13に付属するものと考える。また，炉関連遺構が伴うことから，ＳＢ13は鍛冶関連の作業場的な機能をもつと考えられる。

2092号土坑（ＳＫ2092，第27図，図版35）

ＳＫ2092は164cm×164cm，深さ８cmの竪穴状土坑で，南西角は柱穴を避けて歪んでいる。埋土は炭化物混じりの灰色シルト，灰色砂質シルトである。建物内に位置しており，土間などの作業場と考えられる。ＳＢ15の柱穴ＳＰ2103と重複しており，ＳＫ2092の方が新しい。ＳＫ2092からは瀬戸美濃の椀(*69*)が出土している。

2040号土坑（ＳＫ2040，第27図）

ＳＫ2040はＳＢ13のほぼ中央部に位置している。41cm×38cmの円形の土坑で，深さは40cmを測る。埋土は灰黄色シルト，暗灰黄色砂質シルトである。埋土上面には５cm～10cmの礫が半円形に集積されており，石敷きの上面を焼土が覆っている。このことから，炉跡と考えられる。

14号建物（ＳＢ14，第26図，図版33・34）

ＳＢ13，ＳＢ15と重なるようにして立つ。ＳＤ170の東約６ｍに位置し，道路１のカーブに沿う南北棟の建物である。桁行6.0ｍ×梁行3.0ｍ，平面積18.0㎡を測り，主軸はＮ－18°－Ｅである。建物の北側約1.3ｍに北側柱列と並行な溝ＳＤ2099・ＳＤ2098があり，区画溝と考えられる。さらに，建物の北東には，ＳＤ2099・ＳＤ2098に連続するものと思われるＳＤ2052があり，南北方向のＳＤ2053とで一つの区画を構成していると思われる。ＳＢ14はこの区画内に位置しており，溝を挟んでＳＢ12と並行に並んでいる。建物内部に炉関連遺構（ＳＫ2465），建物屋外の南側に土坑（ＳＫ2062，ＳＫ2063）があり，ＳＢ14に付属するものと考える。建物屋外の土坑のある空間は土台などによる補助屋的な空間で，建物中核部分と連続した覆屋を持つ可能性がある。炉関連遺構があることから，ＳＢ14は鍛冶関連の作業場的な機能をもつと思われる。柱穴ＳＰ2039からは銅銭(*72*)が出土している。

2052号溝（ＳＤ2052，第27図）

ＳＤ2052はＳＢ14の北東約４ｍに位置する東西方向の溝である。区画溝と考えられるＳＤ2099・ＳＤ2098の延長上にあたり，区画溝の可能性がある。溝自体は，幅23cm，深さ４cmを測り，埋土は黄灰色シルトである。

2053号溝（ＳＤ2053，第27図）

ＳＤ2053はＳＢ14の東約８ｍに位置する南北方向の溝で，ＳＢ14と並行する。ＳＤ2053を境として東側には遺構がみられないことから，区画の東辺の溝と考えられる。ＳＤ2099・ＳＤ2098・ＳＤ2052を北辺とし，ＳＢ14・ＳＢ15を囲む区画を構成すると思われる。溝自体は，幅31cm，深さ9cmを測る。埋土は黄灰色シルトで，噴砂に切られている。

2465号土坑（ＳＫ2465，第27図）

ＳＫ2465は建物内部の南東角に位置する。133cm×86cmの楕円形の土坑で，深さは15cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルト，灰色砂質土である。西側半分の埋土上面には５cm～15cmの礫の集積がみられ，礫の上面に焼土の堆積が確認されている。炭化物の混じりはないが，炉跡と考えられる。

2062号土坑（ＳＫ2062，第27図）

ＳＫ2062は建物の南約0.5mに位置する52cm×47cmの円形の土坑で，深さは５cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で，焼土が混じる。焼土は面を成さないが，炉跡の可能性が考えられる。

2063号土坑（ＳＫ2063，第27図）

ＳＫ2063はＳＫ2062の東隣に位置し，86cm×70cm以上で調査区外へ続いている。深さは13cmを測り，埋土は黒褐色砂質土で底面に７cmほどの厚さで炭化物が堆積している。建物の南側柱列に近接した位置にあり，補助屋的な空間にあたると思われ，土間などの作業場の可能性がある。

15号建物（ＳＢ15，第26図，図版33・34）

ＳＢ13，ＳＢ14と重なるようにして立つ。ＳＤ170の東約7mに位置する，主軸Ｎ－22°－Ｅの南北棟建物である。桁行4.2m×梁行3.2mで，平面積13.44m²を測る。ＳＢ14と同様に，ＳＤ2099・ＳＤ2098・ＳＤ2052を北辺，ＳＤ2053を東辺とする区画内に位置している。また，ＳＢ13に付属すると考えられる土坑ＳＫ2092と柱穴ＳＰ2103は切り合いがあり，ＳＰ2103の方が古いことから，ＳＢ15はＳＢ13より古い建物と思われる。柱穴ＳＰ2066は南半分が一段深く掘り込まれている。埋土は褐灰色シルトで植物遺体を含んでおり，柱痕と考えられる。建物の東側には炭化物の堆積がみられる土坑６基があり，ＳＤ2053を境とする区画内に位置しており，ＳＢ15またはＳＢ14，ＳＢ13に関連する遺構と考えられる。

2054号土坑（ＳＫ2054，第27図）

ＳＫ2054はＳＢ15の東約４mに位置する28cm×21cmの楕円形の土坑で，深さ３cmを測る。埋土は黄灰色シルトで，上面に炭化物が薄く堆積する。炉関連遺構の可能性があり，炉跡と考えられるＳＫ2071とセットになると思われる。ＳＫ2054をはじめＳＢ13，ＳＢ14，ＳＢ15の東側４mの一帯では炭化物土坑が集中してみられる。ＳＢ13，ＳＢ14は炉跡をもち，鍛冶関連の作業場の可能性が考えられることから，これらの炭化物土坑は鍛冶関連の遺構と思われる。ＳＢ15及びＳＢ13，ＳＢ14のどの建物に関連するものであるのかは不明である。

2056号土坑（ＳＫ2056，第27図）

ＳＫ2056はＳＢ15の東約３mに位置する。85cm×72cmの楕円形で，深さ20cmを測る。埋土は炭化物混じりの黄灰色シルトで，炭化物は藁・小枝状のものが多く，層は成さない。炉関連遺構と考えられる[注8]。どの建物に関連するのかは不明である。

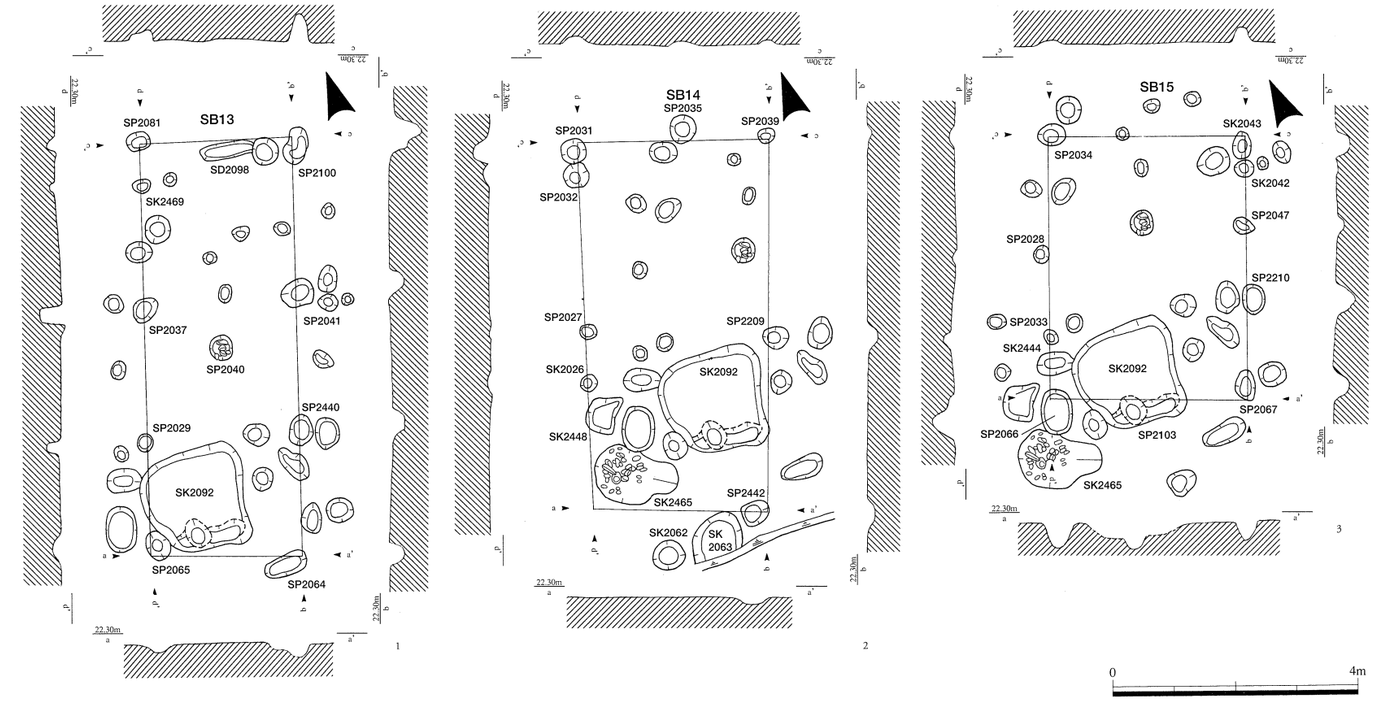
2070号土坑（ＳＫ2070，第27図）

ＳＫ2070はＳＢ15の東0.7mに位置している。径55cmの円形の土坑で，深さは７cmを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色砂質土である。ＳＤ2102と切り合っており，ＳＫ2070の方が古い。

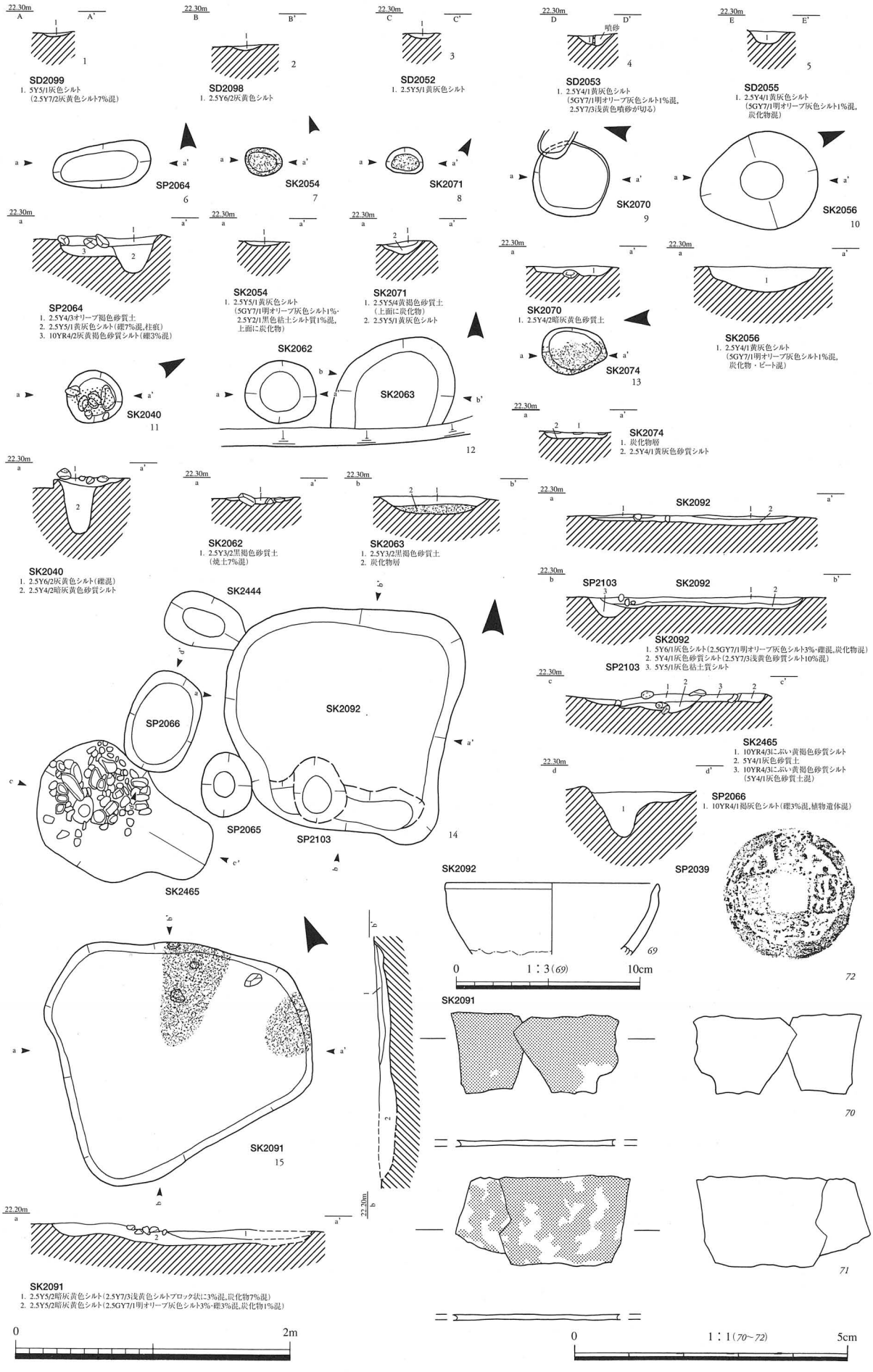
2071号土坑（ＳＫ2071，第27図）

ＳＫ2071はＳＢ15の東2.5m，に位置している。28cm×18cmの楕円形の土坑で，深さは10cmである。埋土は黄褐色砂質土，黄灰色シルトの２層で，上層の黄褐色砂質土は焼土である。埋土の上面には炭化物が薄く堆積する。焼土の堆積がみられることから，炉跡と考えられる。どの建物に関連するものかは不明である。

2074号土坑（ＳＫ2074，第27図，図版35）



第26図　遺構実測図（中世）
1. SB13　2. SB14　3. SB15



第27図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SD2099　2. SD2098　3. SD2052　4. SD2053　5. SD2055　6. SP2064　7. SK2054　8. SK2071　9. SK2070
10. SK2056　11. SK2040　12. SK2062・SK2063　13. SK2074　14. SP2066・SK2092・SP2103・SK2465　15. SK2091
SK2092(*69*)　SK2091(*70*・*71*)　SP2039(*72*)

ＳＫ2074はＳＢ15の東３ｍにあり，ＳＫ2054，ＳＫ2071とは半径１ｍ以内の近接した位置にある。48cm×35cmの楕円形の土坑で，深さ４cmを測る。埋土は黄灰色砂質シルトで，上面に炭化物が薄く堆積する。炉関連遺構と考えられ，ＳＫ2071（炉跡）とセットになる可能性がある。どの建物に関連するものかは不明である。

2091号土坑（ＳＫ2091，第27図，図版35）

ＳＫ2091はＳＢ15の南東角１ｍに位置する竪穴状土坑で，185cm×152cmの台形で，深さ14cmを測る。埋土は皿状に堆積する炭化物混じりの暗灰黄色シルトである。底面北東角に集中して炭化物が堆積しており，埋土中の炭化物は上層に多く混じる。土間などの作業場的な機能をもつと思われ，ＳＢ15に伴う可能性が考えられる。炭化物の集中個所からは，厚さ１㎜ほどの木の皮に金箔を貼ったもの（*70・71*）が出土している。

道路１の東側では，建物のさらに東側に土坑，石列遺構，自然河川がある。これらの遺構は建物との関連が不明なものが多く，ここではまとめて記述する。

自然河川

Ｂ地区を横断し，Ｄ地区の北西角へ抜けていく幅約30ｍの自然河川である。埋土は浅黄色砂とピート混じりの灰色粘質シルトが互層を成している。Ｂ・Ｄ両地区ともに北側では浅黄色砂や灰白色砂質シルトなどの氾濫堆積層が厚く認められ，頻繁に氾濫を起こしていたと思われる。遺物は出土していない。

2378号溝（ＳＤ2378，第28図）

ＳＤ2378はＡ地区北西端に位置する東西方向の溝で，ＳＢ２の南東約10ｍである。ＳＫ2381・ＳＤ2384を切り，ＳＫ2385に切られている。溝の深さは７cm～10cmを測り，埋土は炭化物混じりの灰黄褐色砂質シルトの単層である。埋土中から珠洲の破片（*73*）が出土している。

2384号溝（ＳＤ2384，第28図）

ＳＤ2384はＳＢ２の南東約15ｍに位置する南北方向の溝で，ＳＫ2381を切り，ＳＤ2378に切られている。溝幅49cm，深さ９cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルト，淡黄色シルトである。

2377号土坑（ＳＫ2377，第28図）

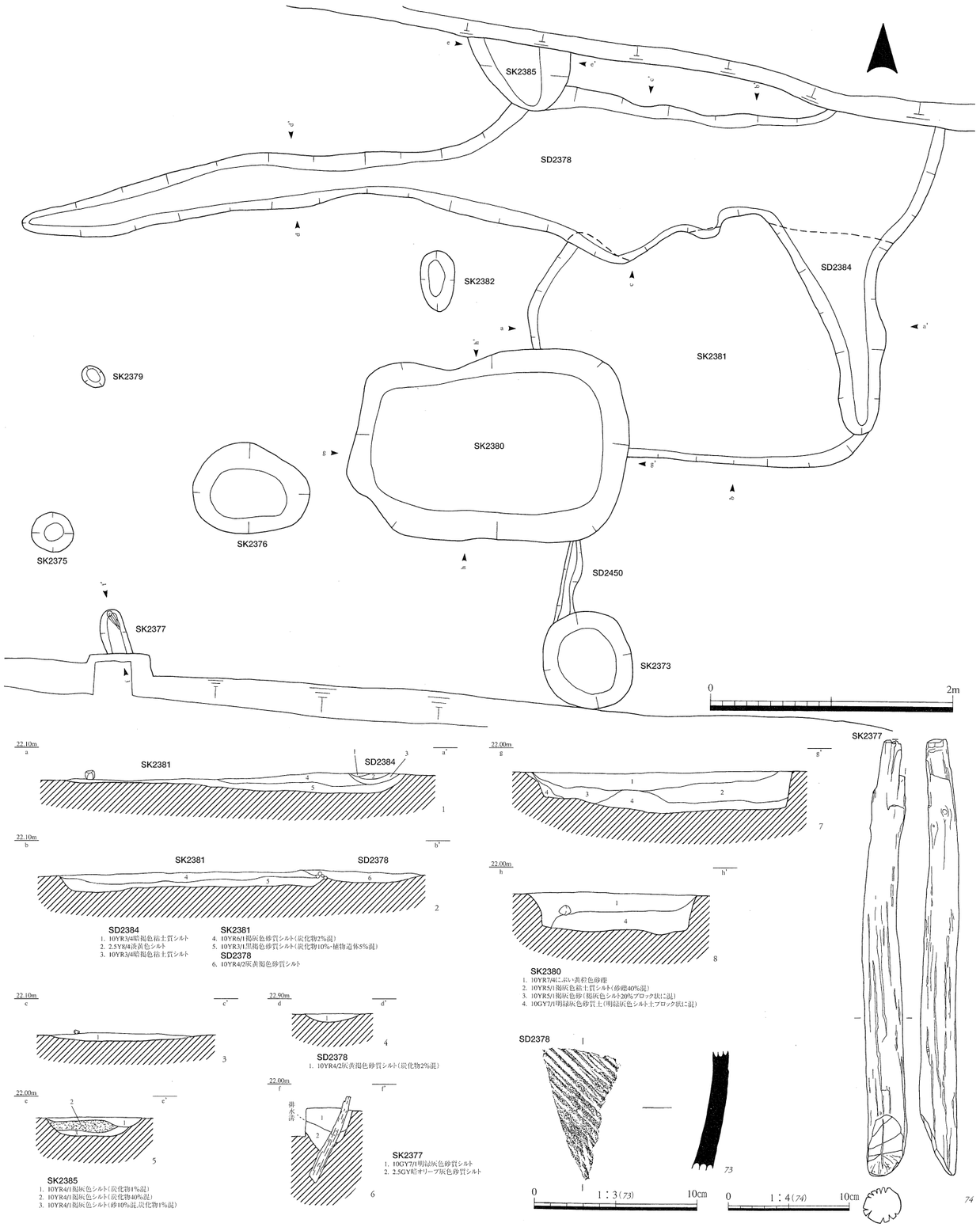
Ａ地区の北西端に位置し，ＳＢ2の南東約13ｍを測る。排水溝によって南側半分を切られているが，20cm×38cm以上の楕円形で，深さは36cmを測る。埋土は明緑灰色砂質シルト，暗オリーブ灰色砂質シルトで，柱根が残っている。柱根（*74*）は長さ72cm，径６cmで，先端は斜めにカットされており，炭化している。

2380号土坑（ＳＫ2380，第28図）

ＳＫ2380はＳＢ２の南東約14ｍに位置する227cm×149cmの長方形の土坑で，深さ35cmを測る。埋土はにぶい黄橙色砂礫，褐灰色粘土質シルト，褐灰色砂，明緑灰色砂質土である。ＳＫ2381，ＳＤ2450を切っている。

2381号土坑（ＳＫ2381，第28図）

ＳＫ2381はＳＤ2378，ＳＤ2384，ＳＫ2380に切られている土坑で，211cm×180cm以上の不整形を呈していると思われる。深さは19cmを測り，埋土は炭化物混じりの褐灰色砂質シルト，黒褐色砂質シルトで，下位のほうは炭化していない藁・小枝状の植物遺体を含んでいる。底面からは板状の木製品が出土している。



第28図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK2381・SD2384　2. SK2381・SD2378　3・4. SD2378　5. SK2385　6. SK2377　7・8. SK2380
SD2378(*73*)　SP2377(*74*)

2385号土坑（ＳＫ2385，第28図）

ＳＫ2385はＳＢ２の南東約12ｍに位置する。排水溝に北側半分を切られているが，85cm×50cm以上の不整形の土坑で，深さは16cmを測る。埋土は炭化物混じりの褐灰色シルトで，炭化物は中層に多くみられる。ＳＤ2378を切っており，ＳＫ2385のほうが新しい。

2366号土坑（ＳＫ2366，第29図）

ＳＫ2366はＳＢ３の北東約９ｍに位置する225cm×134cmの長方形の土坑で，深さ10cmを測る。埋土は灰オリーブ色砂質土混じりの黒褐色砂質シルトの単層である。

2411号土坑（ＳＫ2411，第29図）

ＳＫ2411はＳＢ４の東約7.5mに位置している。石列遺構ＳＸ2432とＳＤ2393を切る台形状の土坑で，240cm×175cm，深さ27cmを測る。埋土は灰色砂質シルトの単層で，地震による噴砂に切られている。

2313号土坑（ＳＫ2313，第29図，図版28）

ＳＫ2313はＳＢ５の南東約７ｍに位置する。152cm×136cmの北西角の欠けた不整形の土坑で，深さは12cmを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色シルトである。

2449号土坑（ＳＫ2449，第29図）

ＳＫ2449はＳＢ10の東７ｍに位置する。120cm×123cmの円形の土坑で，深さ12cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで，上面に10cm代の礫がまとまってみられる。

2109号土坑（ＳＫ2109，第29図）

ＳＫ2109はＳＢ11の東約８ｍに位置している。186cm×176cmの方形の土坑で，深さ17cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰オリーブ色砂質シルト，暗灰黄色砂質シルトである。埋土を地震による噴砂が切っており，噴砂は北から西へ抜けている。この他にもＳＫ2109の周辺では噴砂が確認されている。

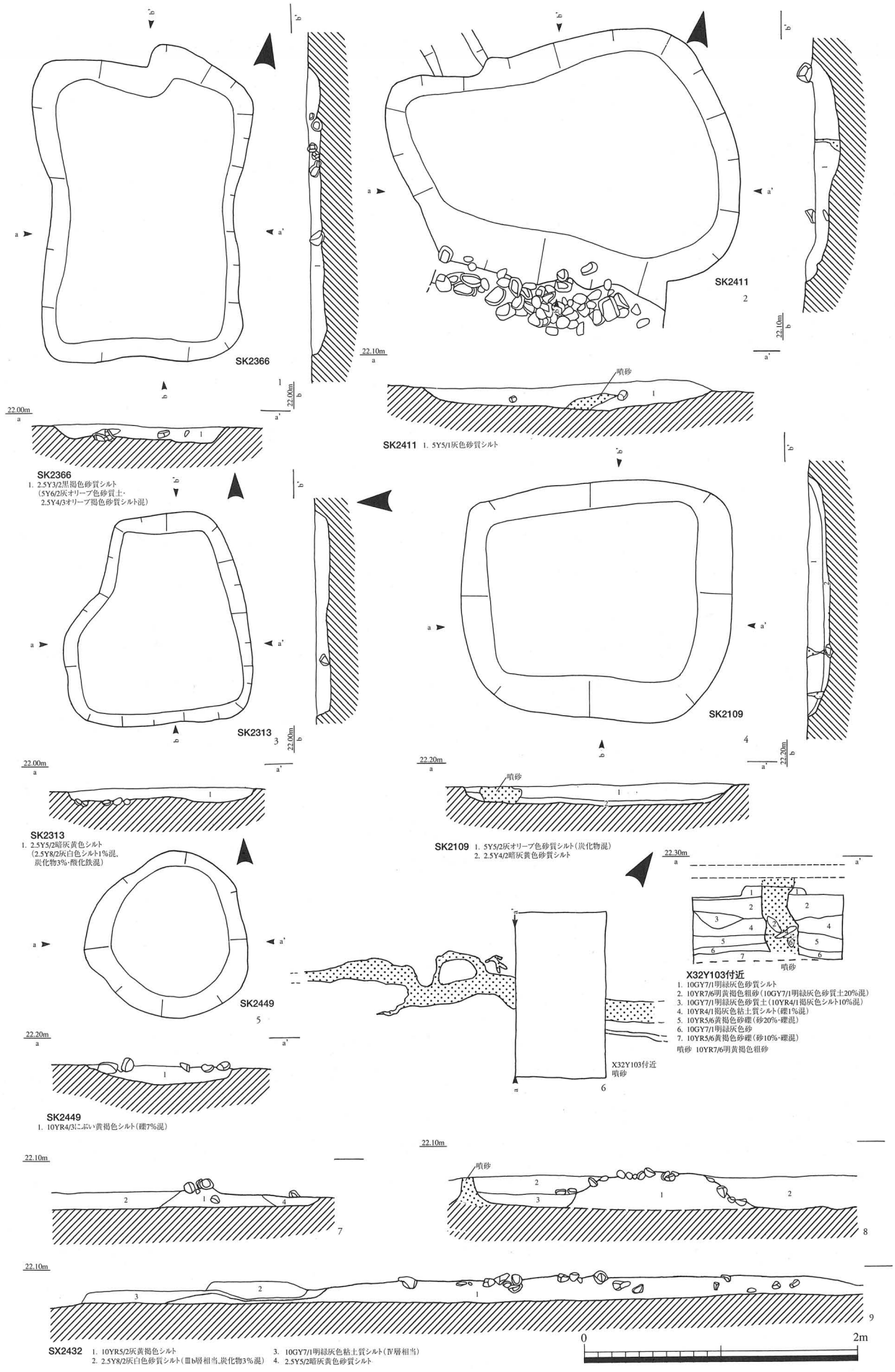
Ｘ32Ｙ103付近噴砂（第29図）

ＳＫ2109の南東３ｍの辺りで東西方向の噴砂が確認されている。噴砂はＶ層の下の黄褐色砂礫層（７層）から上がっており，上位へ行くに従い粒子が細かくなり明黄褐色粗砂となる。Ⅲａ層相当の１層を切って，Ｉｄ層まで上がっている。地震は記録によると木舟城が崩壊したと伝えられる天正13（1586）年の地震の他に，周辺地域では能登・佐渡で享保14（1729）年，金沢で寛政11（1799）年，越中で安政５(1858)年に大きな地震がおきている[注9]。中世面で確認された噴砂は，遺構の埋土を切っていることから江戸時代のいずれかの地震によるものと思われる。

2432号石列遺構（ＳＸ2432，第29図，図版28）

ＳＸ2432はＡ地区の東端に位置する石列遺構である。Ａ地区の中央付近から道路１のカーブに沿って弓なりに北へ伸びて，Ａ地区北端で東へ曲がる。1.5m～2.5mの幅で，屈曲部も含め全長約54ｍを検出している。５cm～10cmの石が20～30cmの厚さで集積され，石の間には灰黄褐色シルトが詰められた土塁状の遺構で，人為的なものと考えられる。遺跡が東西を自然河川に挟まれた中洲状の地形に立地しており，Ｂ地区からＤ地区に抜ける東側の河川は頻繁な氾濫を起こしていたと思われることから，堤防としての機能をもつものと考えられる。この他にＳＸ2432は集落の一番東端にあたることから，防衛・境界などの機能をあわせもつ可能性がある。

道路１東側の包含層出土遺物は，中世土師器，珠洲，瀬戸美濃，越中瀬戸，中国製の白磁・青磁・染付，木製品，石製品，金属製品である。ここでは，種類ごとに記述する。



第29図　遺構実測図（中世）

1. SK2366　2. SK2411　3. SK2313　4. SK2109　5. SK2449　6. X32Y103付近・噴砂　7～9. SX2432

中世土師器（第30図，図版60・68）

中世土師器は*75*～*86*で，口縁部に一段のナデを施し，体部は直線的またはやや内湾気味に開き，越前氏の分類[注10]のＮＪ類にあたると思われる。法量では口径９cm台，11cm台，13cm以上の３タイプがあり，11cm台のものが多い。*75*・*76*は口縁部内外面に煤が付着しており，灯明皿に用いられていたと思われる。*86*は外面にタール状の付着物がみられる。*75*・*76*は16世紀中頃，*77*・*80*～*82*・*84*は16世紀中頃～後半，*78*・*79*・*83*・*85*・*86*は16世紀末の時期のものと考えられる。

珠洲（第30図，図版62）

87・*88*は擂鉢の口縁で，*89*は断面に漆の付着した甕の破片で漆継ぎが施されていたと思われる。破片はいずれも小さく摩耗しており，*87*はⅣ期，*88*はⅠ期，*89*はⅣ～Ⅴ期に比定されるものである。*89*の甕の破片はＳＤ170出土の甕と同一個体の可能性も考えられる。

瀬戸美濃・越中瀬戸（第30図，図版66・92）

瀬戸美濃では天目茶椀が多く*90*～*93*・*96*・*97*・*100*が天目茶椀で，*98*・*99*は皿である。*93*は断面に漆継ぎがみられる。*96*・*97*の高台は薄く錆釉がかかり，*96*は内反り高台でトチンの跡が残っている。*97*は削りだし輪高台である。*98*は鉄釉の内禿皿で，高台裏に「十」の字状の釉の跡がみられる。16世紀後半のものと思われる。*99*は灰釉の皿で，内面に菊の印花文が押印されており，16世紀前半の時期が想定される。*94*・*95*は越中瀬戸の天目茶椀である。

中国製白磁・青磁・染付（第30図，図版63～65・68）

101～*105*・*110*は白磁で，*110*は*101*と同一個体の可能性がある。*101*・*102*・*104*・*105*は小野氏の分類[注11]の皿Ｃ群で，15世紀後半～16世紀後半のものと思われる。*103*はいわゆる菊皿である。

107～*109*は青磁で，*107*は体部が内湾し，口縁部が立ち上がる器形で線描の細蓮弁文を施す。蓮弁頂部は連弧状の沈線を引くが，縦線との対応関係は若干ずれるものがある。上田氏の分類[注12]のＢ－Ⅳ′類にあたり，15世紀後半～16世紀代のものと思われる[注13]。*108*は碗の体部を打ち欠いて，高台部分を「陶製円盤」としたもので，内面のほぼ中央に径３㎜の孔があいている。この孔は人為的に空けたものなのか，欠けたものであるのかは不明である。

111～*113*は染付で，*111*はいわゆる「饅頭心」の碗で，小野分類の碗Ｅ群にあたる。16世紀中頃から後半のものと思われる。*112*は碁笥底の皿で，体部外面に芭蕉葉文，内面に花文が描かれている。15世紀後半～16世紀前半頃のものと思われる。*113*は小野分類の皿Ｂ群で，内面に「獅子」を描いていると思われる。

木製品（第31図，図版79）

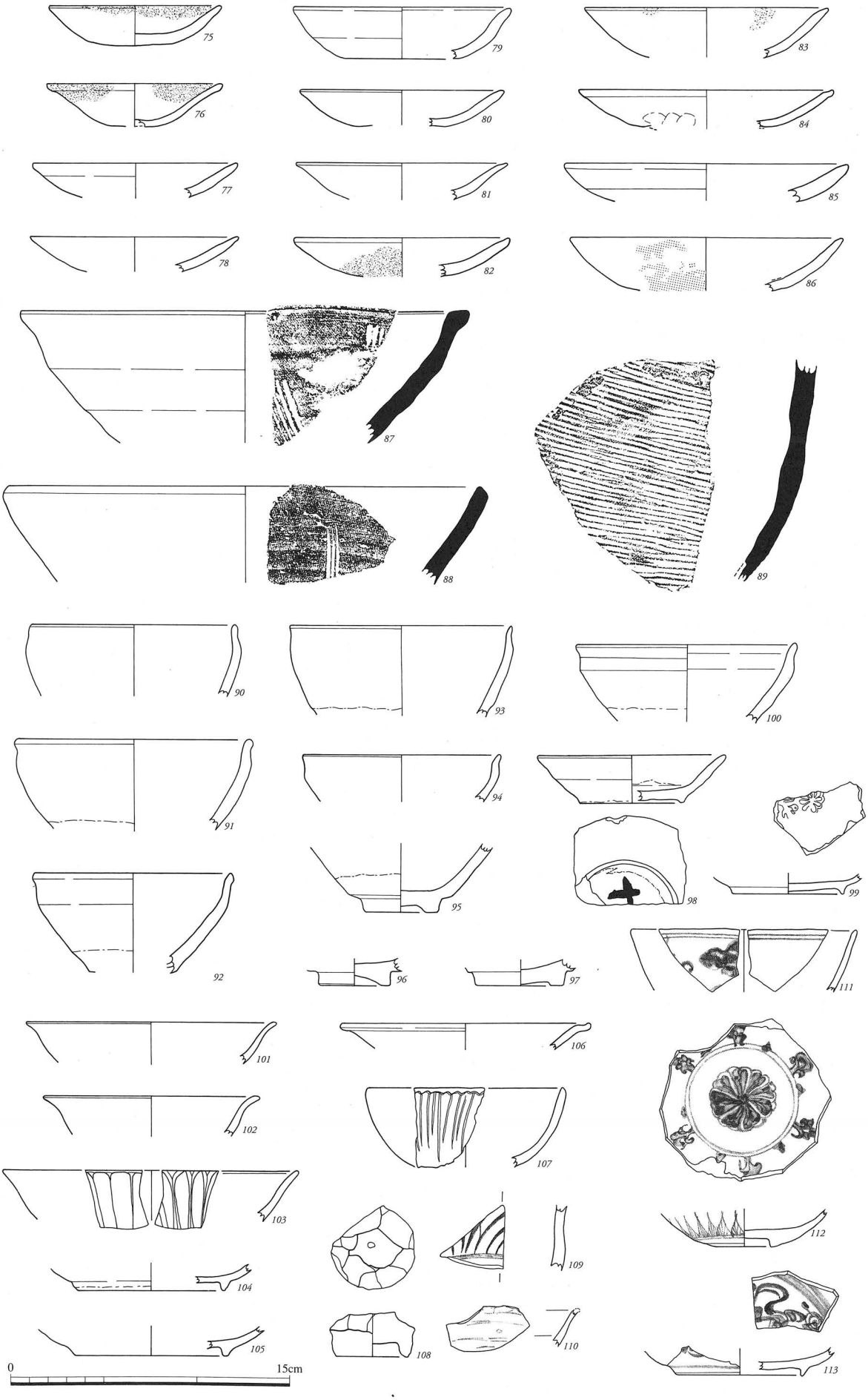
*114*はいわゆる「根来手」の漆椀である。内外面赤色漆で，高台裏は黒色。*115*は蓋で，内赤外黒の漆塗りで，器壁が薄く丁寧な塗りの上質のものである。*116*は小札で，生革に漆を塗り固めたもので，黒漆の地に赤色で「×」状の文様を描いている。この手の小札は，ＳＫ2403でまとまって出土した他，遺跡の広い範囲から小片で出土している。*117*はヒノキの円形板で蓋もしくは底板と思われ，径５cm，厚さ１cmを測る。

石製品（第31図）

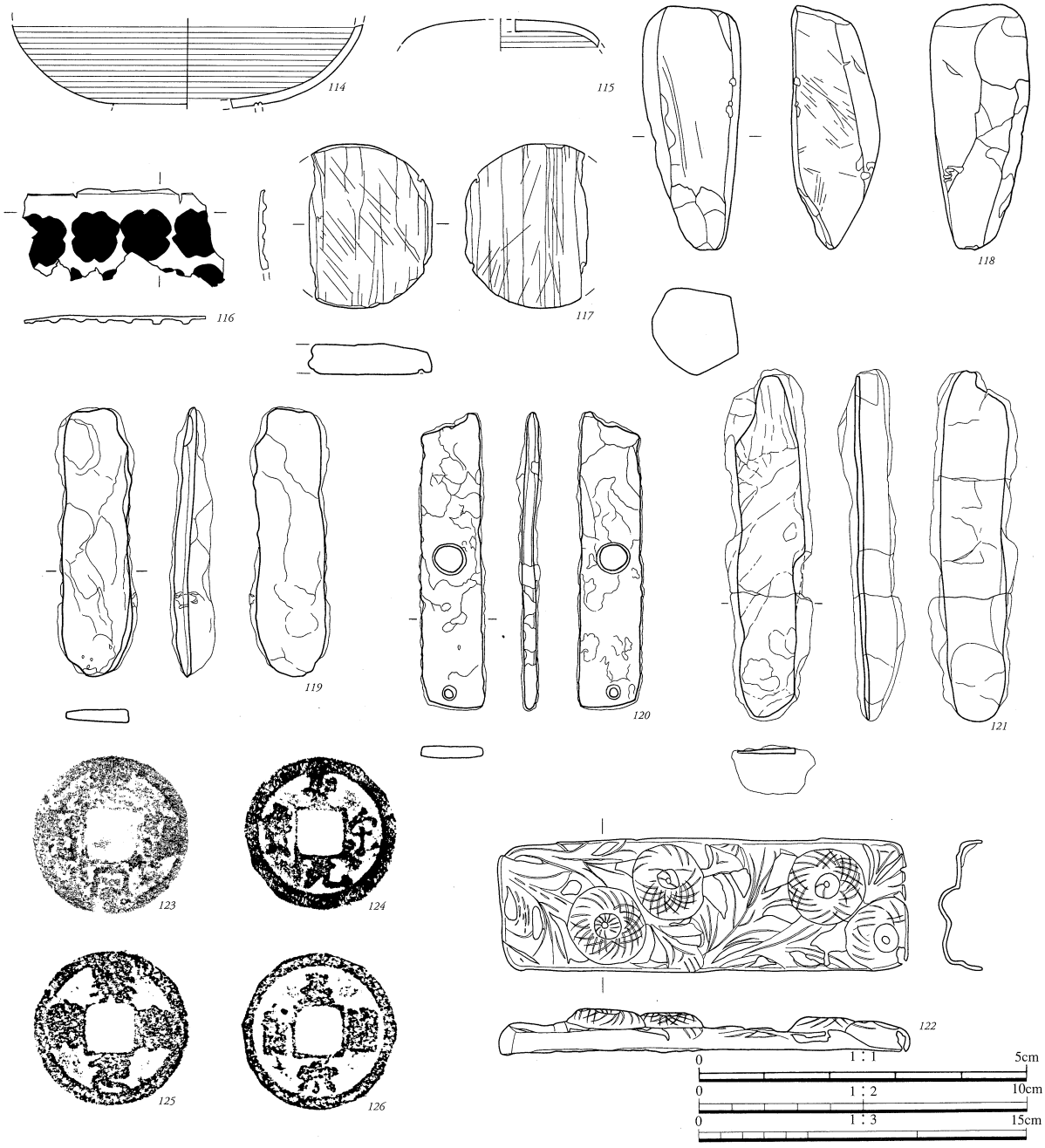
*118*は砥石で，長さ11.2cm，幅4.5cm，厚さ3.6cmを測る。石材は砂質泥岩である。

金属製品（第31図，図版85・87・88）

119～*121*は刃状のものである。*119*は厚さ４㎜，*121*は３㎜であるが，錆がついて厚く膨れている。*120*は柄に差し込まれる中子の部分で，中央の孔は目釘孔である。*122*は飾金具で，鎧の袖部分に用い



第30図　遺物実測図（中世）　(1/3)
包含層



第31図　遺物実測図（中世）（*122*～*126*　1/1, *116*・*117*・*119*・*120*　1/2, *114*・*115*・*118*・*121*　1/3）
包含層

られた「笄金物」にあたると思われる。笄金物は横長の装飾的な座金物で，鎌倉後期頃から用いられるようになったものである[注14]。*122*は幅２㎝，長さ6.2㎝を測り，枝菊文様が透彫りされており，表面に金箔が残っている。*123*～*126*は古銭で，*124*は聖宋元寶，*125*は熙寧元寶，*126*は皇宋通寶で，*123*は判読不明である。　（三島道子）

注１　河西健二他　1994「開碆大滝遺跡」『埋蔵文化財年報』⑸　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
注２　注１に同じ。
注３　吉岡康暢　1994『中世土師器の研究』　吉川弘文館
注４　河西健二　1993「越中における様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究会
　　1994「雑記　建物遺構」『埋蔵文化財年報』⑸　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注５　注１に同じ。炉関連遺構は金属類に関係する炉跡の可能性が考えられている。
注６　四柳嘉章　1997「北陸の中世漆器」『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会
注７　宮崎真澄・山岸素夫　1990『日本甲冑の基礎知識』雄山閣
注８　注１に同じ。フラスコ状ではないが，藁・小枝状の炭化物を含む点などから，Ｆ類に分類されるものであると思われる。
注９　震災予防調査会　1973『大日本地震史料』思文閣
注10　越前慎子　1996「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
注11　小野正敏　1982「15・16世紀の染付碗，皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会
注12　上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会
注13　山本正敏　1996「中国製陶磁器の分類と編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
注14　注７に同じ。

道路１西側遺構群

道路１の西側に面した掘立柱建物群には短冊状に区画する逆「コ」の字状の溝が伴う。この区画溝は部分的重複関係が認められ，幾度かの改変，改築が認められる。南北方向に延びる溝は道路２の東側掘立柱建物群を，東西方向に延びる溝は町並みを区画する。区画溝の幅は一定でなく，掘り込みも浅く途切れる部分もある。10区画が並び，間口の幅は南側の区画が広く北側が狭い傾向にある。区画の面積は100㎡～700㎡台があり，最小の区画は区画７の119㎡，最大は区画３の728㎡である。中でも100㎡～200㎡台が５区画を占め通有規模である。また，北側の区画９・10と南側の区画１は部分的な区画溝で全体規模は明確でない。

地口幅は７ｍ～28ｍを測り，区画４～９は７ｍ～12.5ｍの小規模な地口，区画２は18.5ｍの中規模，区画１・３は23ｍ～28ｍの大規模な地口である。

掘立柱建物は24棟が検出された。その内，道路際に位置する建物は16棟で建物の７割近くを占める。奥に位置する建物は６棟で，中程に位置する建物は２棟と最も少ない。道路際に位置する建物は重複する建物が顕著で，２～３回の建て替えが想定される。建物の配置は大区画の場合は，道路に面して数棟並置する例や奥に建物を配置する例があり，２～３棟の建物で構成される。これに対して小区画の場合は道路際に１棟の建物で構成される例が多い。

建物の長軸方向は南北棟のもの18棟，東西棟のものが５棟で，南北棟建物が圧倒する。道路際に位置する建物は南北棟建物が主体をなし，東西棟建物は３棟で，２棟は２間×２間の正方形に近い建物で，明確な東西棟建物はＳＢ16の１棟のみである。道路際の建物は方位を道路方向に揃え，中程から奥に位置する建物の方位は区画溝に合わせるため，同一区画内でも建物方位は異なる配置になる。また，道路際のＳＢ27から北側に位置する建物ＳＢ30～32･35･37は道路の変化に合わせて柱筋を揃え，計画的な配置状況が伺える。

建物の柱形式は側柱建物が18棟，棟持柱建物２棟，総柱建物が３棟である。建物床面積は８㎡～27㎡台，42㎡があり，小・中規模は明確には区分出来ないため小型建物は10㎡前後，中型建物は20㎡前後としておく。

井戸は12基検出され，全て道路際の建物に伴う。建物との共存が明確な９基の井戸の位置は建物の奥（西）側に位置するものが６基，横に位置するものが２基，手前に位置するものが１基で圧倒的に建物の奥側に位置する井戸が多い。

区画１（第32図）

最も南側に位置し，ＳＤ575・637・646・802の溝で囲まれ，南側はさらに調査区外に延びる。但し，ＳＤ802は南北溝とは直交せず，ＳＢ20に伴う溝の可能性が高い。また，ＳＤ575は道路や建物の方位は一致しない。建物と道路方位は比較的近い。

区画内の規模は地口23ｍ以上，奥行きは中央付近で16ｍ程度で，面積は約368㎡である。区画内の遺構には掘立柱建物６棟・柵１条・井戸３基，土坑，溝などがある。掘立柱建物は道路際に５棟が，また１間×１間の物置き程度の小規模建物１棟が奥に位置する。道路際の５棟の建物の内，３棟の建物は重複し，建物の方位は不揃いである。土坑は区画全体に散在し，溝は奥側に集中する傾向にあり，その中でも畠跡と推定する畝状遺構は奥北側の一角のみで，溝方向は南北方向である。

16号建物（ＳＢ16，第32・33図，図版36）

区画南側の道路からやや奥に下がった場所に位置する。３間×１間の規模をもつ，東西棟の側柱建物で，道路には梁を向ける。桁行は4.8ｍ，梁行1.7ｍ，床面積は8.16㎡を測る。柱穴の位置は比較的

揃っており，規模は直径20cm～30cm，深さは10cm～20cmと浅い。建物にはＳＫ593・754が伴う。

593号土坑（ＳＫ593，第33図）

建物内の中央に位置し，直径36cm，深さ８cmの土坑で埋土中に河原石の石敷がみられる。石敷の隙間の埋土は黒褐色砂質土で，炭化物は認められないが鍛冶関連遺構の可能性がある。

754号土坑（ＳＫ754，第33図）

建物内の南東隅に位置し，長径72cm，深さ12cmを測る土坑で，埋土には多く炭化物が混じる。

17号掘立柱建物（ＳＢ17，第33図，図版36）

16号建物の北側に位置する南北棟の側柱建物で，道路には桁を向ける。18号建物と重複関係にあり，17号建物に付属する井戸と18号建物の柱穴の重複関係から17号建物が新しいと推測する。柱穴の配置は不揃いであるが，２間×２間程度の建物であろう。桁行は3.4m，梁行2.9mで床面積は9.86m^{2}を測る。柱穴の規模は直径20cm～40cm，深さは８cm～20cmで，浅い柱穴が多い。付属遺構にはＳＥ765，ＳＫ764・842・782・815がある。

765号井戸（ＳＥ765，第33図）

建物外の南側横に位置する井戸で，掘形は直径約１m，深さ約80cmの規模をもつ。石組は全て抜き取られ，埋土の中位から上位に拳大から人頭大の河原石を充填して埋め戻されている。

764号土坑（ＳＫ764，第33図，図版37）

ＳＫ764は建物の西側柱列上に位置する石敷遺構で，鍛冶関連遺構の可能性をもつ。検出面が高く掘り込みは不明である。拳大の河原石を30cm×40cmの長方形の範囲に平坦に敷き詰める。

842号土坑（ＳＫ842，第33図）

建物内の南側にある長楕円形の土坑で，長径1.3m，短径68cm，深さ30cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで最上面に石敷がみられる。埋土には僅かに炭化物が混じる。

782号土坑（ＳＫ782，第33図）

建物内の南東隅に位置し，擂鉢状に掘り込まれた深さ24cmの土坑である。埋土の大部分は灰黄褐色砂質シルトで炭化物を僅かに含む。

815号土坑（ＳＫ815，第33図）

建物内の北側中央部に位置する小型の土坑で，深さは５cmと浅い。埋土には炭化物が混じる。

18号建物（ＳＢ18，第34図，図版36）

建物は17号建物と同様に道路からやや奥に下がった位置にある。19号建物とも重複関係にあるが新旧関係は不明である。建物は２間×１間の南北棟の側柱建物で，桁行の柱間は３mを越える。桁行6.2m，梁行2.9m，床面積は17.98m^{2}で中規模程度の建物である。北側の梁行の柱列は桁行と直交せず歪でいる。また，南東端の柱穴はＳＥ765に切られる。柱穴の規模は長径30cm～50cm，深さは５cm～20cmと全般的に浅い。付属遺構にはＳＫ814・817・829・770がある。

814号土坑（ＳＫ814，第34図）

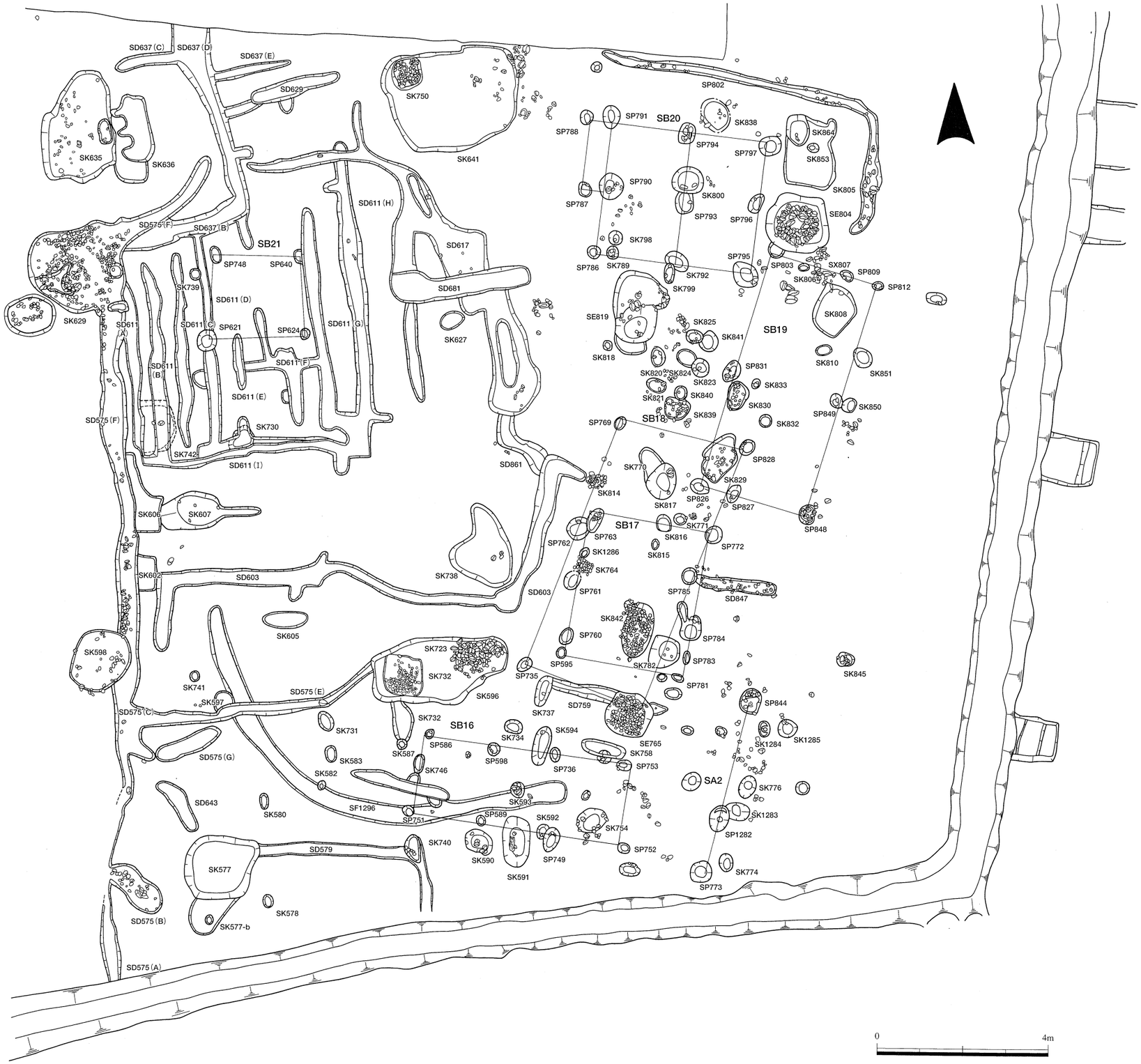
西側柱列上に位置する石敷遺構で，鍛冶関連遺構の可能性をもつ。検出面が高く掘り込みは不明で，拳大の河原石を円形に並べる。石の隙間の埋土は褐灰色砂質シルトで炭化物が混じる。

829号土坑（ＳＫ829，第34図）

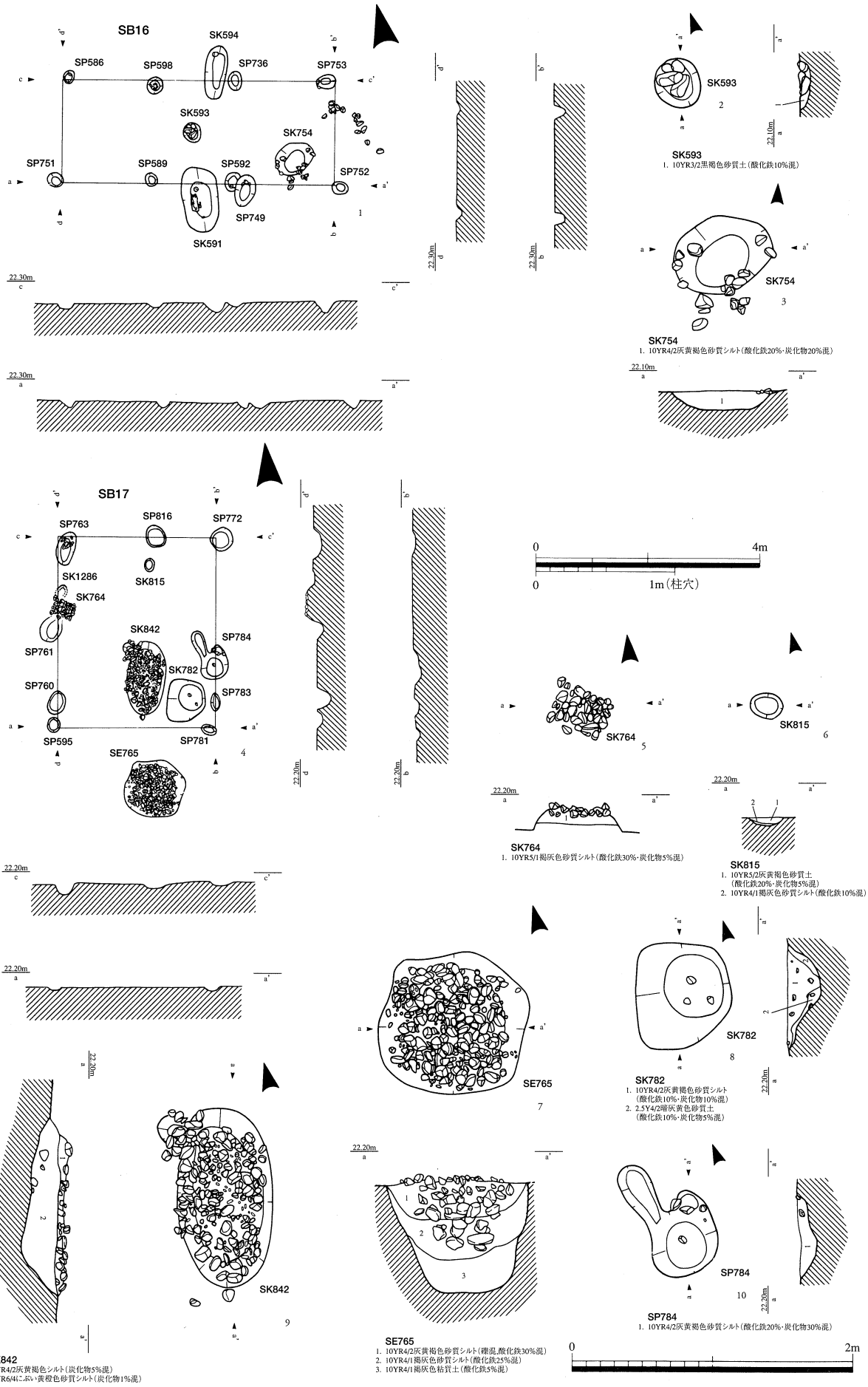
建物内の北東隅に位置する不整形の土坑で，深さは5cmと浅い。底面は平坦で，埋土に石が混じる。

817・770号土坑（ＳＫ817・770，第34図）

建物内の北側中央に位置し重複する。新旧関係はＳＫ770が新しい。ＳＫ770の深さは５cmと浅く，

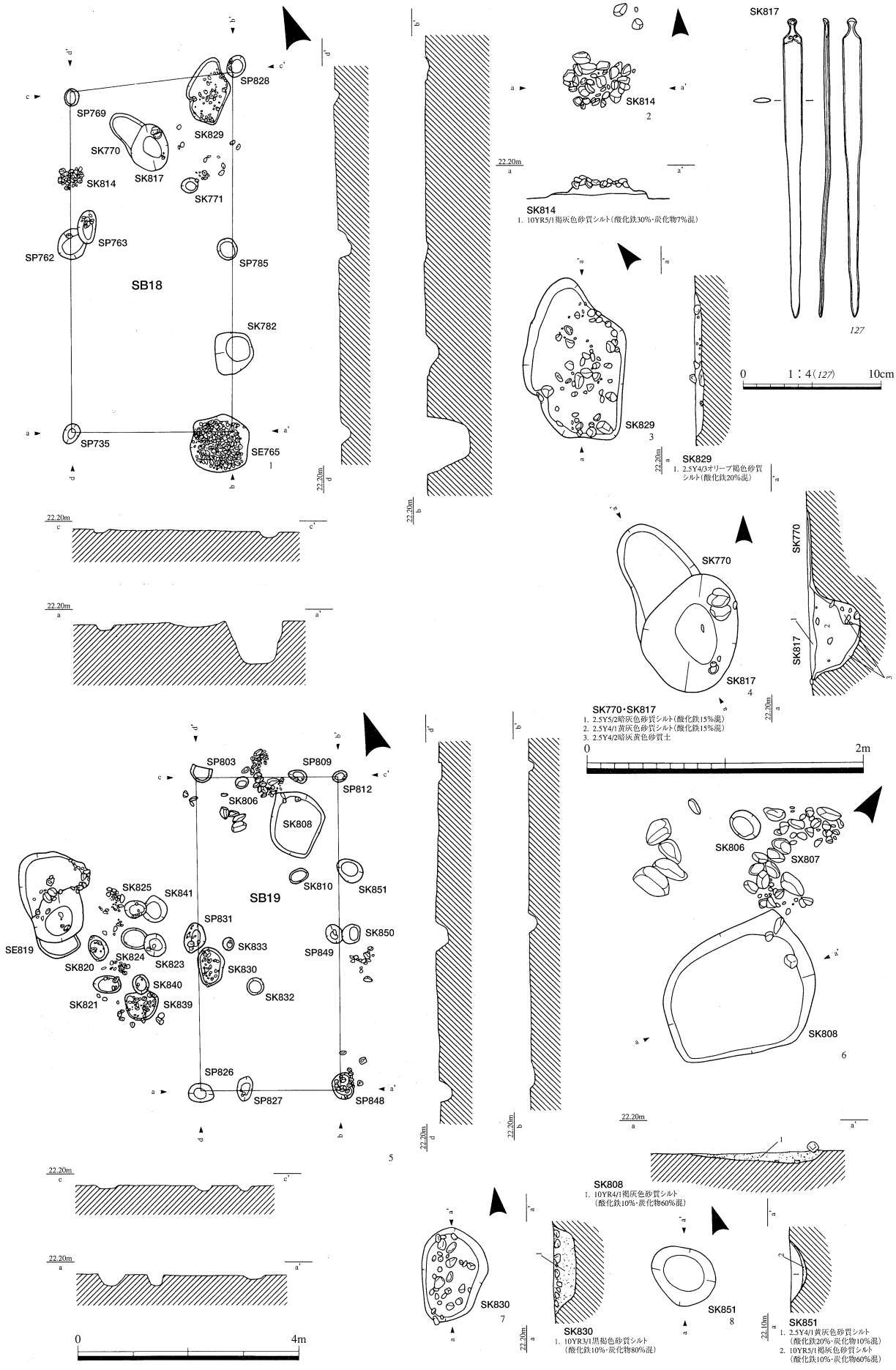


第32図　遺構実測図（中世）
SB16～SB21・SA2



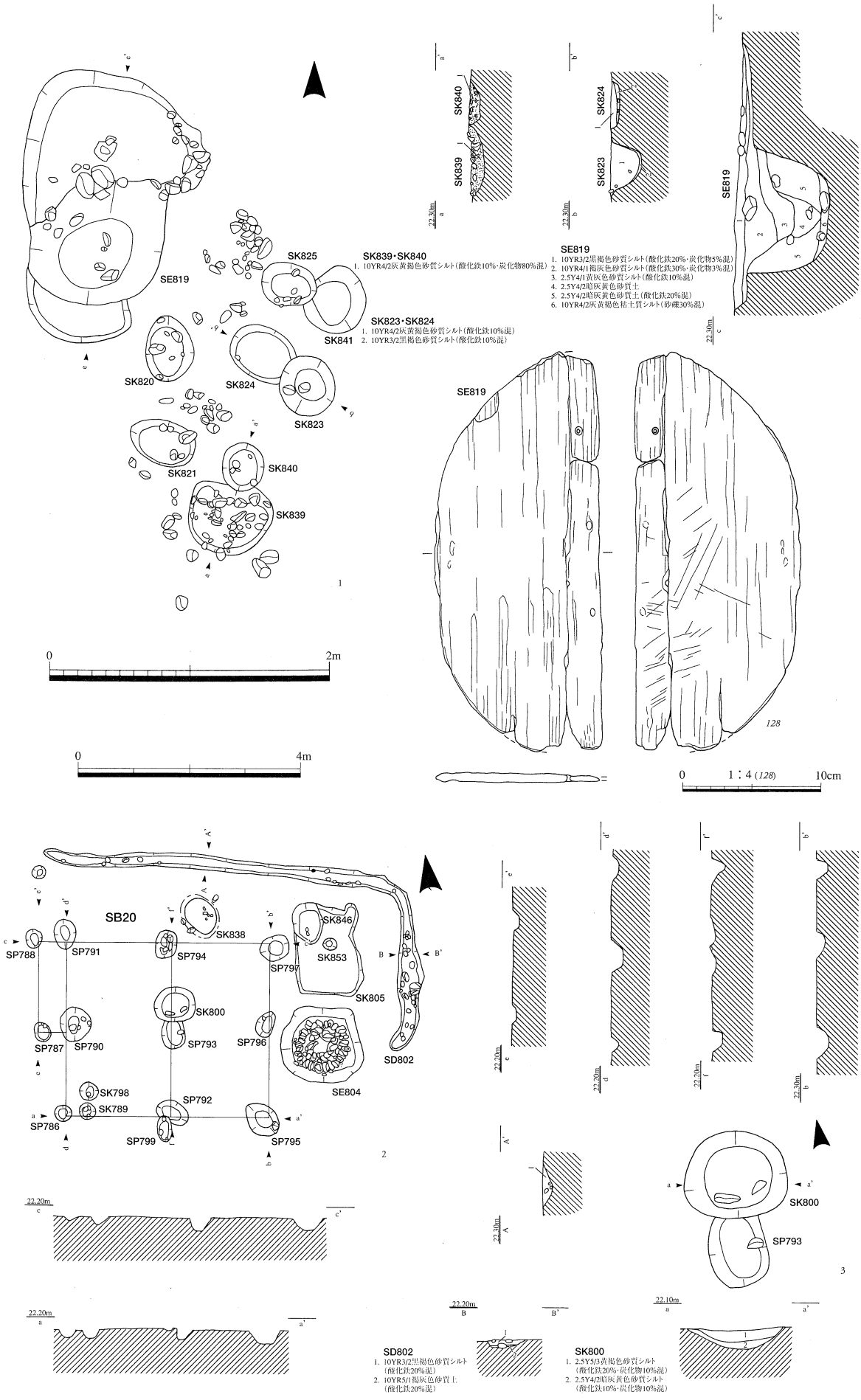
第33図　遺構実測図(中世)

1. SB16　2. SK593　3. SK754　4. SB17　5. SK764　6. SK815　7. SE765　8. SK782　9. SK842　10. SP784



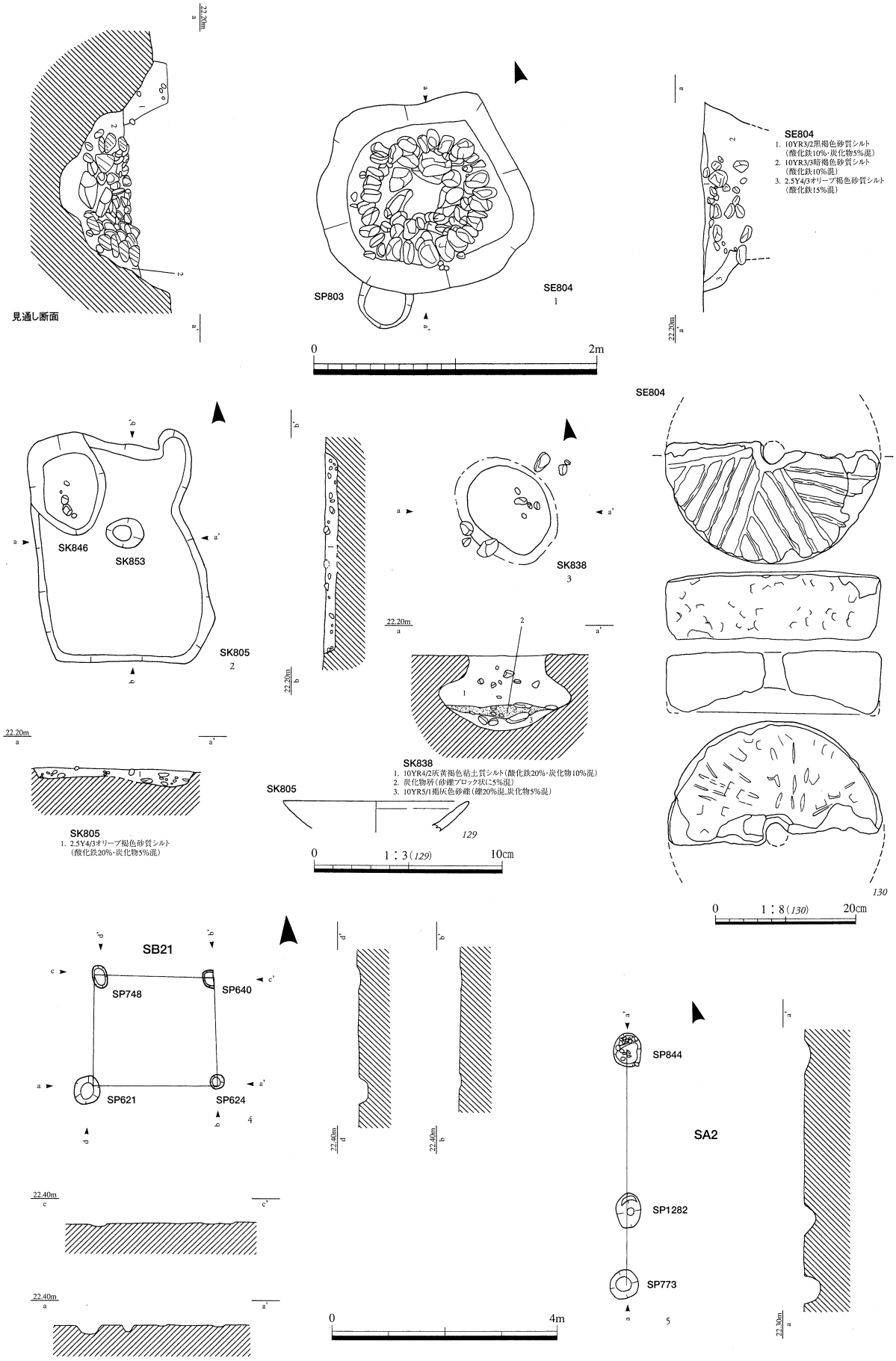
第34図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB18　2. SK814　3. SK829　4. SK770・SK817　5. SB19　6. SK808　7. SK830　8. SK851
SK817（*127*）



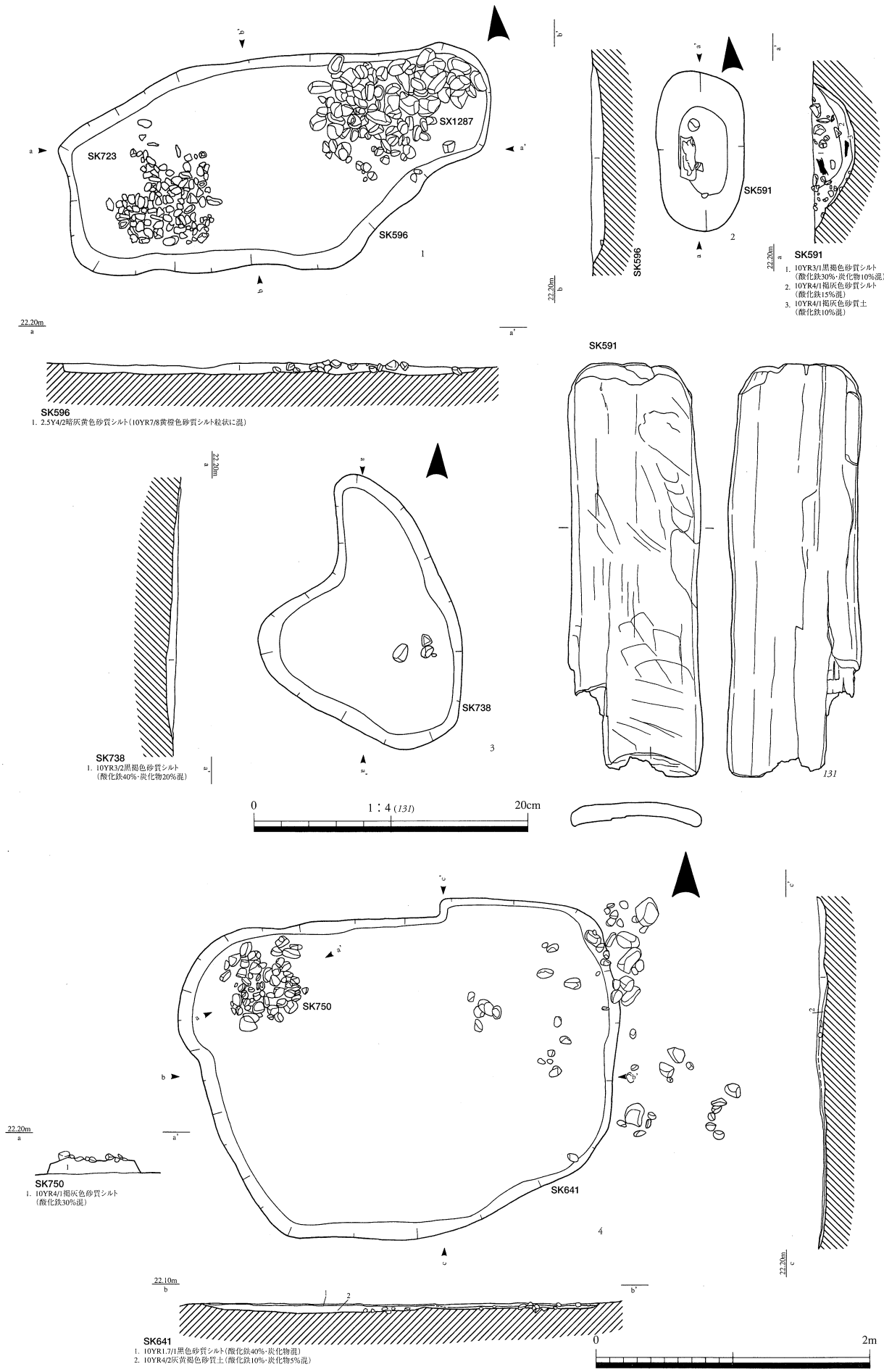
第35図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SE819・SK823・SK824・SK839・SK840　2. SB20・SD802　3. SK800
SE819*(128)*



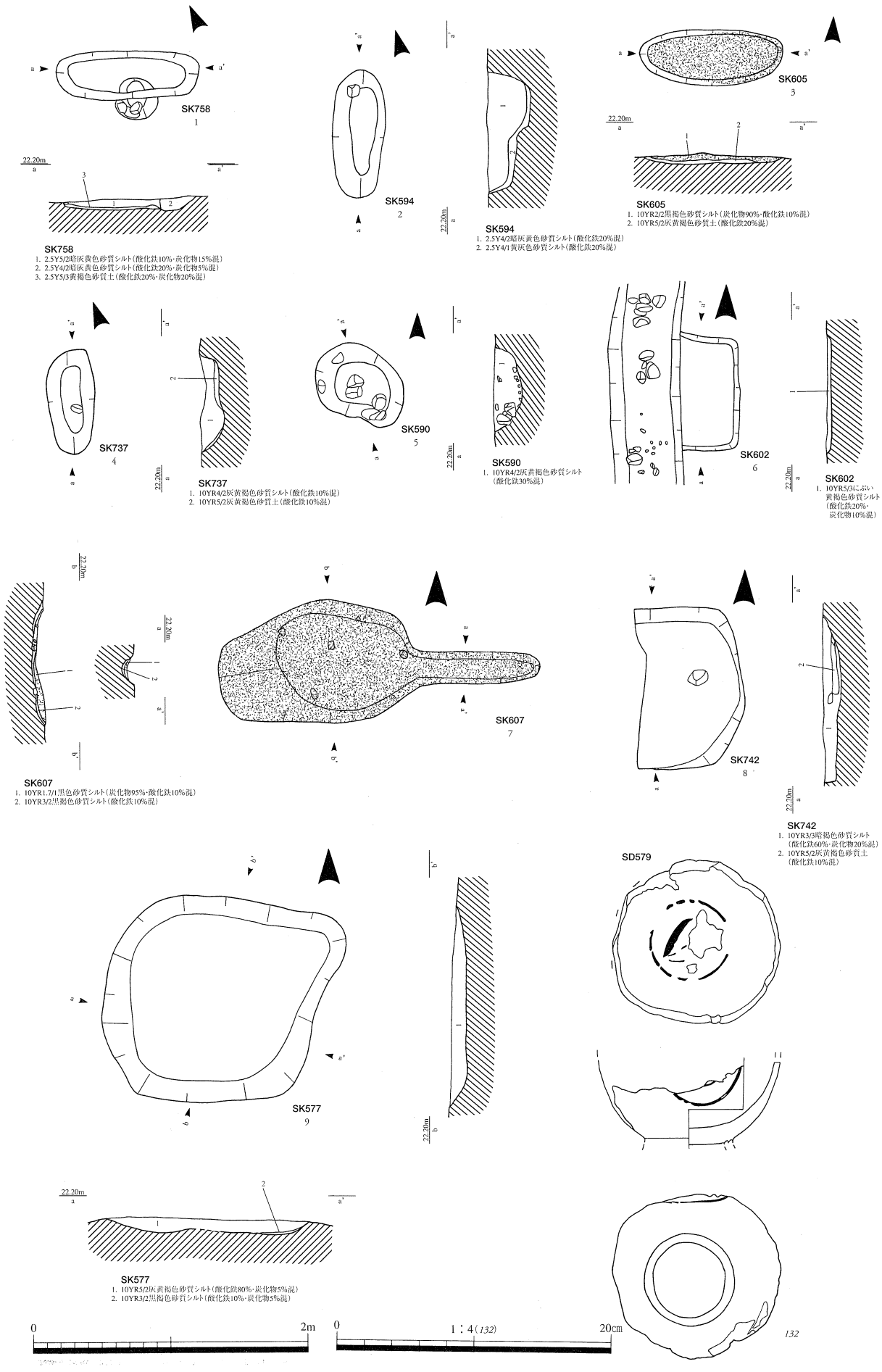
第36図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SE804　2. SK805　3. SK838　4. SB21　5. SA2
SK805（*129*）　SE804（*130*）



第37図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK596　2. SK591　3. SK738　4. SK641・SK750
SK591(*131*)



第38図　遺構・遺物実測図(中世)

1. SK758　2. SK594　3. SK605　4. SK737　5. SK590　6. SK602　7. SK607　8. SK742　9. SK577
SD579(*132*)

底面は平坦である。ＳＫ817は長径78cm，深さ38cmの比較的掘り込みの深い土坑である。

出土遺物の*127*は銅製の笄で全長21.7cm，幅1.3cm，厚さ３㎜を測る。頂部には耳掻きが付き，肩に近い部分の片方に線彫り文様がみられる。

19号建物（ＳＢ19，第34図，図版36・37）

20号建物の南側に隣接する２間×２間の南北棟の側柱建物である。桁行5.6m，梁行2.5m，床面積は14㎡で小規模な建物である。梁の柱穴の位置が不規則で梁行１間の可能性もある。桁行の柱穴の配置は比較的揃う。柱穴の形状は略円形で，規模は26cm～50cm，深さは６cm～20cmで浅い柱穴が多い。付属遺構にはＳＫ808・830・851，ＳＸ807，ＳＥ819がある。ＳＥ819周辺の土坑も建物に伴う可能性があるが明確でない。

808号土坑（ＳＫ808，第34図）

建物内の北側に位置し，石敷の一部は梁柱列外に延びる。ＳＫ808は長径1.1mの隅丸方形の土坑で，深さは10cmと浅く，底面は平坦である。埋土には炭化物が多く混じる。石敷はＳＫ808埋土上にもみられ，拳大から30cm代の大型の河原石が混ざるが，纏まりは明確でない。何らかの作業台の可能性がある。

830号土坑（ＳＫ830，第34図）

建物内の西側桁柱列に接する。長径68cm，深さ16cmの楕円形の土坑で，埋土上面には拳大の河原石を疎らに敷き詰める。埋土は黒褐色砂質シルトで炭化物が多く混入する。

851号土坑（ＳＫ851，第34図）

東側桁行柱列に接した建物外に位置する。直径48cmの円形の土坑で，擂鉢状に掘り込まれ，深さは12cmを測る。底面には薄い炭化物層がみられる。

819号井戸（ＳＥ819，第35図）

建物の奥側約2mに位置し，浅い土坑と重複し井戸が古い。掘形は不整円形で長径192cm，深さ58cmを測る。石組は全て抜き取られ埋め戻されている。出土遺物には，曲物底板（*128*），加工材がある。

*128*は半裁された曲物底板で，裁断側の縁近くに３箇所の穿孔がみられる。庖丁傷や被熱痕を残す。

20号掘立柱建物（ＳＢ20，第35図，図版36・37）

区画の最北端の道路際に位置する建物で，北側と東側の道路側に溝が巡る。建物は２間×２間の総柱建物で，西側に１間×１間の狭い張り出しを設ける。桁行3.5m，梁行3.2mの東西方向に僅かに長い東西棟で，梁行は張り出し部を含めると4.2mになる。床面積は12.22㎡である。柱穴の配置は整っているが，規模には大小がみられる。柱穴は形状は略円形で，長径は30cm～70cm，深さは10cm～25cmで比較的深く掘り込まれたものが多い。付属遺構にはＳＫ800・805・838，ＳＥ804，ＳＤ802がある。

800号土坑（ＳＫ800，第35図）

建物内の中央に位置する擂鉢状に掘り込まれた土坑で，埋土はレンズ状に暗灰黄・黄褐色砂質シルトが堆積する。出土遺物には瀬戸美濃の小破片，加工材がある。

805号土坑（ＳＫ805，第36図）

建物の東側に隣接して配置された略方形の土坑で，長径1.54m，短径1.1m，深さ８cmを測る。底面はほぼ平坦で，２箇所に小型土坑が掘り込まれる。埋土は小礫が混じるオリーブ褐色砂質シルトの単層で僅かに炭化物が混じる。出土遺物には中世土師器がある。

*129*は中世土師器皿の小破片で，口径は9.9cmの小型法量である。胎土には海綿骨針を含む。

838号土坑（ＳＫ838，第36図，図版37）

建物の北側に位置する楕円形のフラスコ状土坑で，深さは53cmを測る。底面は擂鉢状に掘り込まれ，埋土下部に黒色炭化物層が水平堆積する。出土遺物に金属製品がある。

804号井戸（ＳＥ804，第36図，図版37）

建物の東側に位置する石組井戸で，ＳＫ805と並置される。ＳＢ19の柱穴と重複するが新旧関係は不明である。石組は遺存状態は悪く，内側にずり落ちている。また，上部の石組は抜き取られ，礫混じりの暗褐色砂質シルト層で埋め戻されている。井戸底までは78cmを測る。出土遺物には，石臼，小札・漆器椀の小破片，加工棒，加工板がある。

*130*は井戸内に遺棄された凝灰角礫岩製の石臼（下臼）で，約半分が遺存する。

802号溝（ＳＤ802，第35図）

建物の北側と東側に逆「Ｌ」字状に巡る溝で，幅約30cm，深さ約５cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトや褐灰砂質土で，拳大の河原石が混入する。

21号掘立柱建物（ＳＢ21，第36図，図版38）

区画の北西側に位置する１間×１間の倉庫的小規模建物である。柱穴は溝と重複するが新旧関係は不明である。掘り込みの浅い柱穴が多い。

２号柵（ＳＡ2，第36図）

ＳＢ16の東側の道路際に位置し，ＳＢ19の桁方向に柱筋を揃える。柱間は不揃いである。

596号土坑（ＳＫ596，第37図）

ＳＫ596はＳＢ16の北西側に位置する不整形の大型土坑で，土坑の東西両端の埋土内にＳＤ723・1287が構築される。新旧関係は明確でなく，ＳＫ596に付随する石敷の可能性が高い。石敷は拳大から人頭大の河原石を用いる。ＳＫ596は深さ10cmの浅い土坑で，底面は平坦である。

591号土坑（ＳＫ591，第37図）

ＳＢ16建物柱列上に重複する楕円形の土坑で，長径は1.1m，深さは32cmを測る。埋土は褐灰・黒褐色砂質シルトがレンズ状に堆積し，河原石と炭化物が混入する。出土遺物には加工板がある。

*131*は板状の加工材で両先端は磨滅，欠失して長さは明確でないが，厚さは１cm，幅は9.5cmである。僅かに内側に弧を描くことから桶の側板かも知れない。

641・750号土坑（ＳＫ641・750，第37図，図版38）

20号建物の西側に位置する不整形の大型土坑で，掘り込みは13cmと浅く，底面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐・黒色砂質シルトで炭化物が僅かに混じる。また，東側の埋土中や土坑外にも石敷が疎らに広がる。ＳＫ750は土坑北西隅の埋土層中に石敷された遺構で，検出面が高く掘り込みは確認できない。鍛冶関連遺構の可能性がある。

605号土坑（ＳＫ605，第38図）

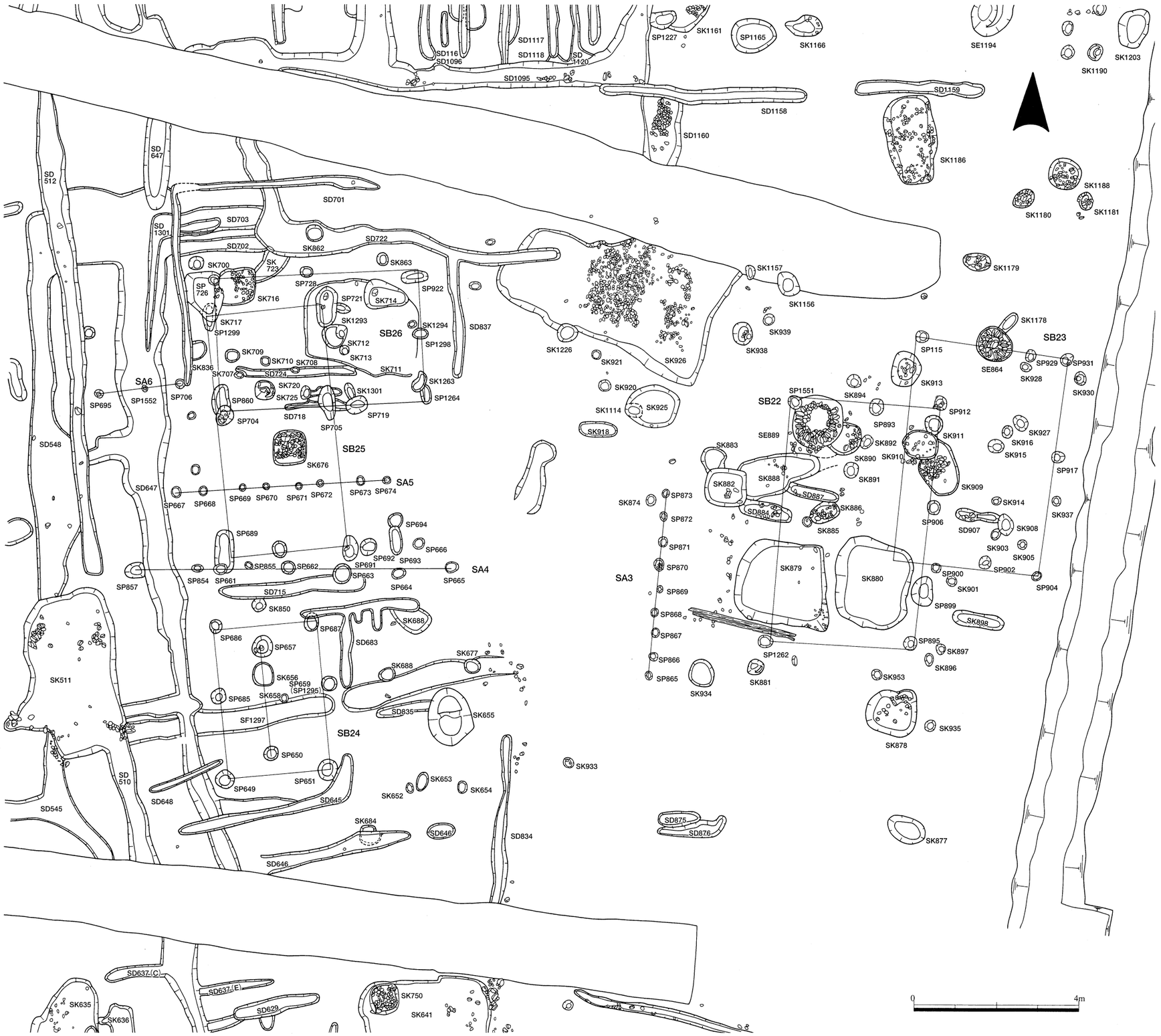
区画の中央奥に単独に構築された長楕円形の土坑である。長径は1.1m，深さは10cmと浅く，底面は平坦である。埋土の大半は炭化物層である。

607号土坑（ＳＫ607，第38図，図版38）

区画の中央奥に単独に構築された土坑である。形状は不整円形土坑に溝状の突出部が付く。掘り込みは浅く，埋土は炭化物層である。出土遺物にはガラス滓がある。

577号土坑（ＳＫ577，第38図）

区画の南側の奥に単独に構築された略方形の土坑である。掘り込みは12cmと浅く，底面はほぼ平坦



第39図　遺構実測図（中世）
SB22～SB26・SA3～SA6

である。埋土は灰黄褐色砂質シルトのほぼ単層である。

579号溝（ＳＤ579，第32・38図）

ＳＫ577と重複して逆「Ｌ」字状に東側に延びる浅い溝である。出土遺物の*132*は小ぶりの漆器椀で，口縁部と高台部を欠く。全体に黒漆を塗り，体部外面と見込みに赤色漆で文様を描く。円文の中に文様が描がかれているが剥落が著しく明確でない。

区画２（第39図）

区画１の北側に隣接し，ＳＤ646・510・512・1095・1158・1159で三方を区画する。奥の区画溝ＳＤ510・512の東西両脇に並行して延びるＳＤ545・548やＳＤ647があり，幾度かの改変，改築がある。また，北側のＳＤ1095・1158・1159とＳＤ722に挟まれた区域は遺構は疎らであり，一時期，東西に横断する幅3.5m程度の脇道が構築された可能性が高い。

区画の地口は約18.5m，奥行は中央部で約23mを測り，面積は426㎡程度になる。遺構の内訳は，掘立柱建物５棟，柵４条，井戸３基，土坑，溝がある。建物は道路際に重複して２棟が，また，奥北側に重複する２棟を含めて３棟が構築される。建物の方位は道路側は道路方位に近似し，また，奥の建物は区画溝の方位に近く，両建物群の方位は異なる。さらに，両建物群の間の中央部は空白域で遺構は疎らである。

646号溝（ＳＤ646，第44図）

東西に延びる南側区画溝で，延長3.6mを確認した。幅は30cm～50cmで，掘り込みは２cmと浅い。出土遺物には染付がある。

647号溝（ＳＤ647，第44・47図）

南北に延びる区画溝でＳＤ510・512と重複し古い。溝の幅は一定でなく，35cm～120cm程度で南北両端は途切れる。深さは８cmと浅く，底面は平坦である。出土遺物には石臼，石鉢，漆器，木製品がある。

*150*は小ぶりの漆器椀で口縁部を欠く。体部の内外面に黒漆が塗られるが剥落が著しく遺存状態が悪い。内面には残滓付着物がみられる。分析の結果，漆紙の可能性が高く漆液容器になる。*151*は曲物の底板で両面に部分的に黒漆が付着し，被熱痕を残す。

1095・1158号溝（ＳＤ1095・1158，第59図）

東西方向に延びる北側区画溝で，ＳＤ1095と1158は重複し，1158が新しい。また，1158と1159は途中で途切れるが本来は同一の遺構であろう。ＳＤ1158は幅30cm前後，深さは８cmを測る。ＳＤ1095は道路２の東側建物群を区画するＳＤ513に連なる溝で，幅は40cm～65cm，深さは17cmである。

22号掘立柱建物（ＳＢ22，第39・40図，図版38・39）

建物は道路際からやや奥に下がった場所に位置する。未検出の柱穴が多いが，３間×２間程度の南北棟の側柱建物と推定され，桁行5.8m，梁行3.5mを測り，床面積は約20.3㎡の中規模建物である。

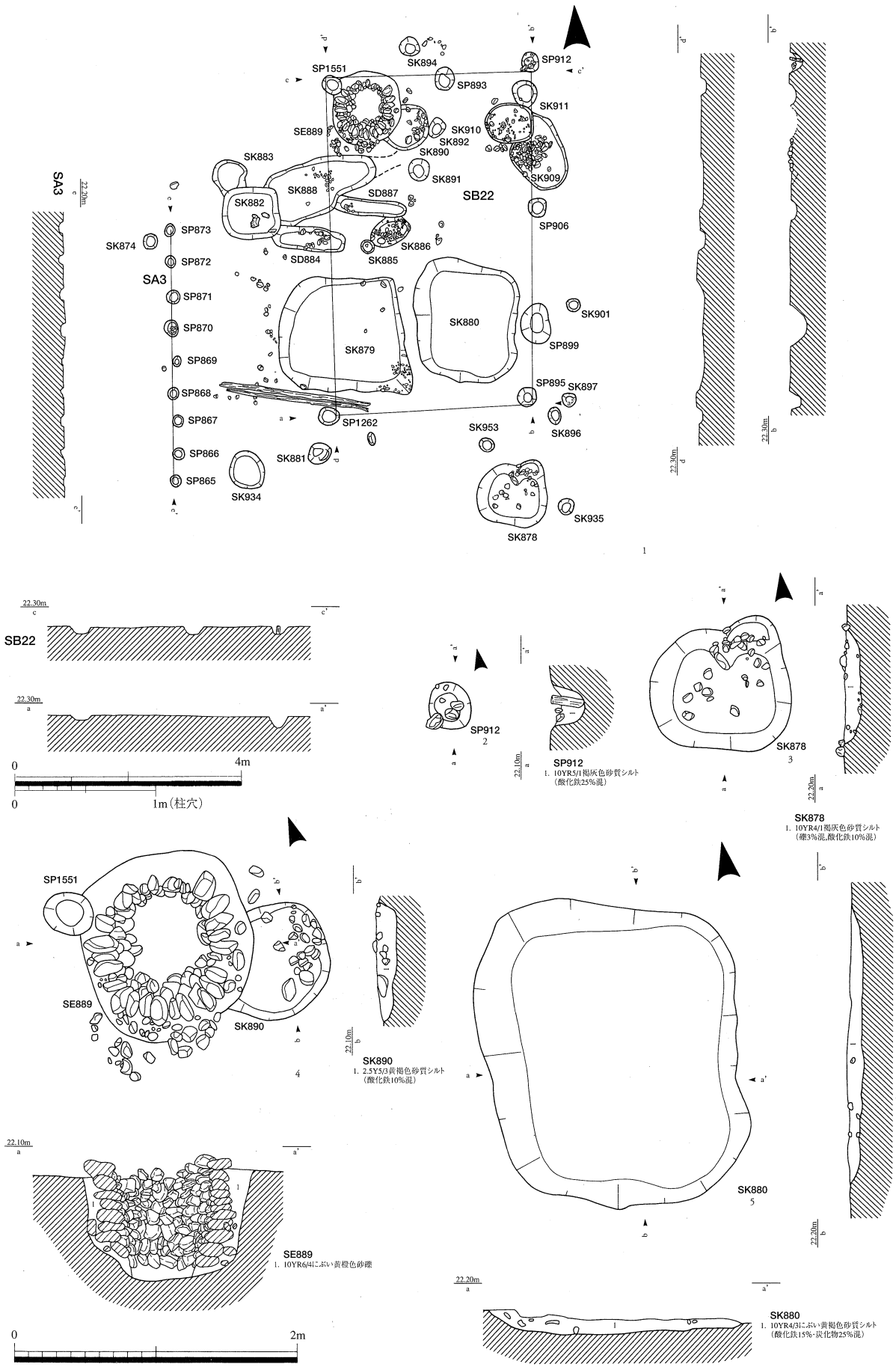
柱穴は略円形で直径は30cm台と小さく，深さは10cm～28cmで浅いものが多い。また，北東隅の柱穴ＳＰ912には直径約18cmの柱根が遺存する。

付属遺構にはＳＥ889，ＳＫ878・880，ＳＡ３などがある。

889号井戸（ＳＥ889，第40・42図，図版39）

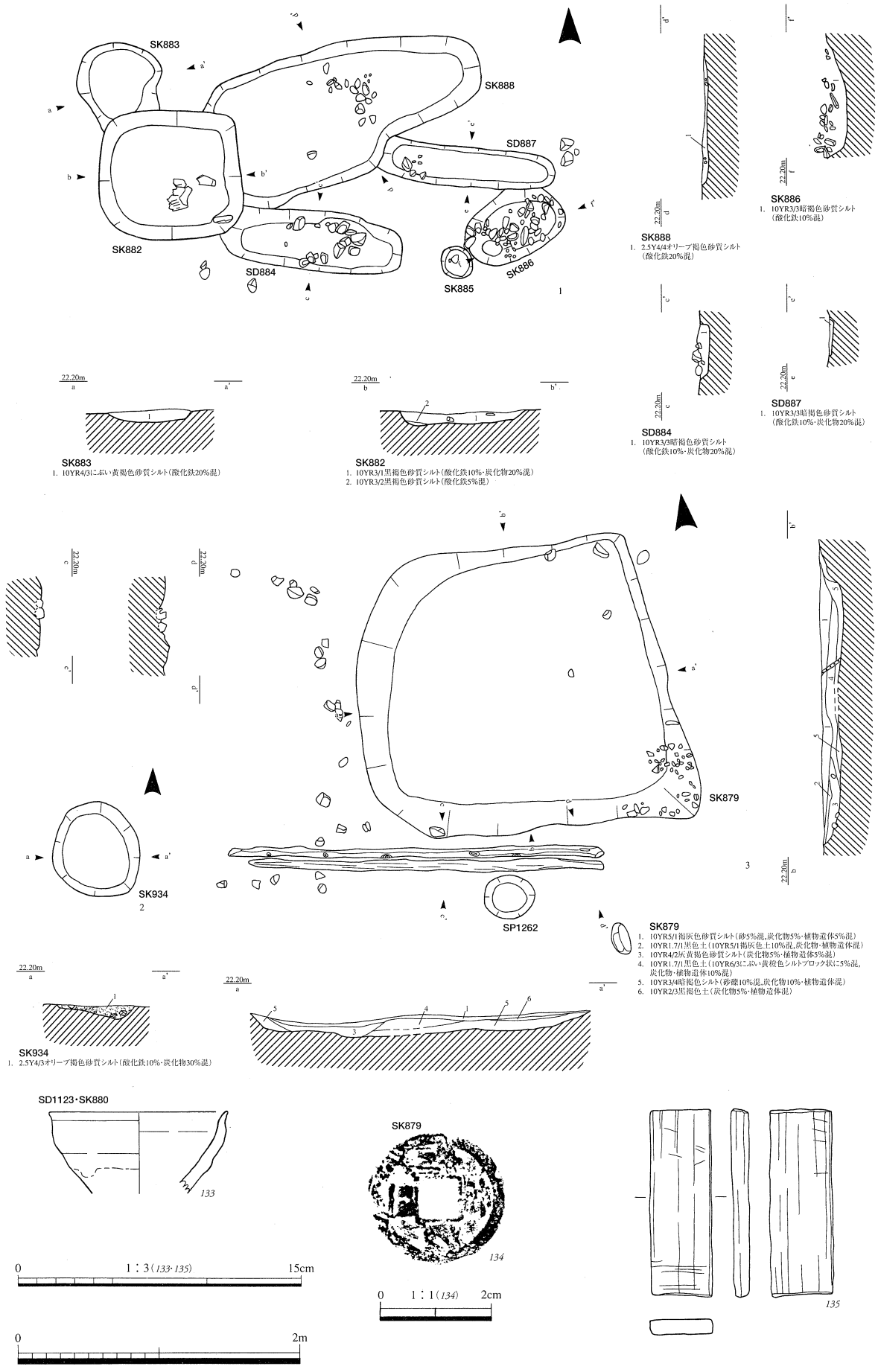
建物内の北西隅に位置する石組井戸で，石組の遺存状態は良好である。人頭大の河原石を用い，直径約60cm，高さ84cm程度まで組む。出土遺物には石臼，加工棒がある。

石臼は２個体で，*144*は凝灰角礫岩製の上臼で，ＳＫ2403出土破片と接合した。４分の３程度が遺



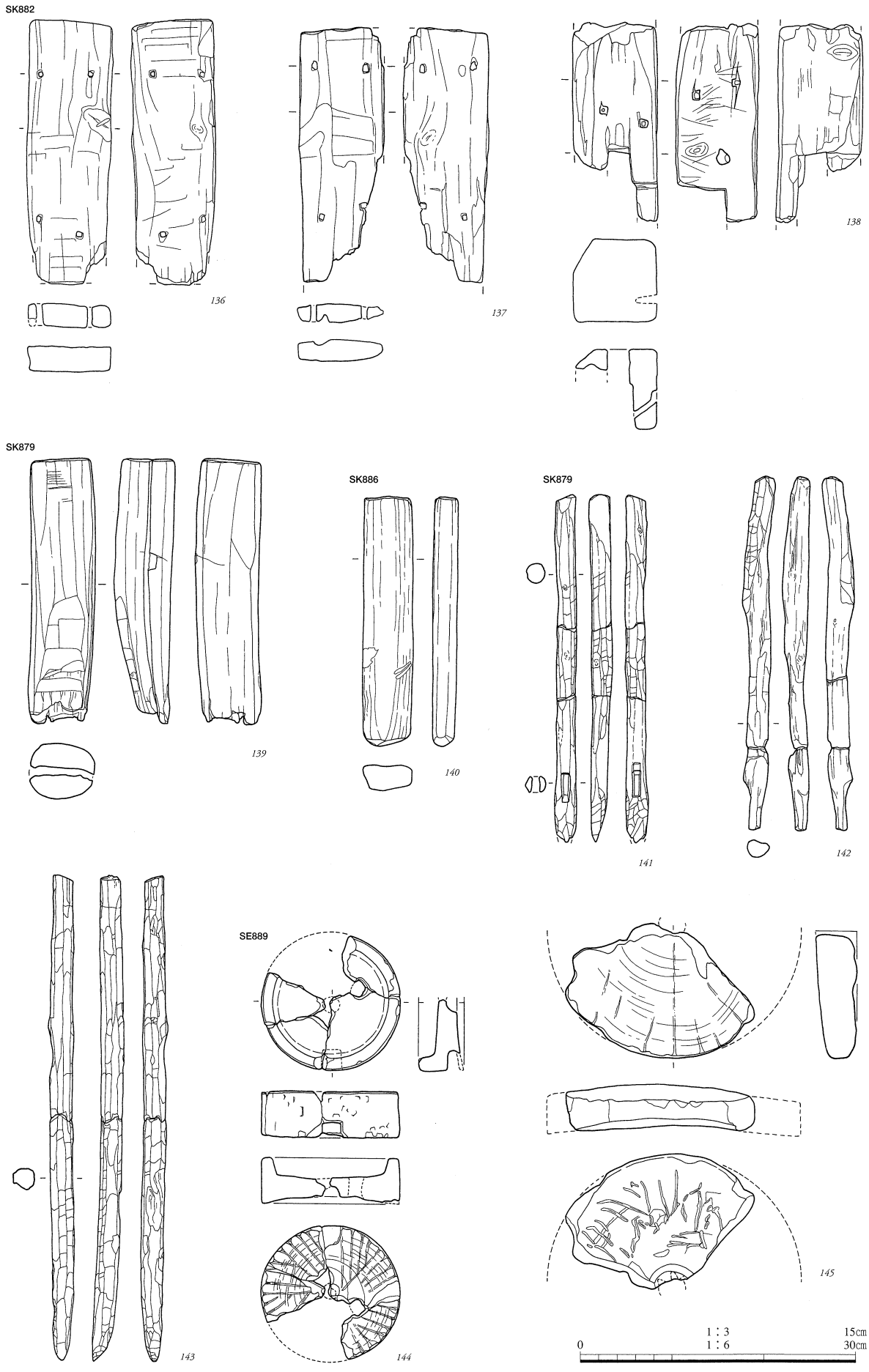
第40図　遺構実測図（中世）

1. SB22・SA3　2. SP912　3. SK878　4. SE889・SK890　5. SK880



第41図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK882・SK883・SD884・SK886・SD887・SK888　2. SK934　3. SK879
SD1123・SK880（*133*）　SK879（*134*・*135*）



第42図　遺物実測図（中世）　（*136～140*　1/3，*141～145*　1/6）
SK882（*136～138*）　SK879（*139・141～143*）　SK886（*140*）　SE889（*144・145*）

存し，直径は30.6cmを測る。*145*は擬灰角礫岩製の下臼で遺存状況は良くない。

879号土坑（ＳＫ879，第41・42図，図版39）

ＳＫ880と共に建物内の南側に並置され，一部は西側建物外に広がる。形状は略方形で長径は2.2m，深さは16cmを測り，底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色土・暗褐色土・灰黄褐色砂質土・褐灰色土が薄く水平堆積し，炭化物が混じる。また，これらの埋土は噴砂によって切られる。

出土遺物には銅銭，加工板，柱，建築材，自然木，ガラス滓などがある。土坑南側に並行して転がし根太２本がみられるが，遺構との関連は明確でない。

*134*は銅銭であるが銭貨名は不明。*135*は長さ10cm，厚さ７㎜の板でスギ材である。*139*は二葉松類の杭で先端には一方向からの切れ込みを入れる。*141*は長方形のホゾ穴をもつ建築材で杭に転用されている。材質は二葉松類。*142*・*143*とも二葉松類の杭で，*143*の長さは159cmを測る。

880号土坑（ＳＫ880，第40・41図，図版39）

建物内の南側に位置する隅丸方形の土坑で，長径2.1m，深さ16cmを測る。底面は平坦で，埋土は黄褐色砂質シルトの単層で炭化物が多く混じる。出土遺物には瀬戸美濃，中世土師器がある。

*133*は口径9.4cmの小型の天目茶碗で高台部を欠く。黒褐色の鉄釉がかかり，下半外面には錆釉を塗る。断面は漆接ぎが施される。藤沢大窯編年のⅡ～Ⅲ期頃の遺物[注1]であろう。

882・888号土坑（ＳＫ882・888，第41図）

ＳＫ882は建物の西側桁柱列の外側に隣接し，ＳＫ883・884・888と重複し新しい。径１mの方形の土坑で，埋土の黒褐色砂質シルトに炭化物が多く混じる。出土遺物には加工板がある。

136・*137*は長さ14.3cm，幅4.5cm，厚さ1.2cm～1.4cmの板材である。同じ位置に釘穴が４箇所認められることから２枚重ねて打ち付けられたのであろう。*138*は方形の柱で長方形のホゾ穴や釘跡を残す。ＳＫ888は不整長楕円形の浅い土坑で，中央部付近に疎らに川原石が混じる。

886号土坑（ＳＫ886，第41・42図）

建物内中央部のやや西側に位置する長楕円形の小型土坑である。埋土は暗褐色砂質シルトの単層で拳大の河原石が多く混じる。出土遺物には中世土師器，木製柄がある。

*140*は木製柄と推定され，長さは13.4cm，厚みは2.8cmを測る。角は丸味をもつ。

878号土坑（ＳＫ878，第40図）

建物の南側に隣接する略方形の土坑で，長径1.24m，深さ17cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルト。

３号柵（ＳＡ３，第40図）

建物の西側約2.9mに位置する柵で，建物と方位を揃える。柵柱穴の間隔は約50cmで９個並び，全長は4.5mを測る。

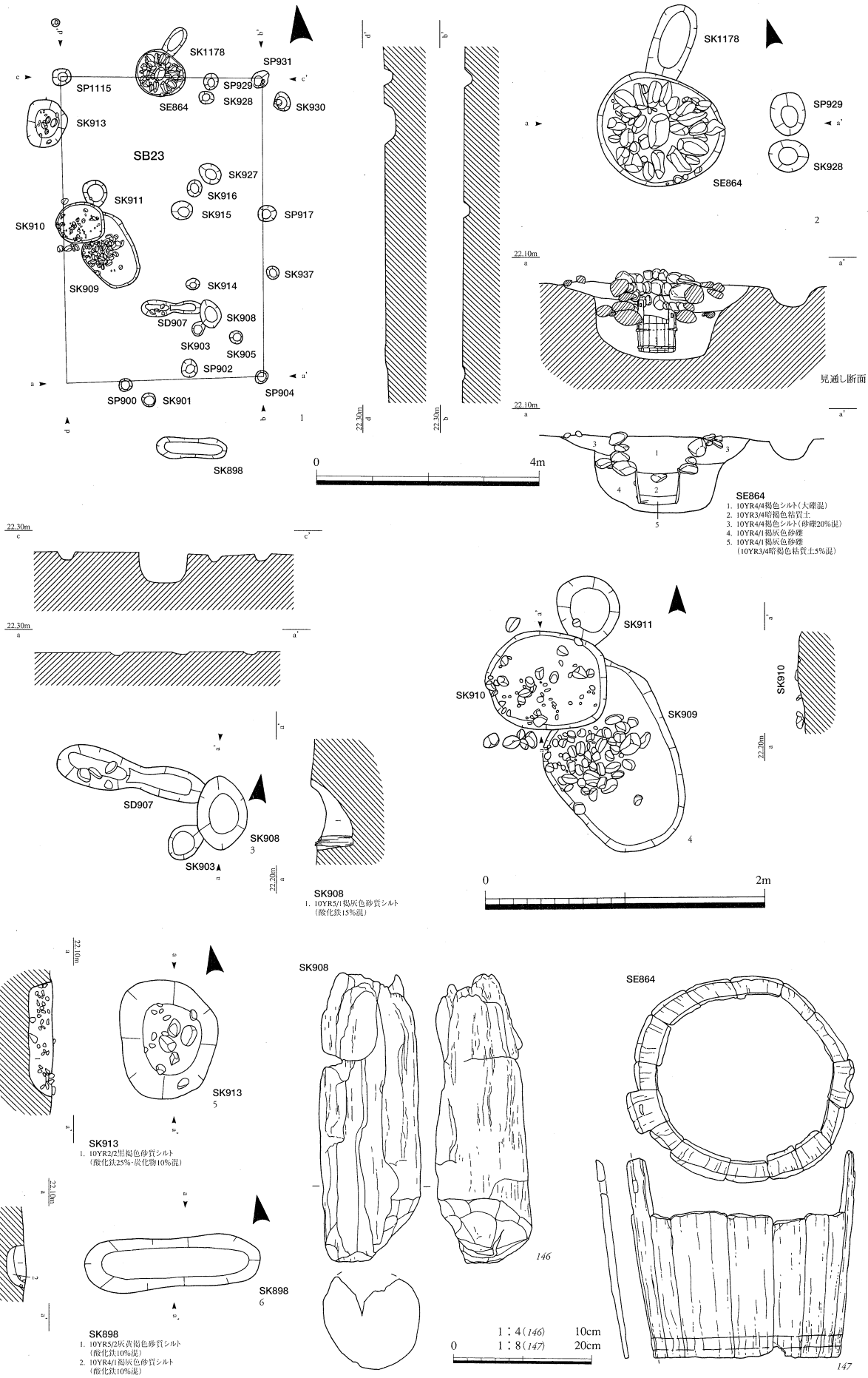
23号掘立柱建物（ＳＢ23，第43図，図版38・39）

22号建物と重複するが新旧関係は明確でない。但し，建物に伴う井戸が埋め戻されていることから22号建物より古いと推定する。

建物は道路際に位置し，柱穴に配置は不揃いであるが２間×２間程度の南北棟建物である。桁行は5.4m，梁行3.6m，床面積は19.44㎡の中規模程度の側柱建物である。柱穴の規模は30cm程度と小さく，掘り込みは４cm～16cmと浅い。また，建物内の南側に位置するＳＫ908には柱根が遺存しており，新たな建物が予想される。付属遺構にはＳＥ864，ＳＫ909・910がある。

864号井戸（ＳＥ864，第43図，図版39）

建物の北側梁柱列上に位置する石組井戸である。形状は円形を呈し，石組の直径は46cm，底までの



第43図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB23　2. SE864・SP929　3. SK908　4. SK910　5. SK913　6. SK898
SK908（*146*）　SE864（*147*）

深さは58cmと小型の井戸である。水溜には桶が転用され，その上部に３～４段の石を組む。

*147*は手桶で底板，取っ手を外して転用される。側板15枚を組み合わせ，底近くの外面にタガ痕跡を残す。底径は27cmを測り，ヒノキ科の材を使用する。

909・910号土坑（ＳＫ909・910，第43図）

建物内の中央西側に位置する。両土坑は掘り込みが浅く，同一遺構の可能性がある。ＳＫ909の中央部に拳大の石敷がみられ，さらに石敷はＳＫ910から遺構外にも疎らに広がる。何らかの作業場や鍛冶関連遺構が想定される。

24号建物（ＳＢ24，第39・44図，図版39・40）

区画の奥南側に位置する。２間×１間の南北棟の側柱建物で，梁行の中央内側に２本の棟持柱をもつ。桁行は3.7m，梁行は2.4m，床面積は8.88m²の小型建物である。柱穴の配置は比較的揃い，掘り込みは10cm～18cmと全体に浅い。棟持柱は側柱とほぼ同様の規模をもつ。付属遺構にはＳＫ655・656，ＳＡ４がある。

655号土坑（ＳＫ655，第44図）

建物の東側に位置する。形状は略楕円形を呈し，長径135cm，深さ32cmを測る。埋土は灰色砂層，灰色砂質シルト，黄灰砂質土が水平堆積する。

４号柵（ＳＡ４，第44図）

24号建物の北側約1.3mに位置する東西方向の柵で，大略１m間隔で柵柱穴が並ぶ。建物方位と柵方位は僅かに異なる。また，柵列に並行して小型柱穴がみられ，その内のＳＰ855には柱根が残り，新たな遺構が想定される。

25号建物（ＳＢ25，第39・45図，図版39・40）

区画の奥北側に位置し，ＳＢ26建物と重複する。新旧関係は26号建物が新しい。２間×１間の南北棟の側柱建物である。桁行は5.9m，梁行は2.8m，床面積は16.52m²の中規模建物である。柱穴の配置は比較的揃い，形状は楕円形のいわゆる楕円柱穴で，長径65cm～100cm，深さは20cm～30cmと比較的深い。付属遺構にはＳＫ676・725，ＳＤ701がある。また，ＳＤ715は付属遺構の可能性がある。

676号土坑（ＳＫ676，第45図，図版40）

建物内のほぼ中央に位置する。直径84cmの隅丸方形の土坑で，底面に拳大の河原石を敷き詰める。石敷の隙間から上面にかけて僅かに炭化物が混じる灰黄褐色砂質シルト層が入り面を形成する。この面の中央部に16cmの円形焼土面が認められ，鍛冶関連施設が想定される。出土遺物にはガラス滓の細片がある。

725号土坑（ＳＫ725，第45図）

建物内の北側中央に位置する小型土坑で，擂鉢状に掘り込まれ，深さは18cmを測る。

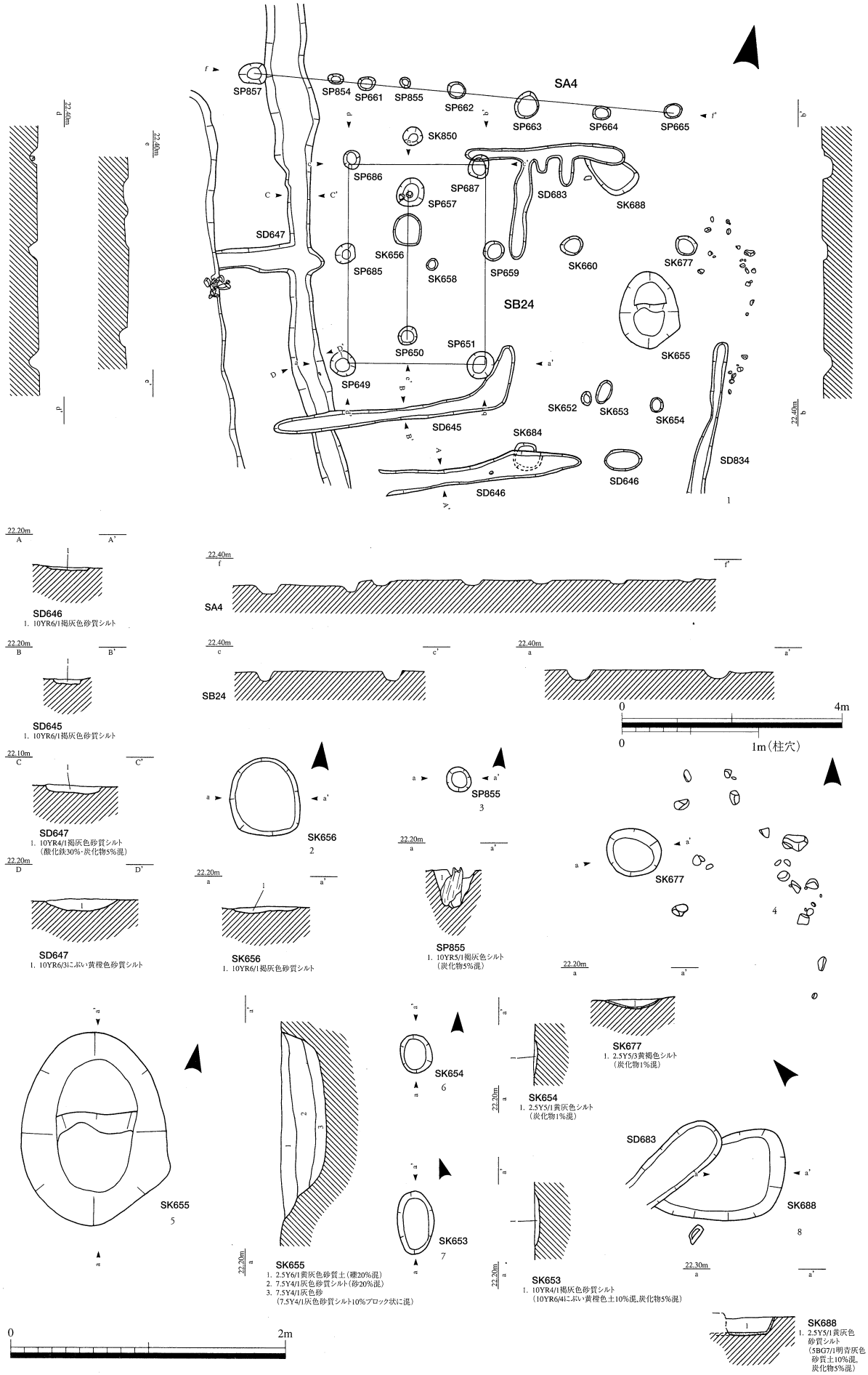
701号溝（ＳＤ701，第45図）

建物の北側と西側の一部に巡る溝で，幅は20cm前後，深さ３cm程度の浅い溝である。東西方向の脇道の側溝と推定するＳＤ722より新しい。出土遺物には木製容器(*149*)がある。

*149*は正方形の組合せ容器で，底板の内径は12cm，側板の高さは7.3cmを測り，ヒノキ材が使用される。側板は相欠接で組合わせ，底板の小口面に木釘で留める。また，内外両面に補強板が補てがわれる。升の可能性がある。

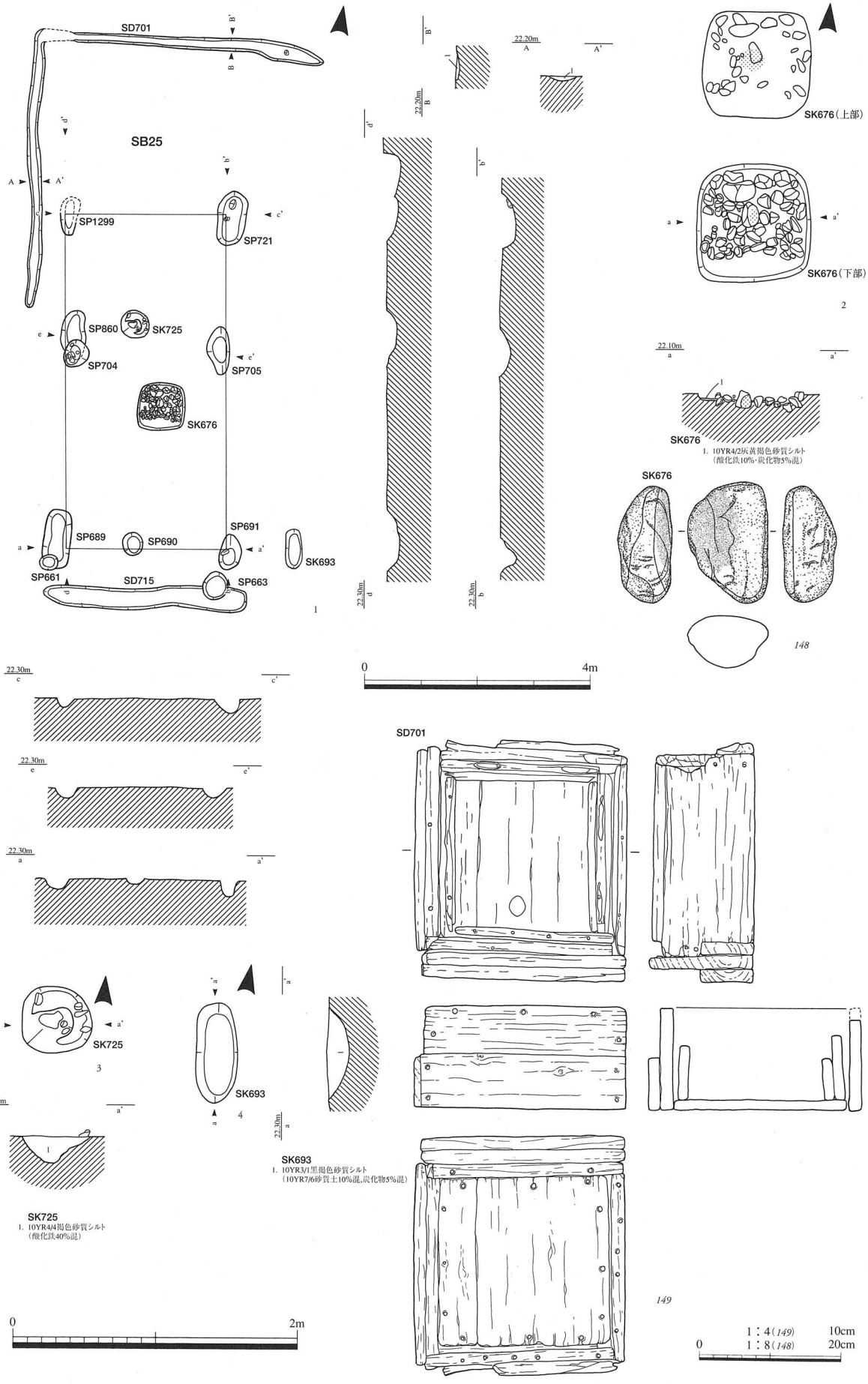
26号建物（ＳＢ26，第39・46図，図版39・40）

25号建物と重複する東西棟の側柱建物で柱穴の配置は不揃いであるが２間×１間程度であろう。桁



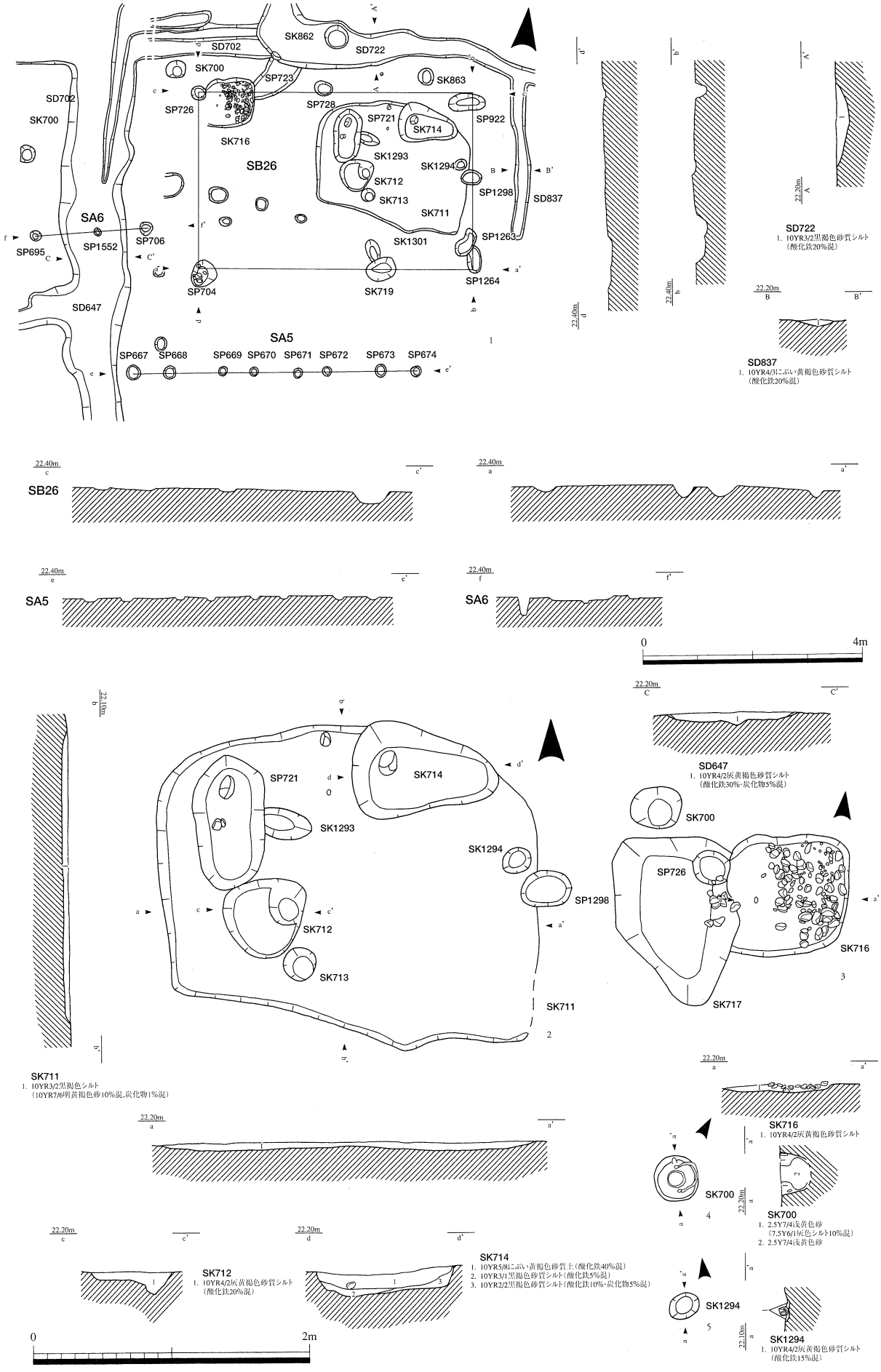
第44図　遺構実測図（中世）

1. SB24・SA4・SD645・SD646・SD647　2. SK656　3. SP855　4. SK677　5. SK655　6. SK654　7. SK653　8. SK688



第45図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB25・SD701　2. SK676　3. SK725　4. SK693
SK676(*148*)　SD701(*149*)



第46図　遺構実測図（中世）

1. SB26・SA5・SA6・SD722・SD837・SD647　2. SK711・SK712・SK714　3. SK716　4. SK700　5. SK1294

行は５ｍ，梁行は3.1ｍ，床面積は15.5㎡の中規模建物である。柱穴は円形と楕円柱穴が混じり，後者は規模が大きく，深い特徴がある。付属遺構にはＳＫ711・700・716，ＳＡ５があり，またＳＤ837が伴う可能性があるが明確でない。

711号土坑（ＳＫ711，第46図，図版40）

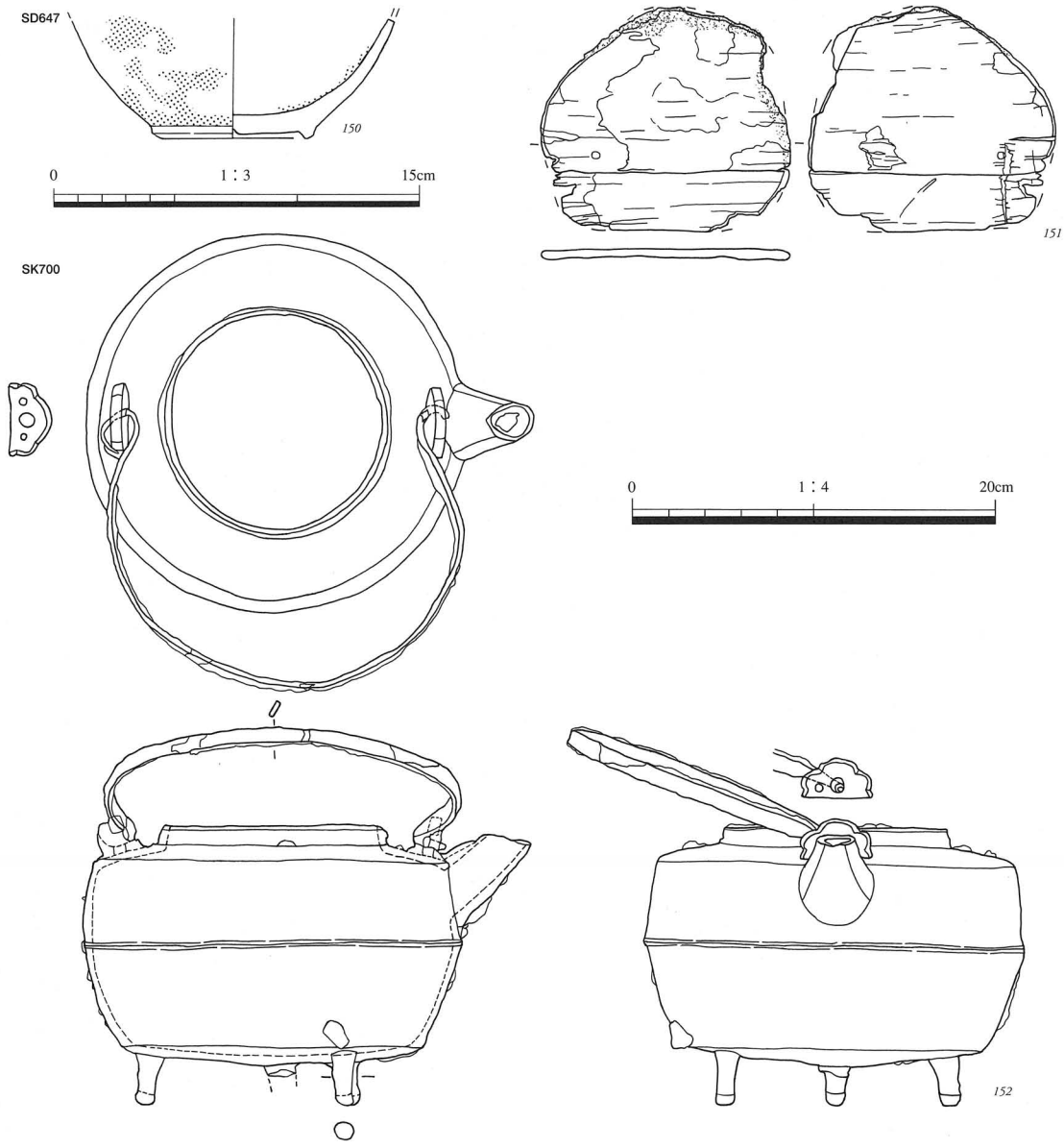
建物内の東側に位置する大型略長方形土坑で，掘り込みは４㎝と浅い。底面は平坦で幾つかの土坑が重複する。埋土は黒褐色シルト層で炭化物の混じりは少ない。

700号土坑（ＳＫ700，第46・47図，図版40）

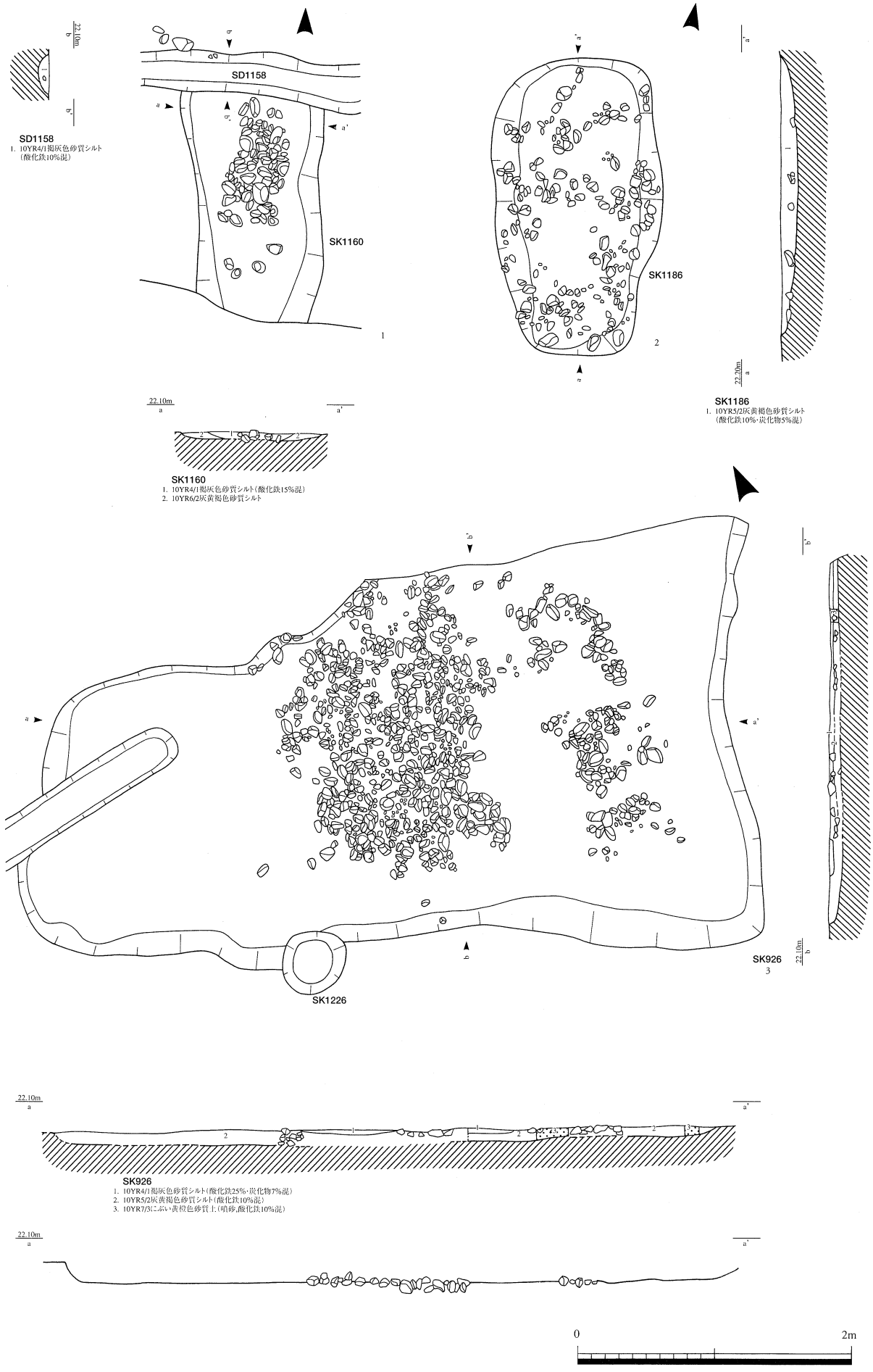
建物外の北西隅に位置する直径37㎝，深さ19㎝の小型土坑で，完形の鉄瓶（*152*）が正位の状態で埋納される。埋土は浅黄色砂で，鉄瓶の内部は空洞であった。遺構の性格は明確でないが，甑炉等の下部施設の可能性がある。

*152*は完形の鋳造鉄瓶で底部外面中央に湯込み口を残す。底部には長さ2.6㎝の３足が付き，胴部には１条の凸帯が巡る。外面には煤が付着し，使用痕跡を残す。弦の断面形状は長方形を呈する。

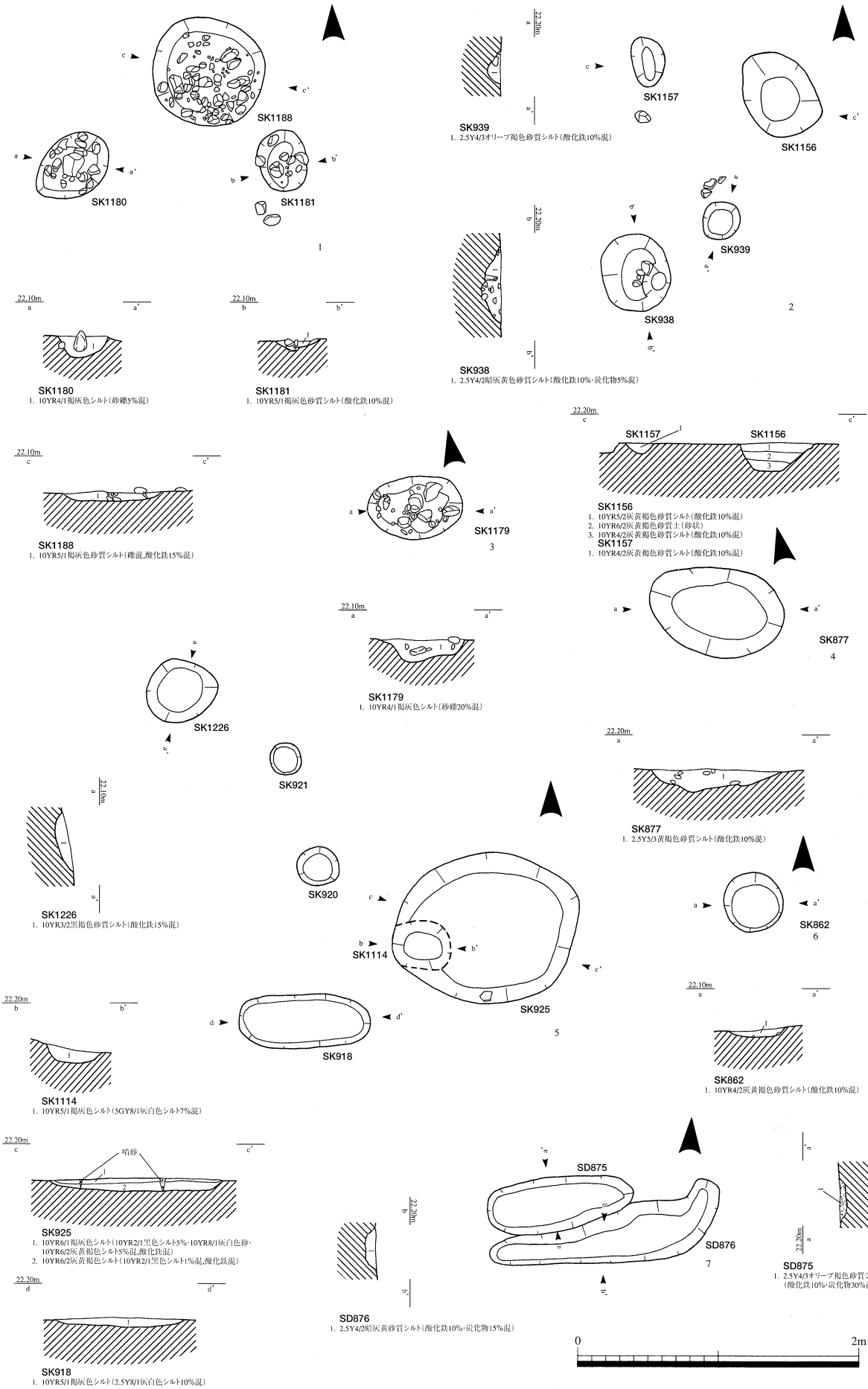
716号土坑（ＳＫ716，第46図）



第47図　遺物実測図（中世）　（*150*　1/3，*151*・*152*　1/4）
SD647（*150*・*151*）　SK700（*152*）



第48図　遺構実測図（中世）
1. SD1158・SK1160　2. SK1186　3. SK926



第49図　遺構実測図（中世）

1. SK1180・SK1181・SK1188　2. SK938・SK939・SK1156・SK1157　3. SK1179
4. SK877　5. SK918・SK925・SK1114・SK1226　6. SK862　7. SD875・SD876

建物内の北西隅の柱穴に接する略方形の浅い土坑である。規模は88cmを測り，埋土内の東側半分に疎らな石敷がみられる。出土遺物には板状金属製品の小破片がある。

５号柵（ＳＡ５，第46図）

ＳＫ26の南側1.8mに位置する東西方向の柵で，建物桁柱列の方位とほぼ同一である。柵は15cm～20cmの小規模柱穴８個で構成され，柱間の間隔は２個対で異なる。

６号柵（ＳＡ６，第46図）

区画の奥中央に位置し東西方向の柵である。柵柱穴は３個検出され更に東側に延びる可能性を残す。ＳＡ５の方位とは僅かに異なり西に傾く。柱穴規模は14cm～20cmで，柱間は70cm～92cmである。

1160号土坑（ＳＫ1160，第48図）

区画の手前北側に位置する土坑で北側はＳＤ1158に，また，南側は試掘トレンチに切られる。幅は90cm，深さは10cmを測り，中央部に石敷がみられる。埋土は褐灰砂質シルト層である。

1186号土坑（ＳＫ1186，第48図）

区画の北側道路際に位置する。隅丸長方形で長さ2.17m，幅1.22m，深さ12cmを測る。底面はほぼ平坦で，埋土は灰黄褐色砂質シルトで，拳大の河原石が疎らに混入する。

926号土坑（ＳＫ926，第48図，図版40）

区画の中央北寄りに位置する不整形の大型土坑で，ＳＤ722と重複し，北側は試掘トレンチに切られる。東西方向の長さは4.93m，深さは20cmを測る。底面は平坦で，埋土は灰黄褐色砂質シルト，褐灰色砂質シルト層がレンズ状に堆積し，数箇所に噴砂痕跡を残す。土坑の中央部と東側に底面から積み上げられた集石がみられるが，東側の集石は纏まりは弱い。

1188号土坑（ＳＫ1188，第49図）

北側の道路際に位置する浅い円形土坑で，埋土には河原石が混じる。直径82cm，深さ6cmを測る。

925号土坑（ＳＫ925，第49図）

区画中央部に位置する。直径1.22m，深さ８cmの略円形の土坑で底面は平坦である。埋土は灰黄褐色シルト，褐灰色シルト層で噴砂によって引き裂かれる。

876号溝（ＳＤ876，第49図）

区画の南端中央付近に位置する東西方向に延びる短い溝で，長さ約1.7m，最大幅45cm，深さ５cmを測る。南区画溝ＳＤ646の東側延長線上にあり，区画溝の可能性を残す。出土遺物には白磁がある。

区画３（第50・51図）

Ｃ地区調査区道路西側遺構群のほぼ中央に位置する大区画である。区画は南側のＳＤ1095・1158・1159，西側のＳＤ1093，北側のＳＤ44で構成される。また，西側溝はＳＤ1077からＳＤ1093に改築がなされる。地口の南北幅は約28m，奥行きの東西幅は改築前が約26m，改築後は約20mを測り，面積はそれぞれ約728，560m^2になる。東側の道路は区画内の中間地点で西側に折れ始める。これに沿って建物の配置も方位を変える。遺構の内訳は，掘立柱建物５棟，柵３条，井戸３基，土坑，溝がある。建物は道路際に３棟，奥に２棟が並ぶ。畝状遺構と推定する小溝は区画奥の南側の一角にみられる。畝方向は南北方向である。

1093・44号溝（ＳＤ1093・44，第59図）

両溝は同一遺構で幅は38cm～90cmと一定せず，深さは10cm程度である。南側区画溝のＳＤ1095と直交して連なり，ＳＤ1095は更に東側に位置し南北方向に延びるＳＤ1123に直角に折れて連結する。このＳＤ1123は北上し，地口幅の中間付近で途切れる。幅は60cm～70cm，深さは10cm前後である。また，

第50図　遺構実測図（中世）

1. SB27～SB30・SA7～SA9

第51図　遺構実測図（中世）
SB31～SB34・SA9

溝群は28・29号建物や畝状遺構と重複し，溝が新しいことから最終段階に近い遺構であろう。出土遺物にはＳＤ1093から中世土師器，ＳＤ1123からは瀬戸美濃がある。

45号溝（ＳＤ45，第84図）

北側区画溝で幅は46cm前後，深さは３cmと浅い。途中で途切れるが一連の遺構である。

27号建物（ＳＢ27，第50・52図，図版41）

区画南側の道路際に位置する南北棟の側柱建物である。４間×１間程度の建物と推定するが未検出の柱穴が多い。桁行7.1m，梁行2.1m，床面積は14.91m²を測る。柱穴の規模は30cm～50cm，深さ８cm～45cmを測り，比較的深いものが多い。ＳＰ1240から瀬戸美濃が出土している。付属遺構にはＳＫ1217，ＳＤ1246・1231，ＳＥ1216がある。

1217号土坑（ＳＫ1217，第52図，図版42）

建物内の北側東寄りに位置する略方形の大型土坑で，直径約2.1mを測る。掘り込みは浅く６cm程度で北側のラインは明確でない。埋土は黄褐色砂質シルトが薄く全面に堆積し，中央部の60cm程度の範囲が新たな掘り込みがあり，炭化物，小枝，種子などを多く含む黒色土が入り込む。

1246・1231号溝（ＳＤ1246・1231，第52図）

建物の北側と東側半分に巡る溝で，コーナー部分はＳＫ1218に切られる。両溝は同一遺構と推定する。溝の幅は一定でなく，幅は20cm～52cm，深さは５cm～10cmを測る。出土遺物に瀬戸美濃がある。

1216号井戸（ＳＥ1216，第52図，図版42）

建物の西側桁柱列上に隣接する。石組の遺存状況は比較的良好で，直径は95cm，深さは74cmを測り，10段程度に人頭大の河原石を積み上げる。出土遺物には加工材がある。

28号建物（ＳＢ28，第50・54図，図版41・42）

区画の中央南端に位置し，西側に隣接する29号建物と柱筋を揃える。３間×１間の南北棟の側柱建物で，桁行4.8m，梁行2.7m，床面積は12.96m²である。柱穴の規模，位置は不揃いであるが，掘り込みは深いものが多い。柱穴のうち，ＳＰ1169・1227の２箇所に柱根が遺存する。ＳＰ1227の柱根は太さは10cm程度で，長さ50cmまで残る。また，建物内のＳＫ1229も柱根が遺存し新たな遺構が予想される。付属遺構にはＳＫ1162・1167・1168・1166がある。

1162号土坑（ＳＫ1162，第54図）

建物内の中央西端に位置する石敷で，検出面が高く掘り込みは確認できない。拳大の河原石を縦60cm，横30cmの範囲に敷き詰める。

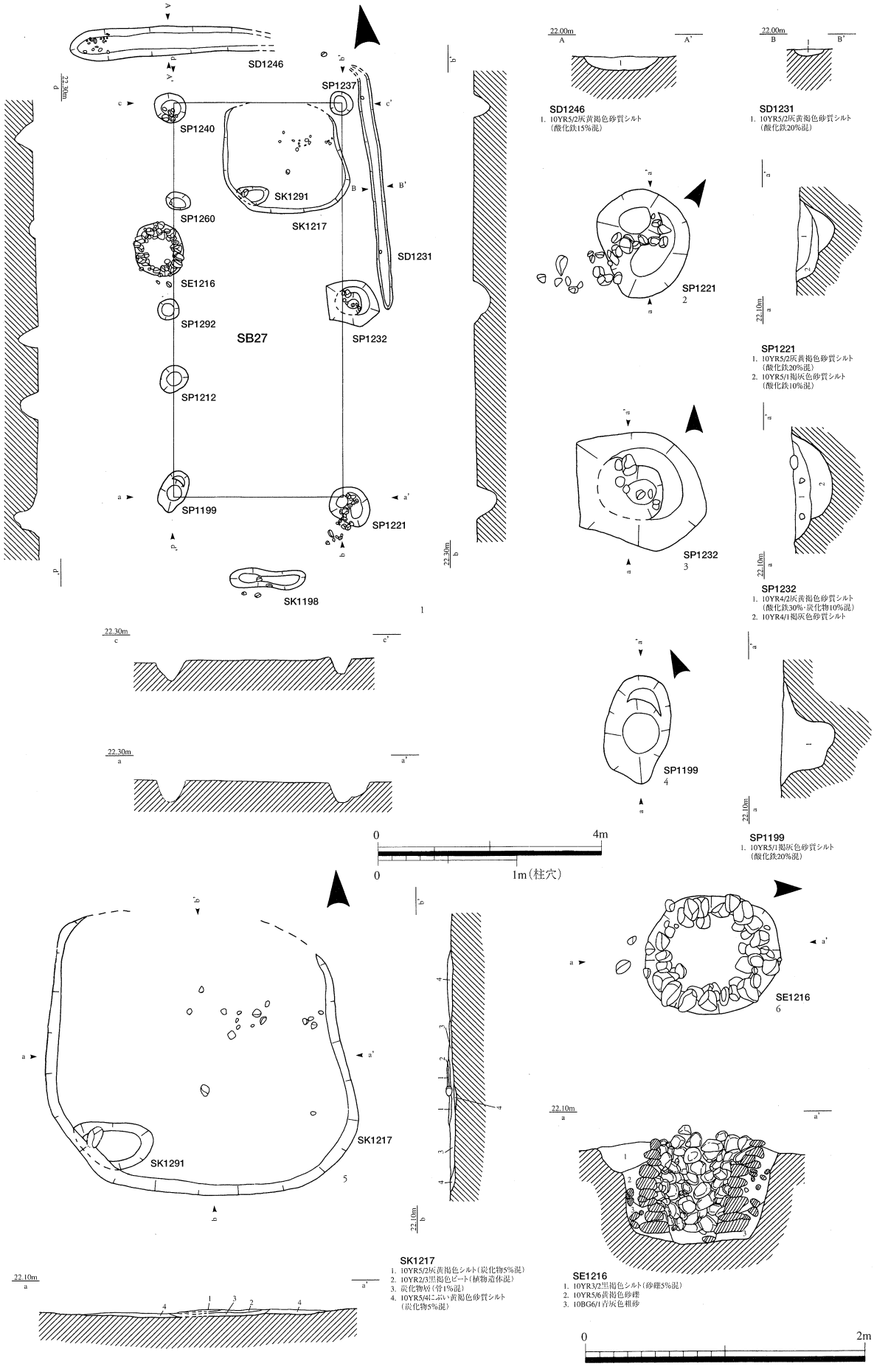
1167・1168号土坑（ＳＫ1167・1168，第54図，図版42）

建物内の中央に位置する。ＳＫ1168は直径52cmの略円形を呈し，深さは５cmの浅い土坑である。土坑の埋土は比較的多くの炭化物が混じる褐灰色砂質シルト層で，埋土層中に円形の被熱痕跡が認められる。平面形は直径17cmの範囲が焼土化し，その中の中央部14cm余りが黒く炭化する。また，断面では焼土は土坑底面までみられ，強い被熱痕跡である。ＳＫ1167は南に隣接する長径63cm，深さ４cmの土坑で，埋土中に石敷が施される。両土坑は鍛冶関連遺構であろう。

1166号土坑（ＳＫ1166，第54図）

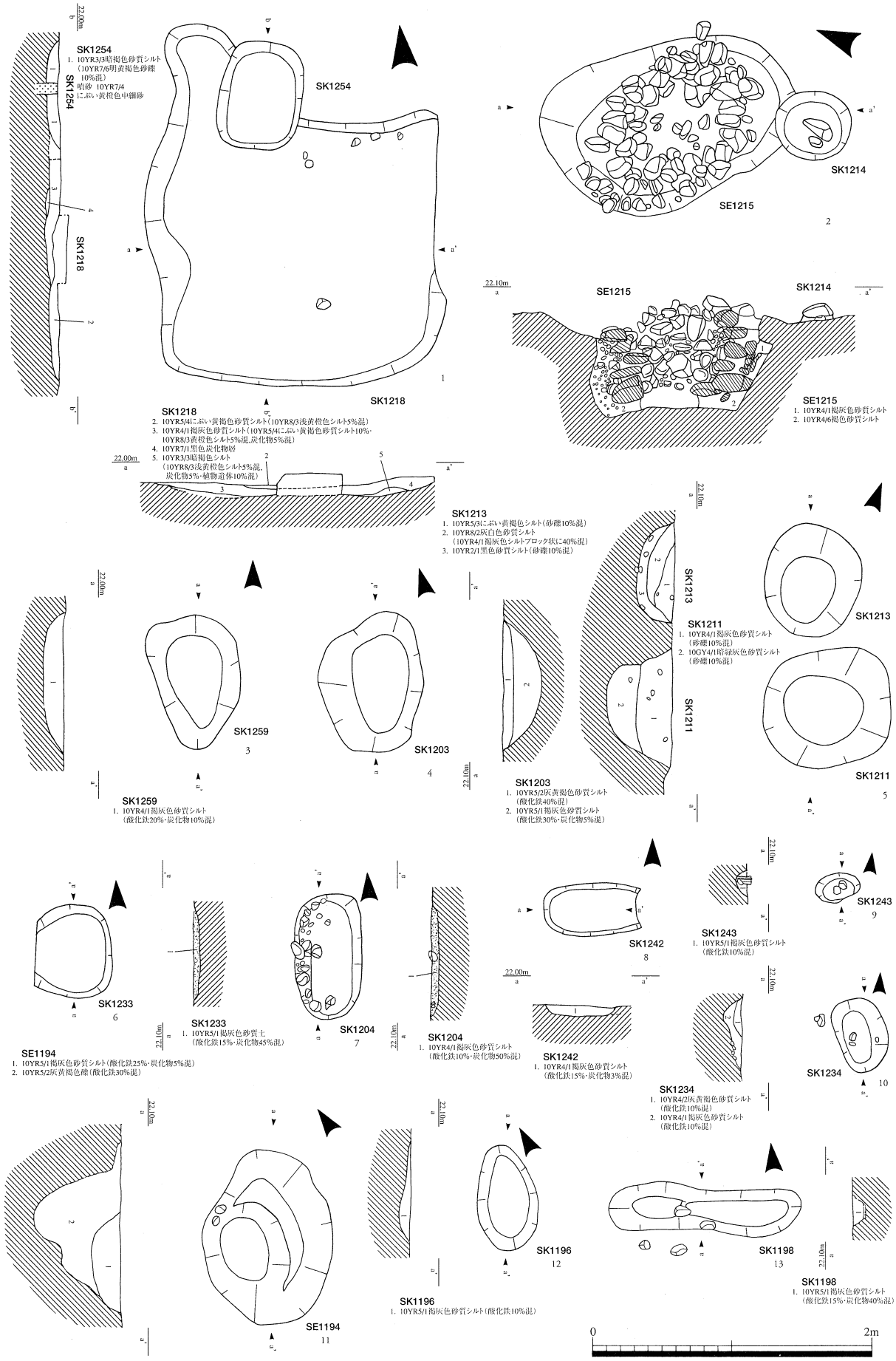
建物の南東側梁方向延長上に位置する不整形の小型土坑である。掘り込みは10cmと浅い。埋土は灰黄褐色砂質シルトで底面には薄く炭化物層が堆積する。埋土は噴砂によって引き裂かれる。出土遺物には瀬戸美濃（*153*）がある。

*153*は瀬戸美濃の天目茶椀の小破片で高台を欠く。口径11.0cmを測り，薄い器壁の体部は口唇部で



第52図　遺構実測図（中世）

1. SB27・SD1246・SD1231　2. SP1221　3. SP1232　4. SP1199　5. SK1217　6. SE1216



第53図　遺構実測図（中世）

1. SK1218・SK1254　2. SK1214・SE1215　3. SK1259　4. SK1203　5. SK1211・SK1213　6. SK1233　7. SK1204
8. SK1242　9. SK1243　10. SK1234　11. SE1194　12. SK1196　13. SK1198

屈曲し，端部は外反する。体部内外面には茶色味がかった鉄釉がかかる。

29号建物（ＳＢ29，第50・54図，図版43）

区画の南端に位置する南北棟の側柱建物で，新しいと推定する南北区画溝ＳＤ1093に切られる。また，ＳＤ1092に切られる畝状遺構とも重複して切られることから最も古い遺構群に入るであろう。建物存続時期の東西区画溝は西側のＳＤ1077である。建物は柱穴を欠く部分もあるが，２間×１間程度と想定され，桁行は4.6m，梁行約３m，床面積は約13.8m²である。柱穴の規模は50cm～90cmと比較的大型で掘り込みは10cm～30cmである。付属遺構はＳＫ1125がある。

1125号土坑（ＳＫ1125，第54図）

建物外の東側桁列に隣接し，畝状遺構のＳＤ1098と重複し切られる。埋土は灰黄褐色砂質シルトで拳大の河原石が多く混入する。

30号建物（ＳＢ30，第50・55図，図版44・45）

区画の道路際に並ぶ３棟の建物の中央に位置する。西・北側の柱穴は不揃いであるが，２間×２間程度の東西棟であろう。桁行は3.2m，梁行は2.8m，床面積は8.96m²の小型建物である。柱穴の規模は28cm～60cm，深さは８cm～12cmで相対的に浅い。ＳＰ375から白磁が出土している。付属遺構にはＳＤ374・373，ＳＡ７がある。

1264号柱穴（ＳＰ1264，第55図）

建物内の中央に位置する小型の柱穴である。中央に立石状に人頭大の河原石が埋置される。

374号溝（ＳＤ374）

建物の南側に巡る浅い溝で埋土に礫を含む。溝は途中で途切れ，ＳＤ151と重複し切られる。

７号柵（ＳＡ７，第55図）

建物の南側約３mに位置する東西方向の柵で，方位は建物桁方位に揃える。直径20cm～30cmの浅い小型柱穴で構成され，延長は約3.2mを測る。

31号建物（ＳＢ31，第51・55・56図，図版44・45）

区画北側の道路際に位置する南北棟の側柱建物で，桁行の中間より東寄りに３箇所の棟持柱が付く。柱穴は未検出が多いが，４間×２間程度の建物が想定される。桁行6.3m，梁行4.4m，床面積は約27.7m²である。側柱の柱穴は18cm～40cmで相対的に小型である。特に東側柱のＳＰ391(*155*)・392(*154*)の小型柱穴には柱根が遺存し突き刺す状態で検出された。また，ＳＫ393には杭状に打ち込まれた柱根（*156*）があり，新たな遺構が想定される。付属遺構にはＳＫ171，ＳＡ９がある。

*155*は直径約７cmの表皮付き柱根で先端は２方向から切り込みを入れ杭状にする。長さは27cmまで遺存する。*154*は直径5.5cmの表皮付きの柱根で，*155*と同様に先端部に３方向から切り込みを入れる。

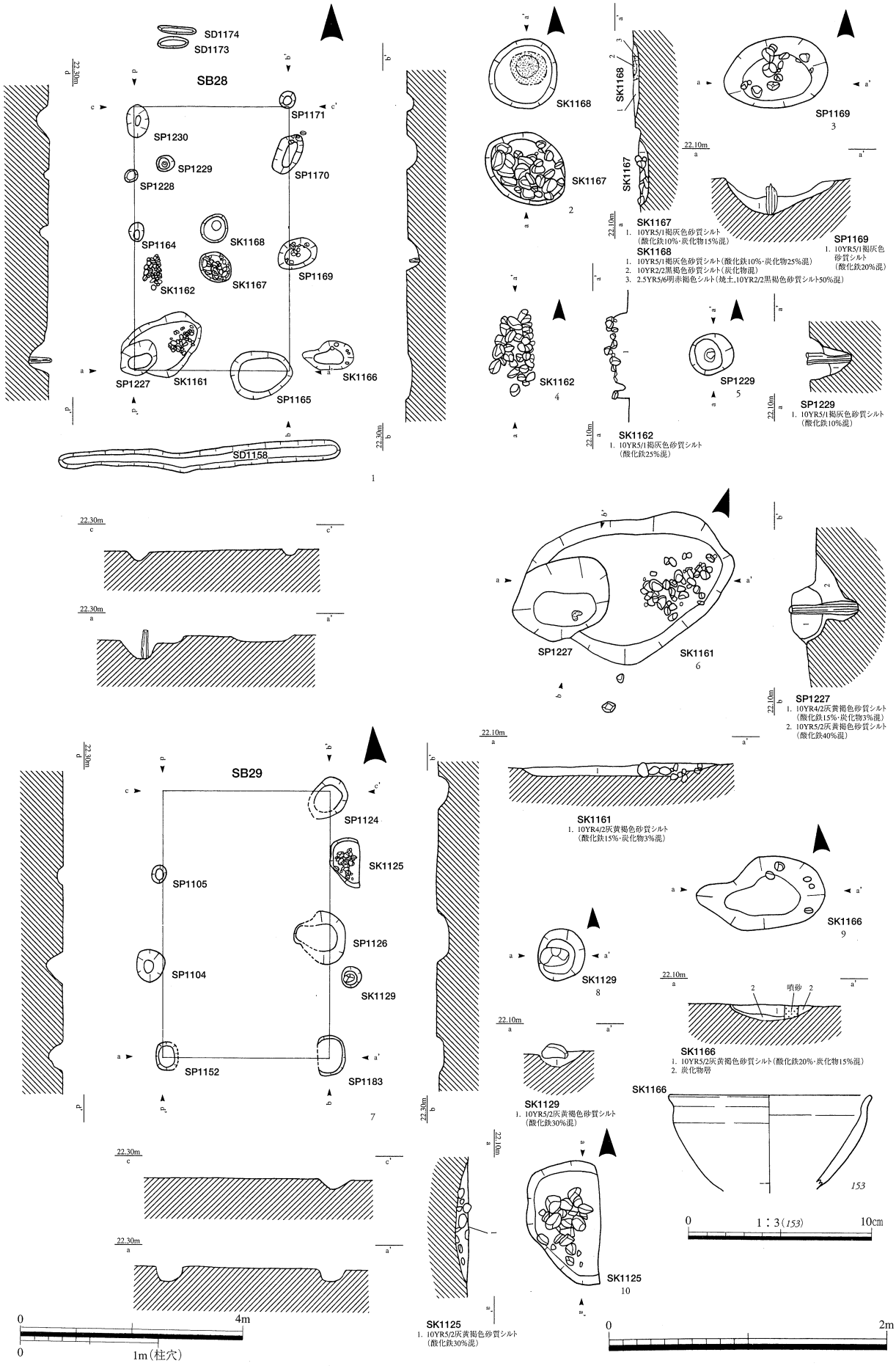
393号土坑出土の*156*は半裁された建材を転用した柱根で，長さ40.3cmまで遺存する。表面に抉り痕や整形痕を残す。

171・171ｂ号土坑（ＳＫ171・171ｂ，第55図）

建物内の北西隅に位置し重複する。新旧関係はＳＫ171が新しい。また両土坑はＳＸ385に切られる。ＳＫ171は直径2.05mの略方形の土坑で深さは12cmを測る。底面は平坦で，埋土は黄灰色シルトの単層である。ＳＫ171ｂは浅い土坑で，埋土は暗灰黄色シルト層である。

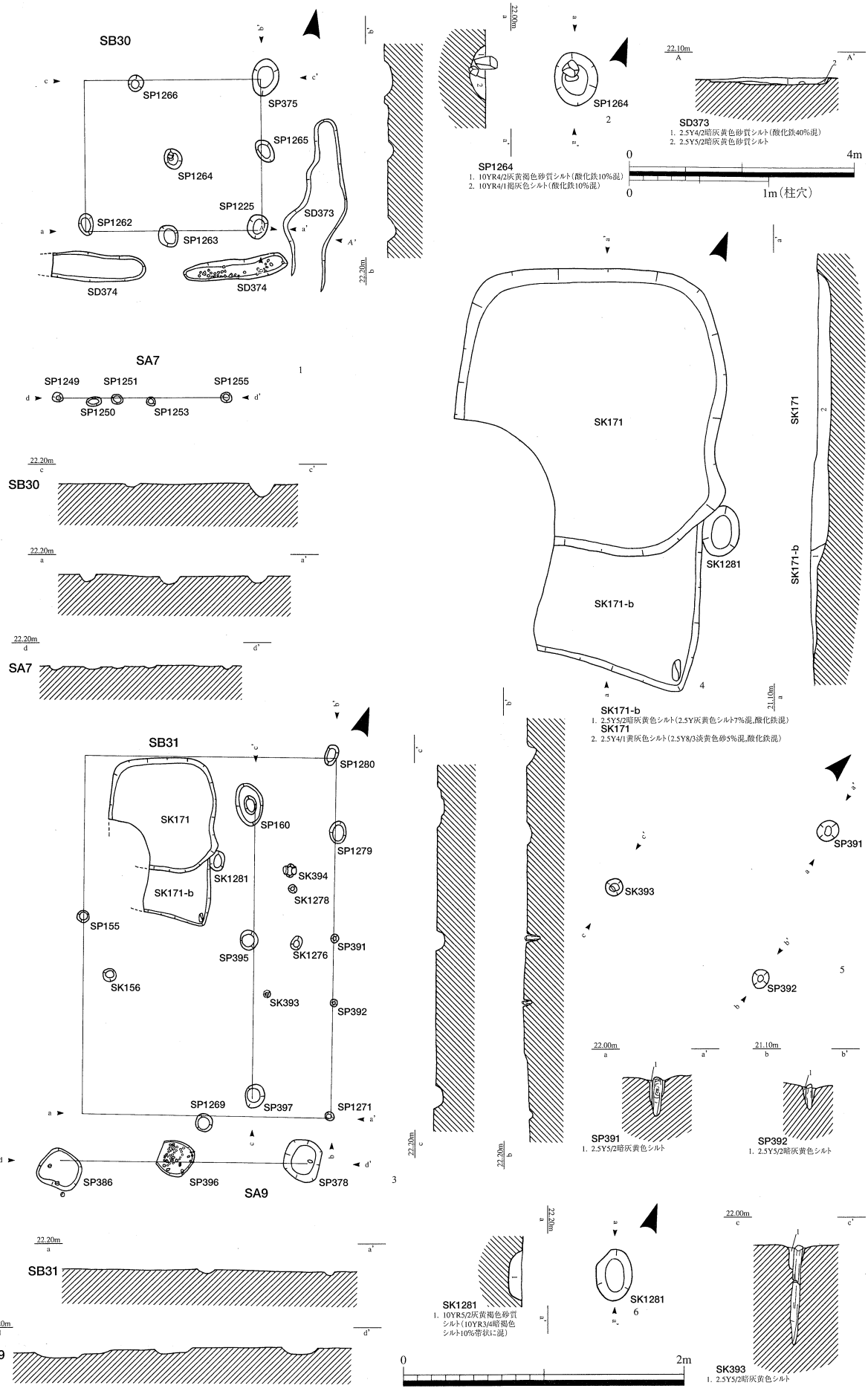
９号柵（ＳＡ９，第55図）

建物南側に隣接する東西方向の柵で大型柱穴である。柵柱穴は65cm～78cm，深さ10cmを測り，延長は4.5m程度である。



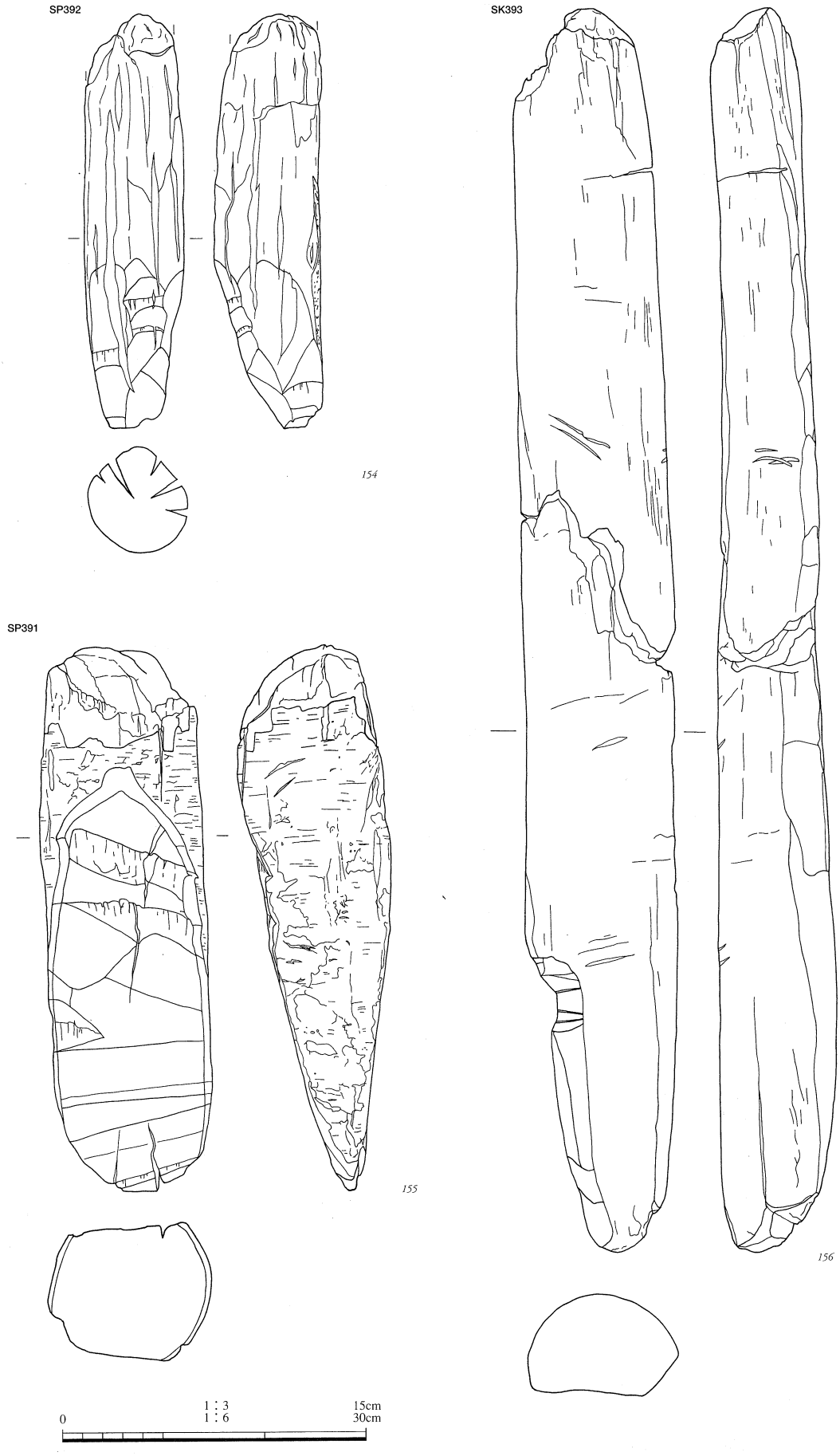
第54図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB28　2. SK1167・SK1168　3. SP1169　4. SK1162　5. SP1229　6. SK1161・SP1227　7. SB29　8. SK1129
9. SK1166　10. SK1125
SK1166（*153*）

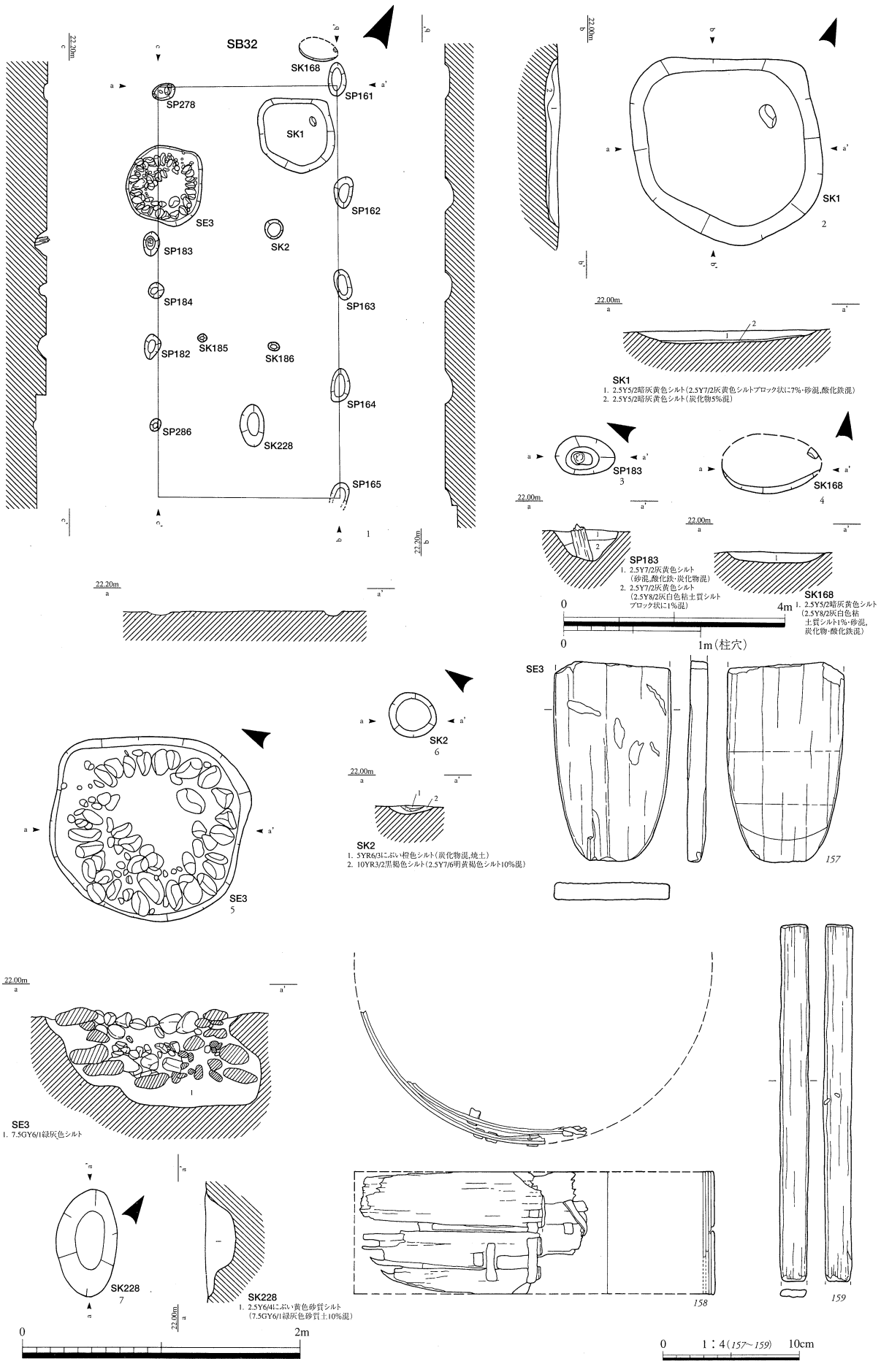


第55図　遺構実測図（中世）

1. SB30・SA7・SP373　2. SP1264　3. SB31・SA9　4. SK171・SK171-b　5. SP391・SP392・SK393　6. SK1281

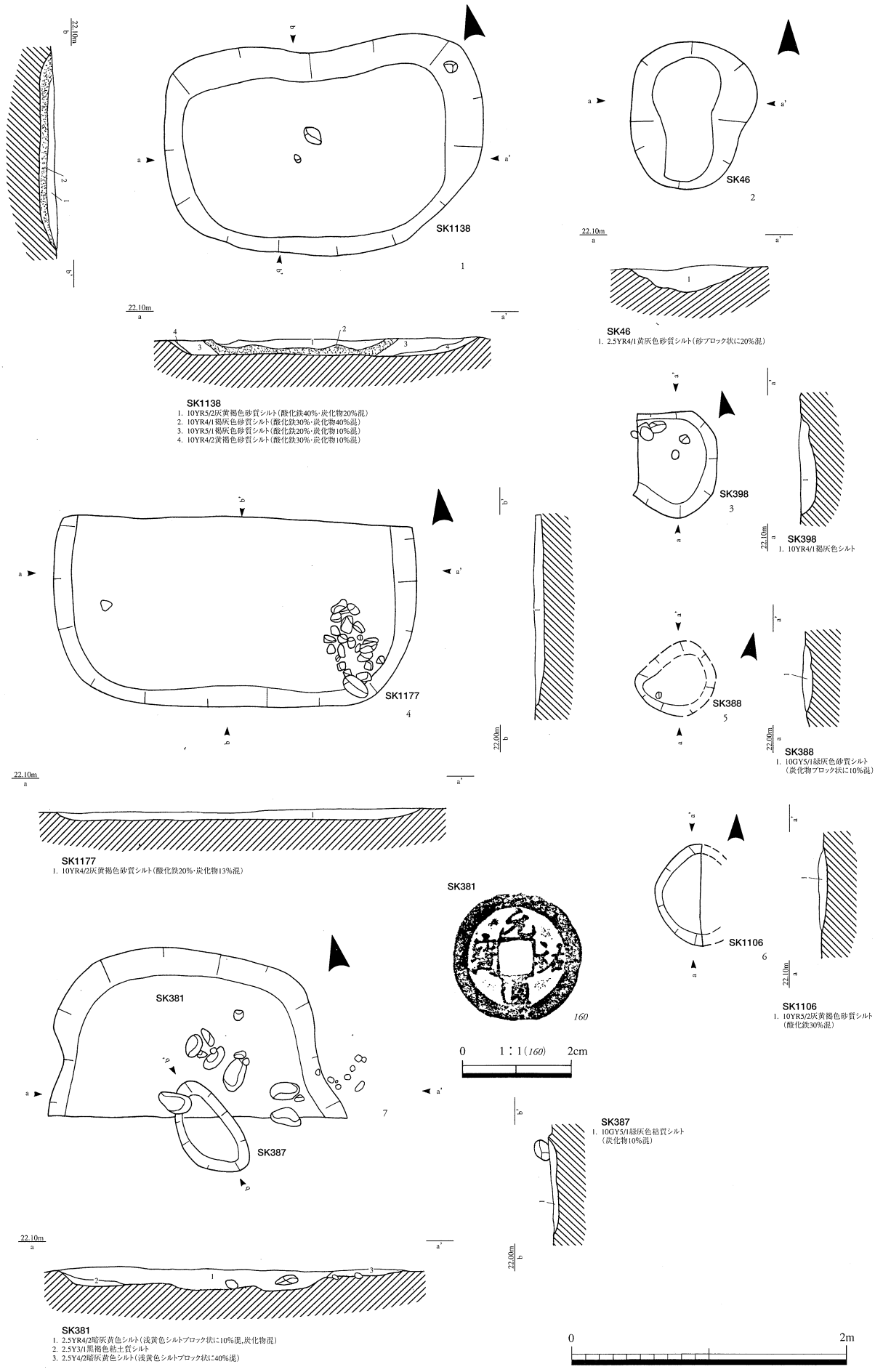


第56図　遺構実測図（中世）　（*154・155* 1/3，*156* 1/6）
SP392（*154*）　SP391（*155*）　SK393（*156*）



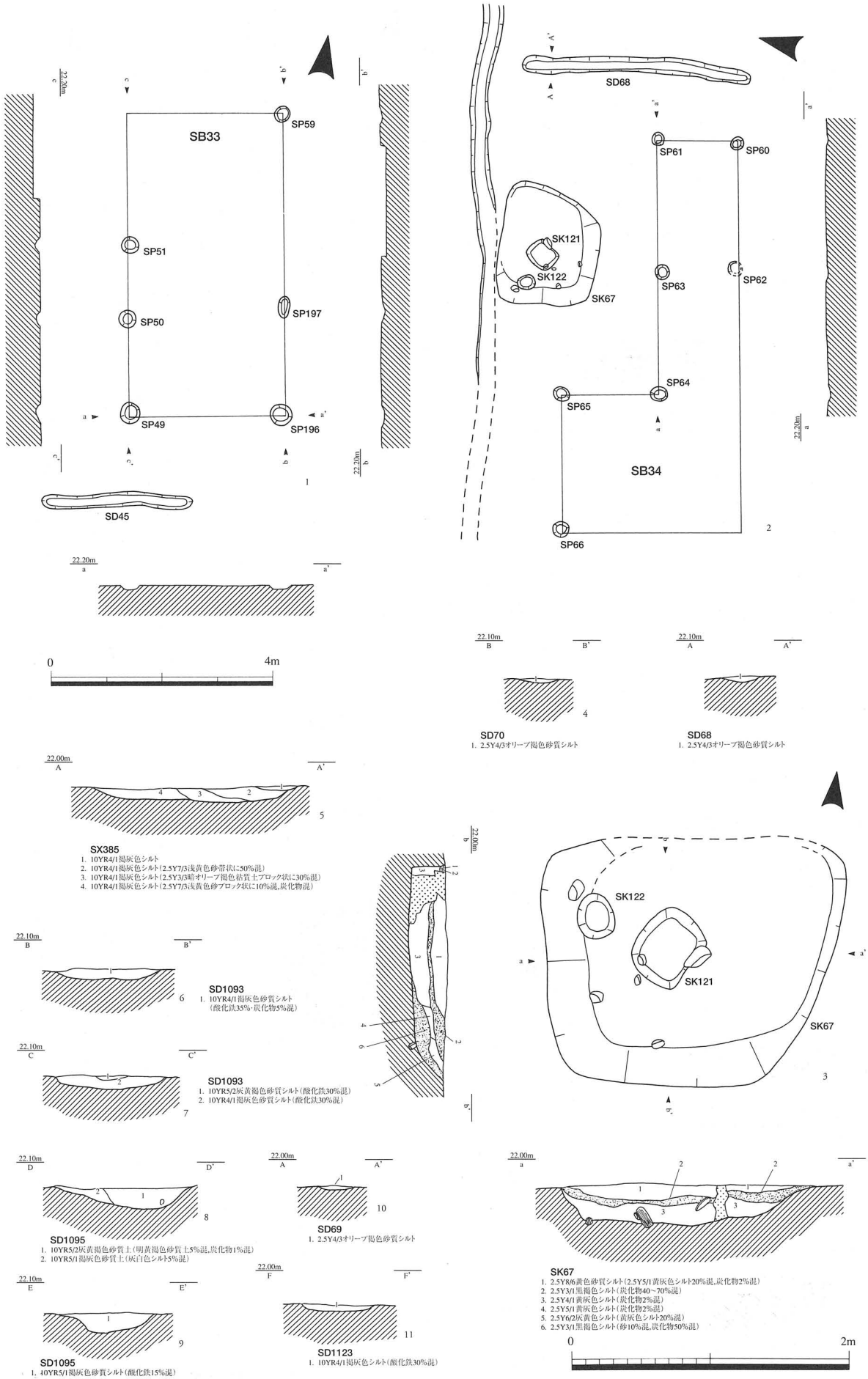
第57図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB32　2. SK1　3. SP183　4. SK168　5. SE3　6. SK2　7. SK228
SE3(*157～159*)



第58図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK1138　2. SK46　3. SK398　4. SK1177　5. SK388　6. SK1106　7. SK381・SK387
SK381(*160*)



第59図　遺構実測図（中世）

1. SB33　2. SB34・SD68　3. SK67　4. SD70　5. SX385　6・7. SD1093　8・9. SD1095　10. SD69　11. SD1123

８号柵（ＳＡ８，第50図）

区画の奥側中央に位置する南北方向の柵で，ＳＤ1093と重複し切られる。柱穴の規模，間隔とも不揃いである。延長は約5.5ｍで，周辺には建物は検出されていない。

1218・1254号土坑（ＳＫ1218，第53図，図版42）

ＳＢ27の北側に位置する大型土坑で建物との関係は明確でない。長径約1.9ｍの略方形で，ＳＫ1254と重複し切られる。掘り込みは８㎝で，埋土は黄褐砂質シルト，褐灰色砂質シルト層がレンズ状に堆積する。出土遺物には中世土師器がある。ＳＫ1254は隅丸長方形の小型土坑で，埋土は噴砂によって引き裂かれる。

1215号井戸（ＳＥ1215，第53図，図版42）

27号建物の西側に位置し付属する建物は明確でない。掘形は楕円形を呈する石組井戸で上部の石組は部分的に抜き取られる。石組の直径は約65㎝，深さは約80㎝を測る。石組は５～６段程度が残り，比較的大型の河原石が使用される。

1203号土坑（ＳＫ1203，第53図）

27号建物の南側に位置し，擂鉢状に掘り込まれた不整形の土坑で長径１ｍ，深さは28㎝を測る。

1211・1213号土坑（ＳＫ1211・1213，第53図）

27号建物の西側に隣接する土坑である。ＳＫ1211は石組はみられないが，深さ46㎝を測り小型井戸の可能性を残す。埋土は暗緑灰色砂質シルト，褐灰色砂質シルトが堆積する。ＳＫ1213は長径92㎝の楕円形を呈し，深さは28㎝を測る。出土遺物には青磁がある。

1233号土坑（ＳＫ1233，第53図）

27号建物の東側に位置し，ＳＤ1231に切られる。長径65㎝の不整形の土坑で深さは４㎝と浅い。底面は平坦で，埋土は褐灰砂質炭化物層である。

1204号土坑（ＳＫ1204，第53図）

27号建物の南東隅柱穴に隣接する位置にある。長径90㎝の長楕円形の土坑で，深さは４㎝と浅い。底面は平坦で，埋土は褐灰色砂質シルトの単層で拳大の河原石や炭化物が多く混入する。

1243号土坑（ＳＫ1243，第53図）

ＳＤ1246の南側に隣接する小型土坑で柱根が遺存し，新たな建物が想定される。

1194号井戸（ＳＥ1194，第53図）

27号建物の南側に位置し，断面図から３遺構が重複し最も古い。深さは62㎝を測り，石組は認められないが小型井戸の可能性を残す。埋土は灰黄褐色の礫層で埋め戻されている。

1198号土坑（ＳＫ1198，第53図）

27号建物の南側に位置する長楕円の溝状土坑で長径1.36ｍ，短径30㎝，深さ９㎝を測る。埋土は褐灰色砂質シルトの炭化物層で底面に薄い炭層がみられる。

1138号土坑（ＳＫ1138，第58図）

区画の奥中央付近に位置し，隣接する建物はない。長径2.27ｍ，短径1.45ｍ，深さ12㎝の略隅丸長方形の土坑である。底面はほぼ平坦で，埋土には炭化物が多く混入する。周辺の溝を全て切る。

1177号土坑（ＳＫ1177，第58図）

区画のほぼ中央部に位置し，北側は試掘トレンチに切られる。直径2.62ｍの隅丸方形を呈する大型土坑で，深さは８㎝と浅い。底面は平坦で，埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質シルトの単層である。

381号土坑（ＳＫ381，第58図）

区画のほぼ中央部に位置し，南側半分は試掘トレンチに切られる。直径約２ｍの不整形の大型土坑で，掘り込みの深さは16cmである。底面は凹凸があり一定でない。埋土は炭化物を殆ど含まない暗灰黄色シルトである。出土遺物には瀬戸美濃，銅銭(*160*)がある。

*160*の銅銭は土坑の西端の埋土中位から出土した。銭貨名は「元祐通宝」で初鋳は1086年である。

区画４（第51図）

Ｃ地区調査区のほぼ中央部に位置する小区画で三方にＳＤ45・70が巡る。南側と奥側を区画するＳＤ45は奥側から中央部付近まで延びるが手前側にはみられず途切れる。また，奥の中央部付近でも途切れる。南隣の区画３の奥側区画溝ＳＤ44はＳＤ45の南溝の途中に連結し，両区画の奥行きは異なる。ＳＤ45は改築された溝の可能性が高い。区画の規模は地口約12.5m，奥行約18.5mを測り，面積は約231m²になり，区画３の半分程度の規模である。

区画内の遺構には掘立柱建物は３棟，井戸１基，大型土坑２基，溝がある。掘立柱建物は道路際，中央部，奥にそれぞれ１棟みられる。中央と奥の２棟は南北方向の柱列を揃えることから同時期の可能性が高い。区画中央南寄りの南北方向溝群は畝状遺構と推定する。奥の南側は遺構がみられず空白域が広がる。

32号建物（ＳＢ32，第51・57図，図版45）

区画中央の道路際に位置する南北棟の側柱建物で，南側に位置するＳＢ31から北側に位置するＳＢ38までの建物は，道路に面する東側桁列を揃える。南側の柱穴は試掘トレンチに切られるが４間×１間程度の建物で，桁行約7.6m，梁行3.3m，床面積約25m²を測る。柱穴は小型楕円柱穴を主体に円形柱穴が混じり間隔は比較的揃う。深さは10cm～22cm程度で，ＳＰ183には柱根が残る。付属遺構にはＳＫ１・２・228・168，ＳＥ３がある。

１号土坑（ＳＫ１，第57図，図版45）

建物内の北東隅に位置する略隅丸方形の土坑で，直径は1.36m，深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦で埋土は暗灰黄色シルトが堆積し，底面に炭化物が混じる層が薄くみられる。

２号土坑（ＳＫ２，第57図）

建物内の中央部やや北寄りに位置する小型円形土坑である。擂鉢状に掘られ，埋土は黒褐色シルト層で中央上面に円形の焼土層が乗る。鍛冶関連遺構の可能性がある。

３号井戸（ＳＥ３，第57図，図版45）

西側の桁柱列上に位置する。石組は６段程度に積み上げられているが地震の影響で上部は北方向にずれ崩落寸前の状況である。井戸の深さは58cmを測る。出土遺物には中世土師器，加工板，加工棒，下駄，曲物，漆器椀がある。

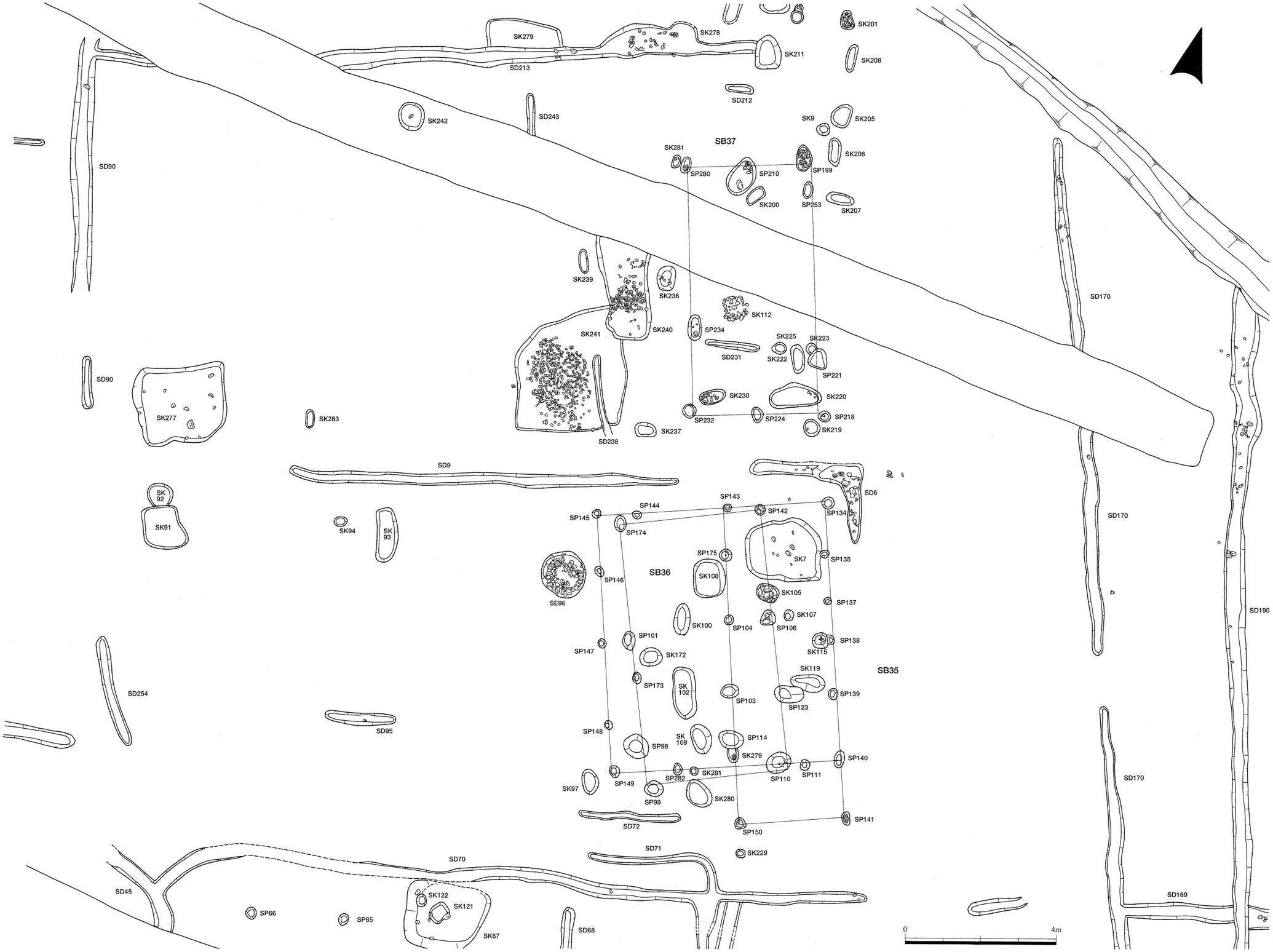
*157*は歯が付かない雪下駄で先端を欠く。材質は二葉松類である。*158*は曲物の側板断片で桜皮による綴目が残る。ヒノキ材を使用し，高さは8.8cmを測る。*159*は長さ25.8cm，幅２cmの板材である。

33号建物（ＳＢ33，第51・59図，図版45）

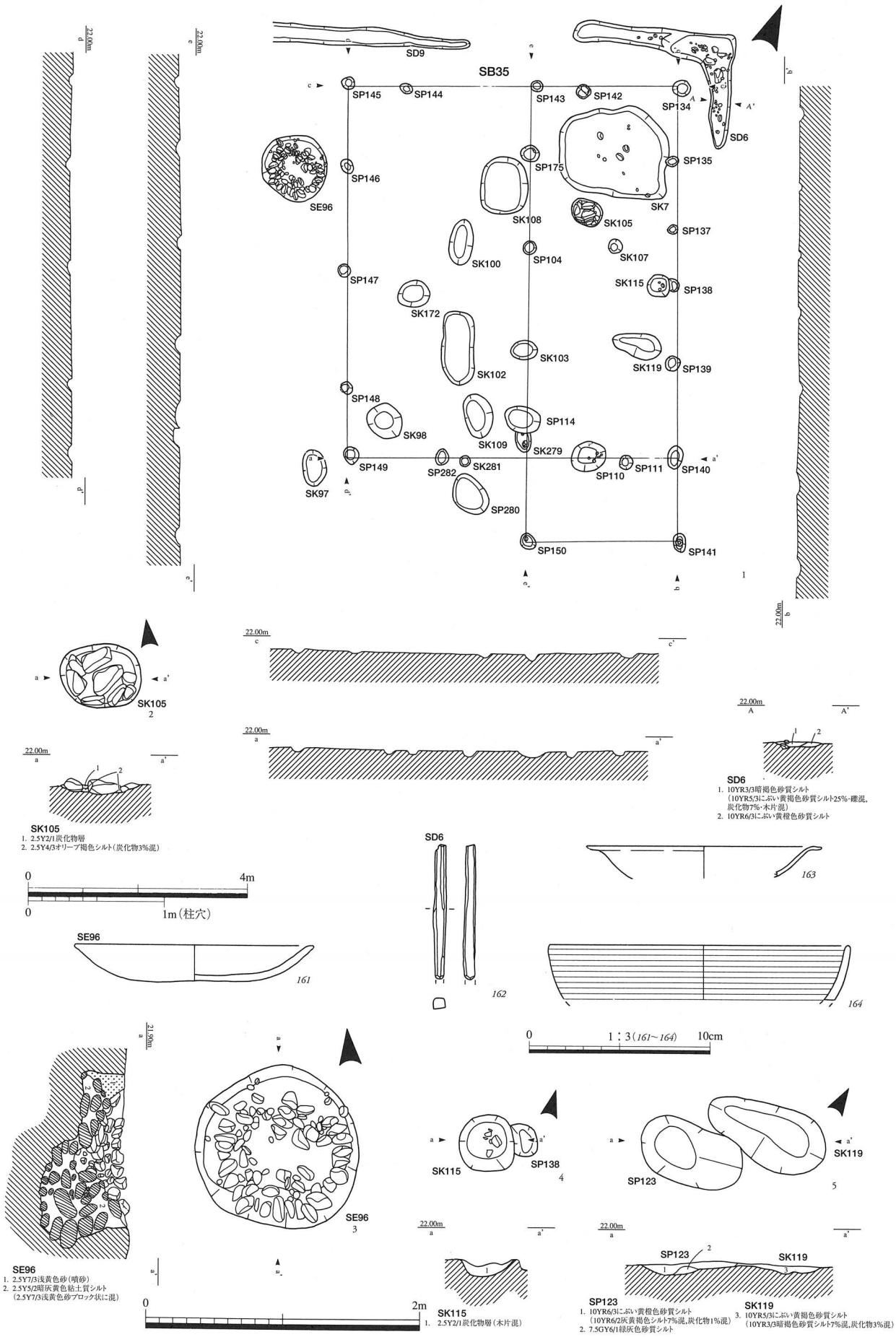
区画の中央南寄りに位置する南北棟の側柱建物で，北側の柱穴の数個所は試掘トレンチに切られる。不明確な部分もあるが３間×１間程度の建物で，桁行5.5m，梁行2.7m，床面積は14.85m²を測る。柱穴は円形で規模は直径26cm～40cm，深さは４cm～10cmで相体的に浅い。ＳＰ197から瀬戸美濃が出土した。付属遺構は明確でない。

34号建物（ＳＢ34，第51・59図，図版45）

区画の奥北側に位置する東西棟の総柱建物で，南西側の柱穴は試掘トレンチに切られる。また，北



第60図　遺構実測図（中世）
SB35～SB37



第61図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB35・SD6　2. SK105　3. SE96　4. SK115　5. SK119・SP123
SE96（*161*）　SD6（*162～164*）

東側の柱穴は未検出であるが，土坑の位置や付属溝の関係から３間×２間の総柱建物に復元する。桁行７ｍ，梁行3.3ｍ，床面積23.1㎡の中規模建物である。柱穴は直径23㎝～28㎝，深さは１㎝～４㎝と非常に浅い。ＳＰ64から加工材が出土した。付属遺構にはＳＫ67，ＳＤ68がある。

67号土坑（ＳＫ67，第59図）

北側桁列上の東側に位置する。長径約２ｍの略方形の土坑で，深さは30㎝と深い。埋土は黄灰色シルト，黒褐色シルト，黄色砂質シルト層がレンズ状に堆積し，噴砂に引き裂かれる。出土遺物には中世土師器，櫛，加工材がある。

68号溝（ＳＤ68，第59図）

建物の東側に位置する溝で，延長4.2ｍ，幅30㎝，深さ４㎝を測る。出土遺物に中世土師器がある。

区画５（第60図）

Ｃ地区調査区の北側に位置し，ＳＤ70・45・254・９で三方を区画する。三方の溝は途中で途切れる。奥の溝ＳＤ125は部分的な短い溝で，北・南側溝も奥側が途切れる。区画の地口は約10ｍ，奥行は約19.5ｍで，面積は約195㎡程度の小区画である。区画内の遺構には掘立柱建物２棟，井戸は１基，大型土坑３基，溝などがある。

掘立柱建物は道路際にあり，奥側半分は土坑，溝が疎らにみられる程度で遺構の空白域である。ＳＤ９からは染付，青磁が出土している。

９号溝（ＳＤ９，第63図）

北側区画溝で延長約10.2ｍ，幅20㎝，深さ４㎝を測る。*169*は青磁の口縁部破片で被熱痕を残す。体部外面にはやや広めの線描連弁文を描く。

35号建物（ＳＢ35，第60・61図，図版45・46）

道路際に位置する南北棟の建物で道路と方位を揃える。建物は柱の配置が一定でないが５間×３間程度の建物を想定する。更に南側に１間の張り出しが付く。桁行は７ｍ，梁行は６ｍ，床面積は42㎡で，張り出しを含むと46.5㎡の大型建物になる。ＳＢ35は２棟分の柱穴群とみる解釈も可能である。つまり，東側の柱穴群を使用して６間×１間の南北に細長い建物と５間×３間の建物に分離する解釈である。しかしここでは北東側の柱穴に明確な重複が認められないことや井戸の配置状況から１棟とした。柱穴は20㎝～30㎝の小型柱穴が多く，掘り込みも10㎝程度と浅い。付属遺構にはＳＫ７・105，ＳＥ96，ＳＤ６などがある。

７号土坑（ＳＫ７，第62図，図版46）

建物内の北東隅に位置する略隅丸方形の大型土坑である。長径2.2ｍ，深さは10㎝を測る。埋土は暗灰黄色シルト，黄褐色シルト層で炭化物が僅かに混じる。出土遺物には桶，木札，しゃもじ，櫛，加工材，小札がある。また，周辺域出土遺物に中世土師器（*165*）がある。

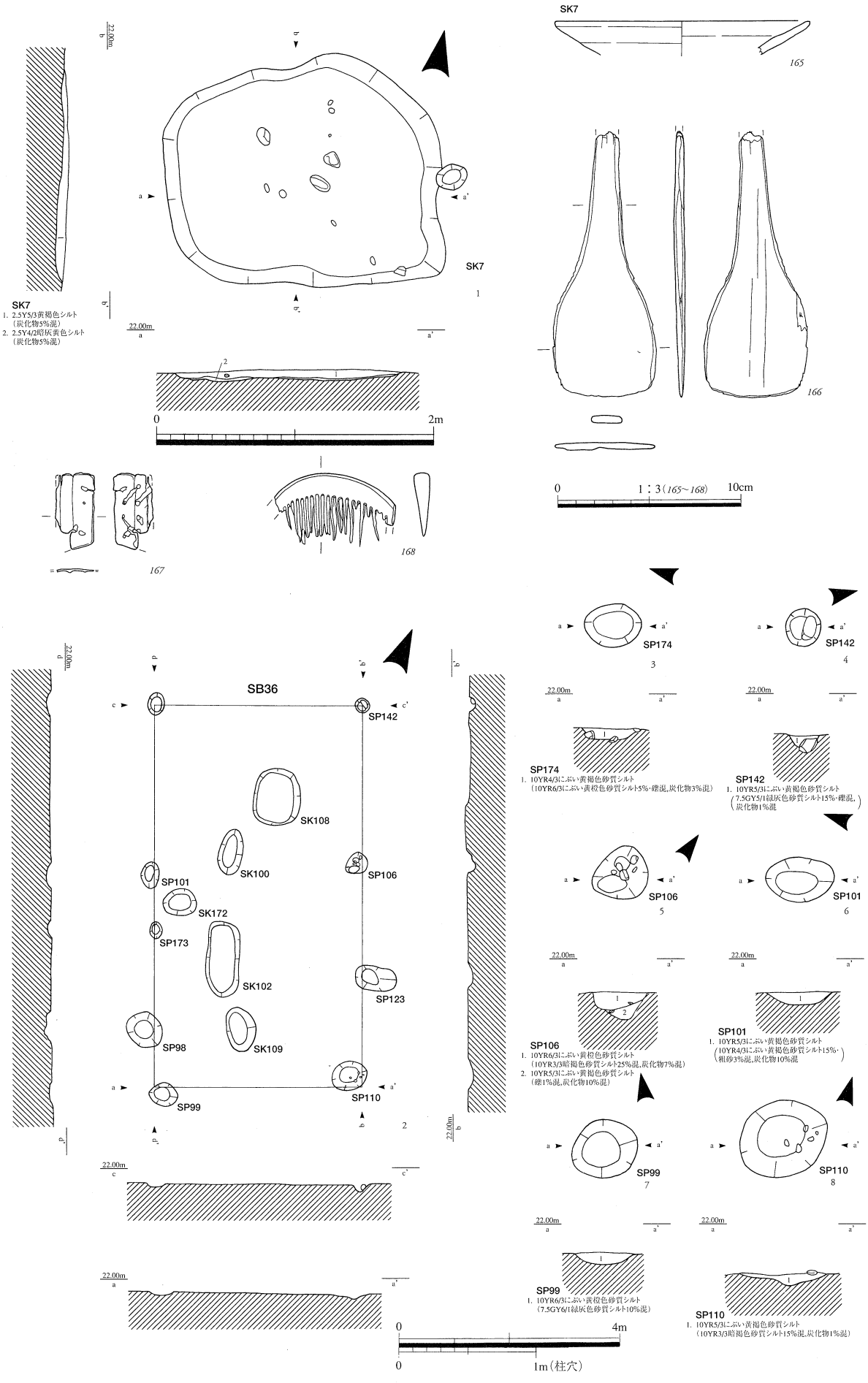
*166*はヒノキ材のしゃもじで，柄の先端を欠く。*167*は黒漆塗りの小札で２枚程度の漆膜部分が残る。*168*の櫛は白木材の隅切り半月形の横櫛で，背の断面は台形を呈する梳櫛である。*165*はロクロ成形の中世土師器口縁部破片で，15世紀後半～16世紀前半の遺物である。

105号土坑（ＳＫ105，第61図，図版46）

建物内の北東側に位置する小型の浅い土坑である。土坑内には人頭大から拳大の河原石が敷き詰められる。石の隙間に入る埋土はオリーブ褐色シルトで上層は炭化物層である。

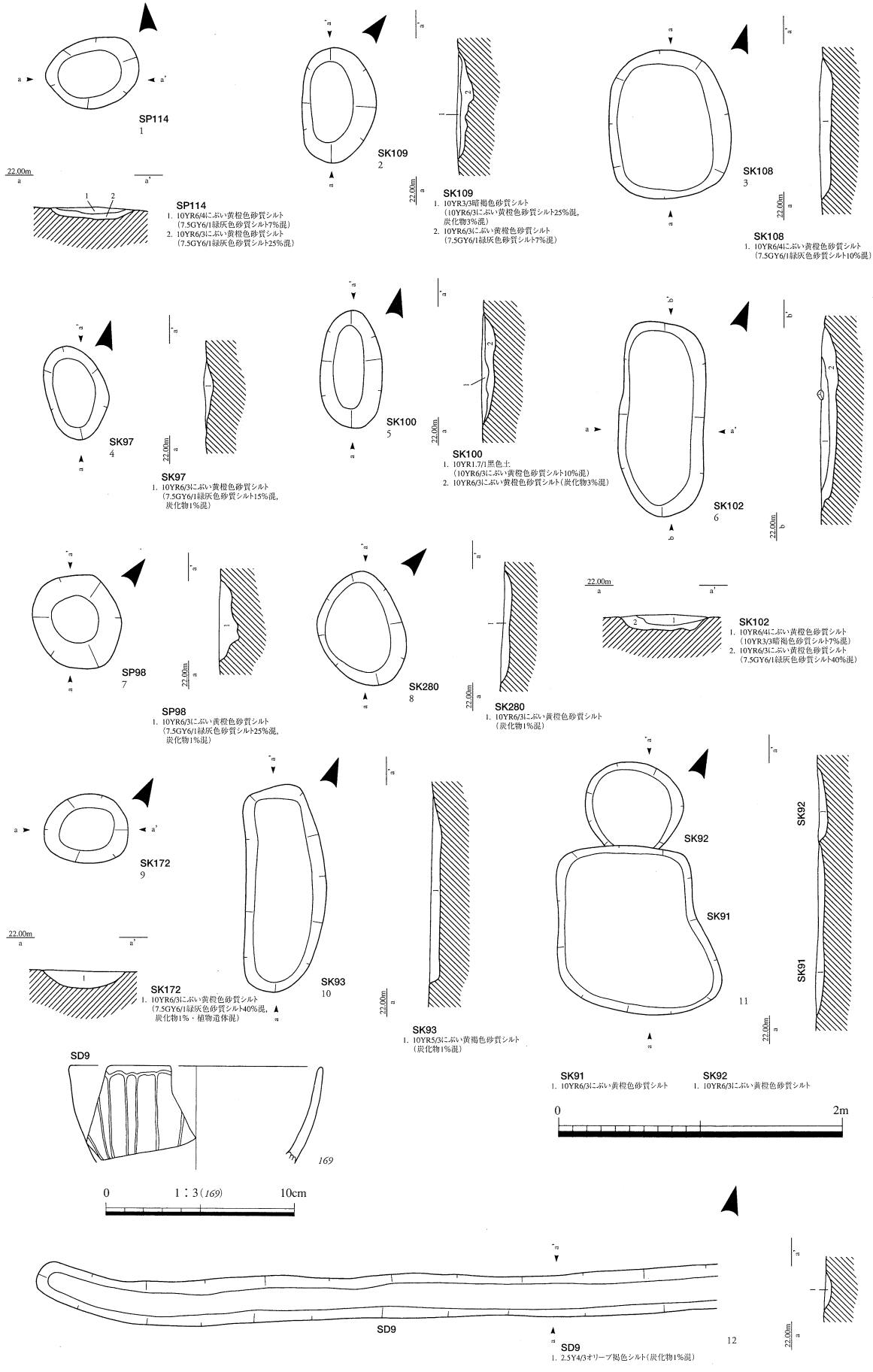
96号井戸（ＳＥ96，第61図，図版46）

建物の西側に隣接する石組井戸である。掘形は円形で，深さは64㎝を測る。地震の影響で井戸の上



第62図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK7　2. SB36　3. SP174　4. SP142　5. SP106　6. SP101　7. SP99　8. SP110
SK7（*165～168*）



第63図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SP114　2. SK109　3. SK108　4. SK97　5. SK100　6. SK102　7. SP98　8. SK280　9. SK172　10. SK93
11. SK91・SK92　12. SD9
SD9（*169*）

部は北側にずれ石組は崩落している。出土遺物には中世土師器（*161*）がある。

*161*は口径13.2cmの大型品で，胎土には海綿骨針を含む。口縁端部は丸味をもって収められ，外面には軽いヨコナデを施す。

6号溝（ＳＤ6，第61図）

建物の北東コーナー周辺に逆「Ｌ」字状に巡る溝で，幅は一定でないが30cm前後，深さは4㎝～10㎝である。埋土には河原石が多く混じる。出土遺物には瀬戸美濃，白磁，漆器椀，加工棒がある。

*162*は長さ7.3cmの加工棒で面取りがなされる。*163*は口径13cmの白磁皿の口縁部破片である。*164*は口径17cmの漆器椀の口縁部破片で，内外面に朱漆を塗る。

36号建物（ＳＢ36，第60・62図，図版45・46）

35号建物と重複する。切り合いはみられないが，道路1西側建物群の配置状況から36号建物が新しいと推定する。3間×1間程度の南北棟の側柱建物である。桁行は6.9m，梁行は3.4m，床面積は23.46㎡を測る中規模建物である。柱穴の配置は不揃いで2間×1間の建物の可能性もある。柱穴の規模は25cm～60cm，深さは10cm前後である。付属遺構は明確には抽出できないが，ＳＫ108・100・102・109を上げておく。

108号土坑（ＳＫ108，第63図）

建物内の北側中央に位置する。長径1.05m，短径86cm，深さ10cmの楕円形の土坑で，底面は平坦である。埋土はにぶい黄橙色砂質シルトの単層で，炭化物は含まない。

100号土坑（ＳＫ100，第63図）

建物内の中央北寄りに位置する長楕円形の土坑である。長径は82cm，深さは10cmと浅い。底面は凸凹する。埋土は下層はにぶい黄橙色砂質シルト，上層は黒色土で焼けた小木片が混じる。

102号土坑（ＳＫ102，第63図）

建物内の中央南側に位置する長楕円形の土坑である。長径1.35m，深さは12cmを測る。埋土はにぶい黄橙色砂質シルト層がレンズ状に堆積する。

109号土坑（ＳＫ109，第63図）

建物内の南側中央に位置する長楕円形の土坑である。長径は80cm，深さは12cmを測り，底面は一定でなく凸凹する。埋土は下層ににぶい黄橙色砂質シルト，上層に暗褐色砂質シルトが堆積する。

区画6（第60図）

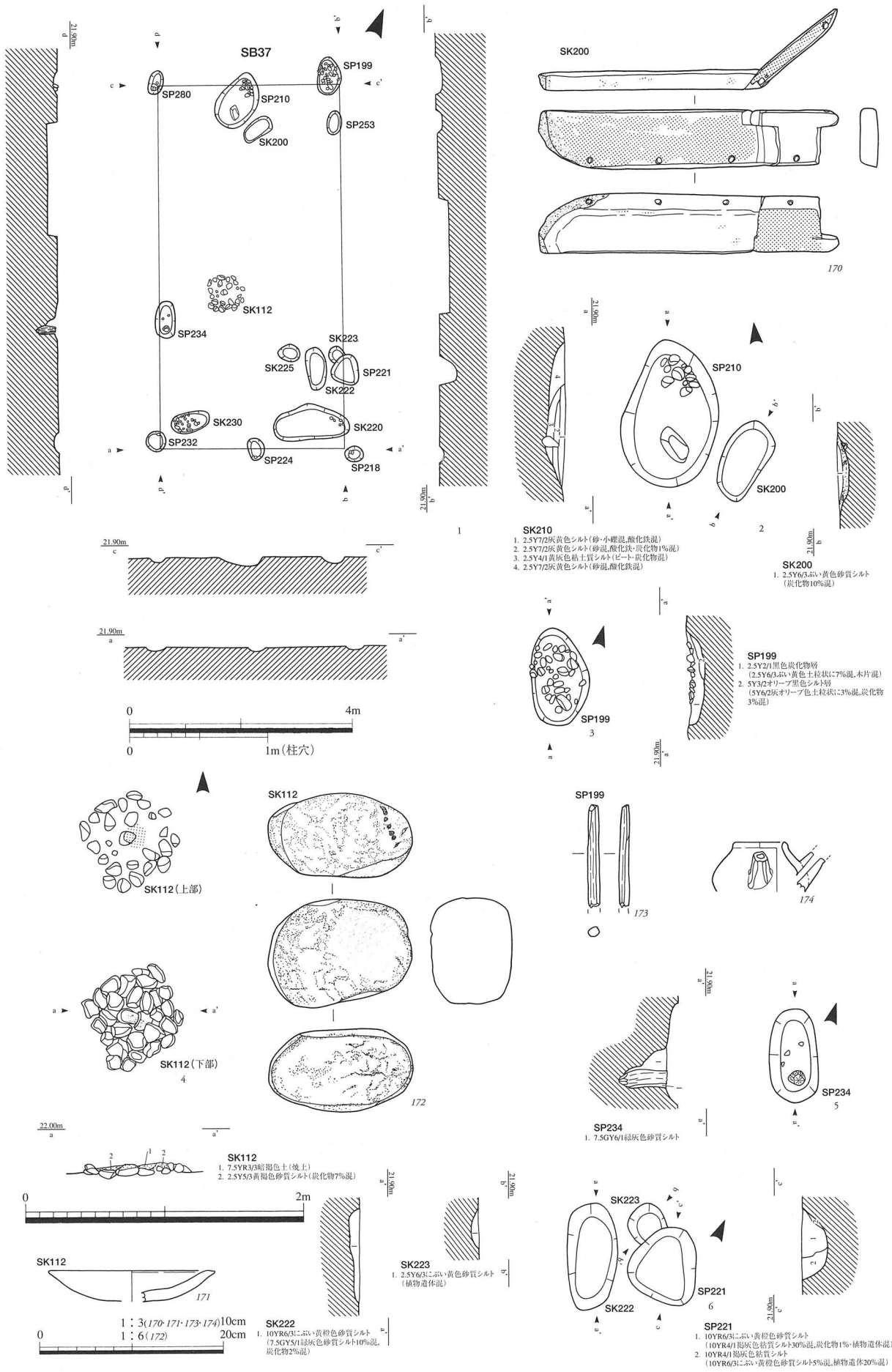
Ｃ地区調査区の北側に位置する区画でＳＤ9・90・213で囲まれる。奥側の溝ＳＤ90は部分的に途切れる。また，北側の溝ＳＤ213は試掘トレンチに奥側が切られる。地口は約10.7m，奥行は約19mで面積は203㎡の小区画である。区画内の遺構には掘立柱建物1棟，大型土坑3基，溝がある。掘立柱建物は道路際にあり，奥は南西隅に大型土坑がみられるのみで遺構の空白域である。

37号建物（ＳＢ37，第60・64図，図版45・46）

道路際に位置する南北棟の側柱建物である。柱穴の配置は試掘トレンチが横切るため明確でないが，3間×2間の建物であろう。桁行は6.9m，梁行は3.4m，床面積は23.46㎡の中規模建物である。柱穴の規模は30cm～70cm，深さは8㎝～34cmを測る。西側桁行柱列のＳＰ234には柱根が残る。付属遺構にはＳＫ112・200・210・220・230がある。

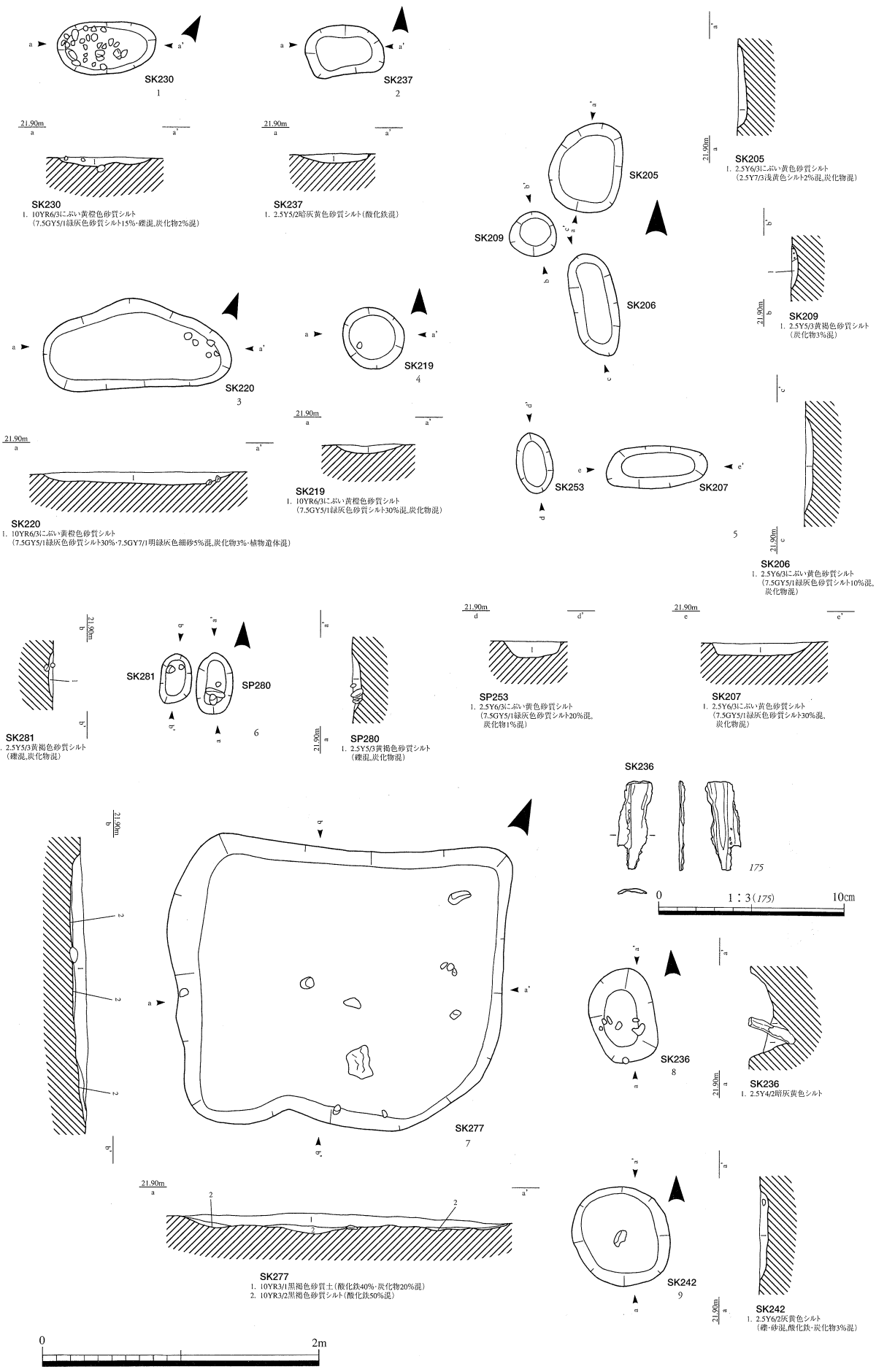
199号柱穴（ＳＰ199，第64図）

北東隅の柱穴で規模が他に比べて大きく重複が想定される。埋土上面には石敷がみられる。埋土はオリーブ黒色シルト層や黒色炭化物層で自然木などを含む。出土遺物には瀬戸美濃，白磁，硯，加工



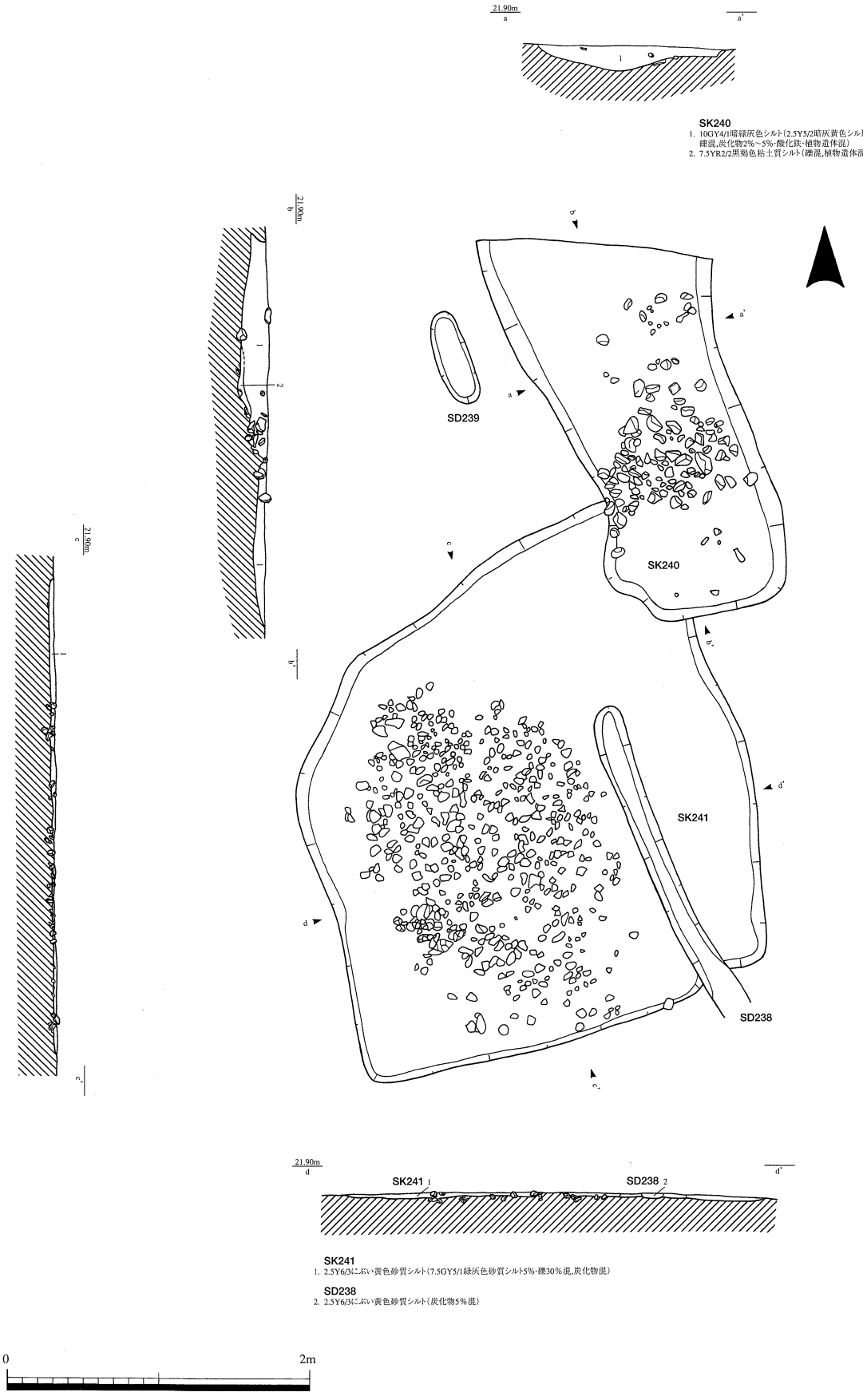
第64図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB37　2. SK200・SK210　3. SP199　4. SK112　5. SP234　6. SP221・SK222・SK223
SK200(*170*)　SK112(*171*・*172*)　SP199(*173*・*174*)

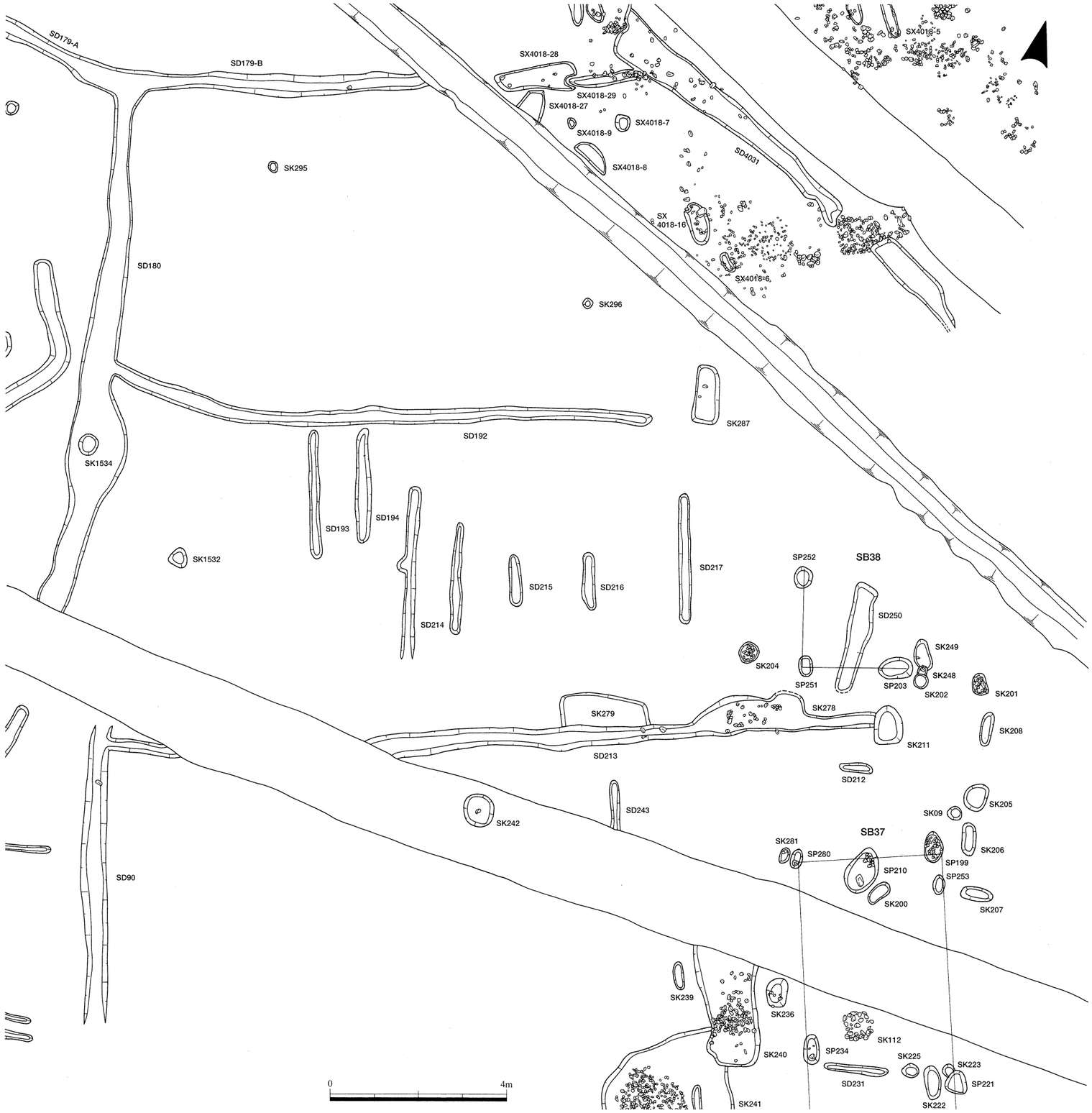


第65図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK230　2. SK237　3. SK220　4. SK219　5. SK205・SK206・SK207・SK209・SP253　6. SP280・SK281　7. SK277
8. SK236　9. SK242
SK236（*175*）



第66図　遺構実測図（中世）
SK240・SK241・SD238



第67図　遺構実測図（中世）
SB38

棒がある。*173*は長さ5.7cmの折れた箸である。*174*は瀬戸美濃製品の小型の水滴で，鉄釉がかかる。

234号柱穴（ＳＰ234，第64図）

西側桁行柱穴で形状は楕円形を呈し，長径70cm，深さは44cmを測る。柱根は直径約14cmの表皮付きの丸太で先端を尖らし，突き込む状態で埋め込まれる。

112号土坑（ＳＫ112，第64図，図版46）

建物内のほぼ中央に位置する石敷遺構である。検出面が高く掘り込みは確認できない。石敷は拳大の河原石を60cmの方形に敷き詰める。石敷の中央部は円形状に被熱痕を残す。被熱痕の範囲は直径16cmで上部では焼土，下部では吸炭層となる。*171*の中世土師器は周辺出土遺物である。口径8.9cmの小型法量で，口縁端部は僅かに外反させる。胎土には海綿骨針を僅かに含み，体部外面から口縁部内面にかけて煤が付着する。

200・210号土坑（ＳＫ200・210，第64図）

建物内の北側梁柱列に隣接する。ＳＫ200は長径58cm，深さ４cmの長楕円形の土坑である。底部には薄く炭化物を含む層がみられる。出土遺物には折敷がある。*170*は折敷側板の断片で黒漆を塗る。側面と小口面に木釘穴がみられる。ＳＫ210は略楕円形を呈し，深さは16cmを測り，北側に土坑が重複する。

220号土坑（ＳＫ220，第65図）

建物内の南東隅に位置する略長楕円形の土坑である。長径は1.35m，深さは10cmを測る。底面は平坦で，埋土は黄橙色砂質シルトの単層で植物遺体，自然木が含まれる。

230号土坑（ＳＫ230，第65図）

建物内の南西隅に位置する楕円形の小型土坑で，埋土に礫や拳大の河原石が混じる。

236号土坑（ＳＫ236，第65図）

37号建物の西側に位置し桁行柱列から外れる。長径67cmの楕円形を呈し柱根が残る。柱根は北側にやや傾斜して長さ48cmが遺存し，新たな建物が予想される。その他の出土遺物には飾り金具（*175*）破片がある。

240・241号土坑（ＳＫ240・241，第66図）

両土坑は重複し，ＳＫ240が新しい。ＳＫ240は不整形の溝状の大型土坑で北側は試掘トレンチに切られる。現存長径は約2.8m，深さは20cmで底面の深さは一定でなく中央付近が最も深い。中央南側には拳大から人頭大の河原石の集石がみられるが纏まりは明確でない。埋土は暗緑灰色シルト，黒褐色粘土質シルト層で植物遺体，木片が含まれる。

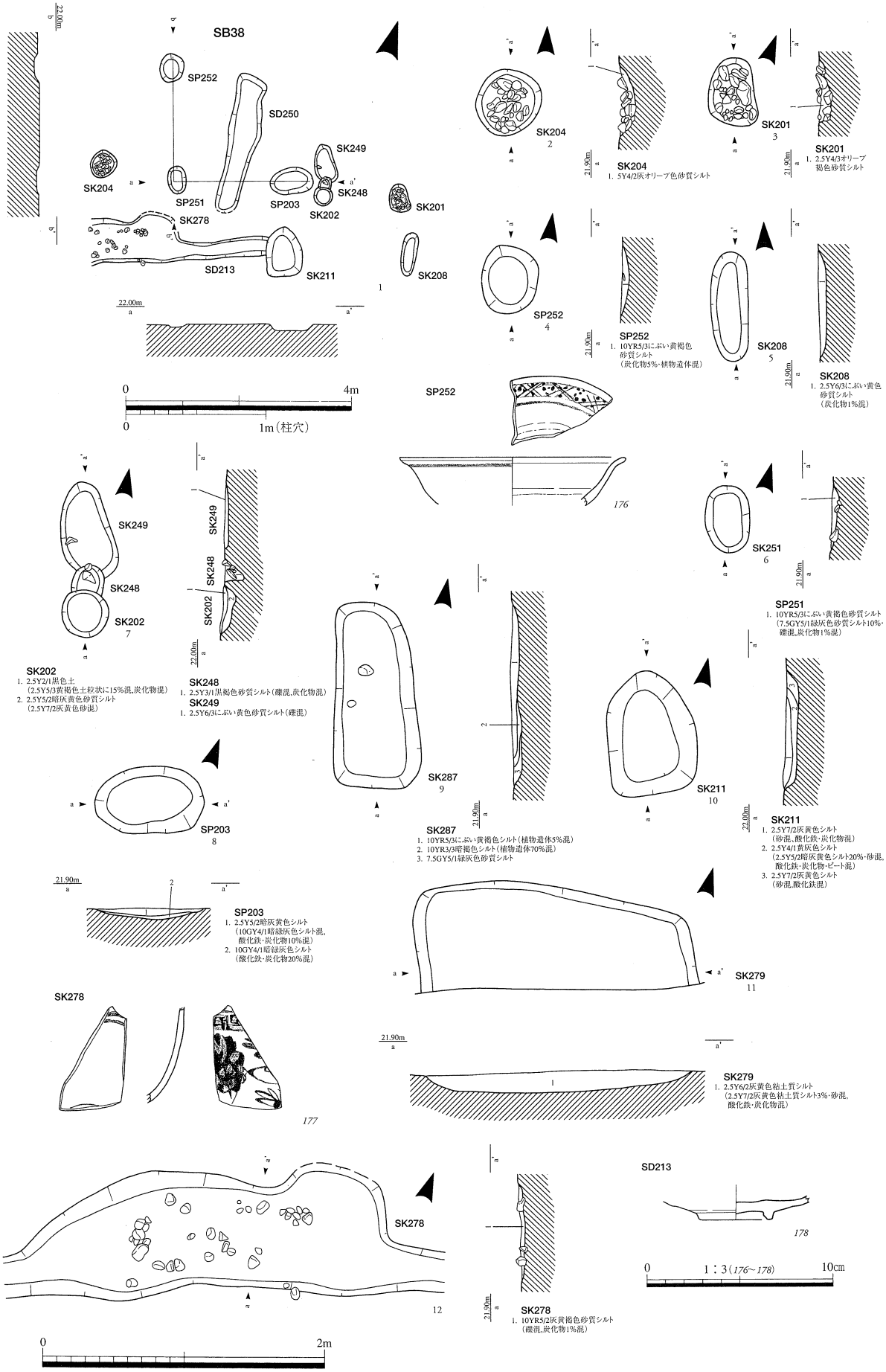
ＳＫ241は不整形の大型土坑で東西幅は約3.07mを測る。掘り込みは４cmと浅く，礫が多く混入する。埋土はにぶい黄色砂質シルト層で炭化物が僅かに混ざる。

277号土坑（ＳＫ277，第65図，図版46）

区画の南西隅に位置する略隅丸方形の大型の土坑である。深さは14cmと浅い。底面は僅かに凸凹し，埋土は黒褐色砂質シルト層で炭化物が比較的多く混ざる。

区画７（第67図）

北側に位置しＳＤ213・180・192で三方を囲まれる小区画である。奥の区画溝ＳＤ180の南端は試掘トレンチに切られる。地口は約７m，奥行は約17mで面積は約119m^{2}で最小区画である。区画内の遺構には掘立柱建物１棟，土坑，溝がある。掘立柱建物は道路際にあり，中央部周辺には畝状遺構の溝が南北方向に延びる。奥は遺構の空白域である。



第68図　遺構・遺物実測図(中世)

1. SB38　2. SK204　3. SK201　4. SP252　5. SK208　6. SP251　7. SK202・SK248・SK249　8. SP203　9. SK287　10. SK211　11. SK279　12. SK278

SP252(*176*)　SK278(*177*)　SD213(*178*)

213号溝（ＳＤ213，第67・68図）

南側の区画溝で，幅は一定せず28cm～50cm，深さは６cmと浅い。溝の手前から中程にかけてＳＫ211・278・279と重複する。出土遺物の*178*は白磁皿の破片で煤が付着する。

38号建物（ＳＢ38，第67・68図，図版46）

道路際に位置する建物で１間×１間分のみ検出された。地口幅から推定すると，おそらく２間×１間程度の南北棟建物が存在したのであろう。梁行は2.2mを測る。柱穴ＳＰ252から染付（*176*）が出土した。*176*は端反の皿の破片で外面に１条の界線，内面に四方襷文がみられる。体部下半の内面は露胎になる。建物に伴う遺構は明確でない。

204号土坑（ＳＫ204，第68図）

建物の西側１mに位置する円形の小型土坑で直径は50cm，深さ12cmを測る。土坑内には拳大の河原石の集石がみられる。埋土は灰オリーブ色砂質シルト層である。

201号土坑（ＳＫ201，第68図）

道路際に位置する略楕円形の小型土坑である。長径48cm，深さ８cmを測り，土坑内は拳大から人頭大の河原石が充填される。埋土はオリーブ褐色砂質シルトで炭化物，自然木が混じる。

278号土坑（ＳＫ278，第68図）

南側の区画溝ＳＤ213と重複するが新旧関係は明確でない。深さは４cmと浅く，埋土には河原石が混じる。出土遺物には染付（*177*）がある。口縁部の小破片で，内面に２条の界線，外面に雷文帯と唐草文を黒味の釉調で描く。

279号土坑（ＳＫ279，第68図）

南側の区画溝ＳＤ213と重複し切られる。隅丸長方形を呈し，長径1.9m，深さ16cmを測る。底面は平坦で，埋土は灰黄色粘土質シルトの単層で炭化物が僅かに混じる。

Ｃ地区道路西側包含層出土遺物（第69・70図）

包含層出土遺物には*186*の須恵器，*179*～*185*の中世土師器，*187*の坩堝，*188*～*192*の瀬戸美濃，*193*の青磁，*194*～*197*の染付，*198*～*200*の白磁，*201*・*205*～*207*の金属製品，*208*の越前，*209*の珠洲，*210*～*212*の漆器，*213*の石製品，*214*～*218*の木製品がある。上層の近世畠跡は中世の薄い包含層を削平して構築されている。このため，近世の畠跡検出時に出土した中世の可能性がある遺物をここに含めた。但し，木製品の時期は明確でない。

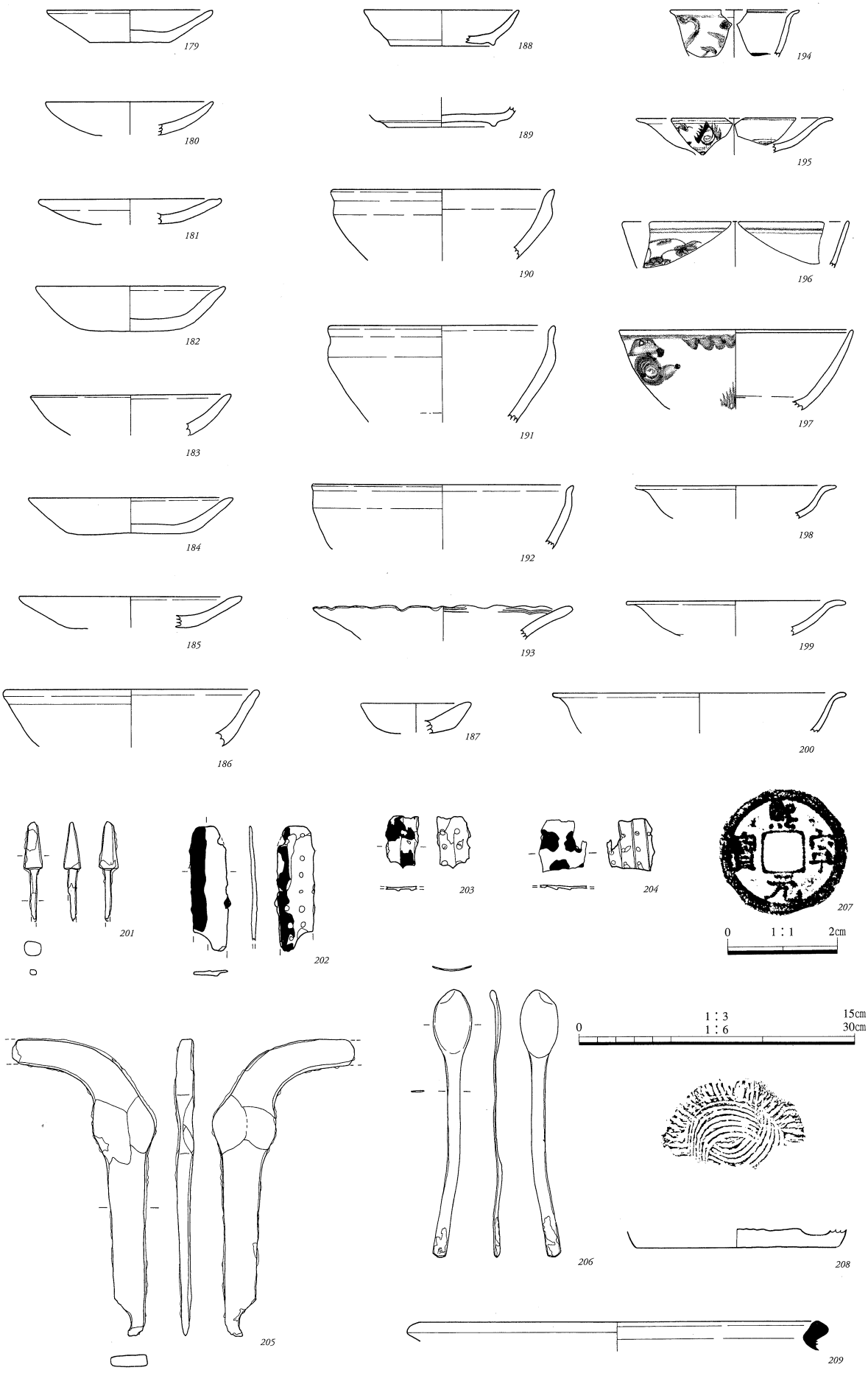
*186*は口径13.6cmの須恵器杯Ａの焼成不良品で時期は８世紀中頃であろう。遺跡からは古代の遺物は断片的に出土している。砂礫層から出土し，磨滅した遺物が多いことから氾濫時に上流から流されてきたものであろう。

179～*185*は中世土師器皿で口径は9.0cm～12.0cmを測る小・中型法量品で，全て手ずくね成形土器である。口縁部は僅かに外反して端部が巻き込むもの，内湾気味に立ち上がるものがあり前者が多い。底部は*182*・*184*のように平坦で比率を増す個体が多くなる。煤が付着する個体が４個体ある。16世紀中頃～後半代の遺物である。

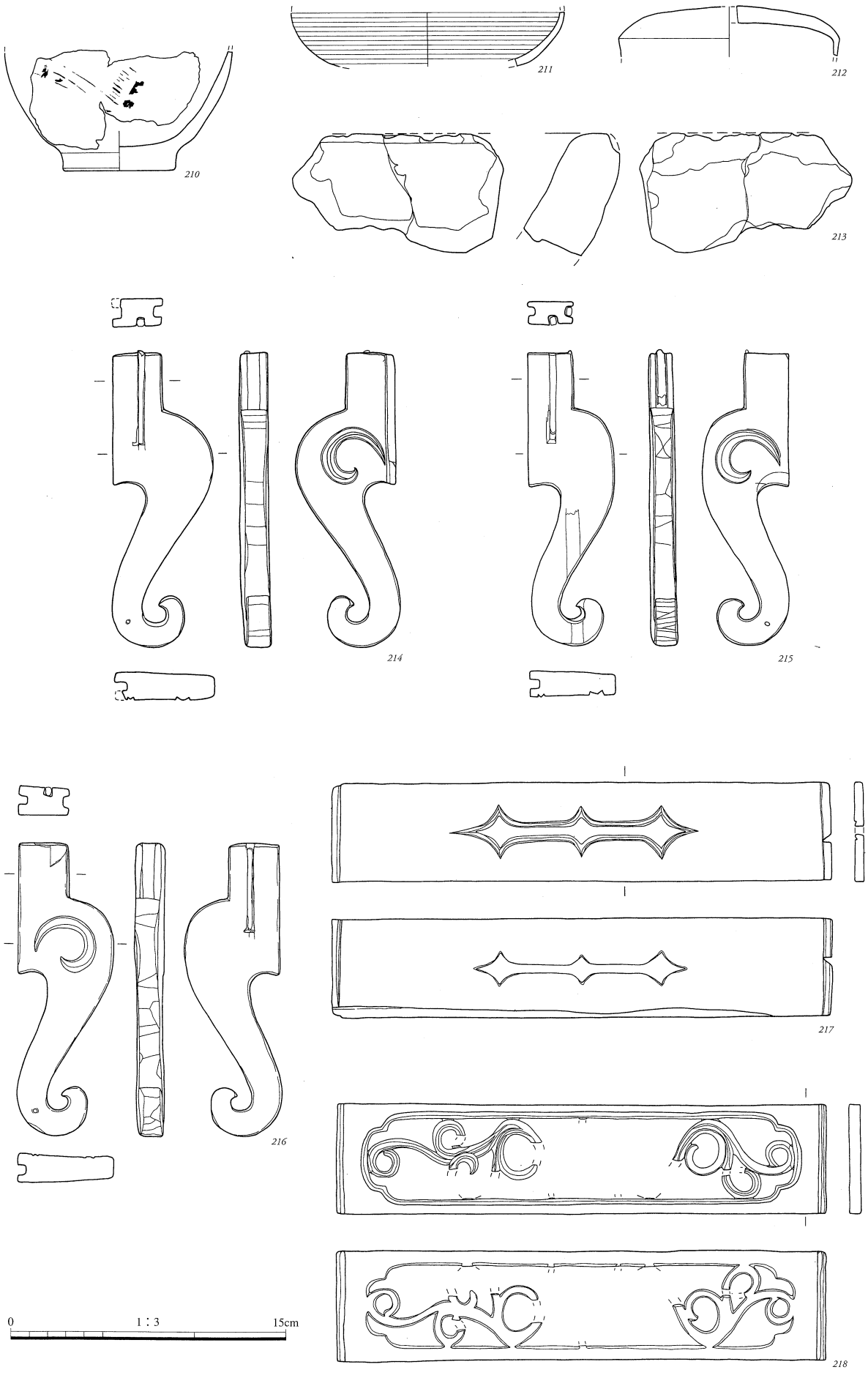
188～*192*は瀬戸美濃である。*188*は口径8.4cmの丸皿Ⅰ類で灰釉がかかる。藤沢大窯編年の２段階に該当する。*189*も同様に灰釉の丸皿である。*190*～*192*は天目茶椀で口径は12.2cm～14.2cmを測る。体部内外面に鉄釉がかかり，口唇部で屈曲し，端部は外反気味におさめる。

*193*は青磁稜花皿の口縁部破片で内面に３条の弧線が描かれる。

194～*197*は染付で，*194*は口径７cmの杯で外面に草花文，内面に界線が描かれる。*195*は皿で外面



第69図　遺物実測図（中世）　（*207*　1/1，*179～206・208*　1/3，*209*　1/6）
包含層



第70図　遺物実測図（中世～近世）　（*210～218*　1/3）
包含層

に牡丹唐草文，内面に玉取獅子が描かれる。小野編年のⅢB1群Ⅶ類[注2]である。*196*は小野編年のE類に該当する饅頭心の碗である。*197*は器壁が厚く文様が稚拙で趣を異にする。

198～*200*は白磁端反の皿で，口径は10.8cm～16.0cmを測る。*199*の体部内面は露胎となる。

*187*は口径6cmの未使用の坩堝で胎土には砂礫が多く混入する。

201・*205*～*207*は金属製品で，*201*は鉄鏃で茎の先端部を欠く。鏃の長さは5.5cmで4面に面取りしノミ先形にする。茎の断面形状は3mm～4mmの方形である。*202*～*204*は皮芯の小札で，*202*の幅は約2cm，片方の先端を欠くが現存する長さは6.8cmを測る。外面には朱漆が塗られ，重ね部分には綴穴痕跡がみられる。*203*・*204*は漆膜片で黒漆地に朱漆が上塗りされる。*204*は花文様を表す。*205*は鳶口で先端を欠く。茎の断面は長方形を呈し，先端は内側に丸めて目釘穿とする。*206*は銅製の匙で全長14.5cm，厚さ1mmを測る。*207*は銅銭で銭貨名は「熙寧元宝」で初鋳は1068年である。

*208*は越前擂鉢の底部破片で土師質焼成である。*209*は珠洲の甕口縁部破片で，吉岡編年のⅣ期かⅤ期[注3]の遺物であろう。

210～*212*は漆器で，*210*は椀で口縁部を欠く。高台はやや高めの平高台で，体部は黒漆の上に朱漆で文様を描く。文様は剥落が著しく明確でないが細線がみられ草花や松などの蓬莱文の一種であろう。*211*は内外面朱漆の椀，*212*は蓋としたが時期を含めて明確でない。

*213*は石鉢の口縁部破片で厚みは約3.3cmを測る。石材は凝灰角礫岩である。

214～*216*は組物容器の脚部と推定され3点セットをなす。接地面側は「S」字状に整形され，容器本体とはほぞ溝で組合わさる。*217*・*218*は透かしが入る長方形の板状の加工材で，*214*～*216*の脚部と同一地点から出土していることから同一個体の破片と推定する。また，出土層位はⅠ層であり時期は明確でないが近世から近代の遺物でなかろうか。

区画8（第67図）

C・D区にまたがる区画で，SD192・180・179-B（SX4018-28・4018-29）で区画される。南北の区画溝は奥側から中程までで道路際にはみられない。地口は約7m，奥行は約19mで面積は約133m²の小区画である。区画内の遺構は道路際に石敷と小土坑があるが，建物は明確でない。中程から奥は空白域である。石敷は検出面が高く掘り込みは不明である。小礫から拳大の河原石を面的に敷き詰められるが纏まりとしては捉えられない。部分的に人頭大の大型の河原石が集中する箇所があり，作業台的な用途が推定される。石敷内には炭化物や小鍛冶滓が含まれる。

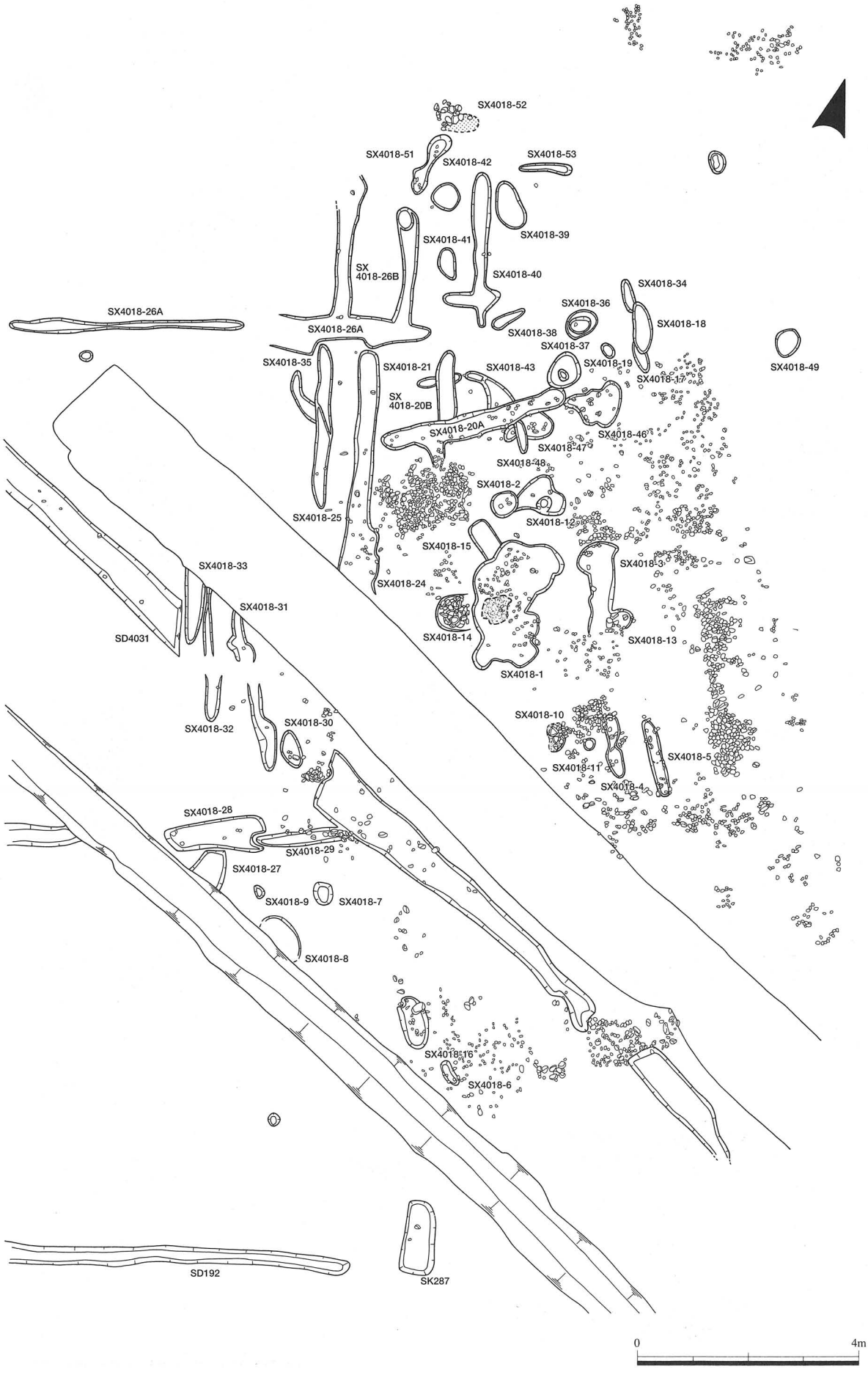
4070号土坑（SK4070，第75図）

石敷撤去後に確認した遺構である。石敷面で検出したSX4018-6・4018-16の直下に当たり同一遺構の可能性が高い。不整形の浅い土坑である。出土遺物には瀬戸美濃がある。*230*は灰釉のひだ皿で，藤沢大窯編年の3段階にあたる。

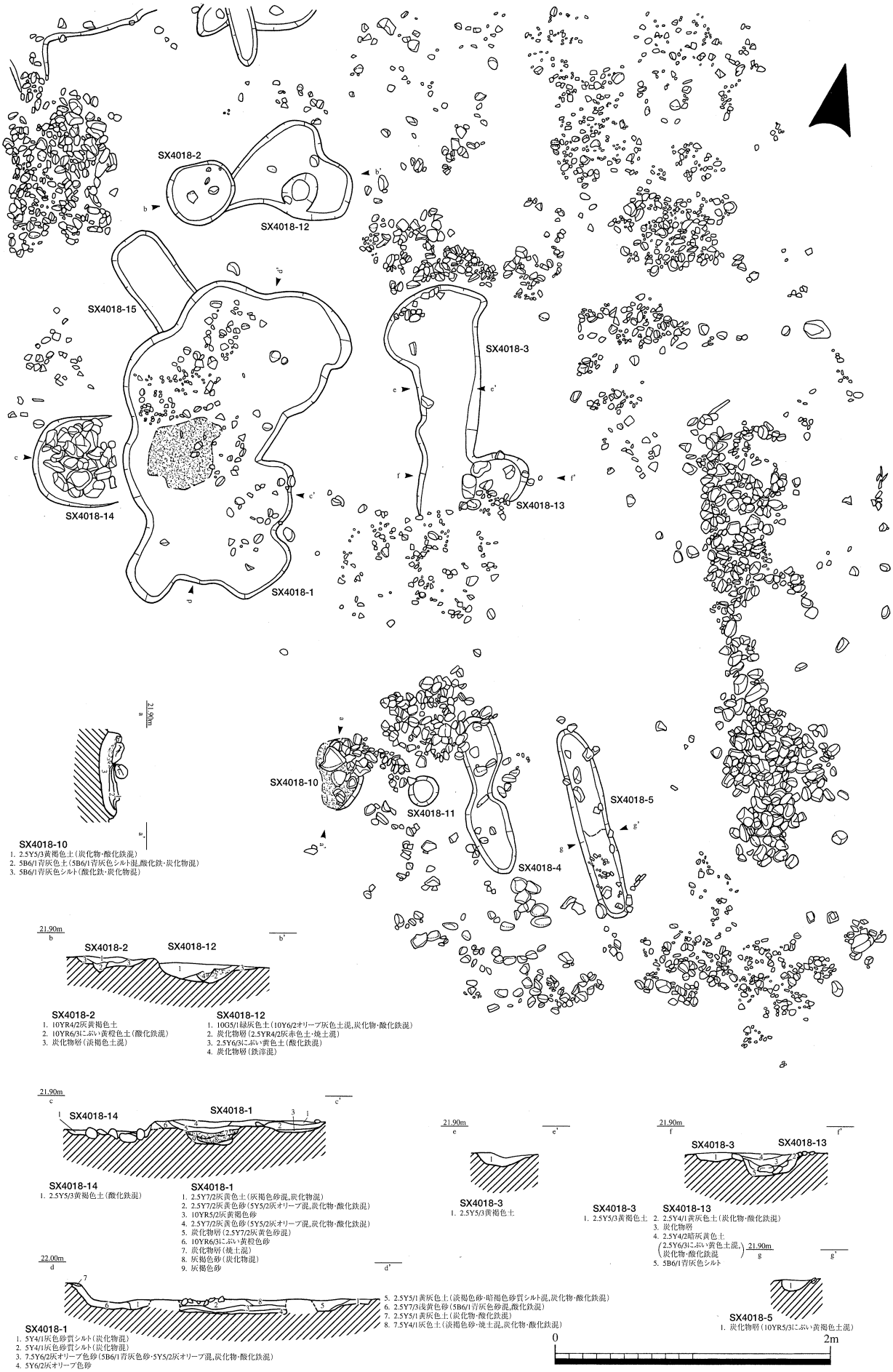
区画9（第71図）

SD179-B（SX4018-28・4018-29）・SX4018-26Aの南北区画溝で区切られるが，奥側の溝はみられず，また南側の区画溝SD179-Bは道路2まで延びることから南北方向の区画が大きく変化するのかも知れない。地口は約8.8m程度である。区画内の遺構は道路際に石敷・土坑・溝がみられるが建物は未検出である。奥側は明確な遺構はない。石敷は小礫から拳大の河原石を使用する。石敷の検出面が高く攪乱を受けた部分もあり，また石敷の南西隅は試掘トレンチに切られるなど遺存状況は良くない。

石敷の範囲は道路方位に沿うようにほぼ長方形を呈し，間口は約8.5m，奥行約6.5m程度になり，

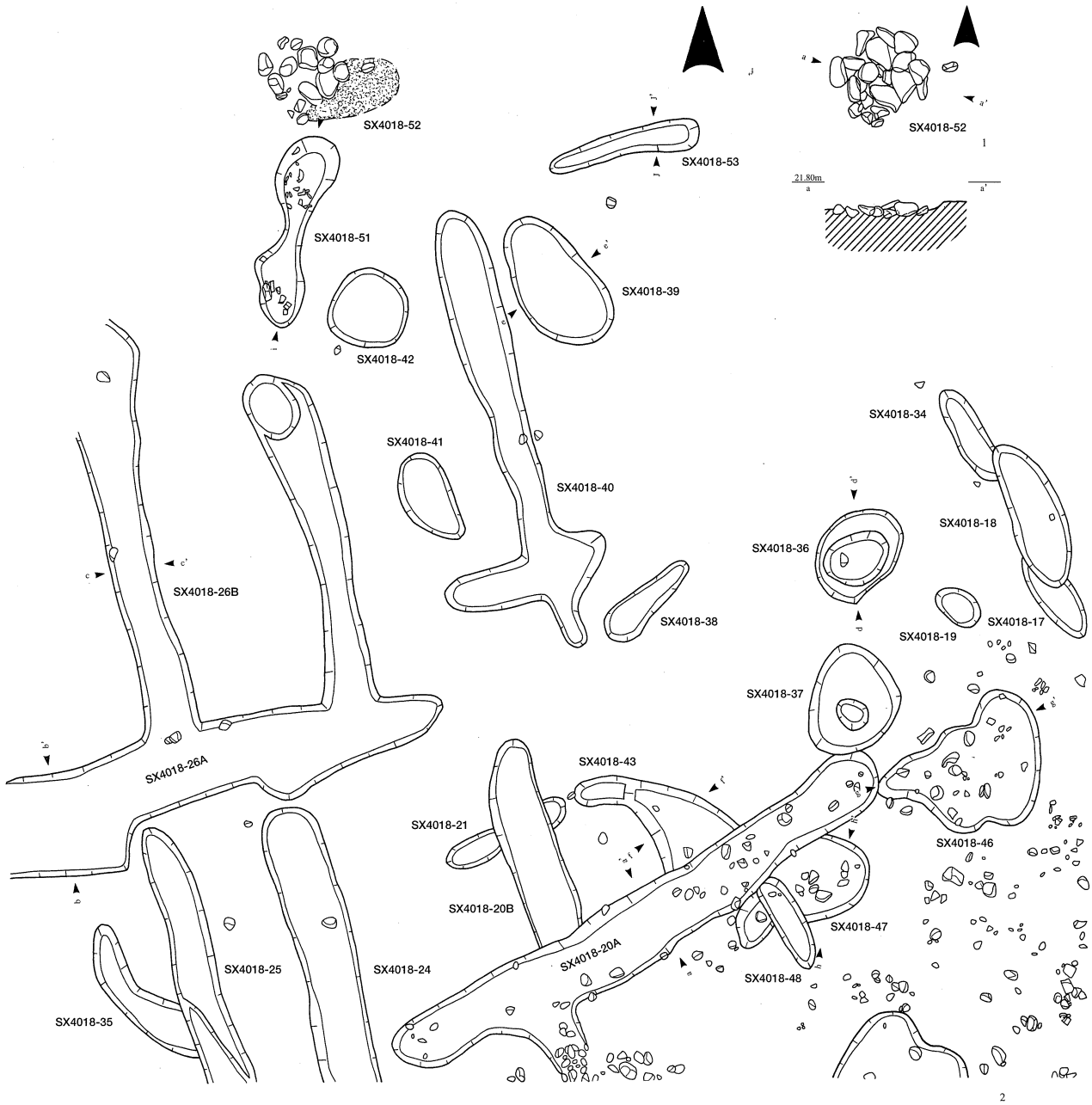


第71図　遺構実測図（中世）
SX4018-1～21, 24～43, 46～49, 51～53



第72図　遺構実測図（中世）

SX4018—1，2，3，5，10，12，13，14



第73図　遺構実測図（中世）

1. SX4018−52　2. SX4018−20A，26A，26B，36，39，43，46，47，51，53

間口幅全体に石敷される。石敷内には炭化物，小鍛冶滓，羽口の小破片が含まれ，作業面と推定される。また，石敷内には土坑や溝が掘り込まれる。

4018-1号土坑（ＳＸ4018-1，第71・72図，図版48）

石敷のほぼ中央に位置する不整形の土坑で，数基の土坑の重複が想定される。土坑の中央部底面には40cm～50cmの範囲に炭化物層がみられる。また，土坑の北側には面的な石敷がみられ埋め戻される。

出土遺物には中世土師器，小札がある。*219*～*221*は中世土師器皿で，*219*・*220*の胎土は粘土質で海綿骨針を含まないなど通有の胎土と異なる。口縁端部は軽く内側に巻き込む。*221*は完形品で口縁部は内湾気味におさめ，外面には１条のヨコナデを施す。中世土師器の時期は16世紀第２四半期～第３四半期である。*224*は黒漆塗りの小札の破片で２列の綴穴を残す。

4018-14号土坑（ＳＸ4018-14，第71・72図，図版48）

ＳＸ4018-1と重複し切られる。直径66cmの円形の土坑で，土坑内には拳大の河原石が敷き詰められる。石敷上には薄く炭化物層がみられ，鍛冶関連遺構である。

4018-2・4018-12号土坑（ＳＸ4018-2・4018-12，第71・72図，図版48）

両土坑は重複するが新旧関係は不明である。ＳＸ4018-2は50cmの円形土坑で，底面に炭化物が多く堆積する。ＳＸ4018-12は不整形の土坑で，埋土は炭化物を含み，中位の炭化物層中に小粒の鍛冶滓が多く混じる。その他の出土遺物に桶の断片，加工材がある。

4018-3・4018-13号土坑（ＳＸ4018-3・4018-13，第71・72・74図，図版48）

ＳＸ4018-3はＳＸ4018-1の東側に隣接する溝状の不整形の土坑で，ＳＸ4018-13と重複し切られる。南側は掘り込みが浅く途切れるが，ＳＸ4018-4に連なる可能性がある。ＳＸ4018-3の埋土は黄褐色土の単層で，出土遺物に銅製品がある。*225*はねじりが入る火箸状の銅製品で折って丸められている。

ＳＸ4018-13は直径34cmの略円形の小型土坑で，レンズ状に石敷がみられ，表面は被熱痕を残す。埋土は炭化物を含む褐色系の土層である。

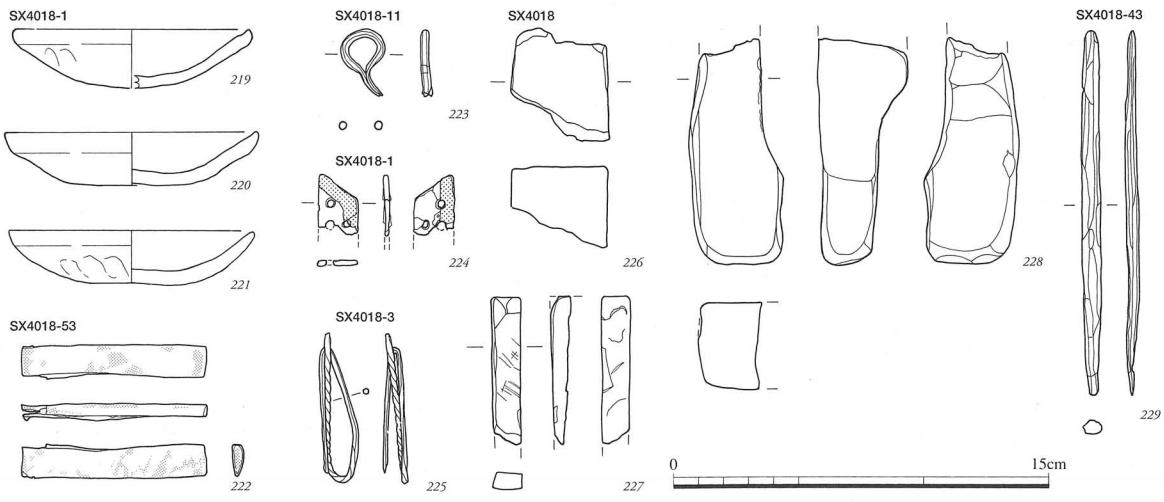
4018-5号土坑（ＳＸ4018-5，第71・72図，図版48）

ＳＸ4018-4と並列して南側に位置する溝状の土坑で，南側半分の埋土は炭化物層である。出土遺物には炭化材，曲物の底板がある。

4018-10号土坑（ＳＸ4018-10，第71・72図）

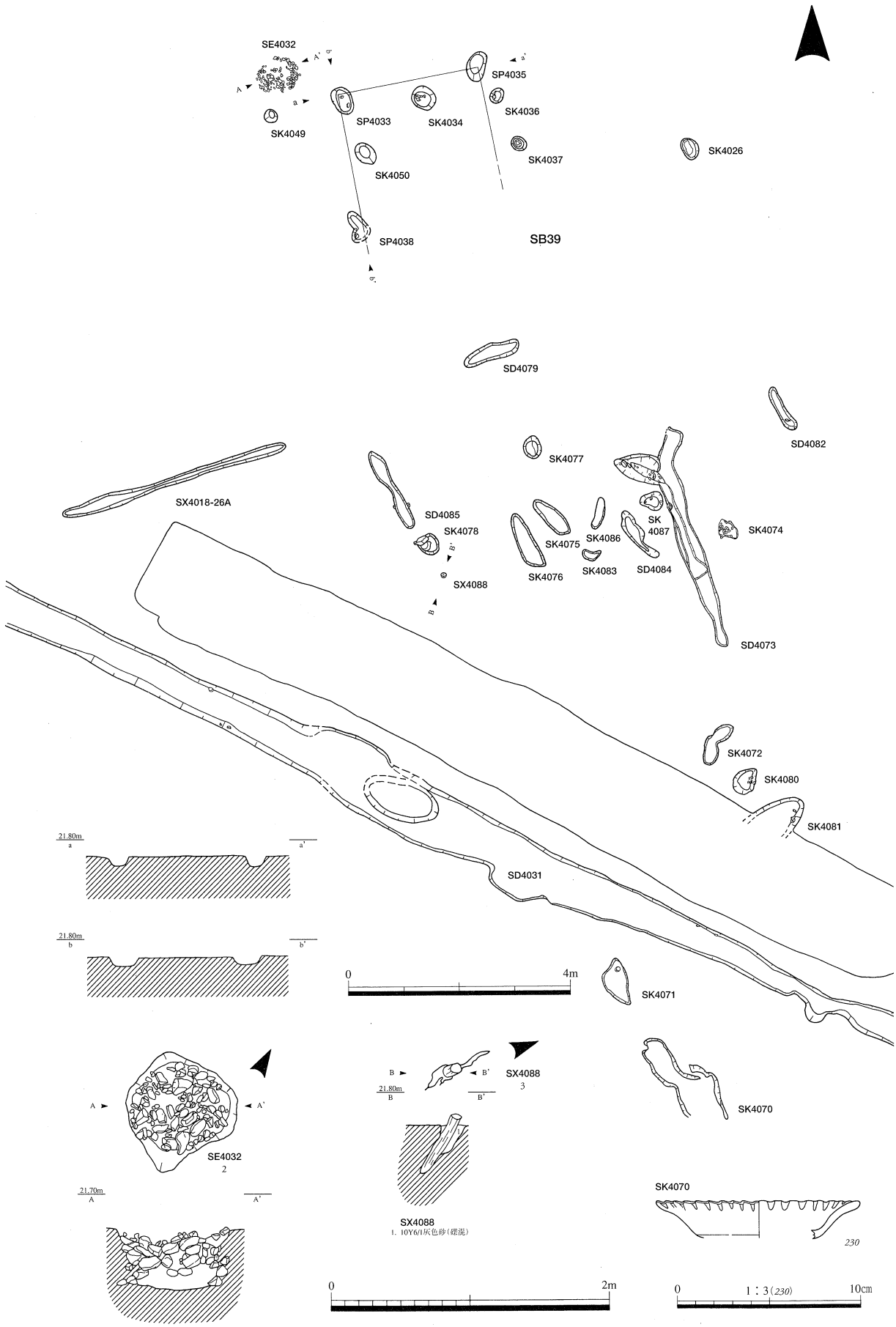
石敷内の南側に位置する石敷土坑で西側半分を欠く。径約54cmの略楕円形の土坑で，炭化物層上に大型の河原石を敷き詰める。出土遺物には加工材がある。

4018-11号土坑（ＳＸ4018-11，第71・74図，図版48）



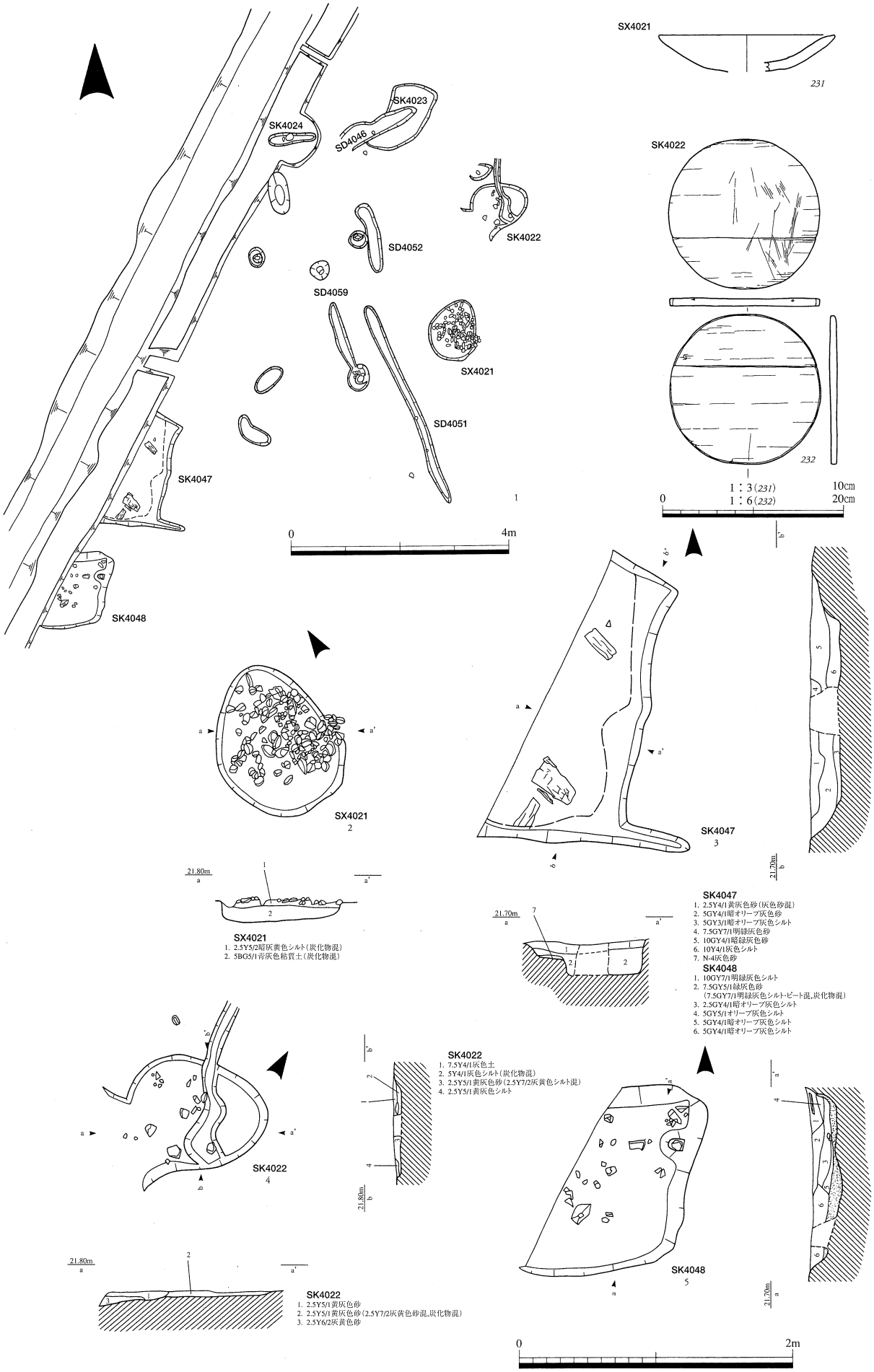
第74図　遺物実測図（中世）（1/3）

SX4018（*226*～*228*）　SX4018-1（*219*～*221*・*224*）　SX4018-3（*225*）　SX4018-11（*223*）　SX4018-43（*229*）　SX4018-53（*222*）



第75図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB39　2. SE4032　3. SX4088
SK4070（*230*）



第76図　遺構・遺物実測図(中世)

1. SX4021・SK4022・SK4047・SK4048　2. SX4021　3. SK4047　4. SK4022　5. SK4048
SX4021(*231*)　SK4022(*232*)

ＳＸ4018-10の東側に隣接する小型の円形土坑である。直径22cm，深さ６cmを測る。出土遺物に鉄製品がある。*223*は鉄製の引き手金具で，断面円形の針金を丸めて引き手とし，先端の打ち込み部は扁平に仕上げる。

4018-20Ａ号溝・4018-43号土坑（ＳＸ4018-20Ａ・4018-43，第71・73図）

石敷の北側に位置し，石敷を区切る溝の可能性がある。長さは約3.45m，幅・深さとも一定しないが，幅は40cm前後，深さは10cm前後である。埋土は青灰色砂質シルト，褐灰色砂質シルトが堆積する。ＳＸ4018-43はＳＸ4018-20Ａと重複するが新旧関係は明確でない。不整形の土坑で，埋土には植物遺体が腐食した灰赤色シルト層が堆積する。出土遺物には箸がある。*229*は長さ14.7cmの箸で，細かく面取りが施される。

4088号杭（ＳＸ4088，第75図）

区画９の石敷撤去後確認した杭で，ＳＸ4018-24の直下に位置する。北側に傾斜して打ち込まれた直径約10cmの丸太杭で，噴砂と重複する。

区画10（第73・75・76図）

最北端に位置し，確認された区画溝はＳＸ4018-26Ａ･4079の南側区画溝のみである。遺構は区画９の石敷面からつながる高い検出面の溝，土坑があり，掘り下げて検出した掘立柱建物１棟，井戸，土坑，溝がある。両遺構面は生活面の遺構と，包含層下の遺構に整理でき，時期はほぼ同一である。

39号建物（ＳＢ39，第75図）

区画内の南端道路際に位置する南北棟の側柱建物と推定する。桁行１間以上，梁行１間で，梁行は2.1mである。柱穴は楕円柱穴で，長径は50cm～60cm，掘り込みは14cm～20cmを測る。ＳＰ4038には柱根の一部が残る。建物に伴う遺構はＳＫ4034・4018-52・4018-51，ＳＥ4032がある。

4018-52号土坑（ＳＸ4018-52，第71・73図，図版48）

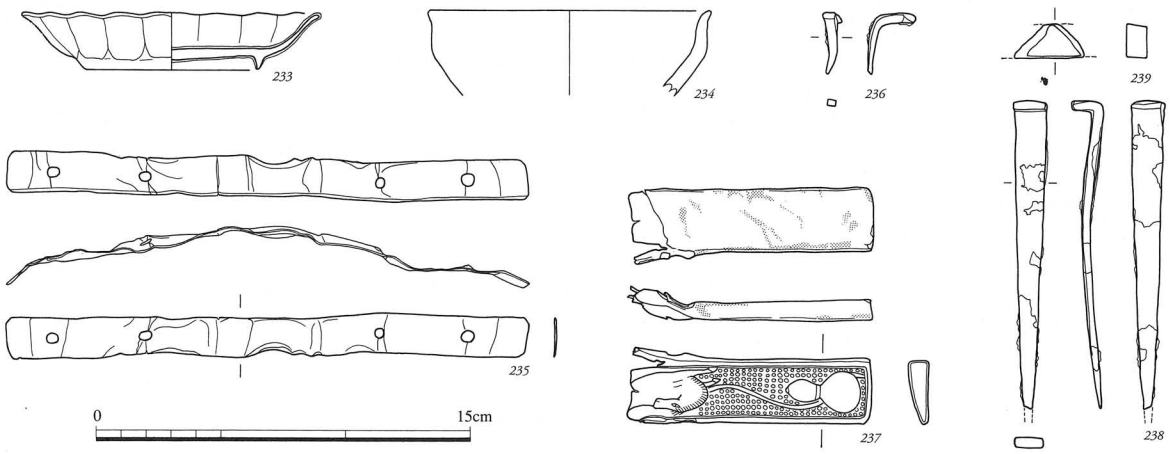
建物内の中央に位置する石敷土坑で掘り込みは僅かにみられる。拳大から人頭大の河原石をほぼ円形に敷き詰める。土坑内から東側遺構面に炭化物層が広がる。鍛冶関連遺構である。

4018-51号土坑（ＳＸ4018-51，第71・73図）

ＳＫ4018-52の南側に隣接する。不整形の土坑２基が南北に重複し，北側の土坑には厚い炭化物層がみられる。

4032号井戸（ＳＥ4032，第75図，図版48）

建物の北西隅に隣接する石組井戸である。径86cmの略円形の掘形をもち，深さは約40cmを測る。石



第77図　遺物実測図（中世）（1/3）
包含層

組は崩れ落ち明確でない。

4018-53号土坑（ＳＸ4018-53，第71・73・74図，図版48）

建物外の道路側桁柱列に隣接するが建物に伴うかは明確でない。溝状の土坑で，深さは６㎝と浅い。出土遺物に小柄がある。*222*は長さ7.5㎝の銅製の小柄の袋で，表面に金箔が残る。

4018号遺構群出土遺物（第74図）

ＳＸ4018出土遺物であるが，詳細な遺構番号が不明な遺物で，砥石３点がある。*226*は断面長方形に面取りされた凝灰岩製の小破片である。*227*は小型の面取りされた泥岩製の砥石である。*228*は２面が使用された泥岩製の砥石で，一面は使用頻度が高くレンズ状に抉れる。

4021号土坑（ＳＸ4021，第76図，図版48）

区画の北側の道路際に位置し，検出面は高い。長径1.12m，深さ６㎝の略円形の土坑で埋土上面に石敷がみられる。埋土は炭化物が混じる青灰色粘質土，暗灰黄色シルト層である。出土遺物は中世土師器がある。*231*は口径9.6㎝の小型法量の中世土師器皿で，口縁端部は尖り気味に収める。外面のヨコナデは部分的である。

4022号土坑（ＳＫ4022，第76図，図版48）

区画の北側の道路際に位置する浅い土坑で，検出面は高い。溝と重複するが前後関係は明確でない。掘り込みラインが不明確な部分があるが，1.2m程度の略楕円形と推測され，深さは10㎝と浅い。埋土には炭化物が僅かに混じる。出土遺物には木製品がある。*232*は曲物の底板で，直径は16.2㎝を測る。スギ材を使用し，表面には庖丁傷が残る。

4047号土坑（ＳＫ4047，第76図）

略方形の土坑で西側は調査区外に延びる。長さは約2.1m，深さ22㎝を測る。底面は平坦で，埋土は黄灰色砂層，暗オリーブ灰色砂層が堆積する。出土遺物には加工板がある。

4048号土坑（ＳＫ4048，第76図）

ＳＫ4047の南側に隣接する不整形の土坑で，西側は調査区外に延びる。深さは約20㎝で，底面は凸凹する。底面には厚さ２㎝～８㎝の炭化物層が堆積する。出土遺物には加工材がある。

Ｄ地区道路１西側包含層出土遺物（第77図）

出土遺物には白磁・瀬戸美濃・金属製品・砥石がある。*233*は白磁の菊皿である。口径は11.9㎝，高さ2.3㎝を測り，全面に厚い釉がかかり，貫入が入る。小野編年の皿Ｄ群に該当し，16世紀中頃～後半代である。*234*は口径11.3㎝の天目茶椀口縁部破片で鉄釉がかかる。*235*は薄い銅製の板で４箇所に穿孔がみられる。長さは約20.8㎝，幅1.55㎝，厚さ１㎜を測り，両端は面取りが施される。*236*は釘で先端を僅かに欠く。途中で直角に折れ曲がり使用痕跡を残す。*237*は小柄の袋で銅製品である。片面には馬とひょうたんを表現し，その間を魚々子文様で埋める。また，片面には金箔が残る。*238*は船釘で先端を僅かに欠く。長さ12.2㎝，幅1.1㎝，厚さ４㎜を測る。*239*は面取りされた粘板岩製の小型砥石である。（池野正男）

注１　藤沢良祐　1993　「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史』陶磁史編四

注２　小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.２

注３　吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

区画９（第78図）

北をＳＤ4039，南をＳＤ179により挟まれたもので，内部にはＳＤ4031とＳＡ10がある。ＳＡ10はＣ地区の最北端に位置し，畠のさくと考えるＳＤ176・ＳＤ177・ＳＤ178と重複している。ＳＤ176・ＳＤ177・ＳＤ178は幅約30cm，深さ10cm程の浅いもので，ほぼ90cm間隔で並行している。遺物の出土はなく，時期は確定できない。

区画11（第78図）

北をＳＤ179，東をＳＤ90・ＳＤ180，南をＳＤ88により囲むもので，東西方向は約12m，南北方向は約24ｍを測る。内部の遺構分布には偏りがあり，調査区西端から約4.5m東に位置するＳＤ80以西（道路２側）はまばらであるのに対し，以東には遺構が集中しており，ＳＢ40・ＳＢ41，溝，土坑がある。ＳＢ40に付属すると考えられる遺構はないが，ＳＢ41の内部には竪穴状土坑が付随している。ＳＢ40とＳＢ41の間には，南西から北東に流れる，幅約60cm，深さ12cmを測るＳＤ1520があることから，区画11の内部を便宜的にＳＤ1520以北と以南に分け，建物とそれに関連する遺構，さらに区画内部の遺構について，それぞれ記述する。

179号溝（ＳＤ179，第78図）

区画11を構成するもので，幅50cm～60cm，深さ６cmを測る。東西に伸びる区画溝で，調査区西端から約10mでＳＤ180が南に分岐する。分岐点以東は区画８を構成している。

180号溝（ＳＤ180，第78図）

ＳＤ179からＴ字状に南へ分岐し，幅50cm～135cm，深さ４cmを測る。ＳＤ179から約６ｍ南でＳＤ192が東に分岐しており，区画7・区画8との境界溝としても機能している。

40号建物（ＳＢ40，第78図）

ＳＤ1520の北に位置し，桁行4.8m×梁行2.4m，平面積11.52m²の規模をもち，主軸はＮ－3°－Ｗの南北棟である。桁行方向で確認した柱穴数は東辺で２基，西辺で６基と不均等であることから，掘立柱建物と復元してはいるが，礎石・土台等を利用したより複雑な構造をもつ建物の可能性があると考える。柱穴からの出土遺物は無い。

ＳＤ1520以北には，ＳＢ40から３ｍ以上離れて土坑が数基あるが，これらはＳＢ40に付随するものではないであろう。

195号土坑（ＳＫ195，第79図，図版62）

ＳＢ40の西，調査区端に位置し，南北108cm，東西約80cm，深さ10cmを測る。平面形は不整形を呈する。埋土は灰黄色粘土質シルトで，底面には礫が多い。遺物は珠洲（*240*）と漆器椀が出土している。*240*は珠洲片口鉢で，底部に近い破片である。体部は直線的に伸び，内面には2.2cm幅に10条の粗い卸目があるが，小破片であるため卸目の間隔は不明である。時期は珠洲Ⅵ期[注1]と考える。

227号土坑（ＳＫ227，第79図）

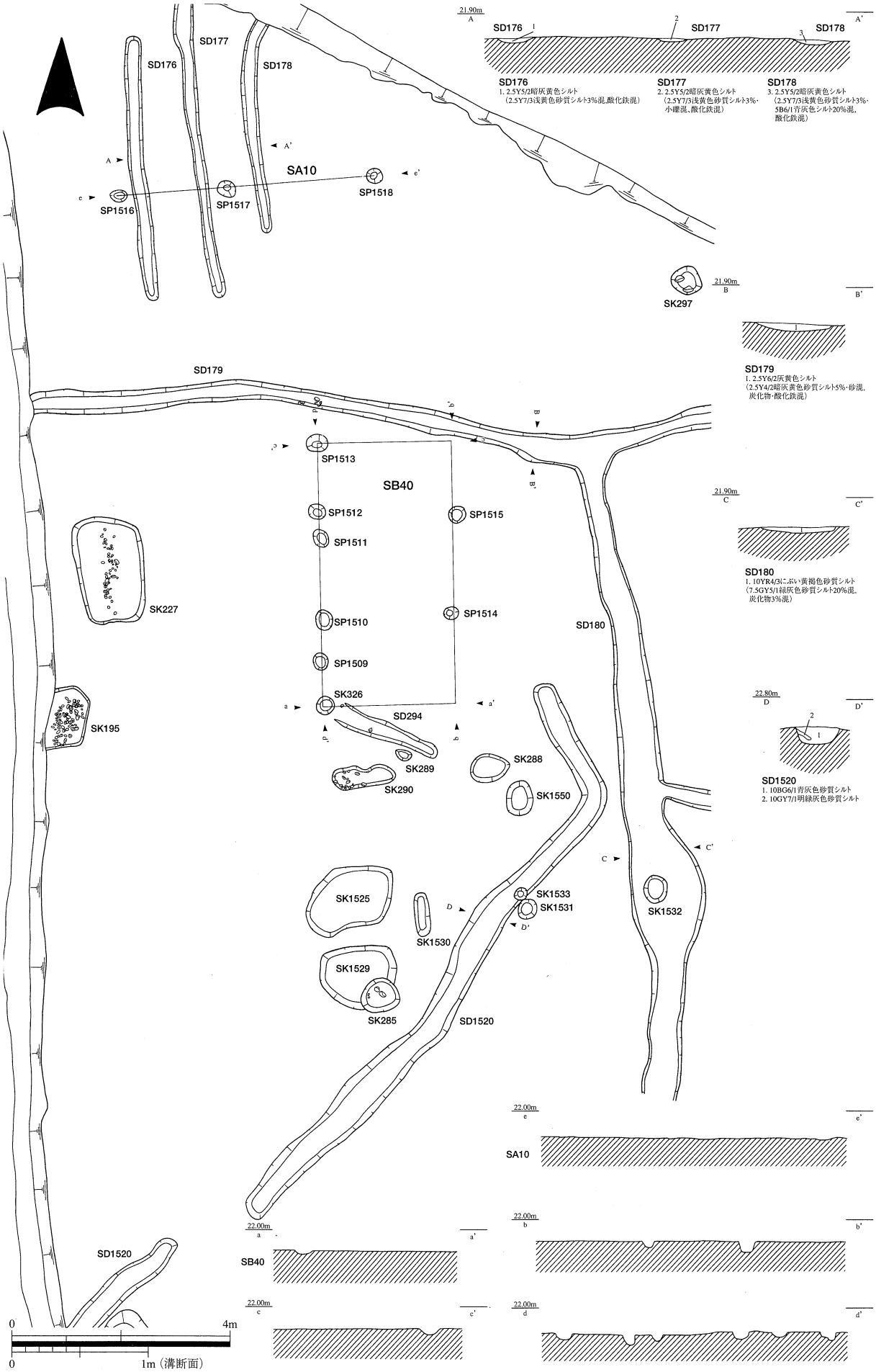
ＳＢ40の西，ＳＫ195の北に位置し，長径190cm×短径120cm，深さ８cmを測る。平面形は隅丸方形である。埋土はオリーブ褐色砂質シルトで，礫が多く混じる。

290号土坑（ＳＫ290，第79図）

ＳＢ40の南約１ｍに位置する。長径116cm×短径38cm，深さ６cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトで，炭化物が混じる。

1525号土坑（ＳＫ1525，第79図）

ＳＢ40の南約３ｍに位置し，長径150cm×短径110cm，深さ３cmを測る。埋土は灰白色粘質土である。



第78図　遺構実測図（中世）

SB40・SA10・SD176・SD177・SD178・SD179・SD180・SD1520

1529号土坑（ＳＫ1529，第79図）

ＳＫ1525の南に位置し，長径140cm×短径110cm，深さ10cmを測る。埋土は青灰色砂質シルトである。規模・形態がＳＫ1525とほぼ同じであることから，関連がある可能性が高い。

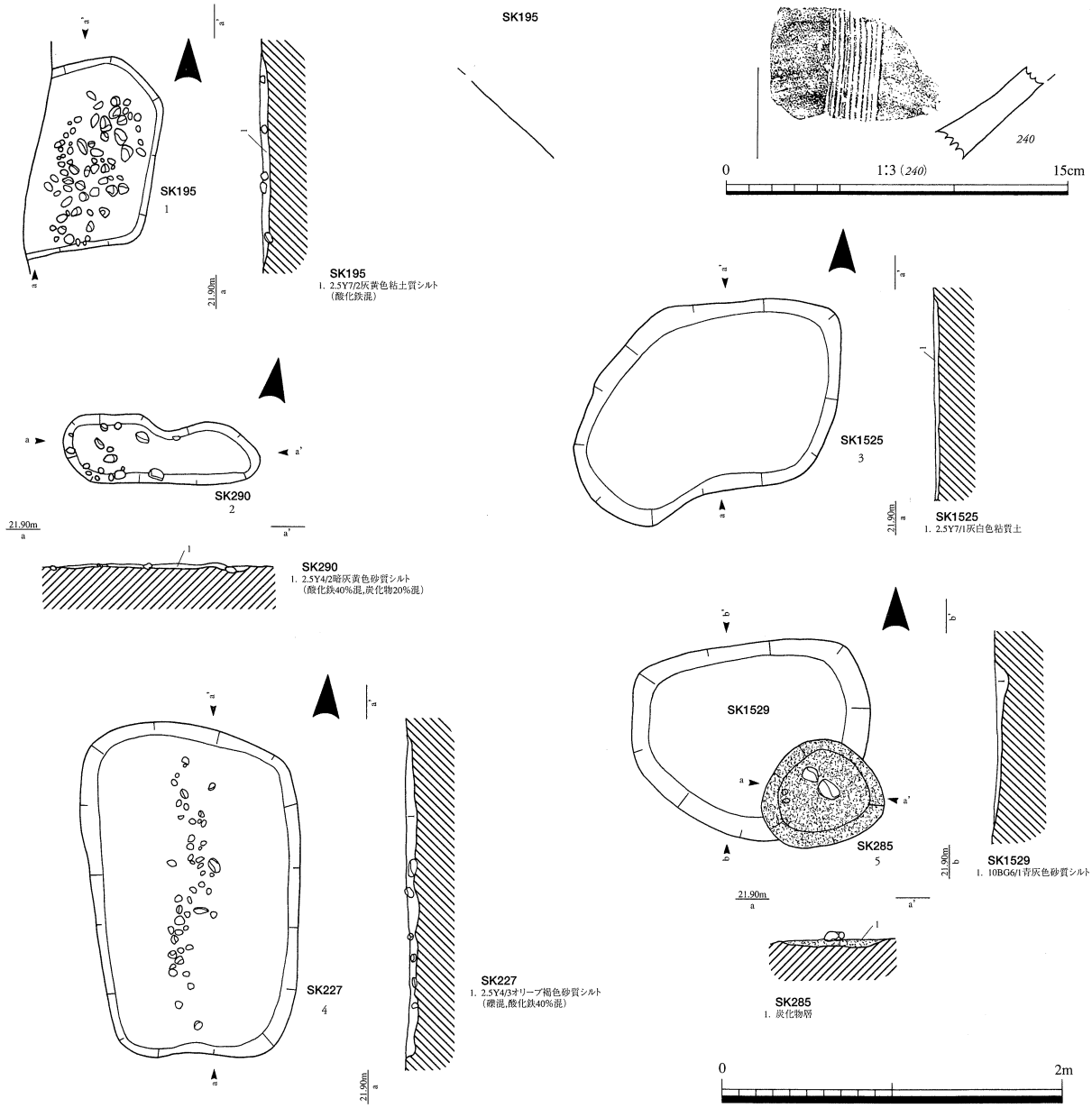
285号土坑（ＳＫ285，第79図）

ＳＫ1529より新しく，70cm×60cm，深さ５cmを測る。埋土は炭化物であるが，遺物の出土もなく，その性格は不明である。

80号溝（ＳＤ80，第81図，図版65）

ＳＤ1520以南で，調査区西端から約4.5m離れて位置し，遺構の疎密を分けているもので，幅43cm，深さ７cmを測る。区画11と区画12とを分けるＳＤ88付近で一旦途切れ，約2.5m南に続いている。出土遺物には瀬戸美濃，中国製染付（*242*）がある。*242*は口縁部が直線的に立ち上がる碗で，口縁部内面に２条の界線があり，口縁部外面には雷文帯が巡り，体部には唐草文？が描かれている。小野分類[注2]で碗Ｅ群６類にあたり，16世紀中頃～後半のものである。

88号溝（ＳＤ88，第81図）



第79図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK195　2. SK290　3. SK1525　4. SK227　5. SK285･SK1529
SK195(*240*)

区画11と区画12を分けるもので，幅約30cm，深さ10cmを測る。

90号溝（ＳＤ90，第81図）

ＳＤ80と平行して南北に走る区画溝で，幅57cm，深さ４cmを測る。北端からわずかに南でＳＤ213が分岐しており，区画６との境界溝としても機能している。ＳＤ80同様にＳＤ88付近で一旦途切れ，約２ｍ南に続いている。

41号建物（ＳＢ41，第80図，図版49）

ＳＤ1520の南に位置し，桁行５ｍ×梁行3.5m，平面積17.5m²の規模をもち，主軸はＮ－3°－Ｗの南北棟である。桁行方向の柱間は東辺と西辺では不均等であるが，３間×２間と復元している。また，建物内部のＳＰ1504・ＳＰ1522は棟持柱と考える。柱穴からの出土遺物にはＳＰ1504から加工材，ＳＰ1522・ＳＰ1523から金属製品がある。

また，建物内部には竪穴状土坑，埋土に炭化物を多く含む土坑があり，ＳＢ41に付属していると考える。

1522号柱穴（ＳＰ1522，第81図，図版84）

ＳＢ41の内部にある北側の棟持柱で，長軸50cm×短軸40cm，深さ12cmを測り，平面形は楕円形を呈する。埋土は青灰色砂質シルトである。出土遺物には金属製品（*241*）がある。*241*は鉄製の輪状の金具である。輪の部分は外径7.2cm×5.8cm，内径5.6cm×4.5cmの楕円形を呈する。また，鋲等で固定するための座金部分は幅2.1cm，厚さ約４㎜で，直径1.5cmの穴が穿たれている。

117号土坑（ＳＫ117，第81図）

ＳＢ41の内部，南東隅に位置し，径115cm，深さ８cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで，礫や砂利を多く含む。出土遺物はないが，土間や作業場のような機能をもっていたのではないかと推測する。

284号土坑（ＳＫ284，第81図）

ＳＢ41のほぼ中央に位置し，68cm×58cm，深さ８cmを測る隅丸方形の土坑である。ＳＫ299より新しい。埋土は暗灰黄色砂質シルトで，炭化物が混じる。

299号土坑（ＳＫ299，第81図）

ＳＫ284と重なり，ＳＢ41の中央に位置する。長軸95cm×短軸65cm，深さ16cmを測る。埋土のほぼ中層には，炭化物を多く含む砂質土が皿状に堆積している。出土遺物はないが，炉に関連したものと推定する。

区画11内のＳＤ1520以南には，ＳＢ41に関連した遺構の他に，ＳＤ80以西に溝・数基の土坑がある。これらはＳＢ41に付随したものではない。

301号溝（ＳＤ301，第81図）

ＳＢ41の東，ＳＤ180のほぼ延長上に位置し，幅44cm，深さ３cmを測る。ＳＤ90とＳＤ301は二股に分かれるようである。これ以南は道路１側の区画溝と道路２側の区画溝との間に，遺構のない空間がある。これは区画が作り替えられた結果と推測する。

118号土坑（ＳＫ118，第81図）

ＳＤ80の北端西側に位置し，110cm×87cm，深さ10cmを測り，平面形は不整形な方形を呈する。最下層の埋土は炭化物層で，約５cmの厚さで皿状に堆積している。炭化物は意識的に入れられたものと推測されるが，関連遺構は付近にないため遺構の性格は不明である。

1526号土坑（ＳＫ1526，第81図）

調査区西端，ＳＤ1520の南に隣接しており，長軸160cm×短軸118cm，平面形は楕円形を呈する。深

さは僅か2㎝で，埋土は褐灰色粘質土である。

区画12（第80・82図）

北をＳＤ88，南をＳＤ76，東をＳＡ11とＳＤ39により囲まれたもので，東西方向は約12m，南北方向は約20mを測る。遺構は南北に並ぶＳＤ80・ＳＤ115・ＳＤ355以東に集中しており，ＳＢ42の他に溝，土坑がある。遺構の分布状況は，ＳＤ88から南約11mに位置するＳＤ78と南北方向に分岐するＳＤ255付近で一旦少なくなり，ＳＤ76の付近で増加することから，これらが区画溝として機能していた可能性が高い。ただし，ＳＤ78は西へ伸びないことから，区画12の内部を南北に分けるものではないと考える。

11号柵（ＳＡ11，第80図）

ＳＤ88から約3.5m南，ＳＢ42の東側に位置する。柵穴の規模は径25㎝～50㎝，深さ4㎝～8㎝を測り，70㎝前後の間隔で並んでいる。ＳＡ11の方向とＳＢ42の棟方向とは一致せず，むしろ区画12の東側区画溝と方向が合うことから，区画を確保することを重視したものと考える。

78号溝（ＳＤ78，第81図）

区画12の北端から南約11mに位置し，東西に伸び，幅45㎝，深さ4㎝を測る。西端から1m程で，南へＳＤ255が分岐している。

255号溝（ＳＤ255，第81図）

ＳＤ78から南に分岐するもので，幅28㎝，深さ3㎝を測る。ＳＡ11の延長上にあり，南に2.5m離れたＳＤ39とともに，区画12の東側区画溝として機能している。

42号建物（ＳＢ42，第80図，図版49）

区画12の北端に位置し，桁行5.5m×梁行2.4m，平面積13.2㎡の規模をもち，主軸はＮ－5°－Ｗの南北棟である。桁行方向の柱間は東辺と西辺ではやや不均等である。ＳＢ42に付属した遺構としては，東に幅20㎝，深さ4㎝の雨落ち状のＳＤ270，内部に炭化物が堆積した土坑が2基ある。柱穴からの出土遺物はない。

81号土坑（ＳＫ81，第81図）

ＳＢ42の北辺にある平面形が楕円形を呈するもので，長軸76㎝×短軸46㎝，深さ6㎝を測る。埋土は底部には炭化物が皿状に堆積しているが，焼土がないこと，炭化していない木片が混じることから，炉として使用されたものではないと考えられる。出土遺物には炭化物上面から鉄滓（*243*）がある。

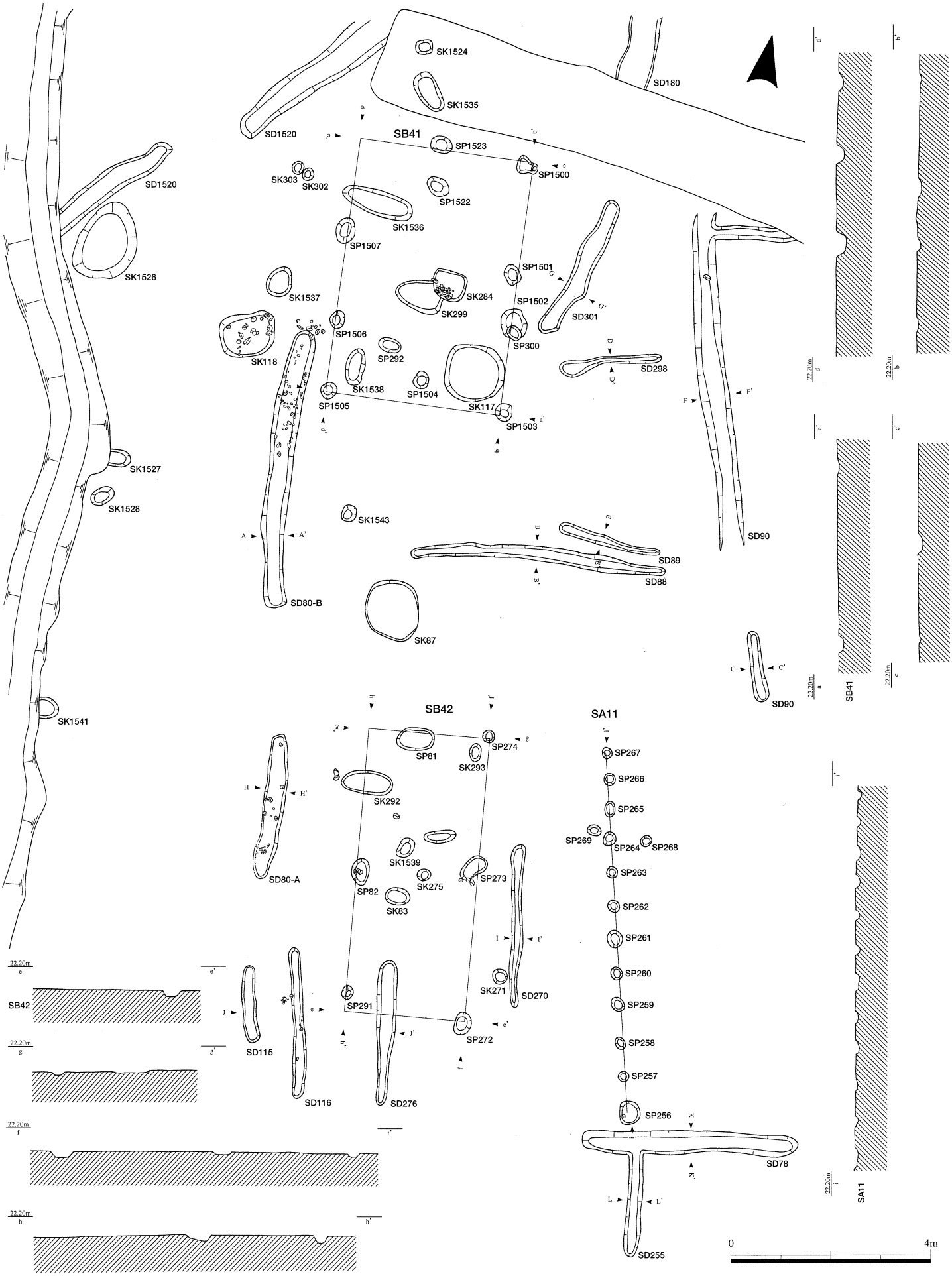
83号土坑（ＳＫ83，第81図）

ＳＢ42のほぼ中央に位置し，長軸50㎝×短軸35㎝，深さ6㎝を測り，平面形が楕円形を呈するものである。埋土は灰オリーブ色砂質シルトで，他の土坑・柱穴の埋土に比べて炭化物が多く混じるが，ＳＫ81との関連は不明である。

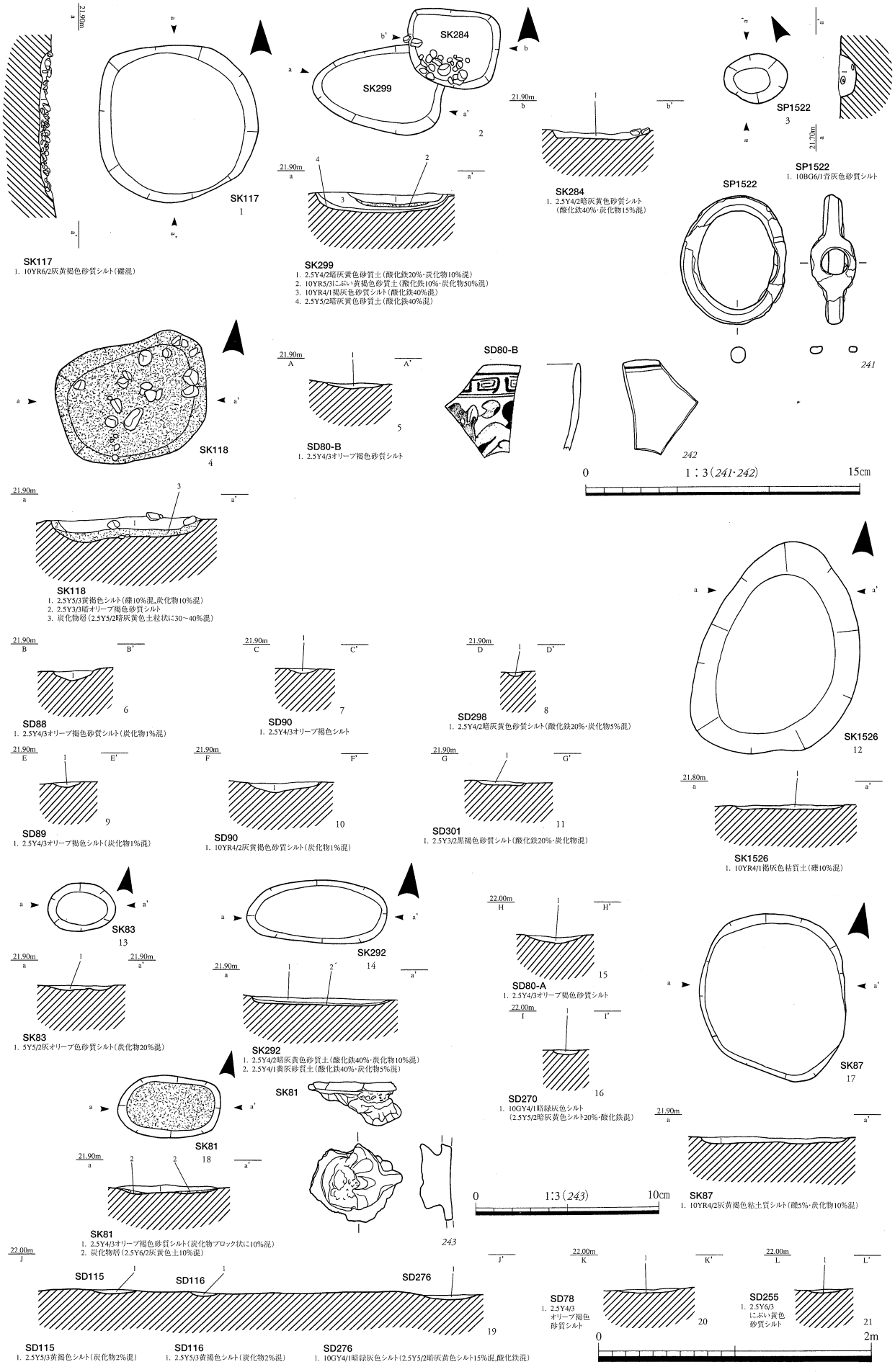
87号土坑（ＳＫ87，第81図）

ＳＤ88とＳＢ42との間に位置し，123㎝×108㎝，深さ4㎝を測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで，炭化物が混じる。出土遺物はなく，ＳＢ42との関係は不明である。

区画12の南端には方形の竪穴状土坑や炭化物が堆積した土坑が集中している。これらは南側の区画溝ＳＤ76とＳＤ355・ＳＤ39に東西を囲まれた，東西約12m，南北約4mの僅かな範囲で，南の区画13と2m程しか離れていない。ここでは柱穴や礎石，土台の痕跡を検出できなかったことなどから，建物を復元していない。しかし，これらの土坑群の北に遺構の少ない空間があること，土間状の竪穴状土坑があること，遺物が出土した土坑が比較的多いことなどから，建物が存在した可能性があると



第80図　遺構実測図（中世）
SB41・SB42・SA11



第81図　遺構・遺物実測図(中世)

1. SK117　2. SK284・SK299　3. SP1522　4. SK118　5. SD80-B　6. SD88　7. SD90　8. SD298　9. SD89　10. SD90　11. SD301　12. SK1526　13. SK83　14. SK292　15. SD80-A　16. SD270　17. SK87　18. SK81　19. SD115・SD116・SD276　20. SD78　21. SD255・SP1522(*241*)　SD80-B(*242*)　SK81(*243*)

考える。

38号土坑（ＳＫ38，第83図，図版51）

ＳＤ77の東に位置し，長軸68cm×短軸40cm，深さ10cmを測る。埋土には焼土がブロック状に混じり，底部には炭化物が厚さ４cmで皿状に堆積している。約１m北東に石組炉と考えられる遺構があることから，この炉に関連する炭化物を廃棄したものと考えられる。

29号土坑（ＳＫ29，第83図，図版51）

ＳＤ76の西端から1.2m離れて位置し，長軸77cm×短軸66cm，深さ８cmを測る。埋土は上層から径５cm～15cm大の礫が多量に入っているが，炭化物，焼土などは確認できない。北西にある，埋土に炭化物が多く混じるＳＫ73より新しい。

55号土坑（ＳＫ55，第83図）

ＳＤ355の東約３m，ＳＤ76の北約２mに位置し，90cm×59cmの規模をもつ隅丸方形の土坑で，深さ25cmを測る。南半部の壁際には礫を積み重ねており，内部に黄灰色粘土質シルトや黄灰色砂質土を充填している。北半部には壁際の礫はなく，埋土のほぼ中間に厚さ約４cmの炭化物層がある。上面南半には礫が敷き詰められ，さらに上面には黄灰色砂質シルトが薄く堆積する。焼土は確認されていないが，ＳＫ55は炉として機能していた可能性が高く，北半部には排出された炭化物が堆積しており，鍛冶関連の石組炉と考えられる。遺物は南半部壁際の礫中から石鉢（*244*）が出土している。*244*は凝灰角礫岩製で，底部付近の破片で，器壁は厚さ4.8cmある。

332号土坑（ＳＫ332，第83図）

ＳＤ39の西に位置し，140cm×105cmの規模をもつ隅丸方形の土坑で，深さ６cmを測る。埋土は下層東寄りにのみ黒褐色砂質土が薄く堆積し，その上部に礫が混じる黄灰色砂質シルトがある。この付近では建物を復元できなかったが，遺構の状況から建物があった可能性も考えられ，ＳＫ332は建物と関連する竪穴状土坑ではないかと推測する。

333号土坑（ＳＫ333，第83図）

ＳＤ76の北に近接しており，ＳＫ32より古い。165cm×150cmの規模をもつ不整形の土坑で，深さ４cmを測る。埋土は灰オリーブ色砂質シルトで，炭化物が僅かに混じる。ただし，南西の角が内側に約40cm，ほぼ直角にカットされており，その抉れた部分にＳＫ347があることから，意図的にＳＫ347を避けるように成形しているようである。これはＳＢ２内に位置する竪穴状土坑ＳＫ８と同様であることから，ＳＫ333は建物に付随した竪穴状土坑で，土間などの作業場である可能性が高い。

32号土坑（ＳＫ32，第83図）

ＳＫ333より新しく，南東隅に位置する。長軸74cm×短軸55cm，深さ４cmを測る。埋土は灰オリーブ色シルトで，炭化物が比較的多く混じる。

113号土坑（ＳＫ113，第83図）

ＳＫ333の北東に位置し，長軸117cm×短軸47cm，深さ６cmを測る。埋土は灰黄色シルトで，礫が多い。出土遺物には金属製品（*245*）がある。*245*は釘で，両端が欠損しており，断面は四角形を呈する。

区画13（第82・85図）

北をＳＤ76，南をＳＤ513，東をＳＤ39・ＳＤ41・ＳＤ1077によって囲まれたもので，南北約32m，東西約20mを測り，道路１西側の区画としては最大規模である。ＳＤ14・ＳＤ945以東は遺構の密度が高く，北半にはＳＢ43が，南半にはＳＢ44～ＳＢ47の４棟が密集して確認された。建物内部には炭化物や焼土が堆積した土坑が確認されたほか，建物に付随すると考えられる溝，土坑，井戸がある。他

に建物とは直接関連付けられない遺構として土坑・畠のさくがあり，最も近接した建物とともに記述する。

また，東側区画溝とＳＤ45・ＳＤ44・ＳＤ1093に挟まれた，幅約７ｍ～９ｍの部分には畠のさくと考えられる溝がみられるだけで，区画12の東側から続く遺構の空白地帯である。

76号溝（ＳＤ76，第84図）

区画12と区画13を分ける溝で，幅25cm，深さ３cmを測る。西から約７ｍ付近で，ＳＤ39と交差し，さらに遺構の空白地帯へ伸びている。

14号溝（ＳＤ14，第84図）

区画13の西端に位置し，遺構の疎密を分けている溝である。幅80cm，深さ６cmを測り，ＳＤ945に続くと考えられる。平行するＳＤ15よりは古い。出土遺物には瀬戸美濃，中国製白磁，漆器椀，加工板がある。

39号溝（ＳＤ39，第84図）

区画13の東側区画溝で，幅28cm，深さ３cmを測り，途切れながら南北に伸びる。ＳＤ327と近接しているが，ＳＤ41・ＳＤ1113へとつながる。

45号溝（ＳＤ45，第84図）

区画４の西側区画溝で，ＳＤ39とともに遺構の空白地帯を挟む。南北方向に途切れながら約12m，直角に東に折れて約10m の範囲を囲み，幅46cm，深さ３cmを測る。コーナーから約２ｍ東でＳＤ44が南に分岐している。

44号溝（ＳＤ44，第84図）

区画３の西側区画溝で，ＳＤ45から分岐しており，幅45cm，深さ３cmを測る。試掘トレンチを挟み，南のＳＤ1093につながる。

43号建物（ＳＢ43，第82図，図版50）

区画13の北側区画溝ＳＤ76から約１ｍ南に位置し，桁行7.8m×梁行4.1m，平面積31.98㎡の規模をもち，主軸はＮ－２°－Ｗの南北棟である。柱穴の規模は長軸50cm～90cm×短軸30cm～60cm，深さ10cm～30cmを測り，平面形が楕円形を呈する柱穴が主体である。梁行方向の柱間は北辺と南辺で異なり，北辺は西から2.6m，1.5m，南辺は西から2.3m，1.3mと不均等であることから，西側が主屋と推定する。付属する遺構としては，建物内部に炭化物と焼土が堆積した土坑が１基，ＳＰ335の南東約１ｍに炭化物が堆積した土坑が１基ある。

11号土坑（ＳＫ11，第83図，図版50）

ＳＢ43内やや南に位置し，60cm×55cm，深さ10cmを測る。埋土は下層に厚さ３cmの炭化物が皿状に，上層に暗オリーブ褐色シルトが堆積しており，上層の埋土には朝黄色シルトがブロック状に混じる。鍛冶関連の炉に関連した遺構と推定するが，建物内には炉と断定できる遺構はない。出土遺物には瀬戸美濃，近世磁器，加工材がある。

33号土坑（ＳＫ33，第83図）

ＳＢ43の柱穴ＳＰ335の南東約１ｍに位置し，42cm×40cm，深さ６cmを測る。埋土に炭化物が混じるが，ＳＫ11内に堆積した炭化物とは様相を異にする。

12号土坑（ＳＫ12，第84図，図版51）

ＳＢ43の東約3.5mに位置し，長軸213cm×短軸70cm，深さ10cmを測る，平面形が楕円形を呈するものである。埋土には噴砂が確認された。

34号土坑（ＳＫ34，第84図）

ＳＢ43の東約1.5ｍに位置し，ＳＫ12に近接する。規模は長軸215cm×短軸180cm，深さ10cmを測る。埋土に炭化物が混じるＳＫ13より古いが，南北方向に流れるＳＤ23・ＳＤ24よりは新しい。

331号土坑（ＳＫ331，第84図）

ＳＢ43の東約３ｍ，ＳＤ76の南約50cmに位置し，規模は205cm×185cm，深さ6cmを測る，不整形なものである。埋土は上層に炭化物が混じる黒褐色砂質土が堆積している。周囲１ｍ～1.5ｍには畠のさくがあるが，この土坑との関連は不明である。

20号溝（ＳＤ20，第84図）

ＳＢ43の南端に位置し，幅84cm，深さ10cmを測る。試掘トレンチを挟みＳＤ946につながると推定する。遺物は中世土師器が出土している。ＳＢ43との新旧関係については，ＳＫ11がＳＢ43に付随した遺構であると考え，ＳＤ20が古いと推定する。

23号溝（ＳＤ23，第84図）

ＳＫ34より古く南北に流れる溝で，幅45cm，深さ５cmを測る。ＳＤ36より新しく，ＳＫ40より古い。出土遺物には中国製白磁がある。

319号井戸（ＳＥ319，第83図）

ＳＤ23の南約50cm，試掘トレンチ内にあり，58cm×55cm，深さ18cmを測る。埋土は灰色粘土質シルトで，径５cm～10cm大の礫が混じる。ＳＢ43とＳＢ44のほぼ中間に位置する素掘りの井戸で，どちらの建物に付随したものかは不明である。出土遺物には曲物，加工材がある。

945号溝（ＳＤ945，第89図）

区画13の南半に位置し，幅45cm，深さ10cmを測る。ＳＤ945以西には土坑２基，溝が１条確認されたのみで，試掘トレンチを挟み，ＳＤ14とつながる区画内の遺構の疎密を分ける溝と考える。

946号溝（ＳＤ946，第86図）

ＳＤ945の東約２ｍに位置し，幅23cm，深さ３cmを測る。ＳＤ20から南に続くもので，区画端までのびている。ＳＢ45の柱穴を切っていることから，ＳＢ45より新しい溝である。出土遺物には加工材がある。

1077号溝（ＳＤ1077，第86図）

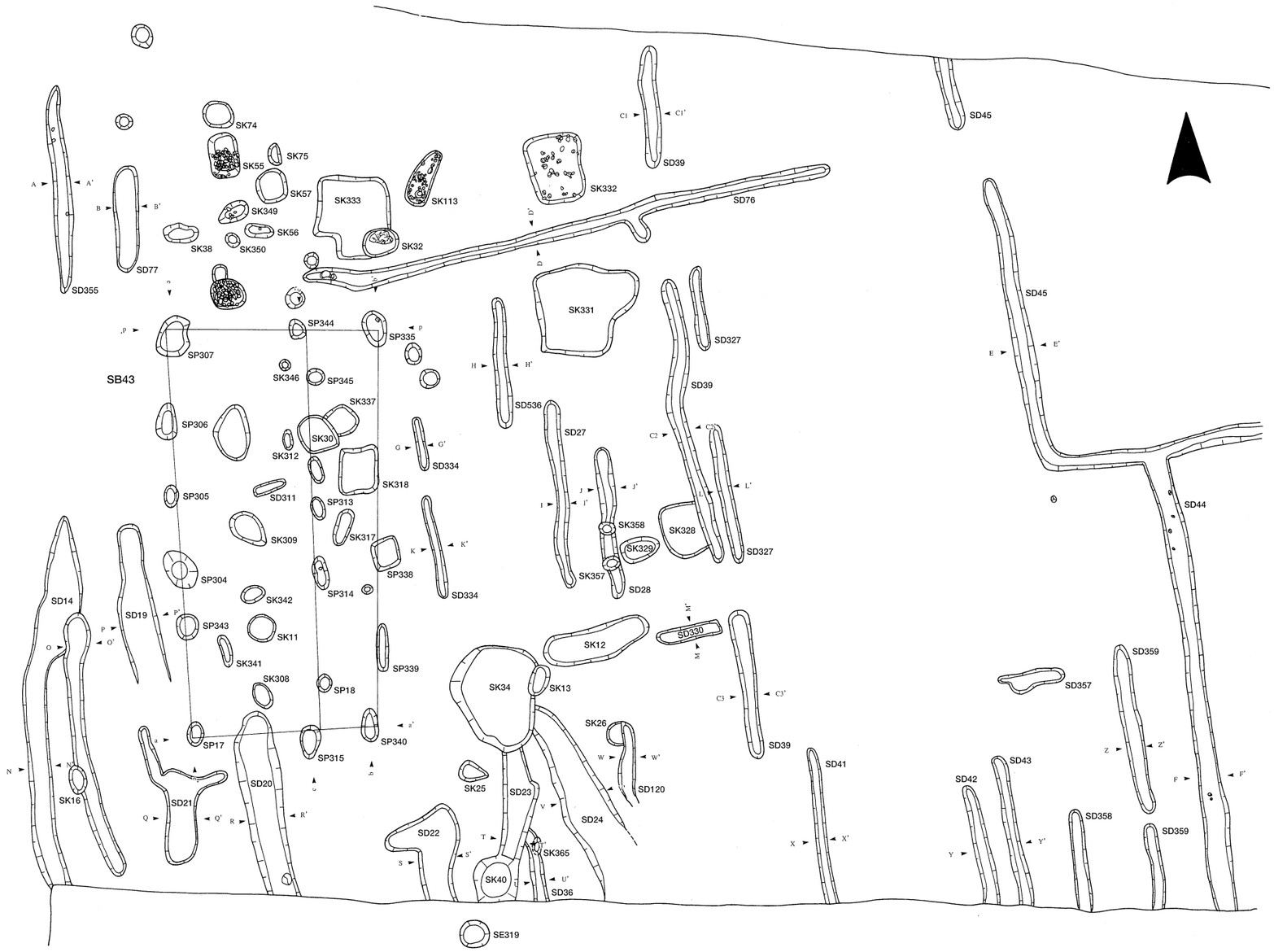
区画13の東側区画溝で，幅75cm，深さ９cmを測る。ＳＤ39・ＳＤ41から続くもので，試掘トレンチを挟んで南に約15ｍのところで東に屈曲し，ＳＤ1095となって区画３の南側区画溝となる。またコーナーから約７ｍでＳＤ1093が分岐している。ＳＤ1077とＳＤ1093に挟まれた部分は，溝が数条あるのみの遺構の疎な空間であるが，ＳＤ1093以南にはこのような空間はみられない。

513号溝（ＳＤ513，第86図，図版63・83）

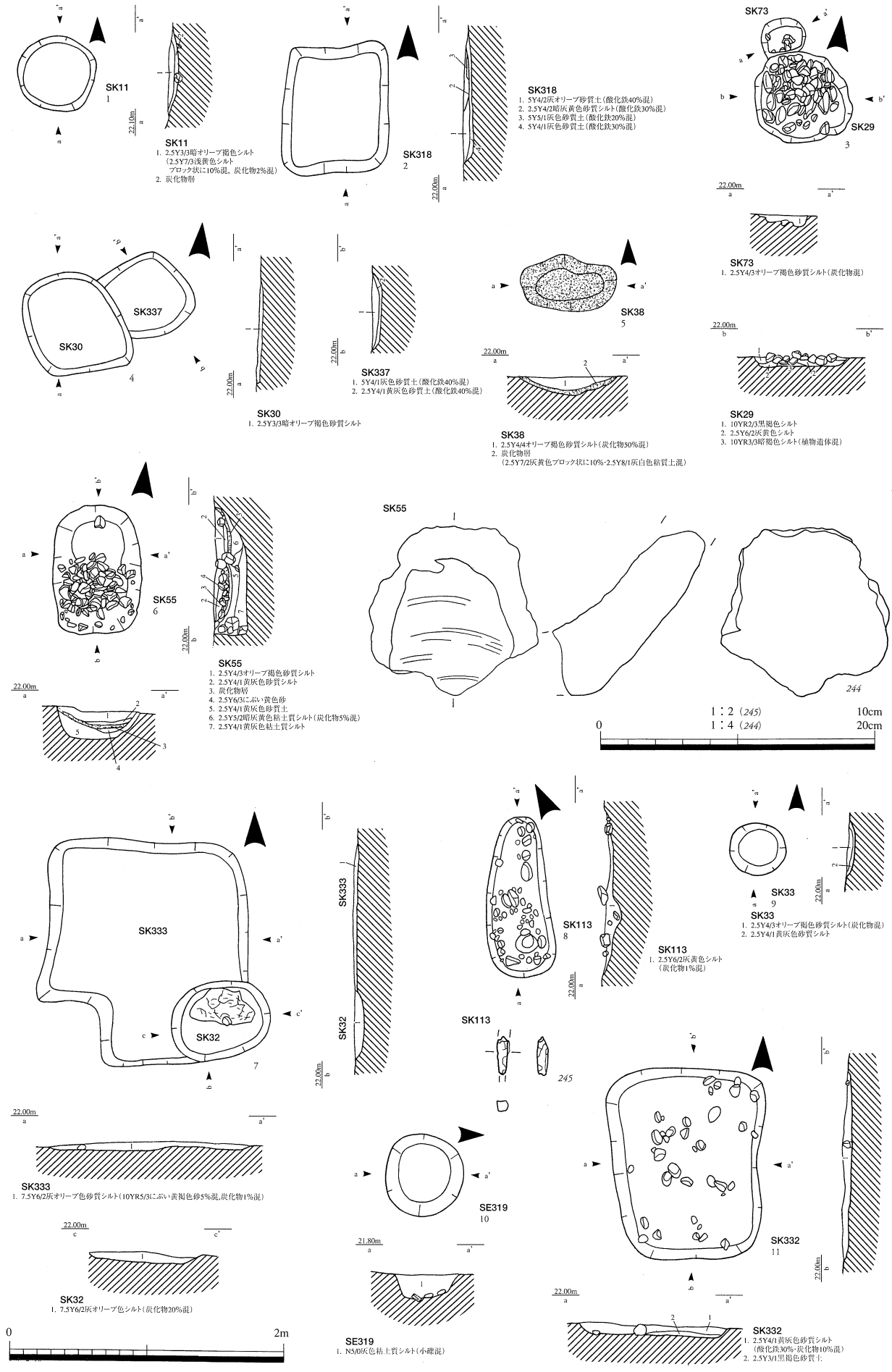
区画13の南側区画溝で，幅55cm，深さ12cmを測る。試掘トレンチを挟みＳＤ1095につながり，約3.5ｍ南に位置する，区画14の北側区画溝ＳＤ1265・ＳＤ631と平行している。ＳＤ513とＳＤ1265・ＳＤ631間はほとんど遺構がないことから，道路と考えられる。出土遺物には砥石（*247*）と中国製白磁（*248*）がある。*247*は片面にのみ擦痕があり，断面形が台形を呈する。石材は泥岩である。*248*は中国製白磁杯で，口径7.6cm，器高3.1cm，底径4.4cmを測る。畳付けは釉剥ぎされ，丸みをもった体部から口縁にかけ端反る。時期は15世紀後半～16世紀後半と考えられる。

44号建物（ＳＢ44，第85・86図，図版51・52）

区画13の南半では３棟の建物が重複しており，その最も北に位置する。桁行3.6ｍ×梁行3.2ｍ，平

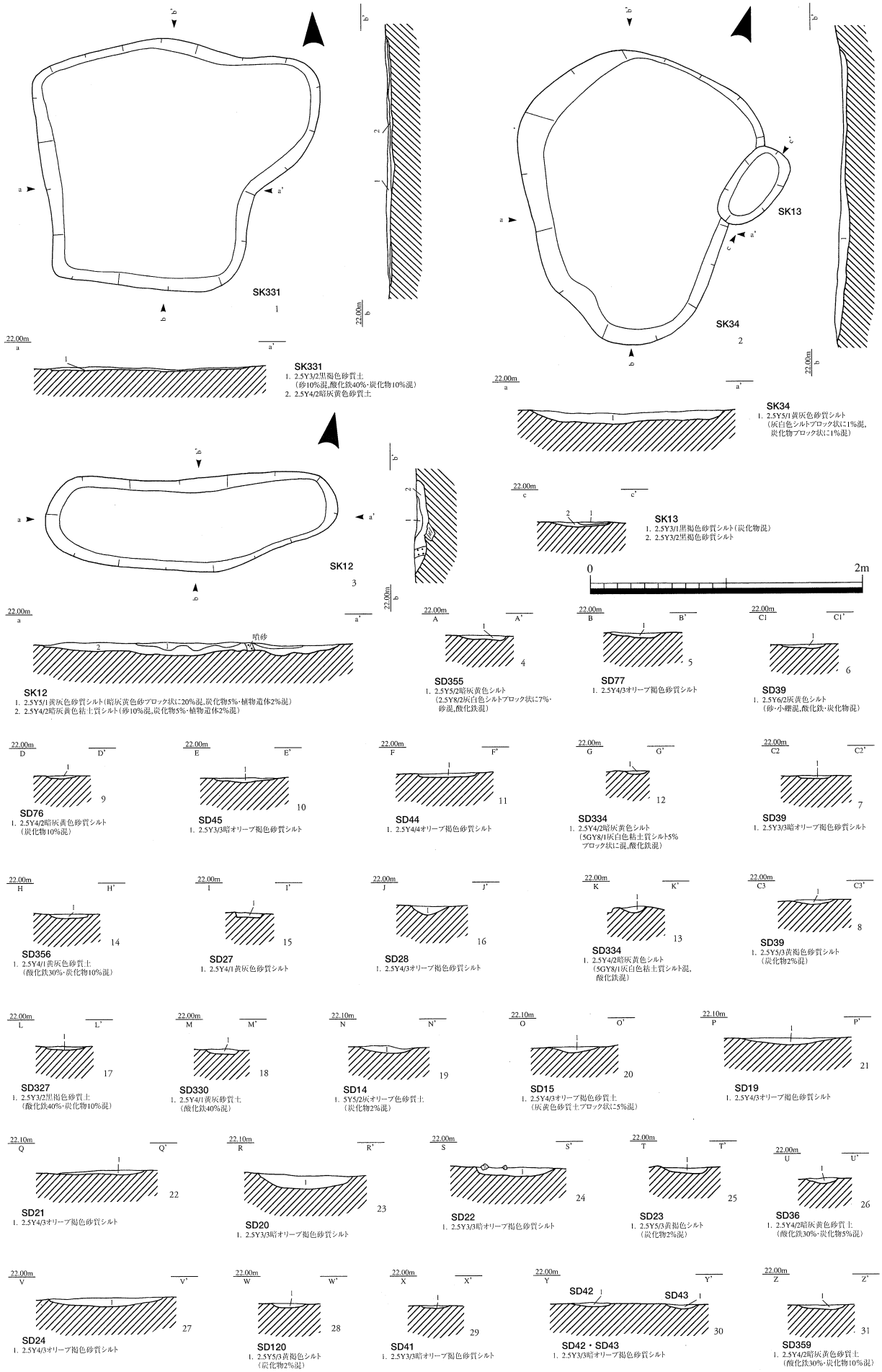


第82図　遺構実測図（中世）
SB43



第83図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SK11　2. SK318　3. SK29・SK73　4. SK30・SK337　5. SK38　6. SK55　7. SK32・SK333　8. SK113　9. SK33
10. SE319　11. SK332
SK55（*244*）　SK113（*245*）



第84図　遺構実測図（中世）

1. SK331　2. SK13・SK34　3. SK12　4. SD355　5. SD77　6～8. SD39　9. SD76　10. SD45　11. SD44　12・13. SD334　14. SD356　15. SD27　16. SD28　17. SD327　18. SD330　19. SD14　20. SD15　21. SD19　22. SD21　23. SD20　24. SD22　25. SD23　26. SD36　27. SD24　28. SD120　29. SD41　30. SD42・SD43　31. SD359

面積11.52㎡の規模をもち，主軸はＮ－4°－Ｗの南北棟である。柱穴の規模は長軸40cm～80cm×短軸30cm～60cm，深さ10cm～20cmを測り，平面形が楕円形を呈する柱穴が主体である。ＳＰ994には柱根が残っており，横に40cm×70cmほどの石があり，柱を固定していたと考えられる。また，ＳＰ990は畠のさくと考えるＳＤ950より古いが，ＳＰ1032はＳＤ1014・ＳＤ1015より新しい。ＳＤ950はＳＤ947・ＳＤ997と約1.8m間隔で，ＳＤ1014・ＳＤ1015はＳＤ1029・ＳＤ1030・ＳＤ1032と約30cm間隔で平行している畠のさくと考えるものであることから，ＳＢ44はＳＤ1014の畠より新しく，ＳＤ950の畠より古いといえる。建物に付属すると考えられる遺構には，井戸が１基，炭化物が堆積した土坑が１基ある。

1035号井戸（ＳＥ1035，第86図，図版53）

ＳＢ44の北東約２ｍに位置し，規模は100cm×88cm，深さ80cmを測る。ＳＤ1029より新しいことから，ＳＢ44に付属すると推定する。井戸側は石組で，上部の石組は壊され，石が内部に落ちている。井戸側の裏込土は褐灰色粘質シルトで，下層には青灰色砂，褐灰色砂質土が堆積している。出土遺物には羽口（*246*），加工材がある。*246*は7.5cm×6.0cmの羽口の破片で，器壁の厚さ2.0cmを測る。外面と先端部には鉄が付着しており，製鉄に関連したものと考えられる。

1011号土坑（ＳＫ1011，第86図，図版53）

ＳＢ44の内部に一部重複するように位置し，長軸95cm×短軸62cm，深さ４cmを測る。平面形はやや不整形な楕円形を呈し，上面には5cm～10cm大の礫が敷きつめられている。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルトであるが，礫の上面に焼土を確認できなかったため，炉と断定することは困難であるが，ＳＥ1035から出土した羽口と関連した製鉄関連の炉である可能性が高いと考える。

45号建物（ＳＢ45，第85・87図，図版51・52）

重複する建物３棟のうち最大規模のもので，桁行6.1m×梁行4.9m，平面積29.89㎡を測る。主軸はＮ－5°－Ｗの南北棟である。柱穴の規模は長軸60cm～110cm×短軸40cm～60cm，深さ10cm～30cmを測り，平面形が楕円形を呈する柱穴が主体である。西側桁行方向の柱穴の多くがＳＤ946・ＳＤ951より古く，またＳＰ1054は畠のさくと考えるＳＤ952より古い。柱穴からの出土遺物はない。建物に付属すると考えられる遺構には，焼土と炭化物が堆積した土坑が１基ある。

984号土坑（ＳＫ984，第87図，図版53）

ＳＢ45のほぼ中央に位置し，長軸52cm×短軸42cm，深さ11cmを測る。北端が僅かにＳＤ952に切られているが，平面形が楕円形を呈する。中央部に直径10cmを測る円形の焼土があり，その周辺に炭化物が堆積している。石組はないが鍛冶関連の炉と考えられ，焼土が円形を描くことから上部に炉体があったと推定する。

1068号土坑（ＳＫ1068，第87図，図版84）

ＳＢ45の中央やや東寄りに位置し，長軸76cm，深さ16cmを測る。ＳＤ952に南半部分を削られており全体は不明であるが，埋土は灰黄褐色砂質シルトである。出土遺物には簪（*249*）がある。*249*は銅製の簪で，先端を欠損しており，残存長6.8cm，幅1.3cm，厚さ0.1cm，重さ6.46ｇを測る。断面は両端と中央の文様帯の部分が盛り上がる凸形を呈する。中央の文様帯は沈線が１条入る単純なものである。

46号建物（ＳＢ46，第85・87図，図版51～53）

重複する建物３棟のうち最も南に位置し，桁行3.7m×梁行3.5m，平面積12.95㎡を測る。主軸は真北の東西棟である。柱穴の規模は長軸40cm～70cm×短軸25cm～40cm，深さ10cm～30cmを測り，平面形が楕円形を呈する柱穴が主体である。北側桁行方向の柱穴はＳＤ952に切られている。建物に付属すると考えられる遺構には，炭化物が堆積した土坑が建物内部に１基，約１m南東に１基，ＳＢ45かＳＢ

46に付属すると推定する井戸が１基ある。

983号土坑（ＳＫ983）

ＳＢ46の中央やや北寄りに位置し，畠のさくと考えられるＳＤ952より古い。長軸70cm×短軸60cmを測り，平面形は楕円形を呈し，埋土には炭化物が皿状に堆積している。建物内部にあることから，炉との関連を推測するが，遺構の性格は不明である。

1107号土坑（ＳＫ1107，第87図）

ＳＢ46から南東約１ｍに位置し，ＳＤ952より古く，試掘トレンチに切られているため，確認できた部分の規模は幅140cm，深さ16cmを測る。上面には直径10cm前後の礫が敷き詰められており，東側は壁状に積み上げられている。下層の埋土は炭化物が混じる褐灰色砂質シルトである。礫の上面に焼土はないが，炉のようなものと考えられる。

958号土坑（ＳＫ958，第87図）

ＳＢ46より南約３ｍに位置し，北部を試掘トレンチに切られているが，長さ170cm，深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトである。ＳＢ46に付属したものではないと考えられる。

1182号井戸（ＳＥ1182，第87図）

ＳＢ46の南約70cm，ＳＢ45から約2.5m南の試掘トレンチ内に位置し，110cm×95cm，深さ30cmを測る。平面形は円形で，石組や水溜の施設は確認できなかったが，下層に礫が多く堆積していたことから，本来は石組であった可能性が高い。立地する地点からはＳＢ45とＳＢ46のどちらに付属するものかは不明である。

47号建物（ＳＢ47，第85・88図，図版51～53）

区画13の重複した３棟の建物群の東に位置し，桁行3.1ｍ×梁行2.4ｍ，平面積7.44㎡を測る。主軸はＮ－１°－Ｗの南北棟である。柱穴の規模は20cm～35cm，深さ10cm～20cmを測り，平面形は円形を呈する。２間×２間の総柱建物と復元しているが，桁行方向の柱間は不均等で，南から1.8m，1.3mを測る。梁行方向北西には１間×１間の付属屋と考えられるものがあり，その部分を加えると平面積8.98㎡となる。また，北側柱列に近接する竪穴状土坑が建物に付属すると考えられることから，本来は掘立柱の他，礎石や土台等を利用した，より複雑な構造をもつ建物の可能性があると考える。ＳＰ1036が畠のさくＳＤ1029より新しいことから，ＳＢ47はＳＢ45・ＳＢ46より古いと考えられる。建物に付属すると考えられる遺構として，約1.5m西に井戸が２基あるほか，関連があるか不明な遺構として約３ｍ南に炭化物が堆積した土坑１基がある。

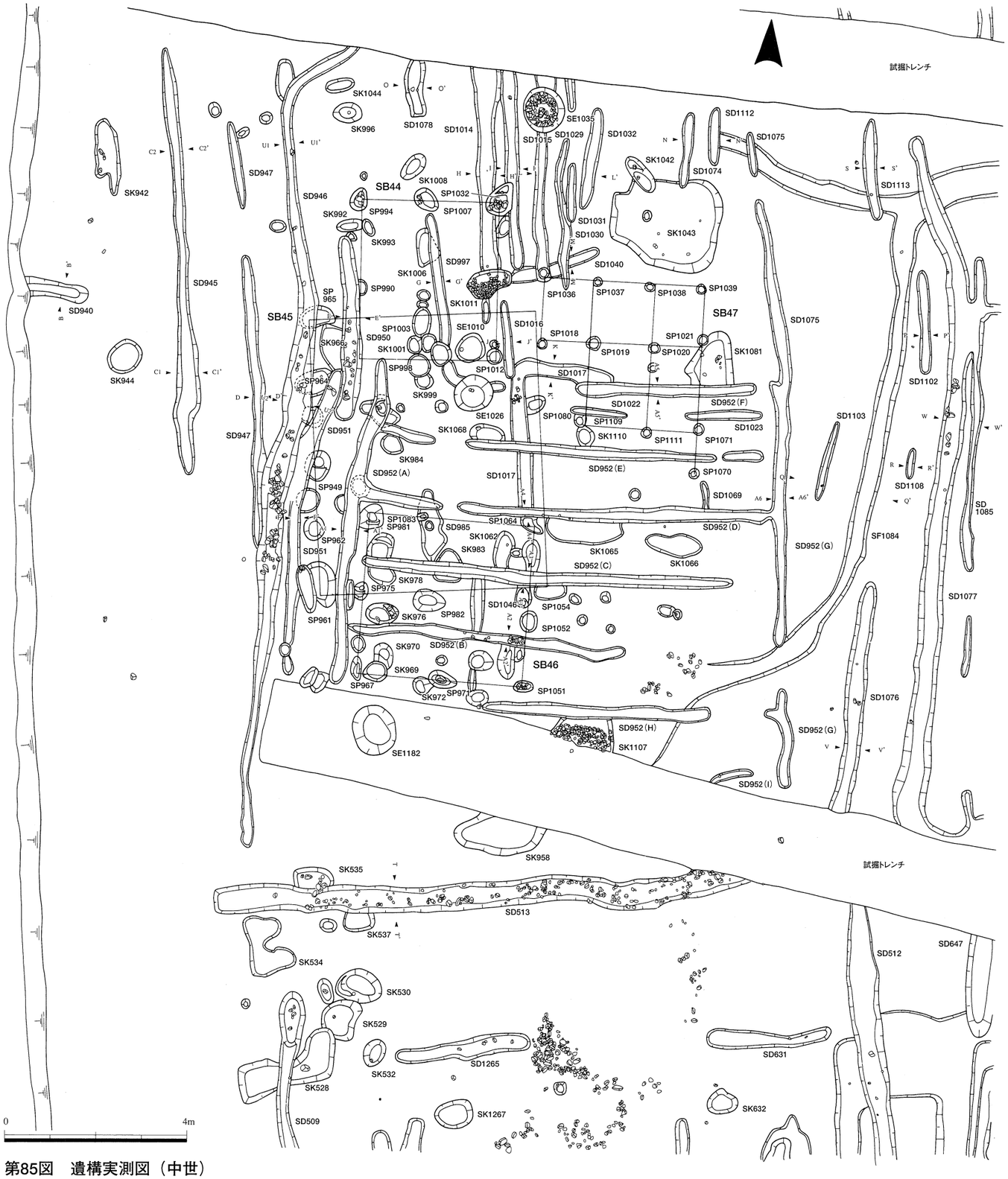
1043号土坑（ＳＫ1043，第88図，図版54）

ＳＢ47の北に隣接し，237cm×193cm，深さ10cmを測る不整形な竪穴状土坑である。埋土は上層が炭化物の混じる灰黄褐色砂質シルト，下層が暗褐色砂質シルトで，中央やや西にはＳＫ1041がある。ＳＫ1041は長軸27cm×短軸20cm，深さ８cmを測り，平面形が楕円形を呈する土坑で，埋土は炭化物主体の黒褐色砂質シルトである。焼土はなく，周囲に石組等の施設もないため，遺構の性格は不明であるが，ＳＫ1043とともにＳＢ47に付随していると推測する。

1010号井戸（ＳＥ1010，第88図）

ＳＢ47の約1.5m西に位置し，86cm×82cm，深さ62cmを測る。石組，水溜等の施設はなく，埋土は上層が暗オリーブ褐色砂質シルト，下層は黒褐色砂礫である。下層の埋土には10cm～20cm大の石が多く入っており，本来石組であったものが破壊されて廃棄されたと考えられる。出土遺物はない。

1026号井戸（ＳＥ1026，第88図，図版54）



第85図　遺構実測図（中世）
SB44～47

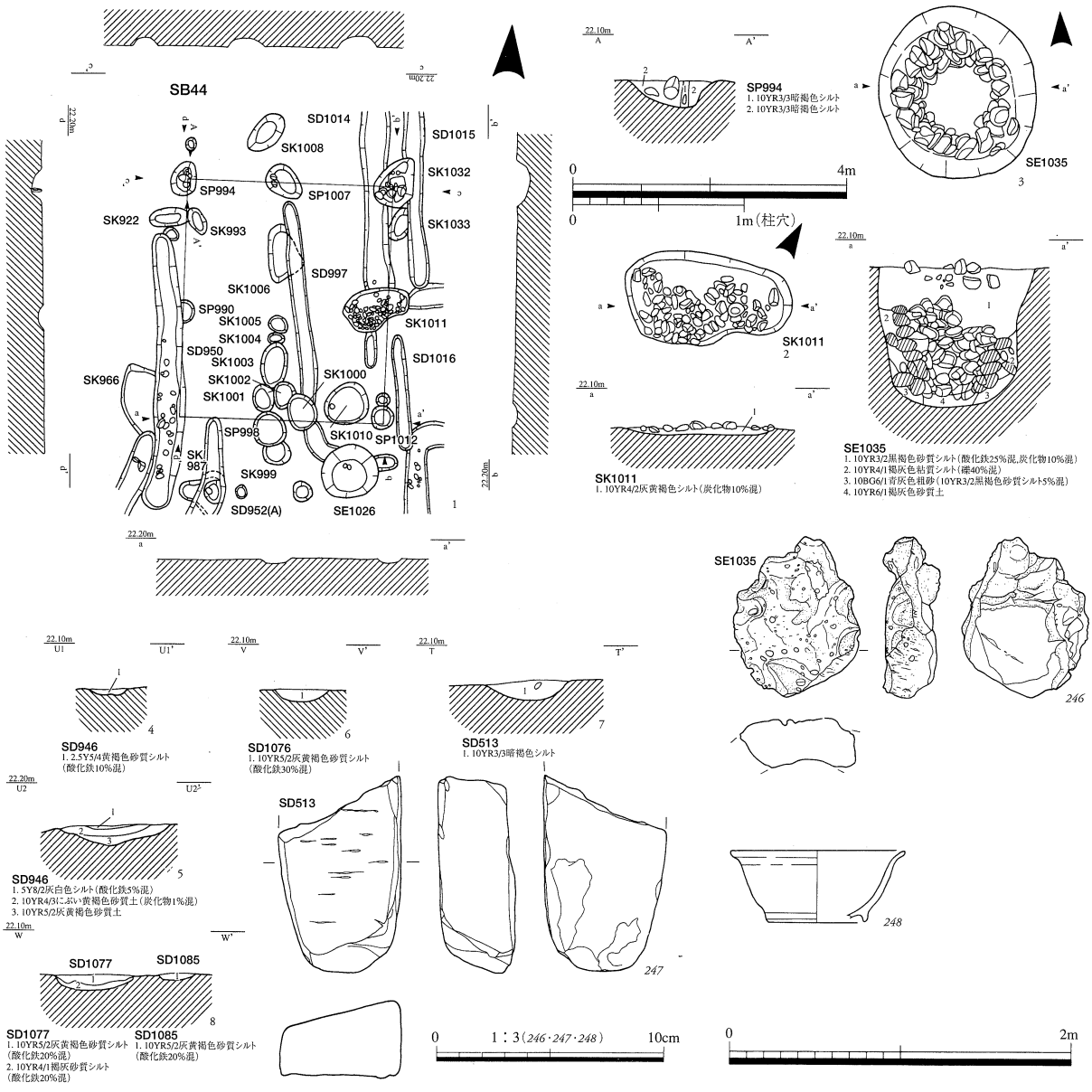
ＳＢ47の約1.5m西，ＳＥ1010の約30cm南に位置し，84cm×80cm，深さ52cmを測る。石組，水溜等の施設はなく，埋土はオリーブ褐色砂質シルトである。畠のさくＳＤ997より新しいことから，ＳＢ47より新しい可能性が高い。

1066号土坑（ＳＫ1066，第88図）

ＳＢ47の南約２mに位置し，長径125cm×短径53cm，深さ６cmを測り，平面形が不整形なものである。埋土は炭化物主体の灰黄褐色砂質シルトで，底面には炭化物が皿状に堆積している。上面や埋土中に焼土は確認できなかったが，炉と関連するものと考えられる。しかし，ＳＢ47に付属するかどうかは不明である。

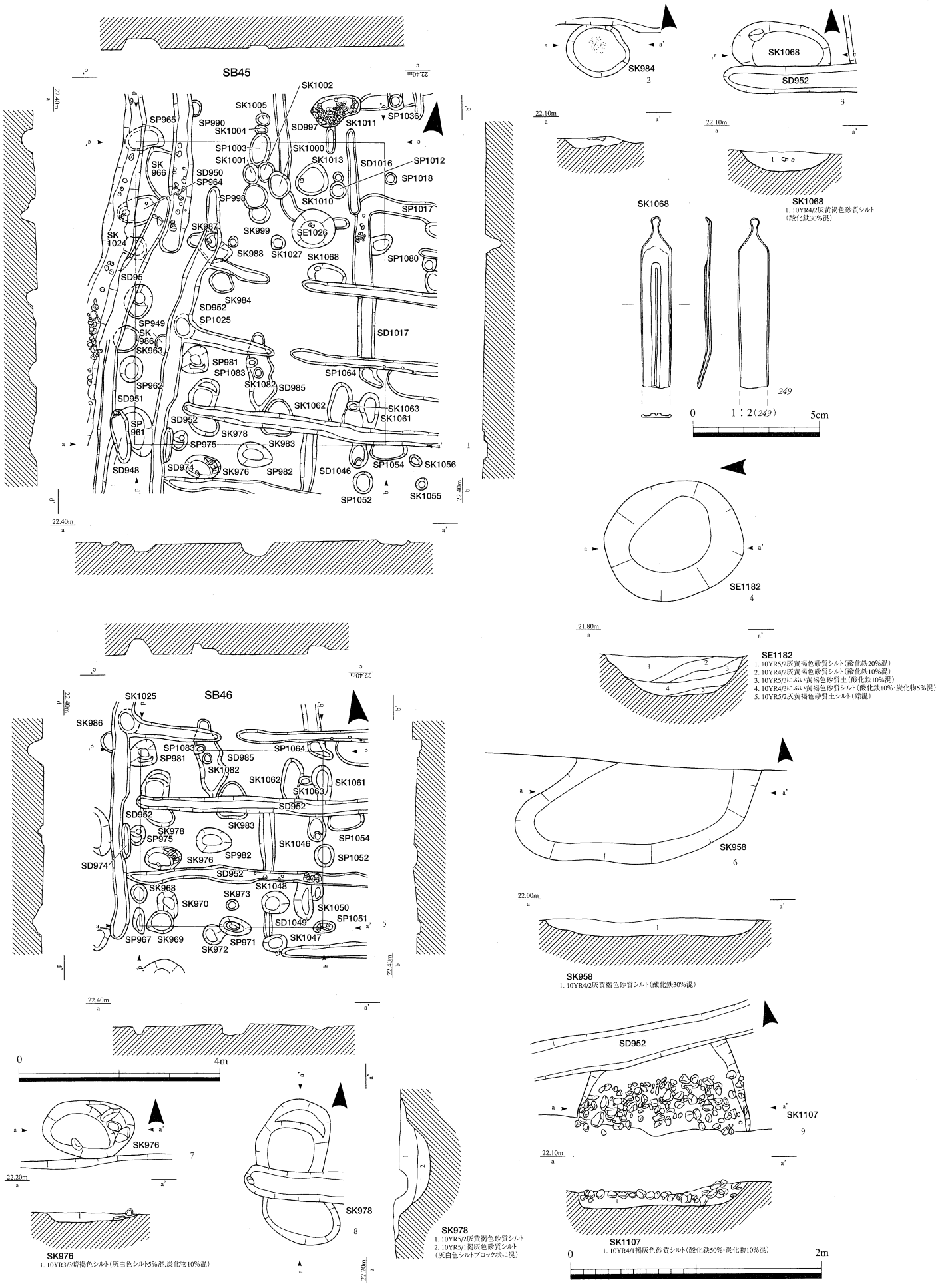
942号土坑（ＳＫ942，第89図）

区画13のほぼ中間，ＳＤ945の西1.5mに位置し，長径170cm×短径53cm，深さ８cmを測る。平面形は不整形で，埋土は暗褐色砂質シルトである。出土遺物はない。



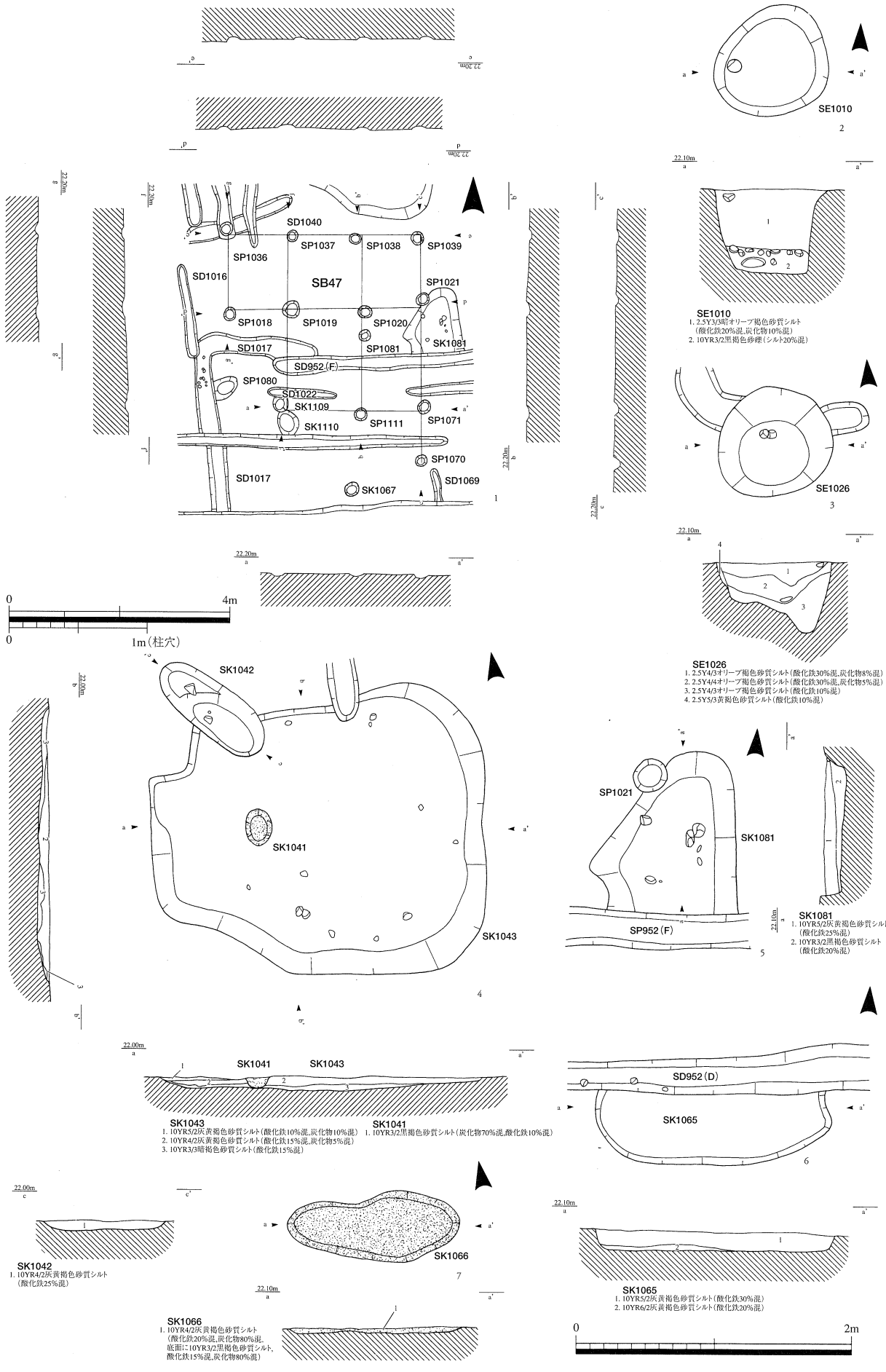
第86図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB44　2. SK1011　3. SE1035　4・5. SD946　6. SD1076　7. SD513　8. SD1077・SD1085
SE1035(*246*)　SD513(*247・248*)



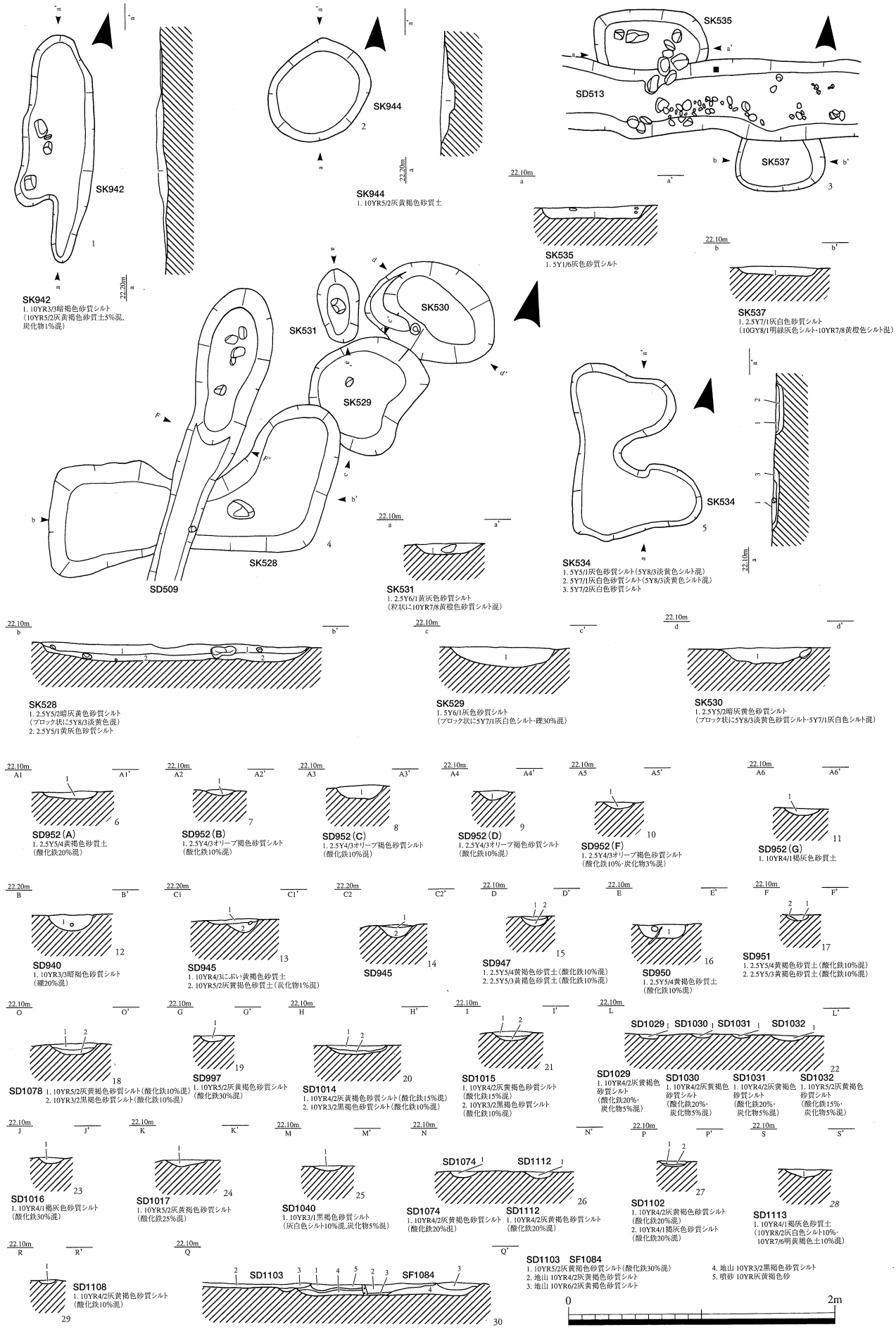
第87図　遺構・遺物実測図（中世）

1. SB45　2. SK984　3. SK1068　4. SE1182　5. SB46　6. SK958　7. SK976　8. SK978　9. SK1107
SK1068(*249*)



第88図　遺構実測図（中世）

1. SB47　2. SE1010　3. SE1026　4. SK1041・SK1042・SK1043　5. SK1081　6. SK1065　7. SK1066



第89図　遺構実測図（中世）

1. SK942　2. SK944　3. SK535・SK537　4. SK528・SK529・SK530・SK531　5. SK534　6. SD952（A）　7. SD952（B）
8. SD952（C）　9. SD952（D）　10. SD952（F）　11. SD952（G）　12. SD940　13·14. SD945　15. SD947　16. SD950
17. SD951　18. SD1078　19. SD997　20. SD1014　21. SD1015　22. SD1029・SD1030・SD1031・SD1032　23. SD1016
24. SD1017　25. SD1040　26. SD1074・SD1112　27. SD1102　28. SD1113　29. SD1108　30. SF1084・SD1103

944号土坑（ＳＫ944，第89図）

ＳＤ945の西１ｍ，ＳＫ942の南約３ｍに位置し，長径77㎝×短径75㎝，深さ11㎝を測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。

535号土坑（ＳＫ535，第89図）

区画13の南側区画溝ＳＤ513の北に位置し，幅85㎝，深さ８㎝を測る。ＳＤ513より古いもので，埋土は灰色砂質シルトである。

537号土坑（ＳＫ537，第89図）

ＳＫ535の南東，区画13の南側区画溝ＳＤ513の南に位置し，長さ67㎝，深さ６㎝を測る。ＳＤ513より古いもので，埋土は灰白色砂質シルトである。

528号土坑（ＳＫ528，第89図）

ＳＤ513の南に約３ｍに位置し，平面形はＬ字状を呈する。規模は長さ66㎝，深さ14㎝を測り，埋土は上層が暗灰黄色砂質シルト，下層が黄灰色砂質シルトである。ＳＫ530・ＳＫ529よりは新しいが，ＳＤ509より古いことから，区画13・区画14ができる以前のものであると考える。

534号土坑（ＳＫ534，第89図）

ＳＤ513の南に隣接し，長さ115㎝×幅98㎝，深さ６㎝を測る不整形な土坑である。埋土は上層が灰色砂質シルト，下層が灰白色砂質シルトである。

区画14（第90・94図）

北をＳＤ631・ＳＤ1265，東をＳＤ510・ＳＤ512・ＳＤ548・ＳＤ545・ＳＤ647・ＳＤ637，南をＳＤ400に囲まれており，南北方向約23m，東西方向は北端で約12m，南端で約14ｍを測る。遺構の分布状況は，調査区端から約５ｍ東に位置するＳＤ509とＳＡ12以東に集中しており，建物３棟，建物に付属する井戸１基，土坑の他，関連が不明である土坑，溝等が確認されている。建物は北に１棟と南に２棟重複しており，各建物に土坑が付属している。これらはＳＤ509やＳＡ12に隣接しており，東側区画溝との間には約６ｍ～８ｍの遺構の疎な空間がある。ＳＤ509とＳＡ12との間隔は約11ｍで，ここが区画14の間口と考えられる。

1265号溝（ＳＤ1265，第93図）

区画14の北側区画溝であり，北のＳＤ513と平行して道路の側溝として機能していると考えられる。幅32㎝，深さ６㎝を測り，東に約４ｍ離れたＳＤ631につながる。埋土は灰黄褐色砂質シルトである。

631号溝（ＳＤ631，第93図，図版65）

ＳＤ1265とともに区画14の北側区画溝であり，道路の側溝として機能していたと考えられる。幅33㎝，深さ６㎝を測り，埋土は灰白色砂質シルトである。さらに5.5m東のＳＤ722につながると推定する。出土遺物には中国製染付（*251*）がある。*251*は口縁部端反りの皿で，口径11.9㎝を測る。口縁部外面には界線が１条，内面には四方襷文が描かれている。これは小野分類の皿Ｂ2群９類か10類[注2]で，時期は16世紀中頃～後半と考えられる。

512号溝（ＳＤ512）

区画14の東側区画溝で，ＳＤ631と直交するように南北に流れ，幅70㎝，深さ６㎝を測る。ＳＫ511を挟み，さらに南の区画溝ＳＤ510に続く。道と推定するＳＤ513とＳＤ1265・ＳＤ631間を突き抜けていることから，道より新しい区画溝と考える。また，ＳＤ548・ＳＤ647より新しいことから，区画が作り替えられていると推測する。

510号溝（ＳＤ510，第93図）

区画14の東側区画溝で，北のＳＤ512，南のＳＤ637につながると考える。幅55cm，深さ６cmを測り，埋土は灰黄色砂質シルトである。ＳＫ511との新旧関係は不明であるが，ＳＤ548・ＳＤ647よりは新しい。

548号溝（ＳＤ548，第93図）

ＳＤ509から東約11mに位置し，幅54cm，深さ６cmを測る。埋土は浅黄色砂質シルト，灰白色砂質シルトである。北端は1.5m東に平行するＳＤ647とつながっており，南に向かって４m～６m間隔でロの字状につながる。さらにＳＫ511を挟んでＳＤ545へと続くが，南端は試掘トレンチに切られて不明である。ＳＤ545は幅50cm，深さ４cmを測り，埋土は上層が灰黄色砂質シルト，下層が浅黄色砂質シルトである。出土遺物はないが，ＳＤ512・ＳＤ510より古い溝である。

509号溝（ＳＤ509，第93図）

調査区端から約５m東，区画14北端に位置し，遺構の疎密を分けている。規模は幅40cm，深さ４cmを測り，北端から６m地点で東へ分岐している。その約60cm南にはＳＢ48があることから，南半部は建物に付属していると推定する。また，北は区画13・区画14間の道上にのびていることから，ＳＤ512と同時期の可能性が高い。

48号建物（ＳＢ48，第90図，図版54・55）

区画14の北に位置し，北と西をＳＤ509にＬ字状に囲まれている。規模は桁行６m×梁行３m，平面積18m^2を測り，主軸はＮ－8°－Ｗの南北棟である。西側桁行方向の柱穴規模は長軸50cm～60cm，短軸40cm～50cm，深さ10cm～20cmを測り，平面形は楕円形を呈する。これに対し，東側では柱穴が１基しか確認できず，ＳＤ515が北端に，ＳＫ522が南端に位置する。ＳＤ515は幅32cm，深さ４cmを測り，埋土はにぶい黄褐色シルトで，建物の土台痕の可能性が高いと考えられることから，ＳＢ48は掘立柱と土台を併用した構造をもつと推測する。

建物内部には炭化物や焼土が堆積した土坑２基と，石敷炉と考えられる土坑１基がある他，ＳＢ48に付属すると考えられる遺構として，石敷炉とみられる土坑１基，炉と考えられる土坑１基，井戸１基が近接している。このように付属する遺構に炉や，炉の可能性が高い遺構が多い建物は他に例をみないことから，他とは異なる性格をもつ建物であると推測される。また，ＳＢ48との関連が不明な遺構として，約６m東に土坑が数基ある。

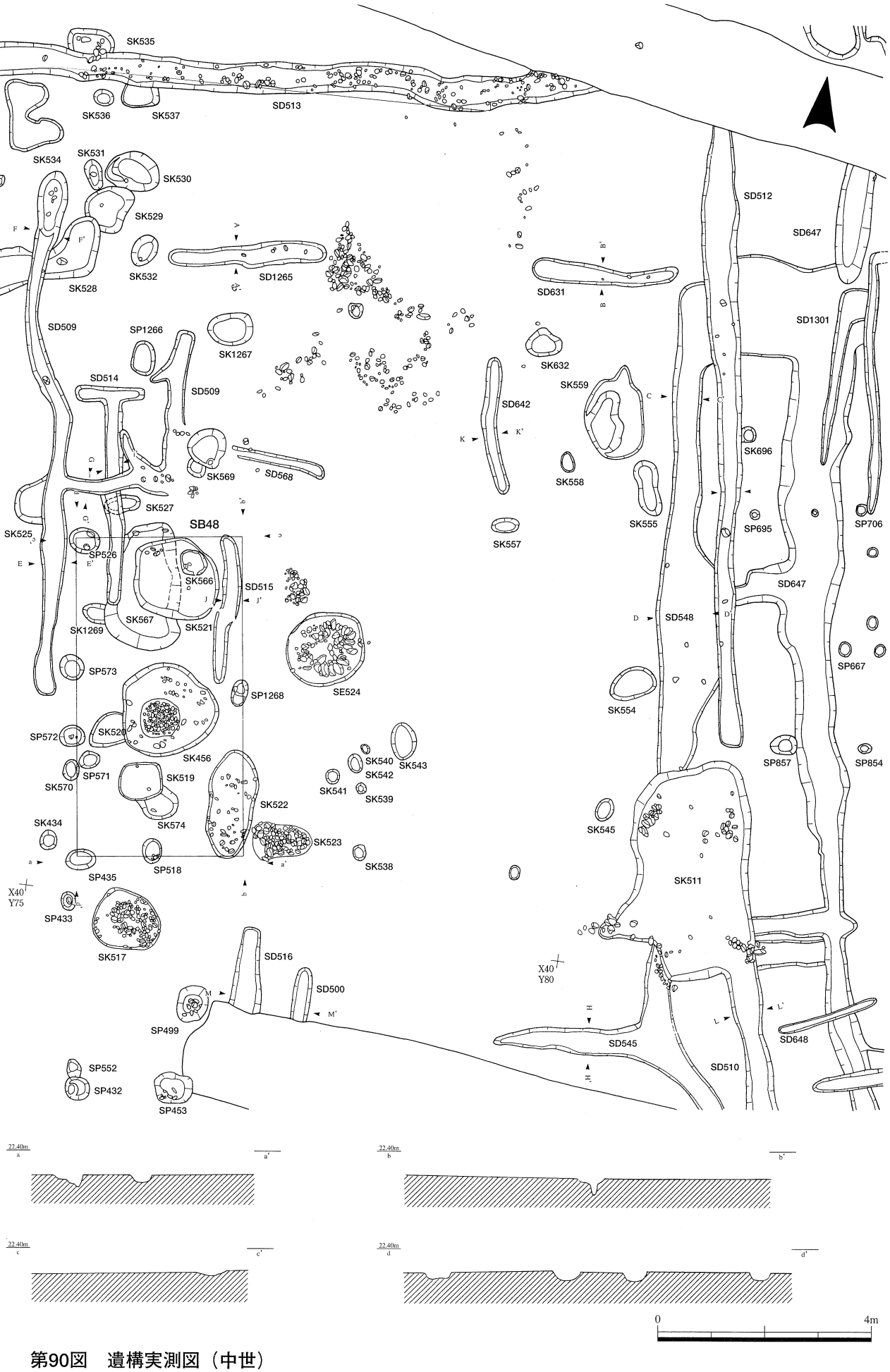
521号土坑（ＳＫ521，第91図）

ＳＢ48内部北端に位置し，160cm×150cm，深さ４cmを測る，不整形な掘形をもつものである。埋土は上層が暗灰黄色土，下層が黄灰色砂で，噴砂によって切られている。噴砂は平面的にはＳＤ515からＳＫ521・ＳＫ566にかけて，最大幅約10cmの帯状で確認されており，ＳＫ566手前で枝分かれしている。周囲には遺構が集中し，ＳＫ521の内部にはＳＫ566，西にはＳＫ567，さらにＳＫ567にＳＤ514が重複しているが，ＳＢ48に付属するものはＳＫ521とＳＫ566と考える。出土遺物には中世土師器があるが，小破片であるため時期は不明である。

566号土坑（ＳＫ566，第91図）

ＳＫ521の内部に位置し，53cm×50cm，深さ６cmを測る。埋土は上層が炭化物層，中層が焼土層，下層がにぶい黄褐色砂質シルトで，噴砂に切られている。焼土はＳＫ566のほぼ中央に堆積するのみで，上層の炭化物層がＳＫ521の上面に広がっており，炉に関連した遺構と考えられる。ＳＢ48に付属すると推定する。

567号土坑（ＳＫ567，第91図）



第90図　遺構実測図（中世）
SB48